

亀泉西久保Ⅱ遺跡 荻窪南田遺跡

一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2008

国 土 交 通 省
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

亀泉西久保Ⅱ遺跡
荻窪南田遺跡

一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

二〇〇八

国土交通省
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

亀泉西久保Ⅱ遺跡 萩窪南田遺跡

一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2008

国 土 交 通 省
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



1 亀泉西久保Ⅱ遺跡・萩窪南田遺跡遠景(南から)



2 亀泉西久保Ⅱ遺跡・萩窪南田遺跡遠景(北東から)



1 亀泉西久保Ⅱ道跡遠景(南東、亀泉坂上道跡から)



2 亀泉西久保Ⅱ道跡C区遠景(南西、寺沢川下流方向から)



1 萩窪南田遺跡全景(南から)



2 萩窪南田遺跡B2区・B3区平安時代水田・溝(南から)



1 萩窪南田遺跡B4区全景(上空から)



2 亀泉西久保Ⅱ遺跡配石遺構出土縄文土器

序

上武道路は、一般国道17号バイパスの一環として、埼玉県の深谷バイパスから前橋市田口町の現道に接続する道路として計画されました。平成元年には前橋市今井町の国道50号まで、平成17年には富田町までの区間が開通・供用されており、国道17号の交通混雑の緩和に寄与するとともに沿線地域の生活道として活用されています。

上武道路の通過する地域は、本県でも有数の埋蔵文化財が包蔵されています。このため、道路建設工事に先立って埋蔵文化財の記録を後世に残すための発掘調査が昭和48年度より群馬県教育委員会および当事業団によって行われてまいりました。更に、平成11年度からは前橋市今井町の国道50号以北の発掘調査に着手し、記録保存の措置が取られました。

本書は、平成14年4月より平成17年3月にかけて発掘調査を行いました亀泉西久保Ⅱ遺跡と萩窪南田遺跡の調査報告書です。

亀泉西久保Ⅱ遺跡・萩窪南田遺跡は、ともに縄文時代から中・近世にかけての複合遺跡です。亀泉西久保Ⅱ遺跡では奈良・平安時代の竪穴住居や水田・多くの溝が発見されました。これらは前橋市桂萱地域の歴史的発展を知る上での貴重な資料となるものです。

発掘調査から報告書作成に至るまで、国土交通省関東地方整備局、同高崎河川国道事務所、群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、地元関係者等からは種々、ご指導ご協力を賜りました。今回、報告書を上梓するに際し、これらの関係者の皆様に衷心より感謝の意を表し、併せて、本報告書が群馬県の歴史を解明する上で、多くの人に広く活用されることを願ひ序とします。

平成20年1月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 高橋 勇 夫

例 言

1. 本書は、一般国道17号（上武道路）改築工事に伴い事前調査された亀泉西久保Ⅱ遺跡および荻窪南田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の 亀泉西久保Ⅱ遺跡 群馬県前橋市亀泉町187番地、荻窪町1-1番地、上泉町2878-2番地他
所在地 荻窪南田遺跡 群馬県前橋市荻窪町2-1番地、上泉町2878-1番地他
3. 事業主体 国土交通省関東地方整備局高崎河川国道事務所
4. 調査主体 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
5. 調査期間 亀泉西久保Ⅱ遺跡 平成14年10月1日～平成14年12月31日
平成15年12月1日～平成16年3月31日
平成16年4月1日～平成17年3月31日
荻窪南田遺跡 平成14年4月1日～平成14年9月30日
6. 調査組織 管理・指導 小野宇三郎、吉田 豊、住谷永市、神保佑史、萩原利通、矢崎俊夫、市 隆之、石島和夫
事務担当 中沢 悟、関 晴彦、植原恒夫、丸岡道雄、國定 均、小山建夫、竹内 宏、高橋房雄、須田朋子、吉田有光、森下弘美、栗原幸代、佐藤聖行、阿久沢玄洋、田中賢一（事業団職員）、今井もと子、内山佳子、若田 誠、佐藤美佐子、本間久美子、北原かおり、狩野真子、松下次男、吉田 茂（事業団補助員）
調査担当 亀泉西久保Ⅱ遺跡 平成14年度 女屋和志雄、青木さおり（事業団職員）
平成15年度 女屋和志雄、青木さおり（事業団職員）
平成16年度 女屋和志雄、新井英樹（事業団職員）
荻窪南田遺跡 女屋和志雄、青木さおり（事業団職員）
7. 整理主体 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
8. 整理期間 亀泉西久保Ⅱ遺跡 平成18年10月1日～平成18年12月31日
荻窪南田遺跡 平成19年1月1日～平成19年3月31日
9. 整理組織 管理・指導 高橋勇夫、木村裕紀、津金澤吉茂、萩原 勉、中束耕志、西田健彦
事務担当 笠原秀樹、石井 清、國定 均、齊藤恵利子、須田朋子、柳岡良宏、佐藤聖行、今泉大作、栗原幸代（事業団職員）、今井もと子、内山佳子、若田 誠、本間久美子、北原かおり、狩野真子、武藤秀典（事業団補助員）
整理担当 徳江秀夫
10. 本書作成の担当者は次の通りである。
編 集 徳江秀夫
執 筆 第5章 株式会社古環境研究所 左記以外 徳江秀夫
遺構・遺物観察指導、助言 石坂 茂、女屋和志雄、原 雅信、小島敦子、麻生敏隆、大西雅広、津島秀章（事業団職員）
遺構写真 各発掘担当者（空中写真を除く）
遺物写真 佐藤元彦（事業団職員）

遺構・遺物図面整理、図面作成等

上田三代子、武水いち、八峠美津子、狩野芳子、高橋初美（事業団補助員）

器械実測 伊東博子、田所順子、岸 弘子（事業団補助員）

11. 石器・石製品の石材同定については飯島静雄氏（群馬県地質研究会会員）に御教示を得た。

12. 委託関係

遺跡掘削工事 技研測量設計株式会社

空中写真 技研測量設計株式会社

火山灰、プラント・オパール分析 株式会社古環境研究所

遺構図面作成 株式会社測研

13. 出土遺物と記録資料の一切は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団で管理し、群馬県埋蔵文化財調査センターで保管している。

14. 本書の作成にあたり、下記の諸氏、諸機関から御助言、御協力を得た。記して感謝の意を表する次第である。（敬称略）

前橋市教育委員会 前原 豊、高山 剛、亀泉町自治会 青木博久、小竹 齊、藤巻正雄、群馬県高齢者総合ケアセンター明風園

凡 例

1. 挿图中に使用した方位は、座標北を表す。座標系は、日本平面直角座標系（国家座標）第Ⅸ系である。
2. 遺構断面実測図、等高線に記した数値は標高を表し、単位は、mを用いた。
3. 遺構の位置を示すグリッドの表記は、その遺構が掛かるグリッド名をすべて示した。
4. 遺構名称は、遺構の種類毎に遺跡全体で通し番号を付した。整理作業時にもこれを踏襲したため欠番が生じている。
5. 遺構図で使用した北方位はすべて心北を示している。
6. 遺構・遺物実測図の縮尺率は、各国にスケールを入れた。
7. 写真図版の遺物の縮尺率は自在であり、遺物図の縮尺率とは必ずしも一致しない。
8. 遺構の方位は、北を基準に傾きを計測した。東に傾いた場合、N-O°-Eというように示した。
9. 本書では、テフラの呼称として下記の略語を用いる。

テフラ等の名称	略 語	降下年代
浅間A軽石	As-A	1783年（天明3年）
浅間B軽石	As-B	1108年（天仁元年）
榛名二ツ岳渋川テフラ	Hr-FA	6世紀初頭
浅間C軽石	As-C	4世紀初頭

10. 本書で掲載した地図は、下記のものを使用した。

第1図 国土地理院発行 地勢図 1：200,000「長野」「宇都宮」

第2図 『群馬県史』通史編1付図を簡略化した『荒砥上ノ坊遺跡1』第5図を修正して使用。

第3・5図 国土地理院発行 地形図 1：25,000「大胡」

第69図 前橋市発行 現形図29・37（昭和49年測図）

目 次

口絵

序

例言

凡例

目次

挿図目次

表目次

文中写真目次

写真図版目次

第1章 調査の経過と遺跡の概要	1	4 奈良・平安時代の遺構と遺物	45
第1節 調査に至る経緯	1	(1) 概要	45
第2節 遺跡の位置と地形	3	(2) 竪穴住居	45
第3節 周辺の遺跡	5	(3) 土坑	59
第2章 亀泉西久保遺跡の調査	9	(4) 溝	61
第1節 調査の方法と経過	9	(5) 道	67
1 遺跡名の呼称と調査区の設定	9	(6) 浅間B軽石下木田	68
2 グリッドの設定	9	(7) 遺構外出土の遺物	72
3 調査の方法と遺構・遺物の記録	9	5 中・近世の遺構と遺物	72
4 調査の経過	12	(1) 概要	72
5 整理作業の方法	14	(2) 溝	72
第2節 遺跡の基本土層	14	(3) 遺構外出土の遺物	76
第3節 検出した遺構と遺物	17	6 時期不明の遺構	78
1 調査の概要	17	(1) 概要	78
2 縄文時代の遺構と遺物	17	(2) 土坑	78
(1) 概要	17	(3) ビット	84
(2) 土坑	17	第3章 荻窪南田遺跡の調査	88
(3) 配石遺構	19	第1節 調査の方法と経過	88
(4) 包含層の調査	20	1 遺跡名の呼称と調査区の設定	88
(5) 遺構外出土の土器	24	2 グリッドの設定	88
(6) 遺構外出土の石器	31	3 調査の方法と遺構・遺物の記録	88
3 古墳時代の遺構と遺物	44	4 調査の経過	88
(1) 概要	44	5 整理作業の方法	89
(2) 水田	44	第2節 遺跡の基本土層	92
(3) 遺構外出土の遺物	45	第3節 検出した遺構と遺物	93

1	調査の概要	93	(3)	溝	148
2	縄文時代の遺構と遺物	93	(4)	道	153
	(1) 概要	93	(5)	土坑	160
	(2) 土坑	93	(6)	焼土痕	160
	(3) 包含層の調査	95	(7)	遺構外出土の遺物	160
	(4) 遺構外出土の土器	99	第4章	荻窪南田遺跡における自然科学分析	161
	(5) 遺構外出土の石器	111	第1節	荻窪南田遺跡の土層とテフラ	161
3	古墳時代の遺構と遺物	123	第2節	荻窪南田遺跡における プラント・オパール分析	175
	(1) 遺構外出土の遺物	123	第5章	調査成果と整理のまとめ	182
4	奈良・平安時代の遺構と遺物	123	第1節	亀泉西久保Ⅱ遺跡のまとめ	182
	(1) 概要	123	第2節	荻窪南田遺跡のまとめ	183
	(2) 浅間B軽石下水田	123	参考文献		185
	(3) 溝	132	遺物観察表		186
	(4) 道	143	写真図版		
	(5) 遺構外出土の遺物	146	抄 録		
5	中・近世の遺構と遺物	148	付図1	亀泉西久保Ⅱ遺跡全体図	
	(1) 概要	148	付図2	荻窪南田遺跡全体図	
	(2) 水田	148			

挿 図 目 次

第1図	亀泉西久保日道跡・荻窪南田道跡の位置	1	第57図	11号溝	76
第2図	群馬県中部の地形と亀泉西久保日道跡・荻窪南田道跡	3	第58図	11号溝土層断面	77
第3図	亀泉西久保日道跡・荻窪南田道跡周辺の道跡	4	第59図	11号溝出土遺物	77
第4図	亀泉西久保日道跡・荻窪南田道跡の位置と周辺の地形	10	第60図	中・近世道溝外出土の遺物	78
第5図	上武道路と亀泉西久保日道跡・荻窪南田道跡	11	第61図	時期不明の土坑(1)	80
第6図	亀泉西久保日道跡の調査区とその位置	13	第62図	時期不明の土坑(2)	81
第7図	亀泉西久保日道跡の基本土層	15	第63図	A区B9P検出の土坑とピット	82
第8図	亀泉西久保日道跡における旧石器試掘坑の位置と土層堆積状況	16	第64図	A区P6検出の土坑・ピットと出土遺物	83
第9図	亀泉西久保日道跡で検出された道溝	18	第65図	時期不明のピット(1)	85
第10図	縄文時代の土坑と出土遺物	19	第66図	時期不明のピット(2)	86
第11図	1号配石道溝	20	第67図	時期不明のピット(3)	87
第12図	1号配石道溝出土遺物	21	第68図	荻窪南田道跡の基本土層	89
第13図	縄文時代遺物包含層の調査と縄文土器出土地点	22	第69図	B1区東西方向地形断面	90
第14図	縄文時代遺物包含層の調査と縄文時代石器出土地点	23	第70図	B1区東西方向土層断面	91
第15図	A区第1号トレンチと遺物出土状況	24	第71図	荻窪南田道跡における旧石器試掘坑の位置と土層堆積状況	92
第16図	道溝外出土の縄文土器(1)	27	第72図	荻窪南田道跡で検出された道溝	94
第17図	道溝外出土の縄文土器(2)	28	第73図	1号土坑と出土遺物	95
第18図	道溝外出土の縄文土器(3)	29	第74図	縄文時代遺物包含層の調査と縄文土器出土地点	96
第19図	道溝外出土の縄文土器(4)	30	第75図	縄文時代遺物包含層の調査と縄文時代石器出土地点	97
第20図	道溝外出土の縄文時代石器(1)	37	第76図	B1区93B-11グリッド断片出土状況	98
第21図	道溝外出土の縄文時代石器(2)	38	第77図	道溝外出土の縄文土器(1)	100
第22図	道溝外出土の縄文時代石器(3)	39	第78図	道溝外出土の縄文土器(2)	101
第23図	道溝外出土の縄文時代石器(4)	40	第79図	道溝外出土の縄文土器(3)	102
第24図	道溝外出土の縄文時代石器(5)	41	第80図	道溝外出土の縄文土器(4)	103
第25図	道溝外出土の縄文時代石器(6)	42	第81図	道溝外出土の縄文土器(5)	104
第26図	道溝外出土の縄文時代石器(7)	43	第82図	道溝外出土の縄文土器(6)	105
第27図	古墳時代の水田	44	第83図	道溝外出土の縄文土器(7)	106
第28図	古墳時代道溝外出土の遺物	45	第84図	道溝外出土の縄文土器(8)	107
第29図	検出された奈良・平安時代の道溝	46	第85図	道溝外出土の縄文土器(9)	108
第30図	1号住居	47	第86図	道溝外出土の縄文土器(10)	109
第31図	1号住居掘り方・遺	48	第87図	道溝外出土の縄文土器(11)	110
第32図	1号住居出土遺物	49	第88図	道溝外出土の縄文時代石器(1)	116
第33図	2号住居と出土遺物(1)	50	第89図	道溝外出土の縄文時代石器(2)	117
第34図	2号住居出土遺物(2)	51	第90図	道溝外出土の縄文時代石器(3)	118
第35図	3号住居	52	第91図	道溝外出土の縄文時代石器(4)	119
第36図	3号住居遺と出土遺物(1)	53	第92図	道溝外出土の縄文時代石器(5)	120
第37図	3号住居出土遺物(2)	54	第93図	道溝外出土の縄文時代石器(6)	121
第38図	4号・6号住居	55	第94図	道溝外出土の縄文時代石器(7)	122
第39図	4号・6号住居遺	56	第95図	古墳時代道溝外出土の遺物	123
第40図	4号住居出土遺物	57	第96図	浅間B軽石下水田と古代の溝	124
第41図	6号住居出土遺物	58	第97図	浅間B軽石下水田面記録計測地点位置図	125
第42図	5号住居	58	第98図	B区土層断面	126
第43図	奈良・平安時代の土坑	60	第99図	B2区浅間B軽石下水田土層断面	127
第44図	奈良・平安時代の土坑出土遺物	61	第100図	浅間B軽石下水田明瞭・置石(1)	128
第45図	1号溝	63	第101図	浅間B軽石下水田明瞭・置石(2)	129
第46図	2号・12号溝	64	第102図	浅間B軽石下水田明瞭・置石(3)	130
第47図	6号~10号溝	65	第103図	浅間B軽石下水田出土の遺物	131
第48図	1号・3号道	66	第104図	B区古代の溝(1)	133・134
第49図	2号道	67	第105図	B区古代の溝(2)	135・136
第50図	A区西側側道南半検出の浅間B軽石下水田(1)	69	第106図	B区古代の溝土層断面(1)	137
第51図	A区西側側道北半検出の浅間B軽石下水田(2)	70	第107図	B区古代の溝土層断面(2)	138
第52図	C区検出の浅間B軽石下水田	71	第108図	B区古代の溝土層断面(3)	140
第53図	奈良・平安時代道溝外出土の遺物	72	第109図	B区古代の溝土層断面(4)	142
第54図	C区検出の中・近世の道溝	73	第110図	3号・5号・16号溝出土遺物	144
第55図	3号~5号溝	74	第111図	1号・2号道と1号道出土遺物	145
第56図	3号溝出土遺物	75	第112図	奈良・平安時代道溝外出土の遺物	146
			第113図	検出された中世以降の道溝	147
			第114図	B区中世の水田	149

第115図	1号溝	150
第116図	13号溝(1)	151
第117図	13号溝(2)	152
第118図	14号・15号・20号溝、3号道と出土遺物	152
第119図	14号・15号・20号溝、3号道	153
第120図	18号溝	154
第121図	3号道	155
第122図	4号・5号道	156
第123図	6号～8号道	157
第124図	中世以降の土坑と埴土痕	158
第125図	中世以降遺構外出土の遺物	159
第126図	科学分析試料採取地点	170
第127図	B2区第1地点の土層柱状図	171

第128図	B2区第2地点の土層柱状図	171
第129図	B1区B地点の土層柱状図	171
第130図	B1区C地点の土層柱状図	172
第131図	B1区D地点の土層柱状図	172
第132図	B1区E地点の土層柱状図	172
第133図	B3区の土層柱状図	172
第134図	A区82K-14グリッドの土層柱状図	173
第135図	A区82K-14グリッドの火山ガラス比ダイヤグラム	174
第136図	荻窪南田遺跡におけるプラント・オパール 分析結果(1)	179
第137図	荻窪南田遺跡におけるプラント・オパール 分析結果(2)	180

表 目 次

第1表	上武道路発掘調査遺跡一覧7工区(その2)	2
第2表	亀泉西久保日遺跡・荻窪南田遺跡周辺の遺跡の概要	6・7
第3表	亀泉西久保日遺跡縄文土器出土地点一覧	26
第4表	亀泉西久保日遺跡縄文時代石器出土地点一覧	32
第5表	亀泉西久保日遺跡出土の縄文時代石器の器種と石材	33
第6表	亀泉西久保日遺跡縄文時代石器一覧	34・35
第7表	時期不明のピット計画第一覧	84
第8表	荻窪南田遺跡縄文土器出土地点一覧	99
第9表	荻窪南田遺跡縄文時代石器出土地点一覧	112

第10表	荻窪南田遺跡出土の縄文時代石器の器種と石材	113
第11表	荻窪南田遺跡出土の縄文時代石器一覧	114
第12表	テララ検出分析結果	168
第13表	A区82K-14グリッドにおける火山ガラス比分析 結果	169
第14表	屈折率測定結果	169
第15表	荻窪南田遺跡におけるプラント・オパール 分析結果	178
第16表	群馬県出土の垂り一覧	182

文中写真目次

図版1	B1区93B-11グリッド出土の剥片	98
図版2	剥片の接合状況	98

図版3	桃果核	131
図版4	植物柱胞体(プラント・オパール)の顕微鏡写真	181

写真図版目次

亀泉西久保日遺跡

P.L.1-1	寺沢川流路から見た遺跡遠景(南東から)	6
2	A区BP9地点遺構検出状況(北西から)	7
3	A区P6地点遺構検出状況(東から)	8
4	A区西側側道部分遺構確認状況(南東から)	9
5	B区遠景(東から)	10
6	現況の寺沢川(北東から)	11
7	C区遺構検出状況(北から)	12
8	C2区調査状況(北西から)	13
P.L.2-1	A区P9地点全景(南西から)	14
2	A区BP9地点全景(北から)	15
3	A区P7地点全景(西から)	16
4	A区P6地点全景(南から)	17
5	A区西側側道部分南側全景(北から)	18
6	C区P2・P3地点全景(南西から)	19
7	B区石部試掘調査状況(南西から)	20
8	B区62A-19グリッド東壁土層断面(西から)	21
P.L.3-1	1号配石遺構遺物出土状況(南から)	22
2	1号配石遺構遺物出土状況(北から)	23
3	1号配石遺構全景(西から)	24
4	1号配石遺構廻り込みの状況(西から)	25
5	5号土坑全景(北東から)	26

6	5号土坑土層断面(南西から)	27
7	17号土坑全景(南から)	28
8	1号トレンチ遺物出土状況(西から)	29
P.L.4-1	1号住居全景(西から)	30
2	1号住居掘り方全景(西から)	31
3	1号住居掘り方全景(西から)	32
4	1号住居掘り方全景(西から)	33
5	2号住居土層断面(東から)	34
6	2号住居遺物出土状況(東から)	35
7	5号住居土層断面(南西から)	36
8	5号住居掘り方全景(北西から)	37
P.L.5-1	3号住居全景(北西から)	38
2	3号住居遺物出土状況(南西から)	39
3	3号住居掘り方全景(北西から)	40
4	3号住居遺物出土状況(北西から)	41
5	4号・6号住居遺物出土状況(南から)	42
6	4号・6号住居掘り方全景(南から)	43
7	4号住居掘り方全景(西から)	44
8	6号住居掘り方全景(西から)	45
P.L.6-1	A区浅間B軒石下水田検出状況(北から)	46
2	A区浅間B軒石下水田検出状況(南から)	47
3	A区浅間B軒石下水田検出状況(北から)	48

	4	C1区浅間B軽石下水田検出状況 (東から)	8	10号ビット土層断面 (南東から)
	5	C区P3浅間B軽石下水田検出状況 (南から)	9	15号ビット土層断面 (南西から)
	6	C区P3浅間B軽石下水田検出状況 (南東から)	10	19号ビット土層断面 (南西から)
	7	C区P3浅間B軽石下水田土層断面 (北西から)	11	21号ビット土層断面 (南西から)
P.L7-1	1	1号溝全景 (南東から)	12	25号ビット土層断面 (南西から)
	2	1号溝土層断面 (南東から)	13	27号ビット土層断面 (南西から)
	3	2号溝全景 (北から)	14	32号ビット土層断面 (南から)
	4	2号溝土層断面 (南から)	15	36号ビット土層断面 (南東から)
	5	6号・7号溝全景 (南から)	P.L15-1	5号土坑、1号配石遺構出土の土器
	6	6号・7号溝土層断面 (南から)	2	遺構外出土の縄文土器 (1)
	7	8号溝全景 (南西から)	P.L16-1	遺構外出土の縄文土器 (2)
P.L8-1	9	9号・10号溝全景 (南から)	2	遺構外出土の縄文土器 (3)
	2	9号溝土層断面 (南から)	P.L17-1	遺構外出土の縄文土器 (4)
	3	10号溝土層断面 (南から)	2	遺構外出土の縄文時代石器 (1)
	4	12号溝全景 (北西から)	P.L18	遺構外出土の縄文時代石器 (2)
	5	12号溝全景 (南東から)	P.L19	遺構外出土の縄文時代石器 (3)
P.L9-1	1	1号道全景 (南から)	P.L20	遺構外出土の縄文時代石器 (4)
	2	2号道全景 (西から)	P.L21	遺構外出土の縄文時代石器 (5)
	3	1号道全景 (北から)	P.L22	古墳時代遺構外、1号～3号住居出土の遺物
	4	2号道全景 (南東から)	P.L23	4号・6号住居、15号・16号土坑出土の遺物
	5	1号道土層断面 (南から)	P.L24	奈良・平安時代、3号・5号・11号溝、中・近世遺構外出土の遺物
	6	2号道土層断面 (南東から)		
	7	3号道全景 (北から)		
	8	3号道全景 (北から)		
P.L10-1	6	1号土坑全景 (西から)		
	2	6号土坑土層断面 (南から)		
	3	10号土坑全景 (西から)		
	4	10号土坑土層断面 (西から)		
	5	11号土坑全景 (南東から)		
	6	11号土坑土層断面 (南東から)		
	7	16号土坑全景 (南から)		
	8	24号・25号土坑全景 (南西から)		
P.L11-1	3	3号～5号溝全景 (南東から)		
	2	4号溝土層断面 (南東から)		
	3	11号溝全景 (上空から)		
	4	11号溝石橋検出状況 (西から)		
	5	11号溝全景 (北西から)		
	6	11号溝土層断面 (北西から)		
	7	11号溝土層断面 (南東から)		
P.L12-1	A区P6地点土坑検出状況 (南から)			
	2	1号土坑全景 (南から)		
	3	2号土坑全景 (南から)		
	4	4号土坑全景 (東から)		
	5	7号土坑全景 (南から)		
	6	12号土坑全景 (西から)		
	7	8号土坑全景 (南西から)		
	8	8号土坑土層断面 (南東から)		
P.L13-1	13号土坑全景 (南西から)			
	2	14号土坑全景 (南西から)		
	3	18号土坑全景 (北から)		
	4	18号土坑土層断面 (北から)		
	5	20号土坑全景 (南東から)		
	6	21号土坑全景 (南から)		
	7	22号土坑全景 (南から)		
	8	22号土坑土層断面 (南西から)		
P.L14-1	A区P6地点ビット検出状況 (南から)			
	2	1号ビット土層断面 (南から)		
	3	4号ビット土層断面 (南から)		
	4	13号ビット土層断面 (南東から)		
	5	8号ビット土層断面 (南から)		
	6	9号ビット土層断面 (南東から)		
	7	7号ビット土層断面 (南東から)		

萩宮南田跡

P.L25-1	調査前の萩宮南田跡 (南から)	
2	B1区・B2区の調査状況 (南から)	
3	B2区・B3区・B4区の調査状況 (南から)	
P.L26-1	A区92M-2グリッド北壁土層断面 (南から)	
	2	A区旧石碓試掘作業状況
	3	A区82M-18グリッド東壁土層断面 (西から)
	4	A区82K-14グリッド東壁土層断面 (西から)
	5	B1区93I-14グリッド西壁土層断面 (東から)
	6	B2区93H-1グリッド西壁土層断面 (東から)
	7	B3区83H-14グリッド西壁土層断面 (東から)
	8	B4区83H-7グリッド西壁土層断面 (東から)
P.L27-1	A区遺構検出作業状況	
	2	B1区93B-11グリッド剥片出土状況 (南西から)
	3	1号土坑全景 (西から)
	4	1号土坑土層断面 (西から)
	5	B1区浅間B軽石下水田および古代溝検出状況 (上空から)
P.L28-1	B1区南、東側部分浅間B軽石下水田および古代溝検出状況 (上空から)	
	2	B1区南、中央部分浅間B軽石下水田および古代溝検出状況 (上空から)
	3	B1区南、西側部分浅間B軽石下水田および古代溝検出状況 (上空から)
P.L29-1	B4区浅間B軽石下水田および古代溝検出状況 (北から)	
	2	B2区・B3区浅間B軽石下水田および古代溝検出状況 (北から)
	3	B2区北、浅間B軽石下水田および古代溝検出状況 (上空から)
P.L30-1	B1区浅間B軽石下水田畦畔・置石5土層断面 (東から)	
	2	B1区浅間B軽石下水田畦畔土層断面 (東から)
	3	B2区浅間B軽石下水田畦畔・置石8検出状況 (北東から)
	4	B2区浅間B軽石下水田畦畔・置石8土層断面 (北東から)
	5	B2区北、浅間B軽石下水田畦畔・置石7検出状況 (東から)
	6	B2区北、浅間B軽石下水田碑出土状況 (南から)

	7	B 3区浅間B軒石下水田畔畔・置石11検出状況（東から）		6	13号溝土層断面（南から）	
	8	B 3区浅間B軒石下水田畔畔・置石11土層断面（東から）	P L 36-1	B区中・近世溝全景（南から）	7	13号溝土層断面（西から）
P L 31-1	1	B 1区3号溝全景（南から）		2	14号・15号溝全景（上空から）	
	2	B 1区3号溝全景（南から）		3	14号・15号溝土層断面（南から）	
	3	B 2区・3区3号溝全景（北から）		4	14号・15号・20号溝、3号道土層断面（南から）	
	4	B 1区3号溝土層断面（北から）	P L 37-1	3号道全景（上空から）		
	5	B 2区3号溝土層断面（南から）		2	3号道土層断面（南から）	
P L 32-1	4	4号溝全景（南から）		3	8号道全景（西から）	
	2	4号溝土層断面（南から）		4	5号道全景（南から）	
	3	10号溝全景（南から）		5	5号道土層断面（南から）	
	4	10号溝全景（北から）		6	2号土坑炭化材出土状況（北から）	
	5	6号溝全景（南東から）		7	1号焼土痕土層断面（北から）	
	6	10号溝土層断面（南から）	P L 38-1	遺構外出土の縄文土器（1）		
	7	7号溝全景（南西から）		2	1号土坑出土の縄文土器	
	8	7号溝土層断面（北から）		3	遺構外出土の縄文土器（2）	
P L 33-1	1	2号溝全景（南西から）	P L 39-1	遺構外出土の縄文土器（3）		
	2	2号溝土層断面（北から）		2	遺構外出土の縄文土器（5）	
	3	8号溝全景（北から）	P L 40-1	遺構外出土の縄文土器（6）		
	4	9号溝全景（北から）		2	遺構外出土の縄文土器（7）	
	5	8号溝土層断面（東から）	P L 41-1	遺構外出土の縄文土器（8）		
	6	5号溝全景（南西から）		2	遺構外出土の縄文土器（9）	
	7	5号溝全景（南から）	P L 42-1	遺構外出土の縄文土器（10）		
	8	5号溝土層断面（西から）		2	遺構外出土の縄文土器（11）	
P L 34-1	1	16号・17号溝全景（西から）	P L 43-1	遺構外出土の縄文土器（12）		
	2	16号溝土層断面（北から）		2	遺構外出土の縄文土器（13）	
	3	17号溝土層断面（北から）	P L 44-1	遺構外出土の縄文土器（14）		
	4	12号溝土層断面（南から）		2	遺構外出土の縄文土器（15）	
	5	12号溝土層断面（北から）	P L 45	遺構外出土の縄文時代石器（1）		
P L 35-1	1	1号・2号道検出作業状況	P L 46	遺構外出土の縄文時代石器（2）		
	2	1号・2号道土層断面（北から）	P L 47	遺構外出土の縄文時代石器（3）		
	3	1号・2号道全景（上空から）	P L 48	遺構外出土の縄文時代石器（4）		
	4	1号溝全景（東から）	P L 49	遺構外出土の縄文時代石器（5）		
	5	1号溝土層断面（東から）	P L 50	奈良・平安時代から中・近世遺構外出土の遺物		

第1章 調査の経過と遺跡の概要

第1節 調査に至る経緯

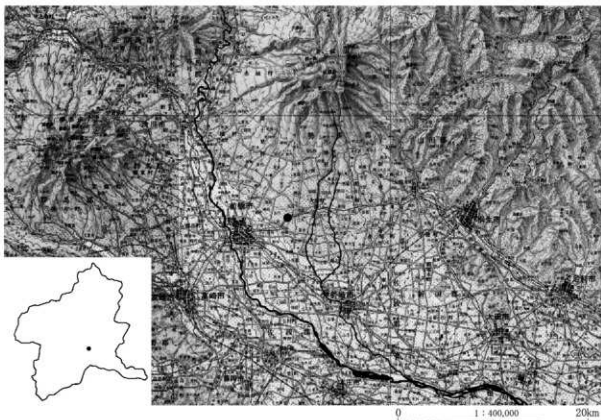
ここに報告する亀泉西久保Ⅱ遺跡・荻窪南田遺跡は、群馬県前橋市亀泉町・荻窪町に所在し、国道17号の改良工事に伴って発掘調査が実施された遺跡のひとつである。

群馬県内の国道17号の改良工事は、埼玉県の深谷バイパスから前橋市田口町の現道に接続する通称「上武道路」建設として実施されている。上武道路は、県内の平野部を斜めに縦断する基幹道路であり、すでに平成元年に前橋市今井町の国道50号までの1期工事が完了し、供用が開始されている。

1期工事に先だって昭和48年度から昭和63年度の15年間にわたって、群馬県教育委員会および財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団によって発掘調査

が実施された。調査された遺跡は35遺跡、面積は延べ534,000m²におよんだ。これらの整理作業は、昭和53年から平成7年度の17年間、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団によって行われ、旧石器時代から近世にわたる遺構・遺物が26冊にのぼる発掘調査報告書にまとめられている。

国道50号以北の工事（7工区）は平成11年から開始された。上武道路が通過する地域は、埋蔵文化財の包蔵地が多くあり、考古学的にも注目される地域である。国道50号以北の道路建設工事に先立ち、建設省（現国土交通省）関東地方整備局と群馬県教育委員会との間で、文化財の保護を前提とした協議がなされた。その結果、埋蔵文化財の包蔵地を道路建設の対象区域から除外することが不可能であり、かつ事業の実施によって埋蔵文化財が破壊される区



第1図 亀泉西久保Ⅱ遺跡・荻窪南田遺跡の位置

第1章 調査の経過と遺跡の概要

域においては、事前に発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に委託されることとなり、平成11年4月1日付けで3者の協定書が交わされた。協定書では、国道50号から前橋市堤町までの調査に関する基本的事項が確認され、整理作業を含めた発掘調査を平成18年3月までに終了することとなった。

調査は、協定書に基づき、平成11年から財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が「国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査（その1）」として受託、実施した。発掘調査は平成11年4月1日に富田細田遺跡から開始された。本事業全体で発掘調査された遺跡は、当初、国道50号に接する今井道上日遺跡から萱野日遺跡までの12遺跡で、表面積は209,000㎡におよんだ。

また、江木町萱野団地内を縦貫する前橋市市道以西の萱野日遺跡から上泉町上泉唐ノ堀遺跡までの間については平成14年4月1日付けで「国道17号（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査（その2）」として協定が結ばれ、平成14年度から発掘調査が実施されることとなった。本報告の荻窪南田遺跡・亀泉西久保日遺跡も当該年度に調査が行われた遺跡である。事業の進捗に伴って、平成14年4月1日付けの協定書は、変更の必要が生じ、平成16年

11月10日付けで新しい協定書が締結された。新協定書では、当初7工区（その1）に東半分が含まれていた萱野日遺跡について、同一遺跡であることから7工区（その2）の協約に移行・統合し、整理期間を含めた調査期間を平成22年3月31日までに改めることとなった。発掘調査は平成17年3月31日付けで上泉唐ノ堀遺跡まで終了している。

最終的な7工区（その2）の各遺跡の発掘調査は第1表の通りである。

出土遺物の整理作業は、平成11年の協定書に基づき、平成15年度から財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が国土交通省関東建設局の委託を受け、7工区（その1）の作業が開始された。7工区（その2）については平成16年11月10日付けの新しい協定書によって、平成18年度までに萱野日・堤沼上・亀泉西久保日・荻窪南田・上泉唐ノ堀の5遺跡の整理作業が着手されている。

今年度は整理作業の3年次にあたり、平成18年度に刊行された萱野日遺跡に続き堤沼上遺跡・亀泉西久保日遺跡・荻窪南田遺跡の調査報告書を刊行することとなった。

第1表 上武道路発掘調査遺跡一覧7工区（その2）

遺跡番号	遺跡名	調査区	調査担当者	調査期間
JK47	萱野日遺跡	55～56区	洞口正史、新井英樹、高柳弘道	13. 4. 1～14. 3. 31
		57～58区	洞口正史、新井英樹	14.10. 1～15. 3. 31
		51～61区	女屋和志謙、洞口正史、新井英樹、井上昌茂、井原陽一、青木さおり、津島秀章	15. 4. 1～16. 3. 31
JK48	堤沼上遺跡	1区	田村公夫、平方篤行、岡部 豊	14.12. 1～15. 3. 31
		2～5区	女屋和志謙、青木さおり	15. 4. 1～16. 3. 31
JK49	亀泉取上遺跡	1区	田村公夫、平方篤行、岡部 豊	14.12. 1～15. 3. 31
		2～5区	女屋和志謙、井上昌茂、井原陽一、青木さおり	15.12. 1～16. 3. 31
		3～5区	女屋和志謙、新井英樹	16. 4. 1～17. 3. 31
JK50	亀泉西久保日遺跡	A・B・C区	女屋和志謙、青木さおり	14.10. 1～14.12. 31
		A区	女屋和志謙、青木さおり	15.12. 1～16. 3. 31
		A・C区	女屋和志謙、新井英樹	16. 4. 1～17. 3. 31
JK51	荻窪南田遺跡	A・B区	女屋和志謙、青木さおり	14. 4. 1～14. 9. 30
JK52	上泉唐ノ堀遺跡	A区	女屋和志謙、青木さおり	14.10. 1～15. 3. 31
		A区	女屋和志謙、青木さおり	15. 4. 1～15.11. 30
		A・B・C区	女屋和志謙、新井英樹	16. 4. 1～17. 3. 31

第2節 遺跡の位置と地形

亀泉西久保Ⅱ遺跡は、群馬県前橋市亀泉町に位置し、市街地から東北東方向に約6.0km、上毛電鉄の江木駅から西南西に約0.7kmの距離にある。荻窪南田遺跡は亀泉西久保Ⅱ遺跡に北接する遺跡である。

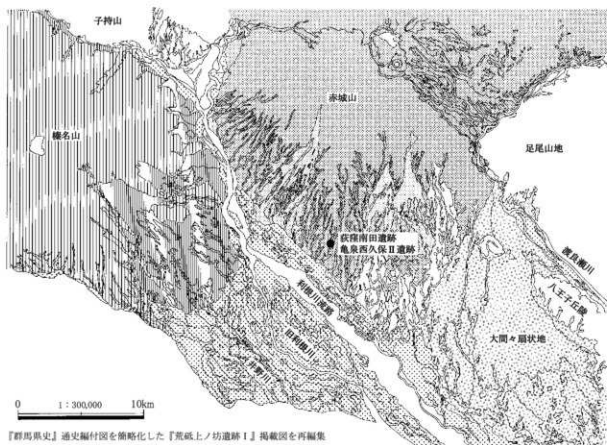
両遺跡は、群馬県の県央部東側に位置する赤城山南麓に形成された火山麓扇状地上にある。

本遺跡のある前橋市柱置地域とその周辺の地形は、山麓を流下する藤沢川・寺沢川・大泉坊川・荒砥川などの河川や台地端部からの湧水により火山麓扇状地に樹枝状の開析が進み、洪積台地と沖積地が複雑に入り込む地形が形成されている。特に、本遺跡周辺では南北に帯状の沖積地が発達し、起伏に富んだ地形が広がっている。

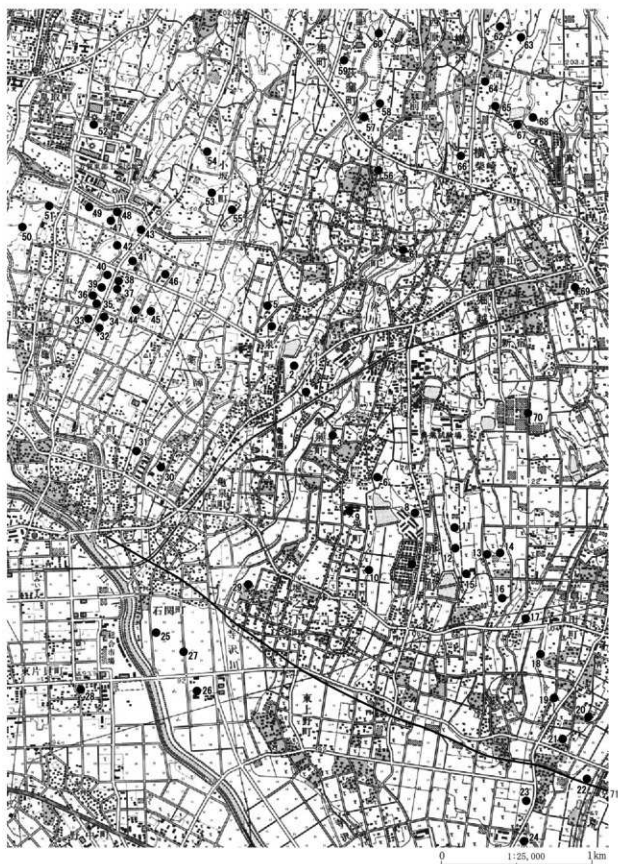
本遺跡周辺の基盤層は赤城山起源の泥流層である。荒砥川以西は基底に大胡火砕流が堆積している。地

表面は、ローム台地の原形面、砂壤土からなる微高地、沖積地に分類される。ローム台地に付随して存在する微高地は、縄文時代早期から前期にかけて、赤城山の山体が降雨災害等によって崩壊し、河川の運搬作用の結果、流速が衰える山麓端部に再堆積することにより形成されたと考えられている。

亀泉西久保Ⅱ遺跡と荻窪南田遺跡は寺沢川の右岸に南北方向に伸びる幅200～300mの洪積台地とその西側に接する寺沢川の第4次谷となる沖積地上に広がっている。寺沢川は、(大胡)金丸町白草に発する桃ノ木川の支流の一つで桃ノ木川との合流地点までの長さは約11.5kmである。第4次谷は亀泉西久保Ⅱ遺跡の南側に寺沢川の流路と合流する沖積地である。この沖積地は荻窪南田遺跡の調査区内で2つに分岐する。東側の一方が本流で、ここから約4.0km逆上った荻窪清掃工場付近に谷頭を有している。この部分の沖積地は現在も水田耕地となっている。



第2図 群馬県中央部の地形と亀泉西久保Ⅱ遺跡・荻窪南田遺跡



第3図 亀泉西久保Ⅱ遺跡・荻窪南田遺跡周辺の遺跡

西側の沖積地は現在の新田塚沼部分を北上、荻窪神社付近に谷頭を有していると考えられる。ただし、新田塚沼より上流部分は畑地化している。

遺跡地の標高は亀泉西久保Ⅱ遺跡で117～124m。荻窪南田遺跡で118～122mを測る。

第3節 周辺の遺跡

亀泉西久保Ⅱ遺跡と荻窪南田遺跡は既述のとおり南北に延びる同一の洪積台地とこれに西接する沖積地上にある。周辺は台地上を中心に周知の遺跡が多数存在している。

まず、同一台地上で見れば、亀泉西久保Ⅱ遺跡の調査区東側、明風園敷地内に西久保遺跡が存在する。「群馬県遺跡台帳」の前橋市№78として記載されている遺跡で、その概要は縄文時代中期および古墳時代土器の包蔵地となっている。

また、寺沢川を臨む台地の南端に業師塚古墳が築造されている。盛土はほとんど流出し、安山岩の自然石を使用した横穴式石室が露出、開口している。昭和48年に前橋市教育委員会により調査が実施され、直径18mほどの円墳であることが判明した。墳輪は発見されていない。横穴式石室は袖無型で、残存長は2.35m、全長5.00mが推定される。直刀、鉄鏝、馬具、耳環、玉類などが出土している。業師塚古墳の存在により、既に古墳時代後期には周辺地域の開発が進んでいたことが想定される。亀泉西久保Ⅱ遺跡B区と沖積地を挟んだ寺沢川右岸の台地上には縄文時代・古墳時代の土器の散布が広範囲にわたって見られ、亀泉霊園内に中山遺跡・亀泉霊園地内A・B遺跡が、またその西南側には縄文土器の散布する本郷遺跡の存在が周知されている。

上武道路通過予定地点で見た寺沢川の対岸、左岸段丘上には亀泉坂上遺跡(3)が、沖積地をさきんだ西側段丘上には上泉唐ノ堀遺跡(4)が位置している。

以下は亀泉西久保Ⅱ遺跡・荻窪南田遺跡で検出された遺構・遺物を理解するために周辺の歴史的環境についてふれておきたい。概観する範囲は、柱置地

域とこれに隣接する芳賀地域、旧大胡町西部、荒砥川右岸を中心とした荒砥地域の一部である。

本遺跡では2遺跡とも縄文時代包含層の調査を実施した。本遺跡周辺においては縄文時代の遺跡は数多く確認されており、中でも前期後半と中期後半に遺跡数のピークがある。縄文時代草創期としては小島田八日市遺跡で土坑9基が検出され、隆起線文土器が出土した。荒砥北三木堂遺跡では黒糸文土器が出土している。本遺跡周辺からは当該期の遺跡は知られていない。早期は草創期と同様の遺跡分布傾向をもち、住居等の遺跡の検出例はない。

前期前半も数遺跡で遺物のみが検出されているにすぎないが、前期後半になると遺跡は急増する。この時期の遺跡は、標高200m以上の丘陵性台地地帯を中心に分布する傾向にあり、荻窪東爪遺跡(60)や横沢向田遺跡(62)、堀越丁二本松遺跡(63)のように各台地を中心に集落が点在している。本遺跡周辺では標高100～150mの地点で亀泉坂上遺跡、上泉唐ノ堀遺跡、泉沼上遺跡(6)、萱野Ⅱ遺跡(8)、五代南部工業団地遺跡群(32～49)などの遺跡で竪穴住居が検出されているが、いずれも住居数軒の小規模な集落である。前期未葉から中期前半も遺跡の少ない時期である。

今回亀泉西久保Ⅱ遺跡では勝坂期の配石遺構を検出したが当該地域においても中期の遺跡が多数見られる。周辺では亀泉坂上遺跡や萱野遺跡(7)、萱野Ⅱ遺跡、五代南部工業団地遺跡群などが当該期の住居が検出された遺跡である。また、五代木福Ⅱ遺跡(45)では後葉の配石遺構が発見されている。いずれの遺跡も低平な台地に占地する傾向が見られ、集落の規模は、中・小規模の事例が大半で、継続性の著しい大規模集落の形成はほとんど見られないが、五代伊勢宮Ⅳ(42)・Ⅴ遺跡(40)と深堀Ⅲ遺跡にまたがり中期中葉の環状集落が調査されている。

後期になると遺跡数は急減しはじめる。本遺跡周辺では芳賀東部団地遺跡(52)で竪穴住居と配石遺構が検出されている。その他では、散発的に遺物が少量出土する遺跡が若干認められるにすぎない。

第1章 調査の経過と遺跡の概要

第2表 亀泉西久保Ⅱ遺跡・荻窪南田遺跡周辺の遺跡の概要

No	遺跡名	旧石器	縄文					弥生			古墳		奈良	平安	中世	近世	その他の遺構・遺跡の概要
			草	早	前	中	後	中後	前住	中住	後住	住					
1	亀泉西久保Ⅱ遺跡	●	●	●	●	●			○					○▽	○		縄文中期配石遺構・前期土坑・古代道・溝、東側の台地上に西久保遺跡
2	荻窪南田遺跡		●	●	●	●								▽	○		縄文前期土坑、古代道・溝、中・近世道・溝
3	亀泉取上遺跡	●		○	○			○						▽			7世紀の円墳、平安墓
4	上泉原ノ堀遺跡	●		○										○			
5	新田塚古墳																7世紀の円墳
6	堤原上遺跡	●		○										○			古墳大溝
7	宮野遺跡			●	○									○			7世紀の円墳
8	堂野Ⅱ遺跡	●		○	○									○			縄文土坑、7世紀の円墳
9	沼南Ⅰ・Ⅱ遺跡													○			
10	堤原下遺跡		●	●	●	●								▽			縄文土坑
11	富田下大日Ⅱ遺跡			○					○					○			
12	江木下大日遺跡	●												○			平安堀立柱建物
13	富田下大日Ⅲ遺跡			○	○									○			平安・中世堀立柱建物
14	富田下大日Ⅰ遺跡			○	○									○			
15	富田下大日Ⅳ遺跡			○	○									○			
16	富田下大日遺跡			○	○									○			
17	富田津田遺跡			●	○				○	FA				○			古墳Ⅰ 平安築土工房跡・竈跡
18	富田高石遺跡	●						○	□					○			前方後方型周溝墓Ⅰ、奈良・平安道路状遺構
19	富田西原遺跡	●						○						△	○		
20	東原遺跡													○			古墳ⅠⅡ、中世墳墓群・寺院
21	宮下(富田宮下)遺跡	●		○	●			○						○			中世墓坑・近世寺院
22	富田細田遺跡													▽	○		
23	富田大泉坊A遺跡													○			古墳時代前期溝
24	富田宮田遺跡													○			
25	石岡西田遺跡													○			
26	石岡西栗瀬													○			
27	石岡西田Ⅱ遺跡													○			古墳道・田河道
28	桂宮大塚古墳													○			6世紀後半の前方後円墳
29	正門寺古墳													○			6世紀前半の前方後円墳
30	上泉太郎三前遺跡			○													
31	桑原遺跡																竪穴住居時期不明、古墳FA堆積の溝
32	五代木福Ⅰ遺跡			○	●	●								○	○		砂鉄ビット
33	五代江戸原敷遺跡													○			縄文土坑
34	五代伊勢宮Ⅲ遺跡													○			縄文土坑・平安堀立柱建物
35	五代伊勢宮Ⅰ遺跡			●	○									○			
36	五代伊勢宮Ⅱ遺跡			○										○			
37	五代竹花遺跡			●	○	●								○			
38	五代竹花Ⅱ遺跡			○										○			
39	五代伊勢宮V遺跡			○										○			古墳小石塚、平安堀立柱建物
40	五代伊勢宮VI遺跡			○										○			縄文土坑、奈良～平安期古遺構
41	五代深堀Ⅰ遺跡			○										○			
42	五代伊勢宮IV遺跡			○										○			縄文土坑
43	五代山街道Ⅰ遺跡			○										○			
44	五代木福Ⅱ遺跡													○			平安期古遺構
45	五代木福Ⅲ遺跡													○			縄文中期配石遺構
46	五代深堀Ⅱ遺跡			○										○			
47	五代中原Ⅱ遺跡			○										○			
48	五代中原Ⅲ遺跡			○										○			
49	五代中原Ⅰ遺跡			○										○			
50	鳥取福蔵寺遺跡			○	●	●								○			縄文後期配石遺構、平安製鉄・鍛冶遺構
51	鳥取東原遺跡													○			近世土坑
52	芳賀東原団地遺跡			○	○	○								○			縄文配石、平安製鉄・鍛冶遺構
53	槍塚遺跡													○			

No	遺跡名	旧石器	縄文					弥生			古墳			奈良	平安	中世	近世	その他の遺構・遺跡の概要	
			草	早	前	中	後	中	後	前	中	後	住						住
54	五代槍筆遺跡																		
55	槍筆古墳																		7世紀の古墳
56	ほっこし塚古墳																		7世紀の古墳
57	我富倉兼道跡														○	○			奈良・平安朝立柱建物
58	我富倉兼日道跡														○	○			奈良・平安朝立柱建物
59	我富藤塚道跡														○	○			奈良・平安朝立柱建物
60	我富東爪道跡																		
61	我富城																○		
62	横沢向田道跡																		縄文土坑、7世紀古墳
63	堀越二本松道跡																		縄文土坑、平安朝立柱建物・小鎮治
64	横沢向山道跡																		7世紀の円墳
65	柴崎古墳群																		7世紀代の古墳群
66	横沢柴崎道跡																		土坑
67	茂木二本松道跡																		
68	堀越甲良木道跡																		奈良・平安火葬墓
69	茂木大道下道跡																		
70	足軽町道跡																		
71	女瀬																		未完成の大川水路

住は住居、墓は墓域、生は生産域を表す。旧石器、縄文の●は遺物の出土を表す。古墳の項、墓の□は方形周溝墓、○は古墳を、As-C下の品を、FAはHr-FA下の水田、▽は水田を表す。平安の項、生の▽はAs-B下水田、▼は818年洪水層下の水田、△は品を表す。

桂置および芳賀地域では弥生時代の遺跡はほとんど知られていない。古くから金丸遺跡で再葬墓出土と想定される土器の存在がある。荒砥地域では荒砥北三木堂遺跡や荒口前原遺跡、富田宮下遺跡(21)で中期の竪穴住居が検出されているがその数は十指に満たない。後期においても遺跡数は少数である。これら弥生時代の遺跡は、沖積地を臨む台地縁辺や微高地上に立地している。この時期には居住域に接した沖積地の一部を生産域とする小規模な集落が形成されていたと考えられる。いずれ本遺跡周辺においても当該期の遺跡の発見もあるものと考えられる。

古墳時代初期から前期の集落は、荒砥地域においてはほぼ全域においてきわめて濃密な分布状況を呈している。荒砥地域における遺跡の立地は、小河川の流域ごとにほぼ一定の間隔において集落が形成されている。そしてこれらは、小河川に沿って、あるいは、小河川の合流点を臨む台地縁辺や沖積地の谷頭周辺に立地していることが確認されている。当該期の集落は、小河川の流水や谷頭からの湧水に依拠して生産域を維持していたと思われる。

そして、この時期の集落には居住域とはその占地

を区別し、周溝墓が築造される事例が多い。富田高石遺跡(18)では前方後方型の周溝墓が検出されている。

このような状況に対し、本遺跡の周辺において当該期の住居を検出した遺跡は亀泉坂上遺跡と五代江戸屋敷遺跡(33)、五代中原1遺跡(49)、五代中原II遺跡(47)、芳賀東部団地遺跡などが知られるにすぎない。五代江戸屋敷遺跡では方形周溝墓2基が発見されている。生産遺構の状況も全く把握できていないが沖積地の開析状況などの相違が極端な遺跡分布の相違となっているのであろうか。

荒砥地域では前期集落のうちの多くは中・後期に継続し、「伝統集落」となる。中・後期になると前期からの集落は占地の範囲を多少変えながら継続する。それとともに新たな地点に「第1次新開集落」の形成がなされる。荒砥天之宮遺跡や荒砥北三木堂遺跡などに代表される集落である。こういった集落変遷の背景には従来からの河川灌漑の整備とともに荒砥天之宮遺跡で検出された溜井の掘削に見られる湧水を人為的、かつ積極的に利用するといった灌漑土木技術の導入とそれに支えられた生産域の拡大が

あったと考えられる。

また、古墳時代中期から後期にかけて荒砥地域では荒砥瓦子遺跡や梅木遺跡、丸山遺跡では、5世紀代、首長層の居宅と考えられる方形区画遺構が検出されている。このような遺構の存在は古墳に見られる被葬者の多様性が居住施設にも現れたものと考えられている。

奈良・平安の集落は、古墳時代後期と比較して標高120m以上ではその数が減少する。標高100～120mの間では沖積地に面した台地縁辺を中心に展開している。標高100m以下では古墳時代の集落から継続する事例が多くみられ、居住域は台地全体を有効に利用するようになる。

この時期、水田の開発はさらに進化したと考えられる。荒砥地域では天仁元（1108）年に降下した浅間B軽石により埋没した水田の調査事例が多数報告されており、浅間B軽石が降下した時点で沖積地の大半が水田化されていたと考えられている。

古墳の動向をみると、6世紀になり、大室古墳群で前二子墳築造され、以後、中二子、後二子の3基の100m級の前方後円墳が継起的に築造される。前二子古墳と同時期、桂置地域では広瀬川低地帯を臨む台地上に墳丘長64.5mの正門寺古墳（29）が築造され、前二子古墳と領域を接する首長層が存在していたことが知れる。その後、6世紀後半には広瀬川低地帯内の微高地上に桂置大塚古墳（28）が築造されるがその他の6世紀代の古墳に対する動向については不明瞭である。特に寺沢川をはじめとした桃ノ木川の各支流域では有力古墳の存在が少ない。7世紀代の古墳についても同様な傾向で小円墳が一基または数基ずつ散在的に分布するのみである。江戸原地区の古墳や檜峯古墳（55）、ほっこし塚古墳（56）がそのような事例である。そのような中、安山岩の切石を石材とした萱野II遺跡2号古墳や直径約40mの新田塚古墳は、堀越古墳と同様、7世紀における小地域の中核的古墳となるものと考えられる。

これに対し、本遺跡周辺桂置地域では遺跡の調査数が少数であることも原因してか古墳時代中期・後

期から奈良・平安時代へと集落の継続性について荒砥地域と対比できるような資料の蓄積はない。ただし五代南部工業団地遺跡群における調査成果によれば台地上の細かな地点の移動はあるものの古墳時代後期から奈良・平安時代まで継続して集落が形成されている。その規模の大小に差異はあるものの、本遺跡周辺も荒砥地域同様の集落展開があったことが想定される。古墳時代中期・後期には沖積地に面した台地縁辺にあった居住域が、奈良・平安時代には台地奥地にも拡大する傾向は、亀泉坂上遺跡から萱野遺跡周辺でも看取される。本遺跡よりも高標高にある伏窪倉兼遺跡（57）、伏窪倉兼II遺跡（58）、檜峯遺跡などでは集落が検出されて、堅穴住居とともに掘立柱建物が多数発見されている。また、五代南部工業団地遺跡群周辺では平安時代の製鉄・鍛冶遺構を伴う集落が多数調査され注目される。

女堀（71）は、桂置・荒砥地域を東西方向に横切る農業用水遺構で、洞名荘立荘に関わり、開削されたものと考えられている。調査結果から掘削工事が途中で中断されたことが確認された。堀の掘土下からは鳥が検出された。女堀は、この鳥の直下に堆積する浅間B軽石の降下によって被害を受けた欠水地帯の農耕地、灌漑設備を復興することを目的に掘削工事が計画されたものと考えられる。取水地点は上泉町地内、現在の藤沢川付近の広瀬川低地帯からとされてきたが近年の研究では現利根川から取水したとの指摘も見られる。

中世の遺構としては上泉城、荻窪城（61）、西荻窪城、亀泉城などの存在が知られている。いずれも室町時代から戦国時代の城郭と考えられ、大胡城との関連性が指摘されている。荻窪城は本遺跡の北方、寺沢川を臨む台地の末端に築かれており、塚址が認められる。西荻窪城は、荻窪城と沖積地を挟んだ西北方向にあり、一辺80mの本郭を中心とした土塁、堀といった遺構が広範囲にあったようである。

城郭以外では表のとおり多数の遺跡で溝や土坑等の遺構が検出されているが屋敷地の検出などにつながる結果にはいたっていない。

第2章 亀泉西久保II遺跡の調査

第1節 調査の方法と経過

1 遺跡名の呼称と調査区の設定

上武道路は赤城山南麓を斜めに横断し、発掘区は7工区（その2）だけでも総延長が約2kmにもおよび。前述のように、赤城山南麓には多くの帯状開析谷が発達しており、上武道路の路線が台地と谷を交互にくりかえして通過する形になっている。加えて本地域には埋蔵文化財が豊富で、台地上はほとんどが遺跡であり、谷地においても埋没水田等が検出される。したがって遺跡が連続的に分布することになり、遺跡の区切りをどこにするか、遺跡名をどう付すかが調査上の課題となった。

これについて7工区（その1）の調査段階で、調査担当者間で原案をつくり、前橋市教育委員会と協議した結果、今回の調査では一つの台地とその南側に接する谷地を含む一単位を一遺跡とすることとした。また、既調査の遺跡には同名称をつけた後「II」を付すこととした。この呼称については7工区（その2）の調査においても踏襲された。

亀泉西久保II遺跡は、東側隣接地に西久保遺跡が周知されていたことから同名称にIIを付した。

厳密な形を取れば西久保II遺跡とされるところであるが、事業団の遺跡命名法の一部を取り込み亀泉西久保II遺跡と命名されるにいった。

亀泉西久保II遺跡内の調査区は、便宜的に北側からA・B・Cと3大別をした。A区は県道前橋・大間々・桐生線と上毛電鉄軌道の間、B区は上毛電鉄軌道以南の台地上、C区は寺沢川左岸段丘上となる。さらにA・Bでは各区ごとに調査地点を設定した。調査地点の設定は現道で区切られた範囲を単位とした。また、道路建設の工事行程に即した対応が調査地点の単位に反映された部分もある。調査地点の呼称はP2とかBP9のような略号を使用した地点もあるがこれは道路建設時の構造物の呼称を利用した

ものである。

なお、国土交通省との調整では、工事区全体の現道に区切られた最小単位に連番をつけた地区名を用いた。これによれば本遺跡はNo.77～82にあたる。しかし、これは考古学的な遺跡の動向とは関連しないので本報告書では用いないこととする。

2 グリッドの設定

上武道路関連の遺跡調査においては路線上の遺跡相互の関連性が把握しやすいように、平面図を記録する測量用のグリッドは、1000m四方の大グリッド-100m四方の中グリッド-5m四方の小グリッドの階層的なグリッド網を設定した。

グリッド名称は各階層で異なる。1000m四方の大グリッドは7工区（その2）全線を6～9でカバーした。亀泉西久保II遺跡は、第5図に表したように8の大グリッドに含まれる。グリッド呼称が煩雑になるので、報告書の記載や個々の図面では大グリッドを省略している。中グリッドは大グリッドを100個に区切り、南東隅からZ方向に1～100までとした。小グリッドは中グリッドの中を5mずつに区切り、東から西へA～T、南から北へ1～20とした。

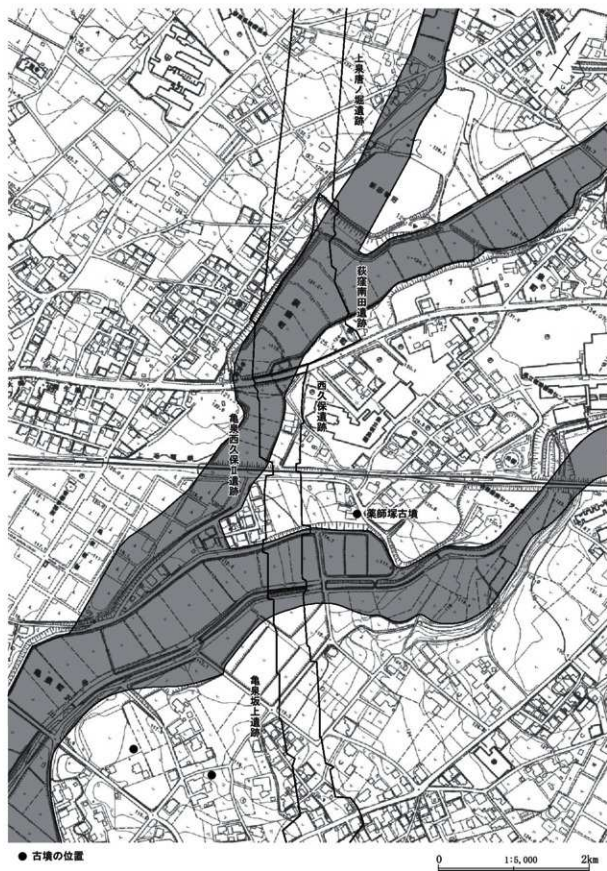
グリッド呼称は、南東隅の交点をあて、独立した単位の100m四方の中グリッドと5m四方の小グリッドを並立して「51A-1」のように呼称した。

亀泉西久保II遺跡のグリッドの座標値は、国家座標（旧座標第IX系）を用いて計測し、8-61K-1が旧座標でX=44,600km、Y=-63,050km、新座標にすれば概ねX=44,951km、Y=-63,331kmである。

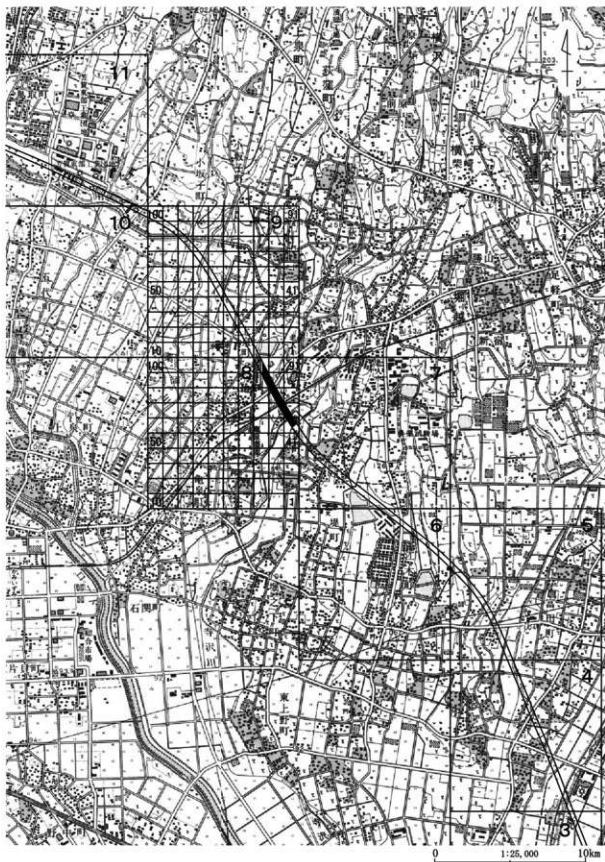
3 調査の方法と遺構・遺物の記録

表土掘削および火山灰・洪水砂等の遺構面被覆層の除去は、調査の効率化を図るため、大型掘削機械で行い、排土の運搬についてはダンプトラックとキヤタピラー式のクローラードンプを使用した。

調査にあたっては図面・写真および観察状況を記



第4図 亀泉西久保Ⅱ遺跡・萩窪南田遺跡の位置と周辺の地形



第5図 上武道路と亀泉西久保II遺跡・萩窪南田遺跡

録した。

遺構の名称は、遺跡全体を通して遺構の種類ごとに通し番号を付した。報告においても調査時の呼称を踏襲した。遺物の取り上げに際しては、遺構単位、グリッド単位を基本とした。

図面は各遺構の平面図と断面図を作成した。測量については、平面図の作成は、一部を業者委託し、実施した。その他の平面図の作成、土層断面図の測量については作業員に指示し、縮尺を検討した上で図面を作成した。

適時作成した遺構実測図には、遺構名・実測図名・縮尺・実測者・水準高・基準杭の高さ・作成年月日を記入し、調査区・調査面・遺構単位で図面ごとに通し番号を付した。

土層の観察・注記は調査担当者各自に委ねたので、不統一な部分がある。

遺構写真撮影には、35mm版と6×7インチ版カメラのモノクロフィルムと35mm版リバーサルフィルムを使用した。遺跡全体の調査状況については高所作業車や気球を使用して全景写真を撮影した。

撮影したフィルムは現像処理し、モノクロフィルムはベタ焼きを行った。ベタ焼きはネガ検索台紙に調査区、調査面、遺構ごとに貼り付け、撮影対象・撮影方向・撮影日・フィルム番号を記録した。リバーサルフィルムはコマごとに遺跡名・撮影対象・撮影方向・撮影日を記入し、通し番号を付した。

出土遺物の洗浄・注記作業は調査事務所内で実施した。遺構の注記は、遺跡略号(UK-50)、調査区名、調査面、遺構名またはグリッド名などを記入した。

4 調査の経過

亀泉西久保Ⅱ遺跡の調査は平成14・15・16年の3年次にわたり断続的に実施された。

1年次の平成14年度は伏窪南田遺跡の調査終了に合わせて9月に発掘準備に入り、11月末で調査を完了した。成果は第3節以下で執筆するとおりである。

調査の対象となったのはA区本線部分のP7・P9・西側側道部分、B区全域、C区東側側道部分のC1・西側側道部分のC2である。

調査はA区P7・P9地点を皮切りでB区、A区西側側道部分、C区C1・C2へと進めた。A区P7地点南半分は宅地造成の際に削平を受けていた。A区西側側道部分北半分では表土掘削を行い沖積地内に浅間B軽石の堆積を確認したものの湧水のため遺構精査を断念した。また、C区では試掘調査を先行して行い、土層観察、遺構確認後、対象部分の調査を拡張した。そのためC2区では南半部分を対象から除外した。

A区・B区の洪積台地上では縄文時代包含層の調査後、旧石器試掘調査を実施した。調査は5×2mの試掘坑を設定、棟名八崎軽石層(Hr-Hp層)までの各ローム層中を精査した。A区・B区の試掘坑の位置は第8図に示したとおりである。A区では3箇所を設定した。この他にP9地点では縄文包含層の調査時に設定したトレンチ部分でも精査を行った。

B区では21箇所の試掘坑で設定したが、この調査区では圃場整備時の削平が深所にまでおよんでおり、ローム層の残存が不良であった。

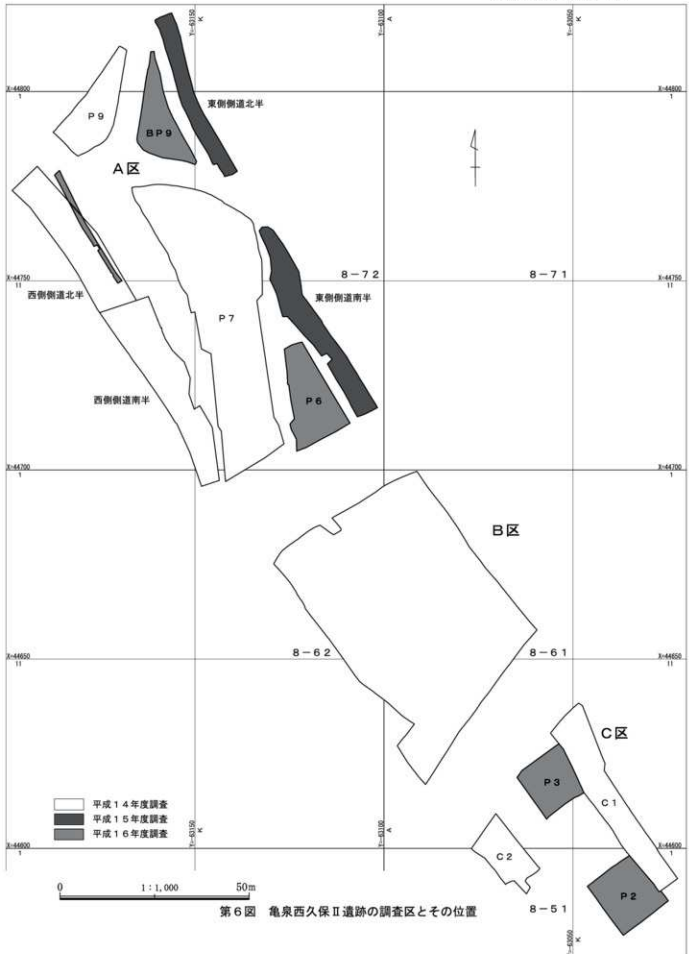
試掘調査の結果、A区・B区いずれの試掘坑からも旧石器時代の遺物は出土しなかった。

2年次の平成15年度は堤沼上遺跡、亀泉坂上遺跡と併行して調査を実施した。調査対象地点はA区の東側側道部分である。この部分は隣接地の造成により後世の盛土が厚く堆積、現地表面と調査面の差が著しく、安全対策上実質調査面に大きな制約が加えられた。旧石器試掘坑を2箇所に設定、ローム層も精査したが出土遺物はなかった。

3年次の平成16年度は亀泉坂上遺跡・上泉唐ノ堀遺跡と平行して調査を実施した。調査の対象はA区B P9・P6とC区のP2・P3であった。これらはA区の2地点が県道をC区の2地点が寺沢川を渡る橋脚基礎工事部分である。

A区P6地点では上面の調査終了後、2箇所に試掘坑を設定し、旧石器の調査を実施したが出土遺物はなかった。

亀泉西久保Ⅱ遺跡の調査経過の概略は以下のとおりである。



第6図 亀泉西久保Ⅱ遺跡の調査区とその位置

第2章 亀泉西久保II遺跡の調査

調査日誌抄録

平成14年度（第1次）

- 9月4日 調査開始準備。
9月5日 A区本郷地点。表土掘削作業開始。17日まで。
9月25日 A区P7・P9地点。遺構確認作業並びにB区の表土掘削を開始。10月10日まで。
10月3日 A区P7地点で1号住居他を精査開始。
10月10日 A区P9地点。全景写真撮影。
10月11日 A区P7地点1号配石遺構の調査開始。
10月18日 A区P7地点旧石器試掘調査開始。合わせて縄文時代包含層の調査も実施。10月28日に終了。
11月11日 B区遺構確認作業を開始。11月13日から溝、土坑の調査。
11月12日 C1区試掘調査を開始。11月29日から遺構確認作業へ。
11月13日 B区旧石器試掘調査開始。
11月18日 A区西側側道部分表土掘削開始。その後南半で浅間B軽石下木田を精査。
11月28日 C2区遺構確認作業開始。
12月4日 C1区3号～5号溝の調査。
12月6日 B区旧石器試掘調査を終了。出土遺物なし。以降埋戻し作業に。
12月12日 A・B・C区空中写真撮影。16日までに記録作業を終了後、各区の埋戻しへ。
12月21日 埋戻し完了。本年度調査を終了する。

平成15年度（第2次）

- 本年度の契約開始日は12月1日であったが、工事工程との調整を図るため下記内容のとおり、調査に着手、実施をした。
11月6日 A区東側側道部分。表土掘削を開始する。併せて遺構確認作業を実施。
11月12日 東側側道南半部分、2号住居。土坑を精査。北半部分の表土掘削を継続する。
11月14日 東側側道南半部分、旧石器試掘開始。北半部分、3号遺調査。
11月19日 旧石器試掘。土層断面記録。
11月26日 埋戻し終了。A区東側側道部分の調査を終了する。

平成16年度（第3次）

- 4月22日 C区P2・P3地点の表土掘削を開始。併せて遺構確認作業を進行する。
5月6日 P2地点、11号溝の掘り下げを開始する。
5月12日 亀泉取上遺跡とあわせ空中写真撮影を行う。
5月13日 実測作業を終了。C区P2・P3地点の調査を終了する。
8月24日 この前後にA区西側側道部分に取り付け側溝工事が行われ、土層観察を実施する。
9月9日 A区P6・B区P9地点。表土掘削を行う。
9月13日 P6地点の遺構確認作業。土坑、ピットの調査を開始する。
9月28日 P6地点土坑。ピットの調査を終了。旧石器試掘調査を開始する。以後、調査記録の作成を行う。
10月7日 P6地点の旧石器試掘調査を終了する。
10月12日 A区B区P9地点の表土掘削を開始。遺構確認作業を行う。
10月14日 3号・4号住居を検出。調査に入る。
10月22日 4軒の住居。12号溝の調査とともに、縄文包含層調査のためのトレンチ設定、掘り下げを開始する。
11月8日 縄文時代遺構の検出はなく、トレンチ調査を終了する。P9地点の調査を11月10日まで実施する。
11月11日 調査区の埋戻しを行い、本遺跡の調査を全て終了する。

5 整理作業の方法

亀泉西久保II遺跡の調査成果・出土遺物の整理作業および報告書編集作業は平成18年10月1日から12月31日の間実施した。

遺構図面は修正・補足の後、素図を作成、これを基礎にデジタルデータを作成、報告書掲載用の図版を作図した。

出土遺物は、出土地点ごとに接合作業を行った後、報告書に掲載する遺物を選択した。実測はその全てを手実測したが一部、器械実測や写真実測で素図を作成した物もある。器形の復元が困難な資料は断面のみ実測を行い、これに拓本を添付した。石器類は石器・剥片・礫に分類、全てについて石材同定を行った。石器は74点について実測図を作成、報告書に掲載した。

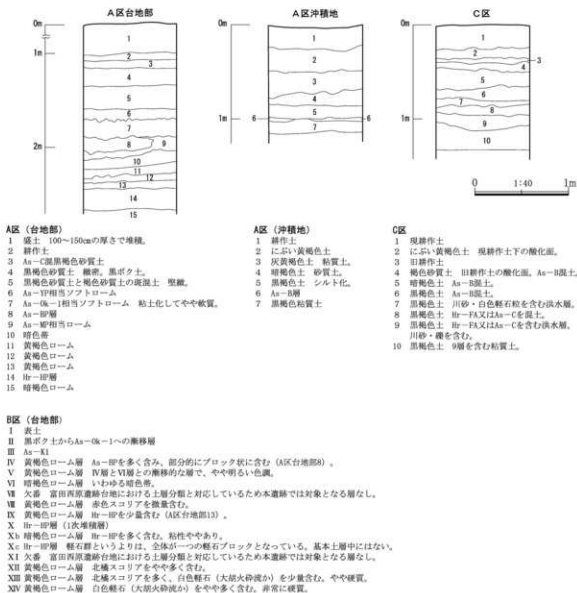
掲載資料はブローニーフィルムを用いて適宜の倍率で写真撮影を行い、その大半を写真図版として報告書に掲載した。

掲載を断念した土器・石器は出土遺構、地点ごとに種別・器種を分類し、計数後収納した。

第2節 遺跡の基本土層

第1章第1節で記したように調査区域のA区の中央から東側とB区は洪積台地上にある。A区の西側側道部分は伏窪南田遺跡B区から続く沖積地である。またC区は寺沢川右岸の段丘上に位置するため、この3地点で土層の堆積状況は大きく異なるものであった。いずれの調査地点も宅地造成や圃場整備により旧状の改変が著しいものであったが第7図に本遺跡の基本土層を示した。

A区台地上では表土・盛土の下位に浅間C軽石を混土する黒褐色砂質土が堆積しており、奈良・平安時代以降の竪穴住居他の諸遺構がこの土層を掘り込んでいた。さらにこの層の下位に黒褐色砂質土、いわゆる黒ボク土が堆積、縄文土器、石器を包含していた。A区沖積地内では浅間B軽石の堆積が確認され、この下位に黒褐色粘質土の堆積が見られた。同軽石で埋没した水田遺構が検出された。これより下



第7図 亀泉西久保Ⅱ遺跡の基本土層

位の火山灰の堆積については不明である。

また、第8図の柱状図はA区・B区の旧石器試掘時に得られた遺跡内各所における土層の堆積状況を記録した模式図である。土層番号に付したローマ数字の番号は周辺遺跡を含めたローマ数字の堆積状況を統一的に整理したものである。B区においては調査区北端で暗色相当層が残存していた他はHr-HP層近くまで削平を受けていた。

C区は圃場整備による削平、中世以降の溝の掘削、複数時におよぶ洪水の影響を受け各時代の現形面を

把握することが困難であった。一部においては浅間B軽石の堆積が確認され、その下位に水田面の存在が想定された。また、榛名二ツ岳降下火山灰や浅間C軽石を混土する土層や洪水堆積層が確認された箇所もあった。

第3節 検出した遺構と遺物

1 調査の概要

各調査区で検出した遺構については以下のとおりである。個々の検出地点については第9図にその概要を提示してある。

A区では台地上から縄文時代の配石遺構1基、土坑1基、奈良・平安時代の竪穴住居6軒、土坑6基、溝7条、道2条を検出した。時期不明の土坑は18基、ピットは37本を数えた。沖積地内では浅間B軽石に埋没した水田1面の広がりを確認した。

B区では縄文時代の土坑1基、奈良・平安時代の溝、道各1条を検出した。

C区では古墳時代の水田1面、中・近世以降の溝4条を検出した。

試掘調査の結果、A区・B区の洪積台地上から旧石器時代の遺物は検出されなかった。

調査で得ることのできた資料は、60×37×15cmの遺物収納箱に10箱である。本文中に掲載した資料の内訳と数量は以下のとおりである。

縄文土器91点、縄文時代の石器74点、古墳時代の土師器4点、奈良・平安時代の土師器22点、須恵器28点、鉄器1点、石製品4点、中・近世以降の陶磁器・軟質陶器17点、瓦1点・石製品1点である。

また、資料化の困難であったものの内訳は縄文土器684点、縄文時代の石器・剥片・礫他438点、古墳時代から平安時代の土師器1512点、須恵器217点、中・近世以降の土器類64点、瓦1点、石器類34点である。

2 縄文時代の遺構と遺物

(1) 概要

縄文時代の遺構としてはA区P7地点で配石遺構1基を検出した。沖積地を臨む台地縁地に立地している。また、A区P6地点で時期は特定できないが土坑1基(17号土坑)を検出した。

配石遺構や土坑の周辺から同種の遺構を検出することはなかったが、後述するよう縄文時代前期を主体に中期から後期の土器を包含する淡色黒ボク土の

堆積が確認され、同時期の集落が台地奥部に展開されていたことが充分推測される。

B区はローム層の削平が進行し、Hr-HP近くまで調査区大半の地形が著しく変形を受けていた。そのような状況の中、寺沢川を臨む台地南側斜面で縄文時代前期の土坑1基(5号土坑)を検出した。ローム層削平以前には同時期、同種の遺構が台地上に展開していた可能性が考えられる。

A区縄文時代遺物包含層の状況については後述する。

(2) 土坑

5号土坑(第10図、PL3・15)

位置 61P-10G

形状 B区南斜面上に位置しており著しく削平を受けていた。平面形は円形で、直径1.20mを測る。残存深度は0.20mである。

方位 N-4°-W

埋没土 一部豊原に褐色土が堆積していた他はロームを主体としたにぶい黄褐色土で埋没していた。

遺物 1は深鉢の底部破片である。形状は平底で底径は11.9cmである。器面はナデが施され仕上げられている。胴部は3.2cmほど立ち上がったところで欠損している。他に縄文施文の小破片が出土した。(第10図、PL15)

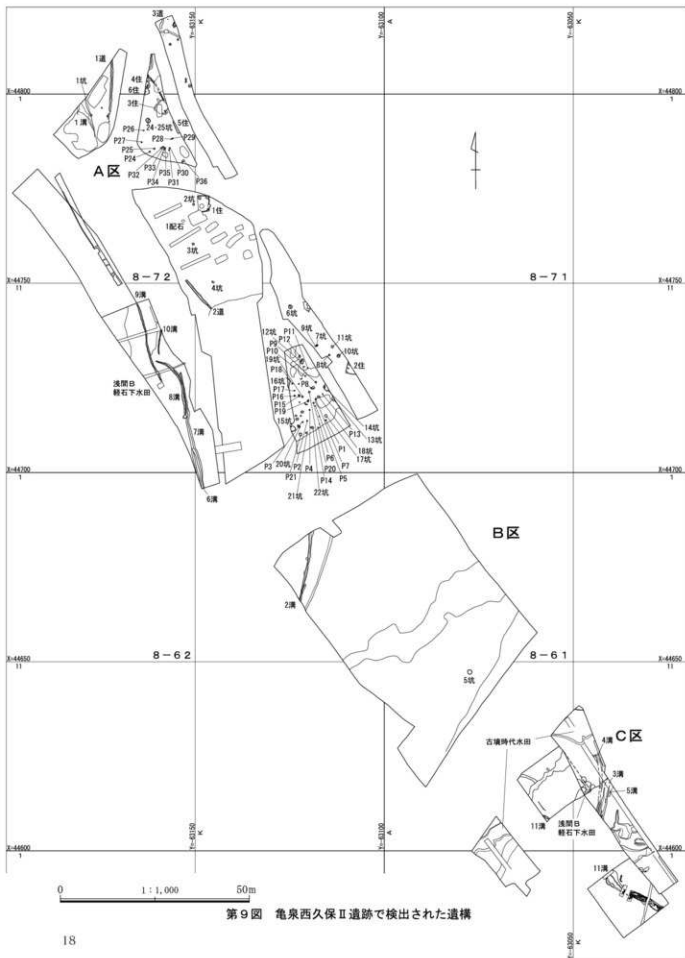
所見 埋没土から深鉢の底部(1)が検出されたことから縄文時代前期諸磯b式の所産と考えられる。土層の堆積状況から周辺の洪積台地は大きく改変を受けていることが知られる。同時期の土坑が近接して存在していた可能性が充分考えられる。

17号土坑(第10図、PL3)

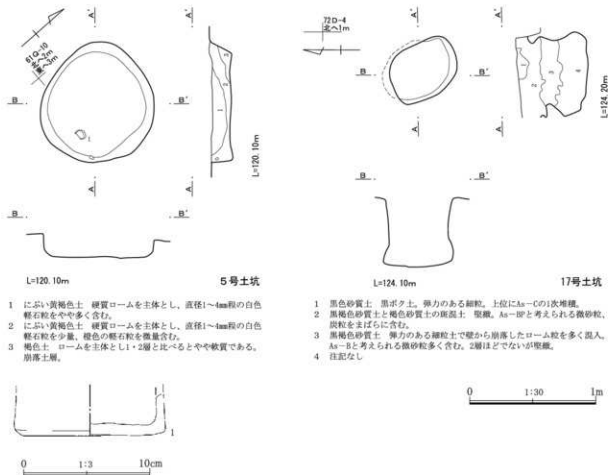
位置 72D-3・4G

形状 P6地点で実施した旧石器の試掘調査途上でその存在を確認したため、全体形状を検出することが困難であった。平面形は長円形で長径0.75m、短径0.58mを測る。残存深度は0.72mである。壁面の断面形は円筒形であったが底面寄りかややオーバーハングし、いわゆる袋状を呈していた。

方位 N-28°-W



第9図 亀泉西久保II遺跡で検出された遺構



- 1 濃い黄褐色土 硬質ロームを主体とし、直径1~4mm程度の白色軽石粒をやや多く含む。
- 2 濃い黄褐色土 硬質ロームを主体とし、直径1~4mm程度の白色軽石粒を少量、橙色の軽石粒を微量含む。
- 3 褐色土 ロームを主体とし1・2層と比べるとやや軟質である。崩落土層。

- 1 黒色砂質土 黒ボク土、弾力のある細粒。上位にAs-Cの1次堆積。
- 2 黒褐色砂質土と褐色砂質土の混成土 堅緻。As-Bと考えられる微砂粒。炭粒をまばらら含む。
- 3 黒褐色砂質土 弾力のある細粒土で壁から崩落したローム粒を多く混入。As-Bと考えられる微砂粒多く含む。2層ほどでないが堅緻。
- 4 注記なし

第10図 縄文時代の土坑と出土遺物

埋没土 中層には黒褐色砂質土と褐色砂質土の混土が、下層には黒褐色砂質土が堆積していた。

所見 残存部分からは出土遺物がなかったが、埋没土の特徴などから縄文時代の所産と考えられるが詳細な時期については不明である。周辺に縄文土器・石器が散在したことから隣接して集落が存在していたことが想定される。

(3) 配石遺構

1号配石 (第11・12図、PL3・15)

位置 72K-14G

形状 平面形は長円形を呈していたと考えられる。規模は長軸0.68m、短軸0.46m、深さ0.23mであった。周壁に沿って円礫を並べていた。東側の小口部分に長さ30cmの礫を横位に置いた他は長さ15cmほどの礫が用いられていた。内側の無配石部分から崩落した礫の出土が見られたが周石が何段積みま

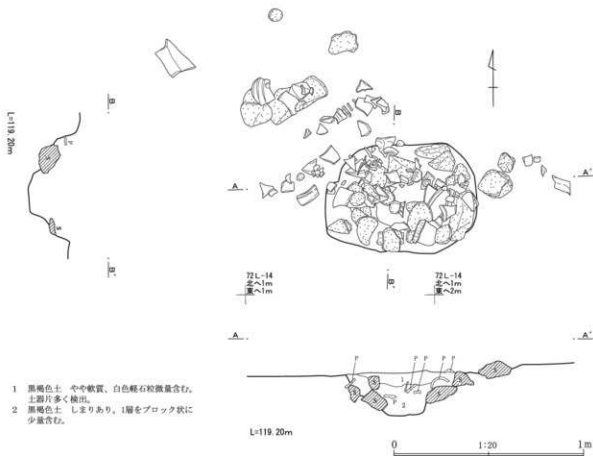
いたのかは不明である。

方位 N-90°-E

埋没土 褐色土が堆積していた。上下2層に分層することができる。

遺物 中央の無配石部分から北辺寄りで深鉢(1)・(2)が細片の状態になって出土した。土器片の出土層位はいずれも底面から10cm以上離れていた。また、土器片出土は配石列の北西外方にまでおよんでいた。

1は深鉢形土器である。口縁部上位を欠損しており、残存高は40.6cmを測る。底径は11.5cmである。頸部は刻みを持つ隆帯で胴部と区画されるが無文である。胴部文様帯は隆帯により2段に分かれる。上・下段とも隆帯貼付の円形のモチーフを、刻みを有する曲線の隆帯2本で繋ぐものである。空間にはペン先状刺突文が充填されている。下段は上下両端の



第11図 1号配石遺構

隆帯に沿って爪形文が一周する。円形のモチーフは上・下段とも4単位が配されており、内側には刻みが充填されている。底部上端との区画には隆帯がめぐり、以下は無文である。

2は深鉢形土器である。口縁部を欠損しており、胴部のみが残存である。残存高は35.6cmを測る。胴部文様帯は平行する2条の隆帯により上下2段に画されている。上・下段とも蛇行する隆帯で三角形を基本とする空間が構成されている。隆帯は両脇に2条ずつ沈線を伴っている。三角形の空間内には三叉文や連続する刻目文が充填されている。底部上端との区画には隆帯が巡り、以下は無文である。

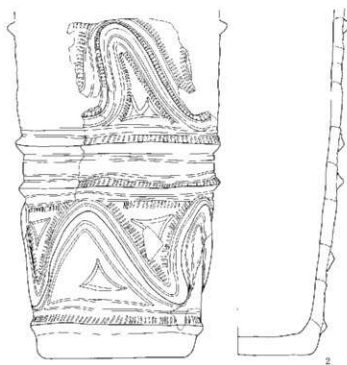
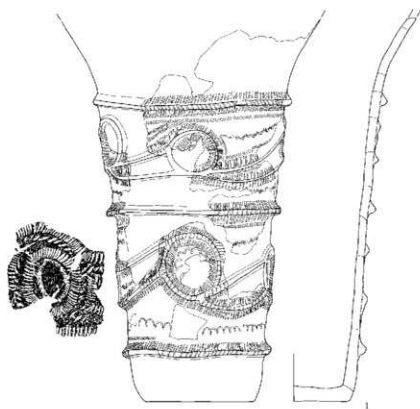
所見 用石に対する規則性はやや稀薄であった。出土した深鉢の特徴から縄文時代中期晩期の所産と考えられる。

(4) 包含層の調査

第16～26図に掲載した遺構外の出土の縄文土器および同時期と考えられる石器は、その大半がA区から出土したものである。これらの遺物は基本土層の4層黒褐色砂質土に含まれたものである。この層はいわゆる淡色黒ボク土である。本遺跡周辺の遺跡ではこの土層中に縄文時代前期を中心とした土器・石器が包含されていることが広く周知されていた。

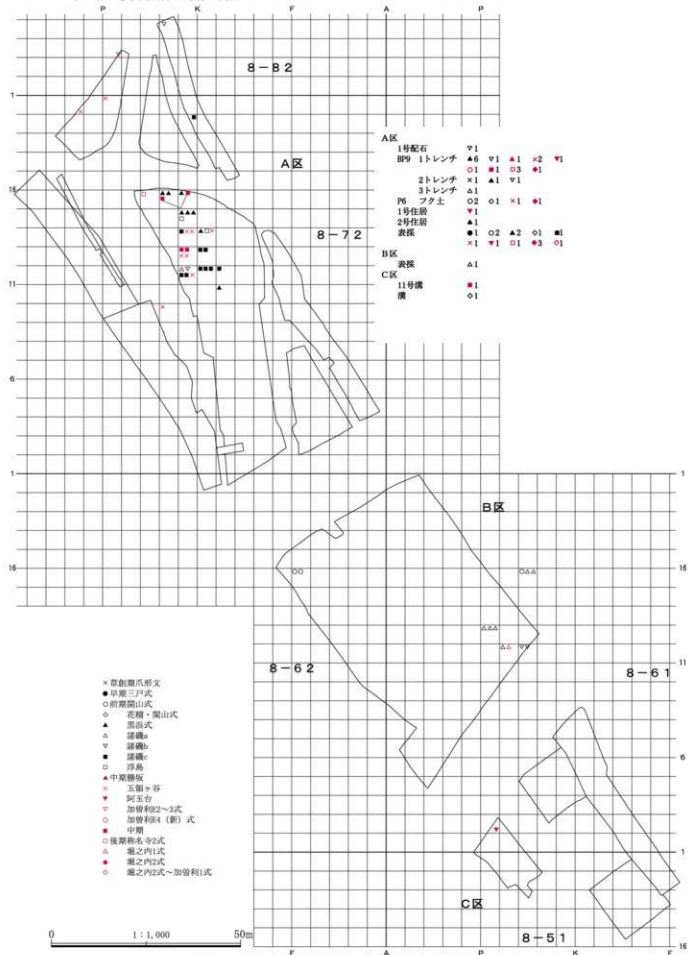
本遺跡においても調査開始当初からこの淡色黒ボク土の堆積が確認されるとともに、表土掘削後の遺構確認作業時に多数の縄文土器・石器の出土が見られた。

調査は配石遺構の存在が明らかになったA区P7地点北半では第8図に示したよう3箇所に長さ10m前後、幅2mの東西方向の試験掘を設定、4層の淡色黒ボク土を掘り下げ、遺物の出土状況、土層の堆

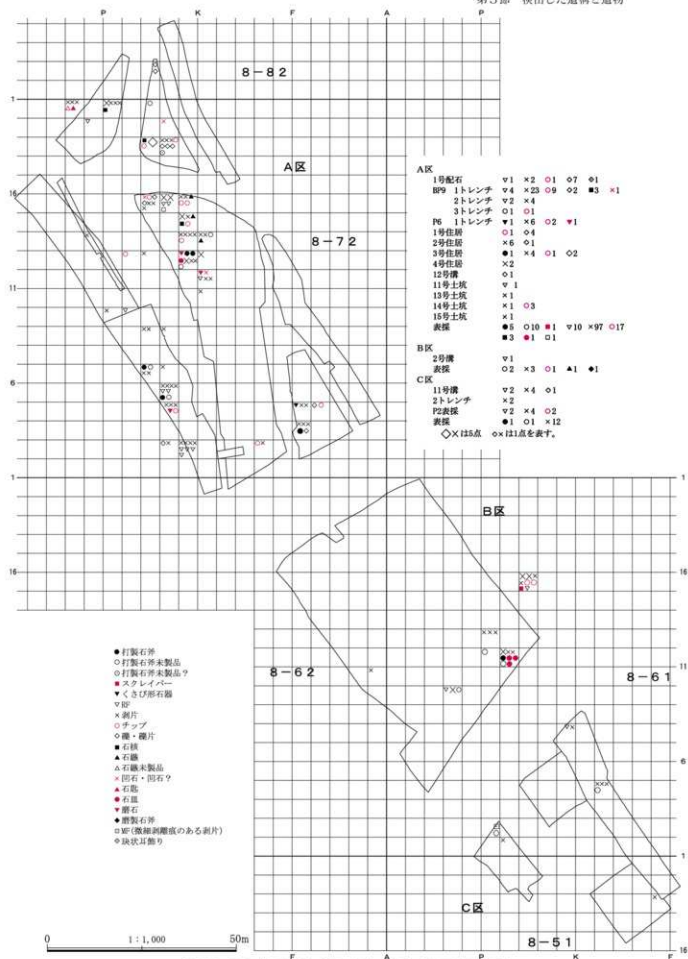


0 1:4 10cm

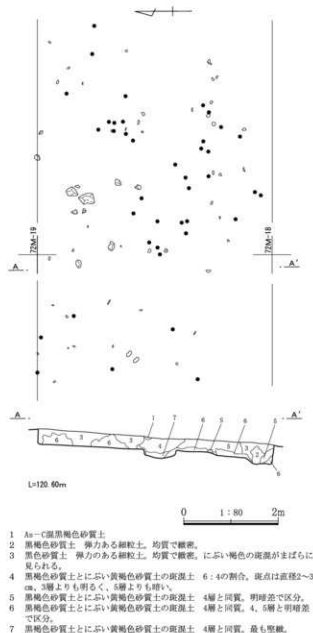
第12図 1号配石遺構出土遺物



第13図 縄文時代遺物包含層の調査と縄文土器出土地点



第14図 縄文時代遺物包含層の調査と縄文時代石器出土地点



第15図 A区第1号トレンチと遺物出土状況

積状を確認しながら、配石遺構あるいは竪穴住居、土坑などの遺構確認作業を行った。

第15図はP7地点の72M-18グリッドに設定した第1号トレンチ内の遺物出土状況と土層の堆積状況である。このトレンチ内からは前期黒浜式（第16図12～16・18・23）、前期諸磯b式（第17図40）、中期勝坂式（第18図60）、後期堀之内2式（第19図85・87～90）の各時期の土器と打製石斧未製品

（第21図117）、石鏃（第20図93・95・98）、石核（第24図149）、凹石（第26図164）などの各種石器が剥片・チップなどと合わせて42点が出土した。

上記の調査で出土した資料は、遺跡全体で縄文土器775点、石器および石器類512点である。これらについては土器の型式分類、石器類の器種分類、石材同定を行った。このうち本文に実測図を掲載した資料は縄文土器91点、石器74点である。

遺跡全体における遺物の出土状況は、第13・14図に示したとおりである。出土数が少量であったため、特段の分布傾向を見出すことは困難であった。

土器の分布ではA区の1号配石遺構が検出された周囲、8-72グリッドの10ラインから15ラインまでの間に前期黒浜式から諸磯c式の出土が集中している。また、配石遺構の年代に近い中期五領ヶ台式から勝坂式の土器もこの範囲内にまとまった。

石器の出土もこの中に多く見られ、打製石斧2点、打製石斧未製品2点、石鏃3点、磨石2点、石皿1点が剥片・チップ・礫などと出土している。A区ではこのP7地点だけではなくBP9・P9・P6などの他地点からも多数の石器類が出土している。また、西側側道南半部分の沖積地周辺においても打製石斧2点、打製石斧未製品2点、2次調整のある剥片2点、磨石1点が出土している。塊状耳飾りの破片（第20図92）もここからの検出である。

B区では削平をまぬがれた台地南側斜面部分から諸磯a式・諸磯b式などの土器が少量検出され、打製石斧1点、打製石斧未製品3点、石皿3点、二次加工のある剥片1点などの石器も出土している。

以上のような状況は文頭にも記したよう台地奥部に展開したであろう集落の緑辺地域を調査対象としたことが反映された結果と考えられる。

（5）遺構外出土の土器

第1群（第16図、PL15）

1はA区2号トレンチから出土した深鉢の口縁部破片である。器内の厚さは0.3cmと非常に薄い。羽状に爪形文が施文されている。焼成は良好、色調はぶい褐色である。草創期に属すると考えられる。

第2群 (第16図、PL15)

2はA区BP9から出土した深鉢の胴部の小破片である。外面に横位の貝殻沈線文が認められる。内面は剥離しており観察ができない。焼成は良好、色調はにぶい黄褐色である。早期三戸式に属すると考えられる。

第3群1類 (第16図、PL15・17)

3～10をこの一群とする。前期関山式に属すると考えられる。いずれも深鉢の破片で、3・5～7はA区から、4・9・10はB区、8はC区からの出土である。

3・4は口縁部の破片である。3は外面が先端を折り返したように肥厚、段をなしている。段の上下に単節RL縄文を縦位に施文する。4は横位の単節のLRとRL縄文により羽状縄文が構成されている。

5～8は胴部破片である。5はループ文の見られる単節のRLとLR単節縄文を横位に交互施文した後、半截竹管によるコンパス文を重ねている。6は口縁部との間を圧痕を伴う隆帯で画している。地文は単節のLRとRL縄文による羽状縄文これに竹管による円形刺突文を重ねている。7は中位に瘤状の突起を有する。地文には懸糸圧痕文LR1単位が施文されている。8は縄文が施されていると考えられるが種別不明である。

9・10は胴部から底部の破片である。両者とも底面に縄文を施文する。9は胴部に単節のLRとRL縄文による羽状縄文を、底面にLR縄文を施文する。10は凹底で、胴部にはループ文の見られるLRとRLの単節縄文を交互に横位施文する。底面には単節RL縄文を施している。

この一群の土器はいずれも胎土中に繊維を含んでいる。色調はにぶい黄褐色のものが多い。

第3群2類 (第16図、PL15)

11はA区P6地点出土の深鉢胴部破片である。前期花積下層式から関山式に属すると考えられる。原体Iを巻く単軸絡状体第5類を施文している。この資料も胎土中に繊維を含んでいる。焼成は良好、色調はにぶい褐色である。

第3群3類 (第16・17図、PL15)

12～29をこの一群とする。いずれもA区からの出土である。前期黒浜式に属すると考えられる。

12～18は波状を呈する口縁部の破片である。縁辺に沿って連続爪形文が施される。14～16は同一個体である。12・13・18では施文具の割れ口を下に向けてのに対し、14～16は割れ口を上に向けている。地文には12が上帯LR、下帯RLの羽状縄文を施している。14は単節RL縄文を横位に施している。

19～22も口縁部の破片で縄文施文である。19はO段3条、RLRを斜位に施文されていると考えられるが、20・21は縦位に単節LR縄文が施されている。22は単節LRとRL縄文により菱形の文様が構成されていると考えられる。

23～29は胴部破片である。23～28はLR、RLの単節縄文により羽状縄文が施文されている。24・26は単節RL、LR横位により菱形の文様を構成する。25はRLと原体の異なる2種類のRLによる施文である。29は無節Rを施文している。

この一群の土器はいずれも胎土中に繊維を含んでいる。色調はにぶい黄褐色・黄褐色が多い。

第3群4類 (第17図、PL16・17)

30～38をこの一群とする。前期諸磯a式に属すると考えられる。32・33がA区からそれ以外はB区からの出土である。いずれも深鉢で30～33が口縁部、34以下は胴部破片である。

30には半截竹管による平行爪形文が見られる。31・34・35は縄文施文で、31は単節RLを横位に、34は単節RLを斜位に、35は単節RLが横位に施されている。

32・33は多截竹管により重畳した波状文・平行沈線文や縦列の円形竹管文が施される。36は浮線文が、37は縦方向の集合沈線が、38は横方向の平行沈線文がそれぞれ施されている。焼成は良好である。色調はにぶい黄褐色をはじめ、明黄褐色、橙色等である。32・33・35・37・38は胎土中にわずかに繊維を含む。

第3群5類 (第17図、PL16・17)

39～48をこの一群とする。前期諸磯b式に属す

第3表 亀泉西久保日遺跡縄文土器出土地点一覧

*は花壇下層あるいは間山を表す

区		早期間爪形文		早期三戸		前期間山		花壇下層*		黒俣		諸磯c		諸磯b	
		掘載	非掘載	掘載	非掘載	掘載	非掘載	掘載	非掘載	掘載	非掘載	掘載	非掘載	掘載	非掘載
AK	17号土坑														
AK	1号配石										8				1
AK	表採			1		4		1			3	86			1
AK	グリッド	1									15	180	2		6
AK	縄文以外の遺構										1	6			
BK	5号土坑														
BK	表採						2						1	1	
BK	グリッド					3	15						5	10	2
BK	縄文以外の遺構				1										
CK	表採						1								
CK	グリッド						1							1	
CK	縄文以外の遺構														
	小計	1	0	1	0	8	19	1	0	19	280	8	12	10	33
区		諸磯c		前期諸磯		浮島		中期諸磯		五瀬ヶ台		阿玉台		加曾利E	
		掘載	非掘載	掘載	非掘載	掘載	非掘載	掘載	非掘載	掘載	非掘載	掘載	非掘載	掘載	非掘載
AK	17号土坑														
AK	1号配石							2							
AK	表採	1	6						2	1	11	1	1		4
AK	グリッド	8	31		5	2		1	2	10	59	1	5	2	4
AK	縄文以外の遺構											1			
BK	5号土坑	1													
BK	表採														
BK	グリッド		9												
BK	縄文以外の遺構														
CK	表採														
CK	グリッド														
CK	縄文以外の遺構														
	小計	10	46	0	5	2	0	3	4	11	70	3	6	2	8
区		中期		後期称名寺2		堀之内2		後期		不明		合計			
		掘載	非掘載	掘載	非掘載	掘載	非掘載	掘載	非掘載	掘載	非掘載	掘載	非掘載	掘載	非掘載
AK	17号土坑											0	0		
AK	1号配石											1	3	9	
AK	表採		39	1	1	5	1		3		42	19	204		
AK	グリッド	2	45	3	2	2	3		6		30	55	395		
AK	縄文以外の遺構		2									2	8		
BK	5号土坑											1	0		
BK	表採		1									1	4		
BK	グリッド		5						2		8	10	51		
BK	縄文以外の遺構											1	0		
CK	表採		1								5	0	7		
CK	グリッド		2									0	4		
CK	縄文以外の遺構	1									1	1	1		
	小計	3	95	4	3	7	4	0	11	0	87	93	683		

と考えられる。いずれも深鉢の破片である。41・42がB区その他はA区からの出土である。

39・40はともに大きく内彎して立ち上がる口縁部破片で同一個体の可能性が高い。平行爪形文が施され、口縁部には連続した刻目が付されている。41は半截竹管による山形の沈線文が、42は多截竹管による波状の沈線文が見られる。43は浮線文である。44～48は平行沈線による施文である。44は木葉文が見られる。45～48では弧状文と直線文の組み合わせが見られる。

この一群の胎土には繊維の混入は見られないが全体的に砂礫の混入が多い。39・40は石英粒やチャートが、47には結晶片岩が顕著に含まれる。

第3群6類 (第17図、PL16)

49～57をこの一群とする前期、諸磯c式に属する。いずれも深鉢の破片で、A区からの出土である。

49は口縁部から胴部上位にいたる3分の1程の大型破片である。口縁部と胴部は内面の弱い稜を境に区画される。口縁部は朝顔状に外反して立ち上がり、先端は内側に肥厚する。文様構成は、口縁部が横方

向の集合沈線を地文にこれにボタン状、棒状の粘土粒を貼付している。胴部は縦方向の集合沈線の上に豆粒大の貼付文が見られる。稜の上にも貼付文が並んでいる。焼成は良好、色調はにぶい褐色である。

50・54は胴部破片である。平行沈線による木葉状、あるいは菱形の文様が描かれている。

51～53・55は平行沈線による矢羽根状文を横位に施している。51・52の口縁部破片は口縁端部に

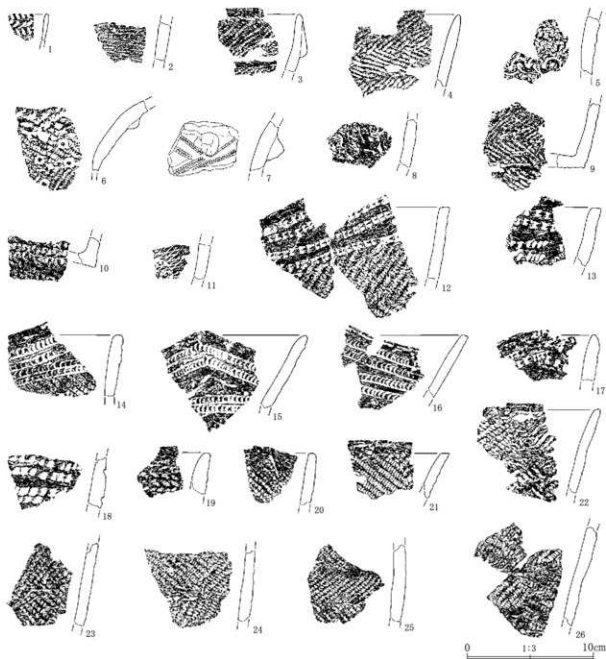
連続刻目文が見られる。55はボタン状貼付文が付く。

56・57は幅の狭く、静止間隔の細かい連続爪形文による施文である。56は波状口縁を呈する。57は縦方向に弧状の文様が描かれている。

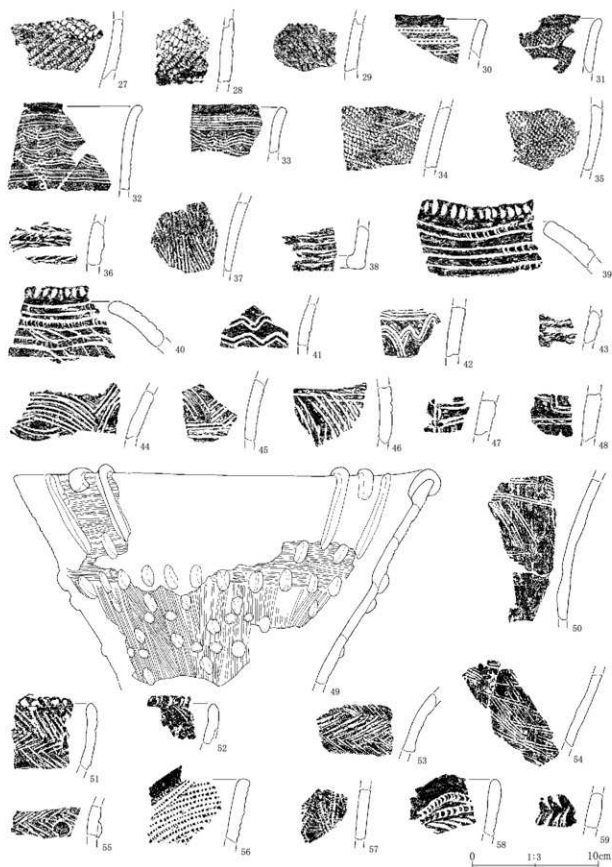
49以外の色調は51の黒褐色、57の赤褐色などと様々である。

第3群7類 (第17図、PL16)

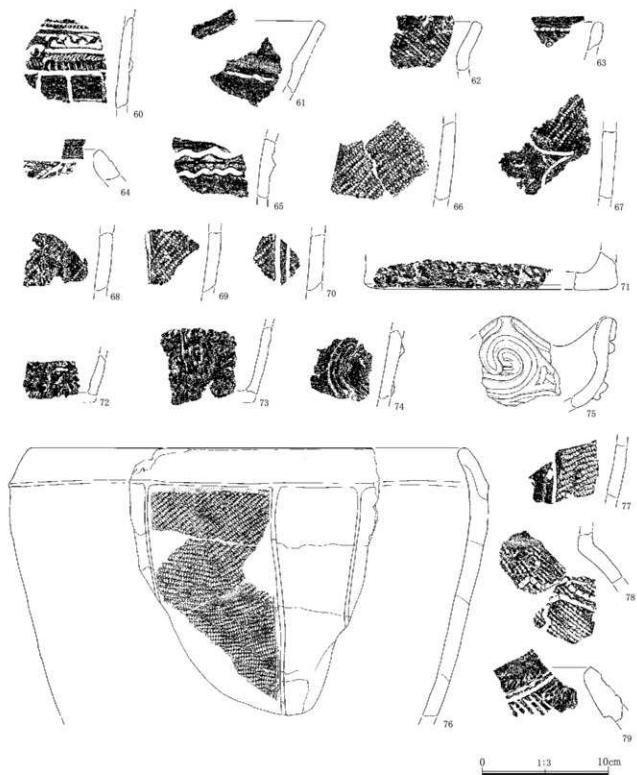
58はA区72J-13グリッド出土の口縁部破片で



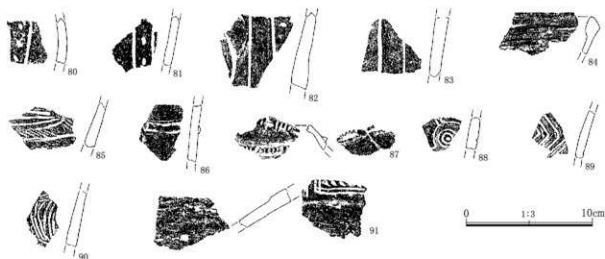
第16図 遺構外出土の縄文土器(1)



第17図 遺構外出土の縄文土器(2)



第18図 遺構外出土の縄文土器（3）



第19図 遺構外出土の縄文土器(4)

ある。小さな波頂部に連続爪形文を配し、その下位に貝殻腹線文の沈線が見られる。59はA区72K-14グリッド出土の胴部破片である。2列貝殻腹線文が見られる。前期浮島式と考えられる。

第4群1類 (第18図、PL16)

61~71をこの一群とする。いずれも深鉢でA区からの出土である。中期五領ヶ台式に属すると考えられる。

61~64は口縁部破片である。61は波高の高い波状口縁部の破片である。横方向の微隆起線文が見られる。62は口縁の端部に豆粒状の小突起が付いている。附加条第1種R+L(2条)を横位に施している。63・64は口縁部直下に連続爪形文が見られる。

65は断面三角形の隆帯を挟んだ上下に山形の太い沈線文がめぐる。66・69は縦方向の沈線が見える。70は2本直下する。67は垂下する微隆起線文と沈線文が、68にも微隆起線文が見える。いずれも地文に単節R L縄文が縦位に施文されている。

71は胴部最下位から底部の破片である。底径は20.0cmに復元される。単節L Rが施文されている。

この一群の土器は胎土中に粗砂が礫大の長石・石英・チャート・雲母を多量に含んでいる。色調は褐色を主体とする。

第4群2類 (第18図、PL16)

60はA区BP9地点トレンチ出土の胴部破片である。中期勝坂式に属すると考えられる。円形浮文

刻目文の付いた横方向の隆帯を境に上位には横方向の沈線区画内に三角形の段刻文や刻目文が施文されている。下位は沈線による区画がなされているか。胎土に石英・雲母が顕著である。色調はにぶい褐色である。

第4群3類 (第18図、PL16)

72~74をこの一群とする。中期、阿玉台式に属すると考えられる。いずれも深鉢の胴部破片でA区からの出土である。72・73は縦方向の懸鐘文が見られる。74は弧状の隆帯を貼付している。色調はにぶい褐色をおびる。

第4群4類 (第18図、PL16)

75・76をこの一群とする。75はA区82O-3グリッド出土の深鉢口縁部突起部分の破片である。渦巻文が見られる。加曾利E2~3式の段階である。76は深鉢の大型破片である。口縁部の復元径は46.0cm、器高の残存は28.4cmを測る。口縁部と胴部は横位の微隆起線で画す。口縁部は狭く、無文である。胴部は縦方向に微隆起線で区画され、単節L R縄文を方向を変えながら充填した文様帯と無文帯が交互に配されている。加曾利E4式の段階である。

第4群5類 (第18図、PL16・17)

77~79をこの一群とする。中期の資料である。77はC区から、78・79はA区からの出土である。77は胴部破片で、隆帯は渦巻文を構成していたか。縄文は単節のL R縄文である。78は単節L R縄文を

地文とし、これに連続爪形文が施されている。79は波状を呈する口縁部破片である。平行沈線による文様構成が見られる。胎土中に結晶片岩が含まれている。

第5群1類 (第19図、PL17)

80~83をこの一群とする。後期称名寺式に属する。いずれも深鉢胴部の破片でA区からの出土である。縦方向の沈線文が見られる。80・81はこの区画内に縦位の列点文が施されている。色調は黄色味をおびている。称名寺2式の段階である。

第5群2類 (第19図、PL17)

84~91をこの一群とする。後期堀之内式に属する。84~90は深鉢である。84はB区から、それ以外はA区からの出土である。84は口縁部の破片で、先端で短く屈曲、外面に稜をなす。85・88~90は沈線による弧線文が見られる。88も同様同心円状のモチーフが、89も菱形のモチーフが描かれている。縄文は単線R.Lの横位施文である。86は横位の微隆起線が見られる。87は口縁部破片である。先端には内外面に刻目文を伴う三山状の小突起が付く。口縁部直下の外面には刻目文を付した稜線がめぐっている。

91は浅鉢の破片である。内面に弱い稜を有し、その上位の沈線区画内に列点文が充填されているか。胎土中に結晶片岩を含む。84は堀之内1式に、それ以外は2式に比定されよう。

(6) 遺構外出土の石器

A区の縄文時代遺物包含層をはじめA区~C区までの調査区から出土した石器および石器類は合計124点であった。

その内訳は以下のとおりである。()内は本文掲載数である。塊状耳飾り1(1)点、石鏃7(7)点、石鏃未製品1(1)点、打製石斧14(12)点、打製石斧未製品24(24)点、スクレイパー2(1)点、くさび形石器3(3)点、石匙1(1)点、2次加工のある剥片38(3)点、軽石1(0)点、微細加工のある剥片2(2)点、石核10(9)点、磨製石斧1(1)点、磨石4(4)点、凹石4(4)

点、石皿1(1)点、剥片287(0)点、礫53(0)点、チップ58(0)点である。

上記の石器について出土状態と器種の間係は第4表に、器種と石材の組み合わせは第5表のとおりである。掲載資料の法量、石材については第6表に一覧とした。以下、個別にその観察結果を記しておく。**塊状耳飾り**(第20図、PL17)

92は塊状耳飾りである。欠損品で全体の3分の1が残存する。外径5.0cm、内径2.6cmに復元される。環の幅は1.3cm、厚さは0.7cmを測り、中央孔の大きな形状と考えられる。材質は滑石でていねいに磨いている。

石鏃 (第20図、PL17)

93~99は石鏃である。100は石鏃未製品である。

93は凸基有茎鏃である。鏃身長に比して基部幅の狭い形状である。側縁部には表裏両面からの押圧剥離が見られるが、内側寄りには大きな剥離面を残す。基部には黒色の付着物が見られる。鏃身を矢柄に装着する際の接着剤の痕跡と考えられるが材質は不明である。

94~99は凸基無茎鏃である。94は2分の1程度の残存で、先端、下端とも欠損、側縁部中位に弱い変換点を有し、五角形状を呈していたと考えられるが、全体形状は不明である。95は全長に比して幅の狭い二等辺三角形形状を呈している。側縁部は直線を形成している。基部の挟りはU字形を呈する。96・97は基部がV字形の挟りを呈する形状である。その度合いは94よりも弱い。97は先端がわずかに欠損している。横断面は菱形を呈している。厚さ0.4cm。基部の挟りはていねいな調整により形作られている。98の挟りはV字状の弱い形状である。他よりもやや小型で、器肉も薄い。99は左右の側縁部が緩やかな弧を描いて基部へ向かう形状である。基底部にはほとんど挟りが見られない。

100は石鏃の未製品である。平面形は風字形を呈する。長さ3.1cm、厚さ0.9cmと成品に比べ一回り大型である。表裏の器面を大きく剥離した後一部側縁部に細かな調整を加え始めている。基部の調整に不

第4表 亀泉西久保日遺跡縄文時代石器出土地点一覧

区		形状不明		石鏃		石鏃木製品		打製石斧		打製石斧木製品		スクレイパー		くさび形石器	
		掲載	非掲載	掲載	非掲載	掲載	非掲載	掲載	非掲載	掲載	非掲載	掲載	非掲載	掲載	非掲載
AK	17号土坑														
AK	1号配石														
AK	表採					1		4	1	10		1			
AK	グリッド			6				5		7				3	
AK	縄文以外の遺構							1	1						
BK	5号土坑														
BK	表採			1						2					
BK	グリッド							1		3		1			
BK	縄文以外の遺構														
CK	表採							1		1					
CK	グリッド	1								1					
CK	縄文以外の遺構														
	小計	1	0	7	0	1	0	12	2	24	0	1	1	3	0
区		石器		2次加工のある断片		磨製加工のある断片		石核		磨製石斧		磨石		凹石	
		掲載	非掲載	掲載	非掲載	掲載	非掲載	掲載	非掲載	掲載	非掲載	掲載	非掲載	掲載	非掲載
AK	17号土坑														
AK	1号配石			1											
AK	表採	1		9	1			3							
AK	グリッド			19	1			6				4		4	
AK	縄文以外の遺構			1											
BK	5号土坑														
BK	表採									1					
BK	グリッド					2									
BK	縄文以外の遺構					1									
CK	表採			1	1			1							
CK	グリッド			1											
CK	縄文以外の遺構					2									
	小計	1	0	3	35	2	0	9	1	1	0	4	0	4	0
区		石皿		断片		鏃		チップ		軽石		合計			
		掲載	非掲載	掲載	非掲載	掲載	非掲載	掲載	非掲載	掲載	非掲載	掲載	非掲載	掲載	非掲載
AK	17号土坑											0	0		
AK	1号配石				2		7		1		1	1	11		
AK	表採	1		86		16		16				22	128		
AK	グリッド			130		18		23				36	190		
AK	縄文以外の遺構			16		10		5				1	33		
BK	5号土坑											0	0		
BK	表採			3				1				4	4		
BK	グリッド			24				10				4	37		
BK	縄文以外の遺構											0	1		
CK	表採			9		1		2				3	14		
CK	グリッド			9								3	9		
CK	縄文以外の遺構			8		1						0	11		
	小計	1	0	0	287	0	53	0	58	0	1	74	438		

都合が生じ作業が中断したものと考えられる。

打製石斧 (第20~23図、PL18~20)

101~112は打製石斧である。101は基部を欠損する。側縁部は直線を形成している。表面は原形面を大きく残し、両側縁部にはみ細かな調整が加えられている。刃部は尖頭状を呈するが、2次調整の結果か。器面は全体に風化している。先端に使用痕が見られる。

102・103は撚形で両側縁部の中位が内彎する形状である。表面には横位の、裏面には縦位の打面が

見られる。両側面には細かな調整が加えられる。103は表裏両面に横位の打面が見られる。器面は全体的に風化しているが原礫面を残している。104~106は刃部寄りの破片と考えられる。104は刃部に細かな調整が加えられているが使用痕はあまり認められない。105・106は側縁部に垂直打撃技法による調整が加えられているが、刃部調整はあまり顕著ではない。

107は撚形を呈する成品である。側縁部には垂直打撃技法による調整が施されている。刃部は内外面

第5表 亀泉西久保II遺跡出土の縄文時代石器の器種と石材

石材	塊状刃部	石鏃	石鏃未製品	打製石斧未製品	打製石斧未製品?	スクレイパー	くまび形石器	石鏃	R F	M F	石核	磨製石斧	磨石	磨石	凹石?	石皿	剥片	礫	チップ	薄片(板押?)	軽石?	軽石?	総計		
チャート		2	1				1		5		1					12			8				30		
デイサイト質凝灰岩																			1				1		
ホルンフェルス												1								1			2		
滑石	1																						1		
珪質頁岩		1							2							3							6		
珪質変質岩																			1				1		
黒色安山岩		1					1		1		1					15							19		
黒色頁岩		3	12	23	1	1		1	28	1	6				1	241	2	1	30				352		
黒曜石									1	1						2			9				13		
砂岩			1								1					1			1				4		
細粒輝石安山岩									1														1		
石英																	1	1					2		
石英閃緑岩																			2				2		
閃緑岩																				1			1		
粗粒輝石安山岩			1										4	2	1	1	5	8	31	1	1	55			
変玄武岩																			1				1		
変質安山岩																4	1	2					7		
変質玄武岩																7			1				8		
変質蛇紋岩												1											1		
未固結凝灰岩																			1				1		
緑色片岩		1	7	1	14	23	1	1	2	1	38	2	10	1	4	3	1	1	291	12	41	52	1	1	510

とも使用による摩耗が著しい。

108は縦位あるいは斜め縦位の打面が認められる。周縁部には細かな調整が加えられている。

109は楕形を呈する成品である。幅に比して長さが短く、刃部寄りで欠損したものを再度調整をして刃部を作った可能性がある。

110は短冊形に近い成品である。表面の一部に原礫面を残す。側縁部は垂直打撃技法によりていねいな調整が加えられている。

111は基部よりの残存破片である。側縁部に垂直打撃技法が見られる。112は基部の一部が欠損している。側縁部が大きく抉り込まれており、分銅形に近い形状を呈する。刃部にはわずかに摩耗痕が見られる。

113～135は打製石斧未製品である。136も打製石斧未製品と考えられる。113・116・119・120・123の5点はいずれも短冊形を呈する資料の未製品である。116に代表されるよう、側縁部を垂直打

撃技法により整えた段階で破断しており、いずれも器肉が厚い。116・119・123は一部原礫面を残している。120を除く4点は器面の風化が進行している。

114・125・126は成品になれば楕形を呈していたと考えられる。114は側縁部に粗い剥離を加えた段階で刃部側が破断している。125も同形と考えられる。両側縁部に垂直打撃技法が見られるが石材の節理に沿って破断している。126も横方向から粗い打面が残され、左側縁部に垂直打撃技法による調整が見られる。

115・122も剥片素材の周縁部に剥離を加え、楕形の成品を予定していたものと考えられる。

117～124も破片資料である。117は周縁部に粗い剥離面が見られる。118は表・裏面とも多方向からの打面が認められる。121は刃部幅が広く、楕形の刃部寄り部分と考えられる。表面に原礫面を残し刃部・両側縁部に剥離後調整を行っている段階で破

第6表 亀泉西久保II遺跡縄文時代石器一覧

No	種別	出土位置	残存状態	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材
92	球状耳飾り	CR 61-O-2	一部残存	3.1	1.9	0.7	5	滑石
93	石鏝	AIK BP9 1号トレンチ	完形	3.8	1.3	0.3	2	黒色頁岩
94	石鏝	AIK 72-J-13	一部欠損	3.0	0.8	0.3	1	黒色安山岩
95	石鏝	AIK BP9 1号トレンチ	先端・基部の一部欠損	2.1	1.4	0.4	1	黒色頁岩
96	石鏝	不明	先端・基部の一部欠損	1.6	1.7	0.3	1	チャート
97	石鏝	AIK 72-K-15	先端欠損	2.3	1.7	0.4	1	黒色頁岩
98	石鏝	AIK BP9 1号トレンチ	先端欠損	1.8	1.4	0.2	0.47	チャート
99	石鏝	AIK 72-K-14	完形	2.6	1.6	0.5	1	球質頁岩
100	石鏝未製品	AIK 72-K-12		3.0	2.6	0.9	6	チャート
101	打製石斧	AIK フタ土	基部欠損	10.7	5.8	1.3	122	粗粒輝石安山岩
102	打製石斧	CR フタ土	完形	11.2	4.7	1.5	89	黒色頁岩
103	打製石斧	AIK 72-L-5	完形	9.7	4.9	1.1	58	黒色頁岩
104	打製石斧	AIK P6 フタ土	基部欠損	5.4	6.0	1.2	44	黒色頁岩
105	打製石斧	AIK 72-K-12	基部欠損	5.9	3.9	1.2	48	黒色頁岩
106	打製石斧	AIK 72-K-12	基部欠損	5.6	3.6	0.8	28	黒色頁岩
107	打製石斧	AIK 72-E-3	完形	9.5	4.4	0.7	56	黒色頁岩
108	打製石斧	AIK フタ土	完形	9.1	3.8	1.0	44	黒色頁岩
109	打製石斧	AIK フタ土	完形	7.9	4.7	2.2	78	黒色頁岩
110	打製石斧	AIK 72-M-6	完形	9.3	3.6	0.9	61	黒色頁岩
111	打製石斧	BR 61-N-11	基部欠損	5.2	4.0	1.4	35	黒色頁岩
112	打製石斧	AIK As-B面	基部欠損	10.9	7.9	2.0	202	黒色頁岩
113	打製石斧未製品	AIK 表様		5.0	3.9	2.0	58	黒色頁岩
114	打製石斧未製品	AIK P6 フタ土		8.0	4.8	2.0	58	黒色頁岩
115	打製石斧未製品	AIK 72-M-6		6.5	5.0	1.7	57	黒色頁岩
116	打製石斧未製品	AIK 3号トレンチ		6.5	4.0	2.1	67	黒色頁岩
117	打製石斧未製品	AIK BP9 1号トレンチ		5.3	5.7	2.8	76	黒色頁岩
118	打製石斧未製品	AIK P6 フタ土		6.1	6.5	2.2	107	黒色頁岩
119	打製石斧未製品	AIK 72-L-5		6.5	4.3	2.3	69	黒色頁岩
120	打製石斧未製品	BR 表様		5.1	4.7	1.9	65	黒色頁岩
121	打製石斧未製品	CR 61-I-4		6.2	6.8	1.8	110	黒色頁岩
122	打製石斧未製品	AIK フタ土		7.0	4.6	1.0	52	黒色頁岩
123	打製石斧未製品	AIK BP9 フタ土		7.5	4.0	2.0	80	黒色頁岩
124	打製石斧未製品	BR 61-N-11		6.5	7.9	1.9	137	黒色頁岩
125	打製石斧未製品	AIK P6 フタ土		6.3	5.7	1.7	65	黒色頁岩
126	打製石斧未製品	CR 表土		7.0	5.2	1.1	56	黒色頁岩
127	打製石斧未製品	AIK フタ土		7.8	5.0	2.0	108	黒色頁岩
128	打製石斧未製品	AIK 72-M-15		7.4	5.9	0.8	44	黒色頁岩
129	打製石斧未製品	BR 表様		7.9	4.5	1.8	74	黒色頁岩
130	打製石斧未製品	AIK 82-M-20		8.8	6.3	2.3	115	黒色頁岩
131	打製石斧未製品	BR 61-Q-9		8.5	5.1	2.6	106	黒色頁岩
132	打製石斧未製品	AIK P6 フタ土		10.2	5.6	2.8	196	黒色頁岩
133	打製石斧未製品	BR 61-O-11		9.1	9.5	2.7	275	黒色頁岩
134	打製石斧未製品	AIK 表様		15.4	5.9	3.9	429	黒色頁岩
135	打製石斧未製品	AIK P6 フタ土		12.0	6.8	4.7	448	黒色頁岩
136	打製石斧未製品?	AIK BP9 1号トレンチ		10.0	11.5	2.9	465	黒色頁岩
137	スクレイパー	AIK BP9 フタ土	完形	6.8	5.5	1.7	54	黒色頁岩
138	くさび形石器	AIK 72-D-E-4	完形	5.9	5.1	0.9	36	黒色安山岩
139	くさび形石器	AIK P6 1号トレンチ	完形	3.2	2.3	0.8	6	チャート
140	くさび形石器	AIK 72-N-9	完形	2.7	2.1	0.6	5	チャート
141	2次加工のある剥片	AIK 1号配石	一部欠損	2.8	1.4	0.6	2	黒曜石
142	2次加工のある剥片	CR 61-K-7	端部欠損	3.0	4.4	1.1	14	チャート
143	2次加工のある剥片	CR P2 フタ土	完形	3.3	1.8	0.5	4	球質頁岩
144	石鏝	AIK フタ土	つまみ部欠損	3.2	7.4	1.9	27	黒色頁岩
145	微細彫刻のある剥片	AIK 72-L-15	完形	4.5	5.7	0.7	16	黒色頁岩
146	微細彫刻のある剥片	AIK P6 フタ土	端部欠損	1.2	1.2	0.7	1	黒曜石
147	石核	AIK P6 フタ土		6.1	8.4	5.7	264	黒色頁岩
148	石核	AIK 72-M-18		5.0	6.5	2.8	128	黒色頁岩
149	石核	AIK BP9 1号トレンチ		3.1	3.9	4.5	59	黒色頁岩

No	種別	出土位置	残存状態	全長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石材
150	石核	A区 不明		1.9	3.1	2.5	14	チャート
151	石核	A区 P6 フク土		10.5	5.1	3.6	291	黒色頁岩
152	石核	A区 BP9 1号トレンチ	完形	5.3	9.8	3.6	167	黒色頁岩
153	石核	A区 72-K-14		5.2	9.3	4.1	215	砂岩
154	石核	A区 82-O-20		5.7	7.4	3.0	109	黒色安山岩
155	石核	A区 1号トレンチ		13.7	24.0	6.4	2673	ホルンフェルス
156	磨製石斧	B区 表土	刃部欠損	4.5	4.1	2.6	80	変質蛇紋岩
157	磨石	A区 72-J-11	完形	10.6	14.7	3.7	732	粗粒輝石安山岩
158	磨石	A区 P6 1号トレンチ	完形	9.3	8.0	2.6	282	粗粒輝石安山岩
159	磨石	A区 72-L-4	2分の1	7.5	6.9	3.8	255	粗粒輝石安山岩
160	磨石	A区 72-K-12	端部欠損	8.1	7.0	4.4	405	粗粒輝石安山岩
161	凹石	A区 72-M-15	完形	8.0	7.6	5.3	351	粗粒輝石安山岩
162	凹石	A区 72-J-11	完形	10.2	6.5	4.4	307	粗粒輝石安山岩
163	凹石	A区 82-L-19	完形	9.3	8.8	3.8	471	粗粒輝石安山岩
164	凹石	A区 BP9 1号トレンチ	完形	10.0	10.7	4.6	552	粗粒輝石安山岩
165	石皿	A区 フク土	一部残存	17.2	13.8	5.3	1016	粗粒輝石安山岩

断したものの。器面はやや風化している。124は円礫を横方向から打ち欠いた素材にわずかに剥離を行った段階である。

127は扁平な礫を素材とし、両側縁部から剥離を重ねているが、まだ両面に原礫面を残した段階で基部が欠損している。128は小型の分銅形成品を製作する予定であったと考えられる。左右の挟み込み部分には垂直打撃技法による調整が見られるが粗い剥離面である。129は円礫を縦方向に打ち欠いて得た素材に横方向からの粗い剥離を加えたところで作業を中断している。130は剥片素材から成品を作成する過程、粗い剥離の段階で破断、作業を中断している。

131は小型品である。片面に原礫面を残している。他面に粗い剥離を加えた段階で放棄されている。132は周縁部に剥離を加える段階で節理に沿って破断したものと考えられる。

133は各周縁部の粗い剥離段階で、破断してしまったものと考えられる。

134は側縁部からの剥離に加え、一部刃部への調整を加えたところで放棄している。各面上に節理が明瞭に見られる。135は素材の円礫に横方向からの打面を加え、裏面を作り、側面の調整を始めた段階で作業を止めている。136は大型の円礫を素材としている。周縁部に、打面を移動しながら剥離を加えている。

スクレイパー (第23図、PL20)

137はスクレイパーである。一部に原礫面を残す剥片を素材とし、その両側縁部に細かな剥離を重ねている。

くさび形石器 (第23図、PL20)

138～140はくさび形石器である。上下両端に両極技法を用いた剥離調整が認められる。138は縦5.9cmと他の2点に比べ大型である。剥片を素材とし、上下両端に剥離痕が認められる。139は両端にわずかずつ原礫面を残している。縦方向に剥離が繰り返されている。140は上下の周縁部には細かな剥離が重ねられている。

2次加工のある剥片 (第23図、PL20)

141～143は2次加工の見られる剥片である。141は粗悪な黒曜石を素材とする剥片である。細かな剥離痕が重ねられている。142は裏面左側縁部に調整痕が見られる。143は現状では平面半月形を呈するが図左端は欠損の可能性が高い。周縁部に、打面を移動させながら剥離調整が加えられている。スクレイパーの様で使用されたか。

石匙 (第23図、PL20)

144は石匙である。横長の形状でつまみ部は欠損している。刃部は厚いが周縁部ともにいい剥離を重ねている。

微細加工のある剥片 (第23図、PL20)

145・146は微細剥離痕のある剥片である。145

は三日月状の剥片である。図下側部に片面方向からのみ細かな剥離を加えている。146は黒曜石製の柱状を呈する剥片で横断面は二等辺三角形形状を呈する。側縁部の一箇所に極めて細かな剥離が加えられている。

石核 (第24図、PL20・21)

147～155は石核である。147は分割した円礫に多方向からの打面が見られる。148は縦方向の打面が見られる。両側面および下端部には垂直打撃技法による調整痕が見られることから打製石斧の未製品を2次的に利用した可能性も考えられる。器面は風化している。149は原礫面を多方向から打ち欠いて小型の剥片を得ている。150には多方向から加えられた打面が見られる。151は棒状の自然礫を素材とし、その一部を打ち欠き平坦面を作り出している。この平坦面から側面に打撃を加えている。これより得られる素材剥片は小型である。

152は自然礫の一方方向からくり返し打撃を加え横長の剥片を剥離している。153は自然礫を素材とし、各方向からの打撃を加えている。154は自然礫の一方の周縁部に多方向から打撃を加え剥片を剥離している。剥片は縦長か。155は亀の甲状をした偏平な原礫の各所に剥離を施している。上下両端の側縁部にはやや細かな調整が見られる。

磨製石斧 (第25図、PL21)

156は磨製石斧である。定角状を呈していたと考えられるが基部寄りの一部の残存に止まった。各面ともていねいに研磨されている。基部には敲打あるいは衝撃の痕跡が認められる。

磨石 (第25図、PL21)

157～160は磨石である。157は偏平な円礫を素材としている。重量は732gと他に比べやや大型である。表・裏両面の広い範囲を磨面として利用している。敲打には使用されていない。158も偏平な円礫を素材としている。一方の面を磨面としている。器面は風化が進行している。159は平面長円形の円礫であるが一部が欠損している。表・裏面に磨面が認められる他、表面側の中央に集中敲打痕が見られ

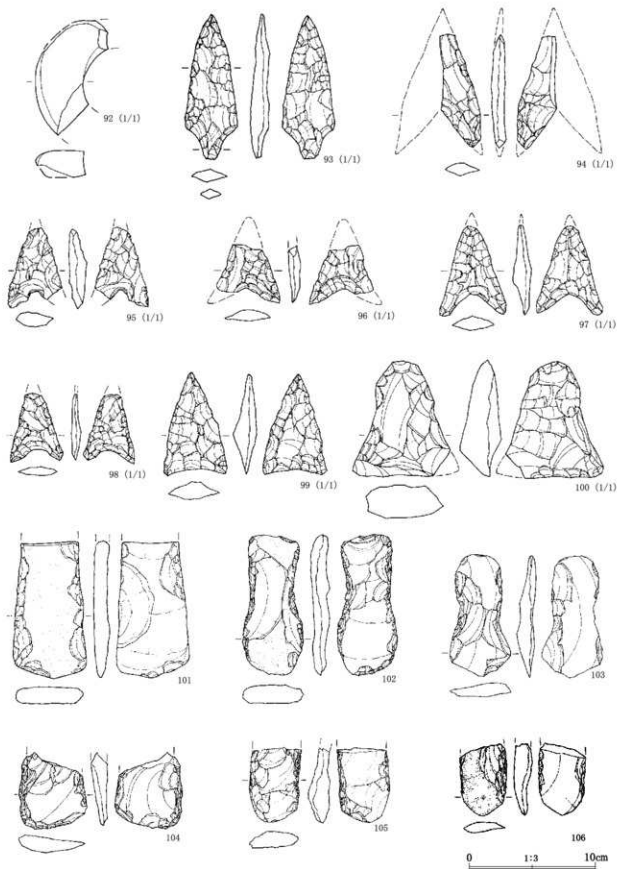
る。欠損は旧事か。割れ口に炭素が吸着している。160も平面長円形をした円礫であるが3分の1ほどが欠損している。表・裏両側部の各面とも広い範囲を磨面として使用する他表・裏面の中央及び側縁部の小口部分に敲打痕が見られる。

凹石 (第25・26図、PL21)

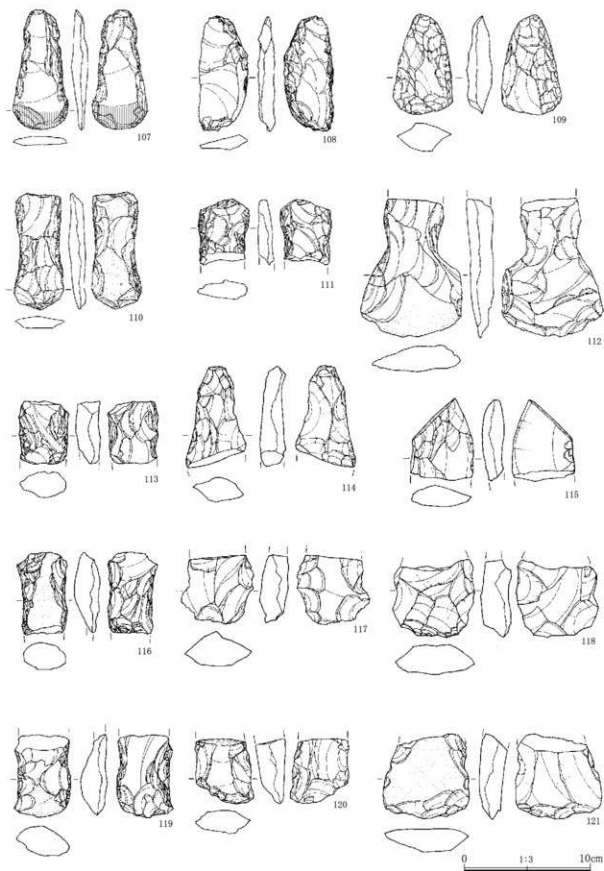
161～164は凹石である。161の裏面は弱い凹面をなすが、表面に稜を有する自然礫である。表面の3箇所と裏面の中央に敲打痕状の凹みが認められる。162は依形をしたやや不整形な円礫である。表・裏両面の二箇所に大きな範囲の集中敲打痕が認められる。右側面にも一部敲打痕が見られる。163は偏平な円礫である。表・裏両面の広い範囲が磨面として利用されている。その中央に集中敲打痕が認められる。164は偏平な礫で、表・裏両面に磨面が認められる。その中央および左右の側面には集中敲打痕が見られる。

石皿 (第26図、PL21)

165は石皿である。狭義の範囲に分類される縁付の欠損品で、4分の1程の残存と考えられる。偏平な礫を素材とし、その一方の面を折り込み、使用面としている。横断面は緩やかな皿状を呈している。裏面は原礫面のままで凹穴は見られない。



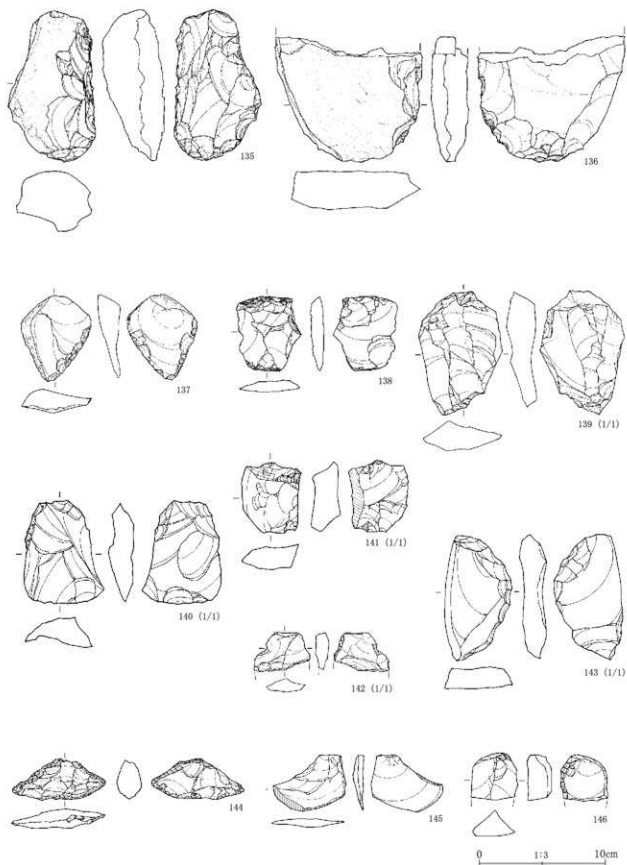
第20図 遺構外出土の縄文時代石器(1)



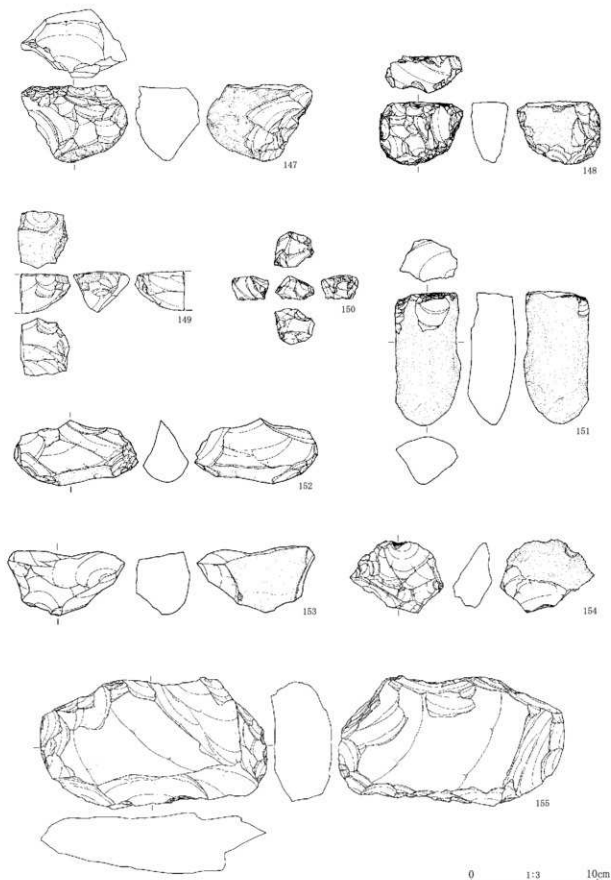
第21図 遺構外出土の縄文時代石器(2)



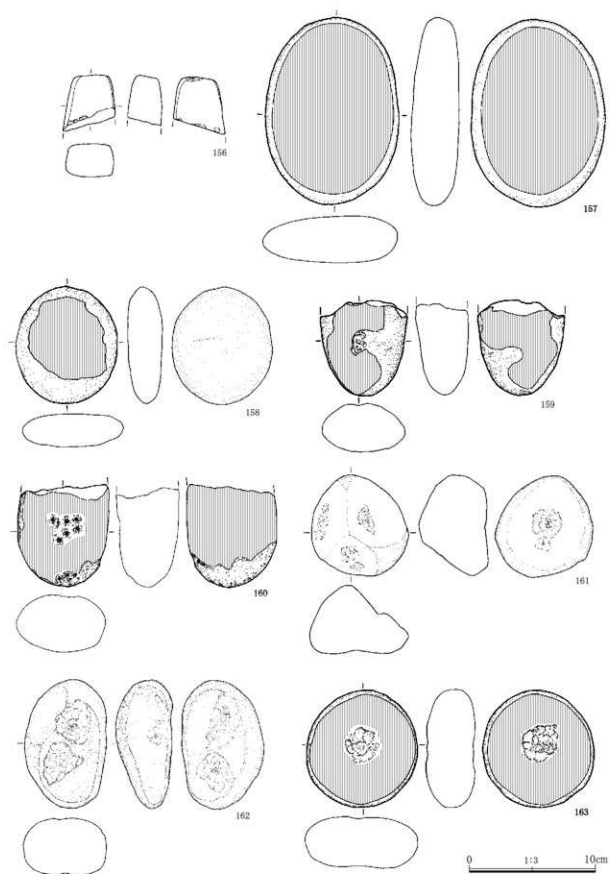
第22図 遺構外出土の縄文時代石器 (3)



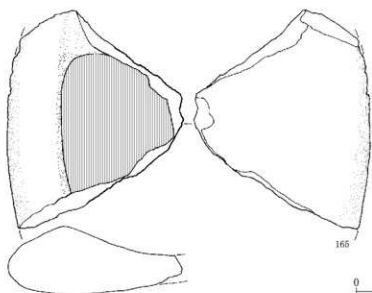
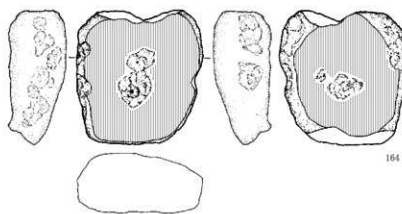
第23図 遺構外出土の縄文時代石器（4）



第24図 遺構外出土の縄文時代石器 (5)



第25図 遺構外出土の縄文時代石器(6)



0 1:3 10cm

第26図 遺構外出土の縄文時代石器（7）

3 古墳時代の遺構と遺物

(1) 概要

周辺の遺跡の項でも述べたよう、本遺跡の東方向150mには古墳時代後期の築造と考えられる亀泉葉師塚古墳が存在する。このことから周辺沖積地の耕地化やそれらを生産基盤とする同時期の集落の形成が進行していたと考えられた。が、本遺跡の調査において古墳時代における遺構・遺物の検出は全時期を通して極めて限られたものであった。

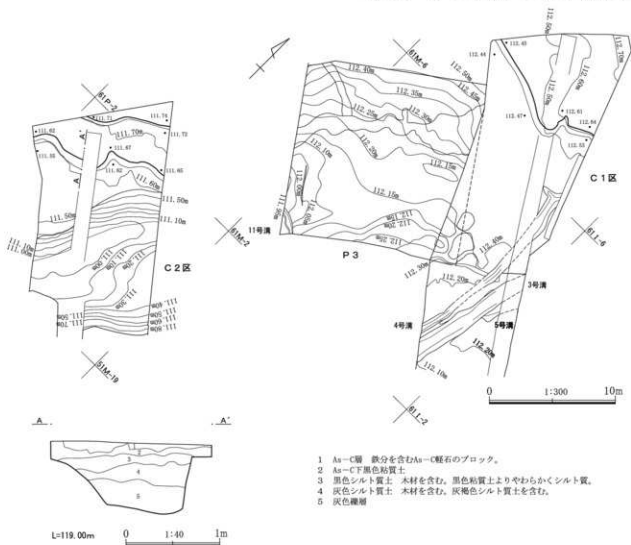
遺構としてはC区寺沢川右岸の沖積地部分で耕土に浅間C軽石を混在する水田の存在が推測されたのみである。

(2) 水田 (第27図)

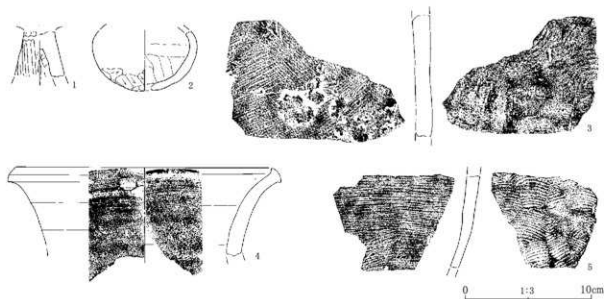
この水田の時期について断定することは困難であるが、C1区とC2区の間に位置するC3区61M-4グリッドでHr-Faが溝状に堆積している部分が検出されている。この点からC1区北端、C2区で検出された水田はHr-Fa降下前とすることができる。

この浅間C軽石混じりの黒色土は水田耕土と考えられ、本調査で検出した遺構は、台地縁辺で棚田状に開削した水田面であると推測される。C1区北端とC2区で検出した。

C1区北端では61J-7からL-8グリッドにかけて高さ0.01~0.11mの段差が検出された。C2区においても61N-1からP-1グリッド方向とN-2からO-1グリッド方向への2箇所で带状に延



第27図 古墳時代の水田



第28図 古墳時代遺構外出土の遺物

びる段差を検出した。両者とも高さ0.02～0.08mであった。これらの検出面は浅間C軽石混じりの黒褐色土であった。

(3) 遺構外出土の遺物 (第28図、PL22)

本項では遺構外出土の古墳時代遺物について記述する。1はA区72M-6グリッド出土の土師器高坪の脚部破片である。2は丸底の埴の胴部破片である。C区51O-2グリッド出土である。4はA区72K-4グリッド出土の須恵器甕の口縁部破片である。3・5も甕の胴部破片でA区出土である。

1・2は古墳時代前期から中期の所産と考えられる。(観P187)

4 奈良・平安時代の遺構と遺物

(1) 概要

奈良・平安時代の遺構としてはA区で当該時代の竪穴住居6軒を検出した。調査区の範囲が限定されたり、削平を受ける部分があり詳細な分析は困難であるが台地上に2ないし3のグループで集落が展開していたものと推測される。この他にA区の台地上からは3条の道、2条の溝、4基の土坑を検出した。

A区の沖積地内からは浅間B軽石で埋没した水田1面とこの水田よりやや後出あるいは同時存在と考えられる溝5条を検出した。

C区では中・近世以降の土地利用の影響を受けたため判然とはしないものの浅間B軽石下の水田の存在が推測された。

(2) 竪穴住居

1号住居 (第30～32図、PL4・22)

位置 72-J-14・15G

重複 攪乱を多く受けていたが他遺構との重複はなかった。

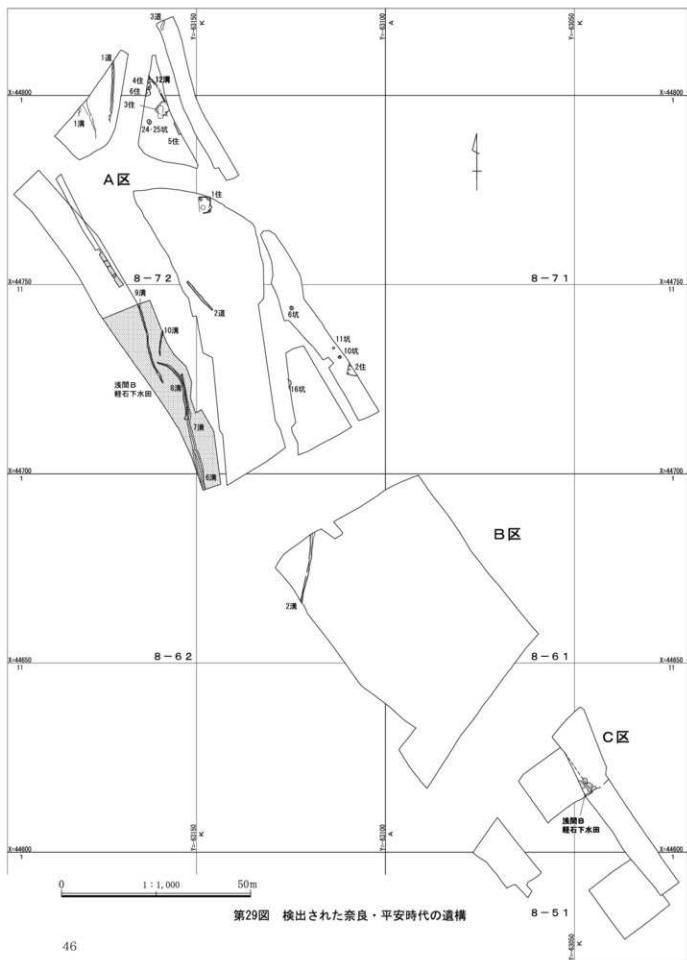
形状 A区P7地点にあり、南北に長軸を有する長方形を呈していたと考えられるがさらに西側に広がる可能性もある。北東隅、南西隅はそれぞれ攪乱を受け欠失していた。規模は南北4.42m、東西3.10mである。

面積 残存 12.95㎡

方位 N-1°-W

床面 床面はローム漸移層、ソフトローム層を掘り込みほぼ平坦に造られていた。一様に硬化していた。壁面の残存は不良で最良な竪石側でも深さ0.14mであったが垂直に近い立ち上がりであった。調査区境界部分の土層観察では深さ0.40mであることがわかった。

埋没土 暗褐色土が堆積していた。焼土ブロックのAは床面と0.30m、Bは薄い間層をはさんで検出された。



第29図 検出された奈良・平安時代の遺構

竈 東壁の中央から南東隅寄りに造られていた。燃焼部は一部地山を掘り込み壁外に達していた。袖部等は確認できなかった。規模は全長0.44m、燃焼部幅0.67mであった。掘り方は長円形を呈していた。住居の壁面との接点には左右に1箇所ずつ皿状の浅い掘り込みが見られた。

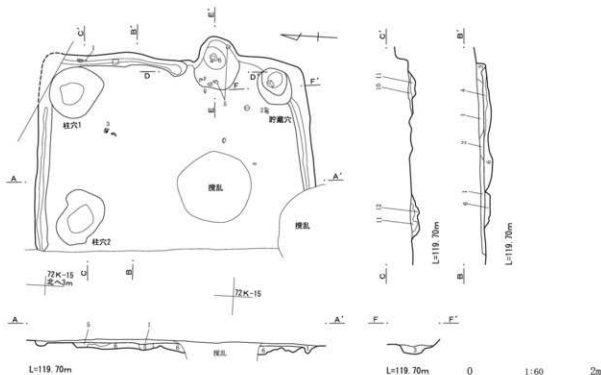
周溝 竈周辺と西壁を除く各壁際で検出された。底幅5cm前後、深さ5cm前後で暗褐色土、黒褐色土が堆積していた。

柱穴 北壁よりの西隅で円形の掘り込みを確認した。調査時これを柱穴と想定した。柱穴1は長径0.87m、短径0.74m、深さ0.19mである。柱穴2は長径0.90m、短径0.60m、深さ0.22mであった。

貯蔵穴 竈の右側、住居南東隅に位置していた。平面形は円形である。規模は長径0.64m、短径0.52m、深さ0.20mである。黒褐色土が堆積していた。**床下** 床面下は小さな凹凸をもって全体に下がった掘り方底面までの深さは0.20m以内、四隅が不整形円形に近くなっていた。

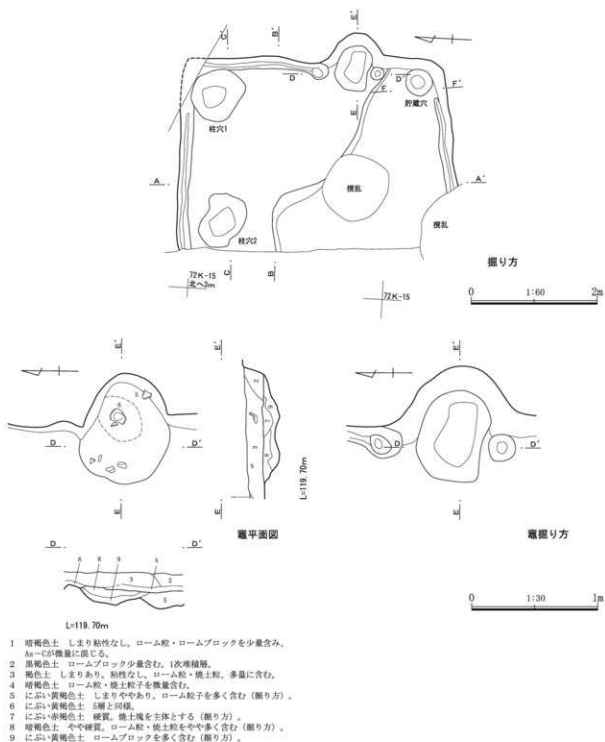
遺物 出土遺物は少量で床面からの出土は皆無であった。竈燃焼部内から土師器杯(5)、須恵器杯(6)が出土した。掲載した資料の他に土師器破片16点、須恵器破片51点が出土した。(観P187)

所見 本住居は出土した土器の特徴から奈良時代中頃から後半の所産と考えられる。



- 1 暗褐色土 しまり粘性なし。ローム粒・ロームブロックを少量含み、As-C粒が微量に混じる。
- 2 黄褐色土 しまり粘性なし。ローム主体の土層。
- 3 黒褐色土 しまり粘性なし。ロームブロックを少量含む。1次堆積層。
- 4 にぶい黄褐色土 やや硬質、ロームブロックを多く含む(掘り床)。
- 5 黒褐色土 やや軟質、ローム粒子をやや多く含む(掘り方)。
- 6 褐色土 しまりあり。ローム粒を主体とする(掘り方)。
- 7 黒褐色砂質土 As-Cほかの軽石を混入。緻密でやや硬質。
- 8 ローム層砂層 黒褐色から褐色をおびる。黒ゴク相当土で直径2~3cmの断面状混土。
- 9 ソフトローム 緻密、粘性あり、やや硬質。
- 10 黒褐色土 やや硬質。ローム粒を少量含む。
- 11 暗褐色土 軟質。ローム粒子を多く含む。
- 12 褐色土 硬質。ロームブロックを主体とする。

第30図 1号住居



第31図 1号住居掘り方・竈

2号住居 (第33・34図、PL4・22)

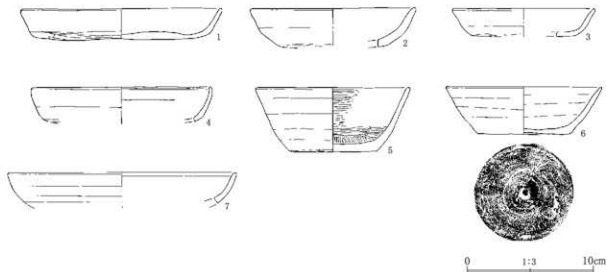
位置 72B・C-6G

形状 東側側道南半部に位置し、南西隅を中心に全体のはば2分の1程を検出した。南北の残存長は3.24m、東西の残存長は2.98mである。

面積 残存 4.46㎡

方位 西壁N-12'-E

床面 確認面から0.34~0.43m、ソフトロームを掘り込んで構築されていた。床面は全体に貼床が施され一様に堅緻であったが中央部分が特に堅緻で



第32図 1号住居出土遺物

あった。

埋没土 浅間C軽石を混入する黒褐色砂質土、にぶい黄褐色砂質土が堆積していた。また、床面近くに間層をはさんで焼土塊が認められた。南西隅には硬化面をもつ土塊ブロックが見られた。調査時の所見として土屋根の一部が埋没時に混入した可能性が指摘されている。

竈・周溝・柱穴・貯蔵穴 検出されなかった。

床下 床面下は0.10m程の深さで掘り方底面に達する。黄褐色ロームの卵大のブロックとにぶい黄褐色砂質土が貼床材として堆積していた。

遺物 遺物は西・南の壁際の床面近くに集中する傾向が見られたが床面直上出土のものは少なく、土師器甕(5)の口縁部破片、須恵器杯(8・9)がこれにあたる。掲載した資料の他に土師器破片39点、須恵器破片3点、縄文土器破片9点が出土した。(観P188)

所見 本住居は焼失住居の可能性がある。出土した土器の特徴から奈良時代中頃から後半の所産と考えられる。

3号住居 (第35～37図、PL5・22)

位置 72L-19・20、M-20G

重複 12号溝と重複する。

形状 A区BP9地点、As-C混黒褐色土面で検出した。全体形状は南北方向に長軸を有する長方形を呈する。北東隅は調査区域外におよび未検出であ

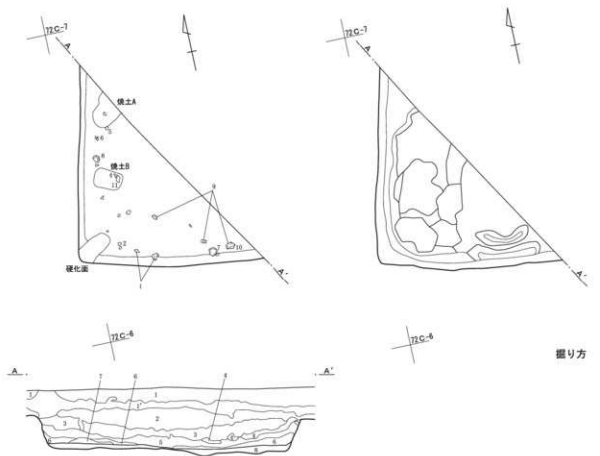
る。南側は擾乱を受け、壁面、床面が大きく欠失している。規模は南北3.51m、東西2.96mである。本住居の掘り込みの周囲からは直径20cmから拳大の粗粒輝石安山岩の礫9点が検出された。住居の上端から2m余りの位置にあることから周堤帯内に埋め込まれたものか。上屋を支える基礎など堅穴住居の外周施設に関係する置石との調査時の所見がある。

面積 残存 9.26㎡ **方位** N-40°-E

床面 遺構確認面から0.40～1.25m程掘り込んで床面としていた。床面は多少の起伏は見られたもののほぼ平坦であった。

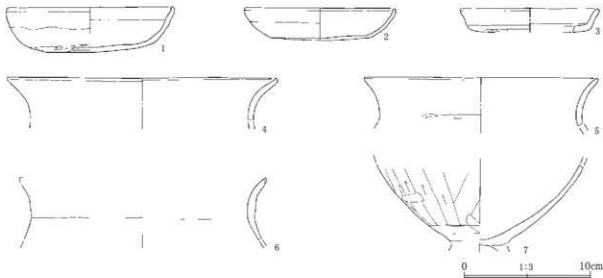
埋没土 壁際に褐色砂質土が三角堆積していた他は浅間C軽石を混入する黒褐色砂質土が堆積、3層に分層が可能であった。

竈 東壁中央から南東隅寄りに造られていた。燃烧部は住居内から一部地山を掘り込み壁外に置いていた。煙道部は削平されていた。壁内に伸びる袖部は左側の残存が良好であった。袖部は黄褐色ロームを貼り付けていた。燃烧部内には細奥部に粗粒輝石安山岩の礫が支脚として据えられていた。その手前の板状を呈する粗粒輝石安山岩は甕と支脚の間隙を調整するための礫と考えられる。焚口部出土の粗粒輝石安山岩は焚口部に構築されていたものが崩落したものであろう。規模は全長1.08m、燃烧部幅0.40mである。底面に灰層が認められる。掘り方を見ると

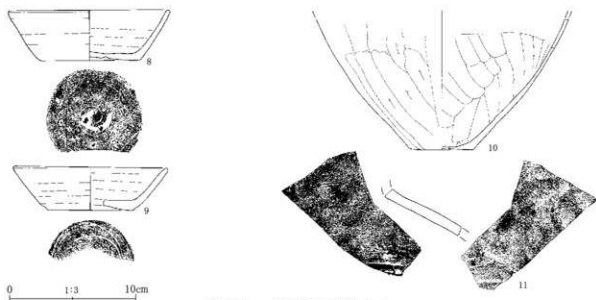


掘り方

- L=125.00m
- 1 褐色砂質土 耕作土を混入する。
 - 1' 褐色砂質土
 - 2 As-C混褐色砂質土 細粒、細密、やや硬質。
 - 3 にぶい黄褐色砂質土 As-C粒混入、弾力のある細粒土。南半は4層との境に黄褐色ロームのレンズ状ブロック。
 - 4 にぶい黄褐色砂質土 As-C粒・ローム粒混入。5層を塊状に混入。
 - 5 As-C混褐色砂質土 細粒、細密。北半に直径1~2cm大のロームやや多く混入。
 - 6 にぶい黄褐色砂質土 4層に直径1~2cm大のローム混入。
 - 7 焼土ブロック
 - 8 黄褐色ロームの特大ブロックとにぶい黄褐色砂質土の混入 粘床材、堅硬。



第33図 2号住居と出土遺物(1)



第34図 2号住居出土遺物(2)

燃焼部は箱形を呈し、煙道部へは急角度で立ち上がっている。内壁には地山の黒褐色砂質土が貼り付けられていた。釜口部前からは貼床下に舟底状の床下土坑が検出され、竈内からかき出された黒灰の堆積が認められたことから竈の造り替えがあったことがわかる。

周溝 床面精査時壁際に幅17~18cmの帯が見られた。深さは1~2cm程であった。

柱穴・貯蔵穴 検出されなかった。

床下 掘り方底面は全体が床面から0.12m下がっていた。薄い貼り床であったと考えられる。北壁・東壁寄りに各1箇所ずつピット状の掘り込みを検出した。東壁よりのピットには粘土が多く入っていたことから竈の造作に係わるものと考えられる。

遺物 床面直上からの出土遺物は皆無であった。北壁寄りから出土した刀子(11)は床面から15cm離れて出土した。掲載した資料の他に土器器破片136点、須恵器破片29点、縄文土器破片4点が出土した。(観P188・189)

所見 本住居は出土した土器の特徴から奈良時代前半の所産と考えられる。

4号住居 (第38~40図、PL5・23)

位置 82M-1G

重複 6号住居と重複、これに切られている。ま

た煙道部分で12号溝と重複、やはりこれに切られている。

形状 A区BP9地点に位置する。南東隅の一部を検出するに止まったため全体の形状は不明である。東壁に竈を付設した四角形を呈していたと考えられる。残存長は南北3.45m、東西1.60mである。

面積 残存 2.69㎡

方位 N-11°-W

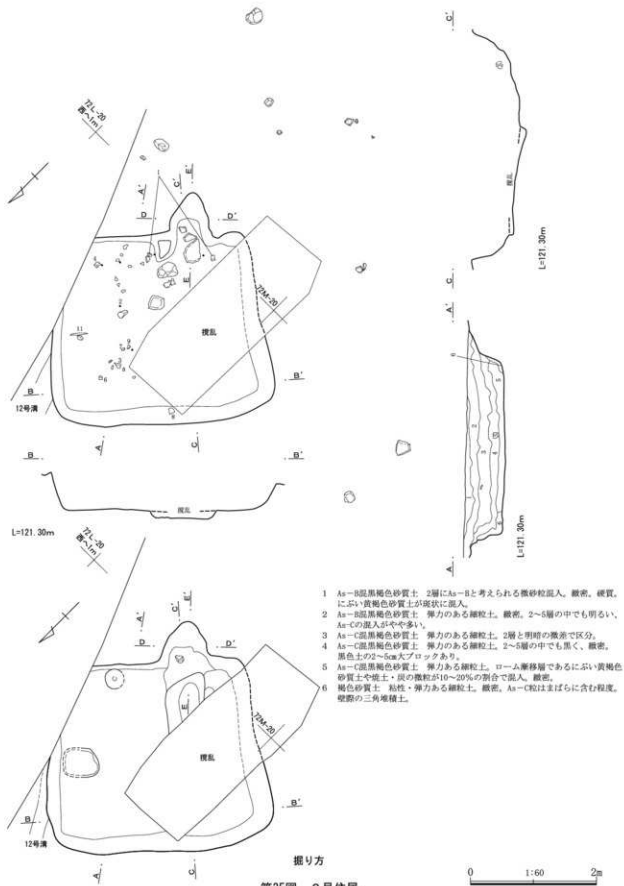
床面 ローム漸層を掘り込み、ソフトロームに達している。残存壁高は竈右側で0.48mである。

埋没土 にふい黄褐色砂質土が堆積していた。

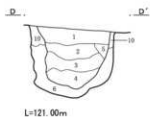
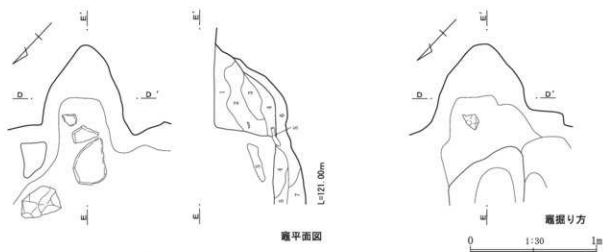
竈 燃焼部は一部壁面を掘り込んで造られていた。住居内左右の袖部が短く突出していた。袖部には、地山にロームを芯材にしてこれにシルト質の土粒が用いられていた。燃焼部の奥壁は急傾斜で立ち上がり、段差を有して煙道に移行している。両者の境界部分は帯状に焼土化していた。残存長は1.23m、釜口部は0.48mであった。燃焼部は中軸からやや右寄りに一段深い舟底状を呈する掘り方を設け、その内に多量のシルト質粘土を貼付し壁面を造っている。袖石・支脚の裾の穴は検出されなかった。

周溝・柱穴 検出されなかった。

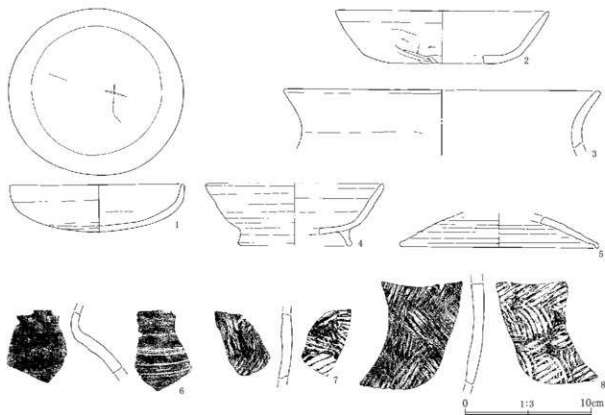
貯蔵穴 南東隅に長径0.48m、短径0.35m、深さ0.09mのピットがあり、これが貯蔵穴である可能性



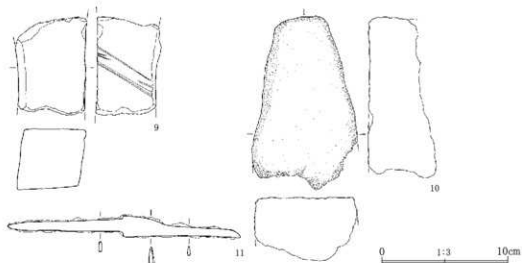
第35図 3号住居



- 1 As-C混黒褐色砂質土 2層より弾力のある細粒土。緻密。硬質。
- 2 As-C混黒褐色砂質土 1層より明るい。1層・黄褐色粘質土を覆って含む。緻密。
- 3 As-C混黒褐色砂質土 2層よりもに黄褐色粘質土の混入が多い。緻密。
- 4 As-C混黒褐色砂質土 3層にブロック状のロームや焼土の小塊を多く含む。天井部からの崩落。緻密。
- 5 As-C混黒褐色砂質土 2層より軽石の混入少量。
- 6 黒褐色砂質土 弾力のある細粒土で一足すると地山の黒ボク土に相当する硬であるがわずかに焼土粒や灰白色シルト質粘質土が混入している。緻密（掘り方埋土）。
- 7 As-C混黒褐色砂質土 ロームや焼土の小塊を含む（掘り方埋土）。
- 8 黄褐色ローム 最大50mmまでの砂粒混入（結床・掘り方埋土）。
- 9 黒褐色砂質土 6層より黒い、弾力のある細粒土。地山の黒ボク土が崩落で、黒灰を多く混入。灰は竈からの掻き出しらしく、レンズ状やブロック状に見られる（掘り方埋土）。
- 10 As-C混黒褐色砂質土 焼土粒を少量混入。



第36図 3号住居竈と出土遺物(1)



第37図 3号住居出土遺物(2)

がある。

遺物 燃焼部内から土師器杯・甕、須恵器壺・甕が小破片となって出土した。左側袖部に小型甕が潰れていた。竈右前の掘り方内から石製の重りと考えられる石製品(15)が出土している。掲載した資料の他に土師器破片243点、須恵器破片30点、縄文土器破片1点が出土している。(観P189・190)

所見 本住居は出土した土器の特徴から奈良時代前半の所産と考えられる。

6号住居(第38・39・41図、PL5・23)

位置 72M-20、82M-1G

重複 4号住居と重複これに後出する。

形状 全体形状は不明であるが、東壁に竈を付設し長方形を呈していたと考えられる。南東隅の一部と竈燃焼部の煙道部寄りを検出したに止まった。

面積 不明

方位 不明

埋没土 ぶい黄褐色砂質土が堆積していた。

竈 掘り方に灰白色シルト質粘土を貼付し、竈燃焼部壁面を造り出していた。最奥部には被熱により焼き締まった焼土が帯状に残っていた。右奥壁際からは粗粒輝石安山岩の割石が2石出土している。壁体の補強用に貼付されたものと考えられる。燃焼部中央寄りでは砂岩を截門錐形に加工した支脚が転倒していた。

周溝・柱穴・貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 土師器甕(2・3)や須恵器蓋(1)が小破片となり出土した。掲載した資料の他に土師器破片45点、須恵器破片3点が出土している。(観P190)

所見 本住居は出土した土器の特徴から平安時代、9世紀中頃の所産と考えられる。

5号住居(第42図、PL4)

位置 72K-18・19、L-19G

形状 A区B9地点に位置する。ローム漸移層を確認面としたため西壁と北西・南西の両隅を検出したに止まった。全体形状は不明である。規模は南北で3.56mを測る。

面積 残存 1.91㎡

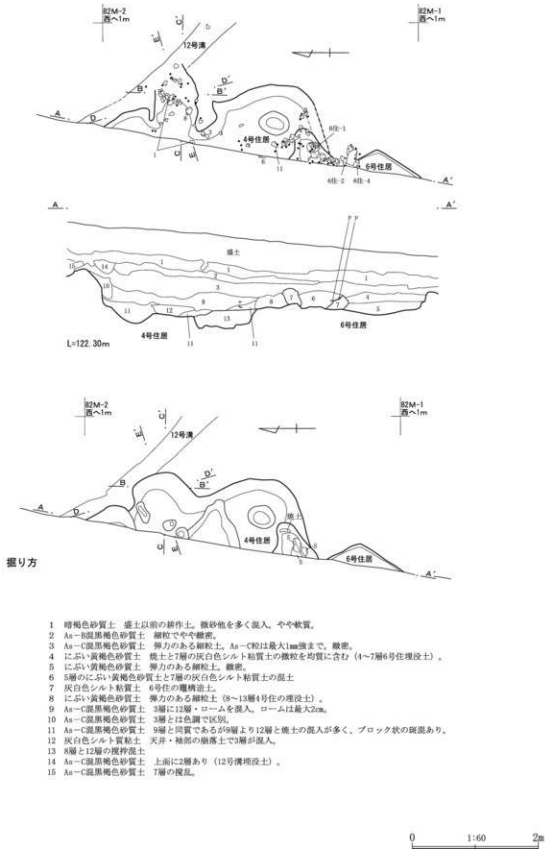
方位 N-25°-W(西壁)

床面 3号・4号住居がローム層を深く掘り込んでいたのに対し、ローム漸移層をわずかに掘り込んでほぼ水平に構築されていた。床面は全体に硬化していた。壁面の残存は北側で0.50m、南側で0.10mであった。

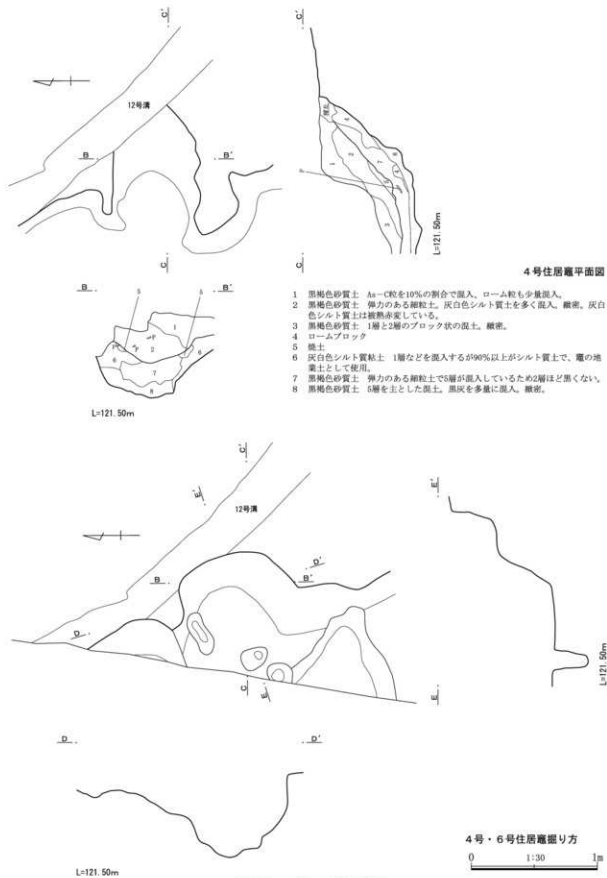
埋没土 浅間C軽石を混入する黒褐色砂質土が堆積していた。上下2層に細分された。

竈・周溝・柱穴・貯蔵穴 検出されなかった。

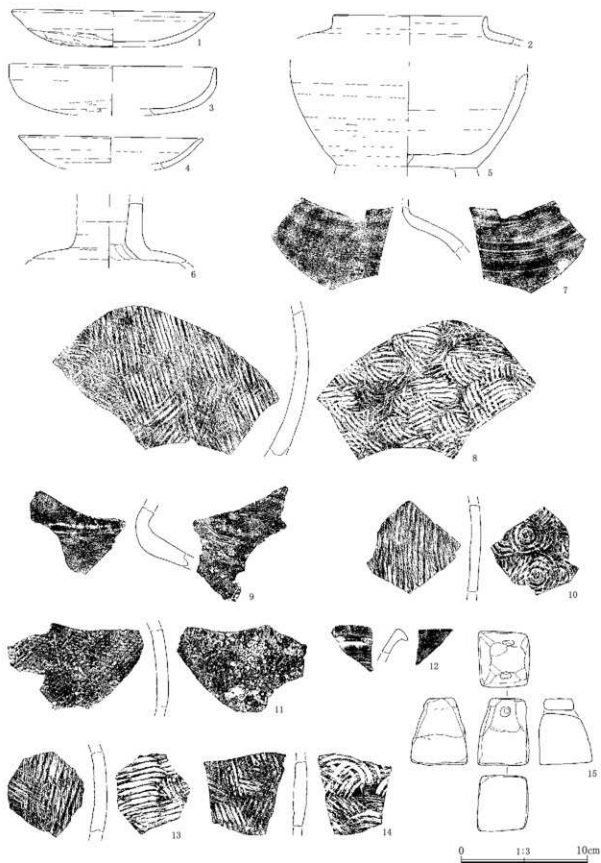
床下 床面下0.10~0.20mで掘り方底面に達した。南西隅寄りに土坑状の掘り込みが見られた他はほぼ平坦であった。浅間C軽石を混入する黒褐色土



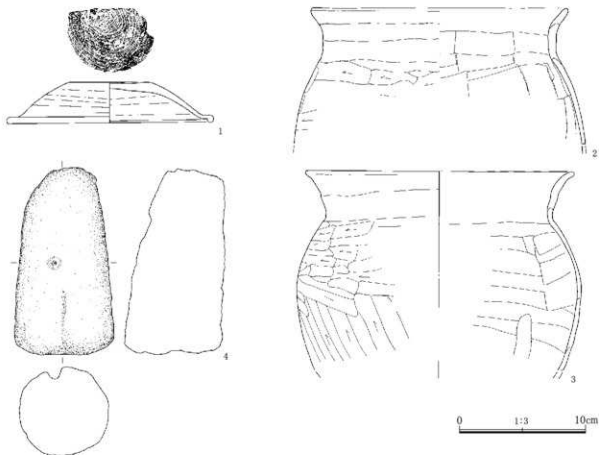
第38図 4号・6号住居



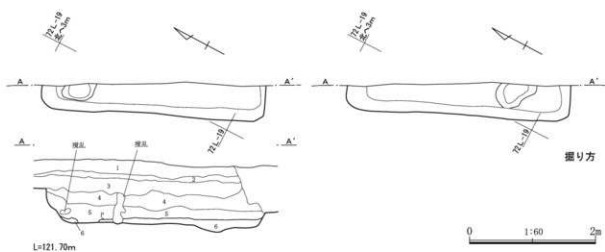
第39図 4号・6号住居



第40図 4号住居出土遺物



第41図 6号住居出土遺物



- 1 明風園造成時の盛土 上期層より上にさらに厚さ1.5mほどあり。
- 2 褐色砂質土 3層上面が盛土による含水で褐色に変化した部分。
- 3 褐色砂質土 細粒。良く攪拌されていて均質。6層のAs-C混黒褐色砂質土がブロックや一部互層で混入。造成前の耕作土。
- 4 As-C混黒褐色砂質土 弾力のある細粒土。As-Cを全体に含む。5層より明るくAs-C多い。5層とは明瞭の色調差。As-Cの混入量で区別。
- 5 As-C混黒褐色砂質土 4層よりも緻密で暗い。褐色砂質土の炭化が4層より多い。
- 6 As-C混黒褐色砂質土 弾力のある細粒土。均質。緻密。にがい黄褐色砂質土が混入。掘り方の埋土で上面が硬化（掘り方）。

第42図 5号住居

が堆積していた。

所見 出土遺物が土師器甕の破片15点に止まったため詳細な掘削時期は不明である。埋没土の状況から他の堅穴住居と前後するものと考えられる。

(3) 土坑

6号土坑 (第43図、PL10)

位置 72E・F-9G

形状 A区東側側道南半部分に位置する。平面形は円形を基本としていたと考えられるが北側はやや突出している。断面形は皿状を呈するが原形は筒状を呈していたか。底面は東側が一段低くなる。規模は長径1.10m、短径1.03m、深さ0.28mを測る。

方位 N-29°-W

埋没土 浅間C軒石を含む黒褐色砂質土が堆積していた。自然埋没である。

所見 出土遺物はないが埋没土の特徴から古代の所産と考えた。近接する2号住居に関係していた可能性がある。

10号土坑 (第43図、PL10)

位置 72C-7G

形状 A区6号土坑の南東18mに位置する。平面形は円形を呈する。断面形は椀状を呈していたが上半部はローム漸移層を掘り込んでいたためやや不明瞭であった。規模は長径0.92m、短径0.86m、深さ0.38mを測る。

方位 N-55°-E

埋没土 上層にはふい黄褐色砂質土が、下層には褐色砂質土が堆積していた。自然埋没である。

所見 出土遺物はなかったが埋没土の特徴から古代の所産と考えた。6号土坑とともに2号住居に関係した可能性がある。

11号土坑 (第43図、PL10)

位置 72C-7G

形状 A区10号土坑の北西3mに位置する。平面形はほぼ円形を呈する。規模は長径0.63m、短径0.62m、深さ0.21mを測った。

方位 N-13°30'-E

埋没土 黒褐色砂質土が堆積していた。埋没土中か

ら土師器杯の細片、2次加工のある剥片1点を出土した。

所見 埋没土の特徴から古代の所産と判断される。

16号土坑 (第43・44図、PL10・23)

位置 72E・F-5G

形状 A区P6地点に位置する。台地の肩辺に位置している。一部分の検出で全体形状は不明である。隅丸四角形の一隅と見ることができ。残存は南北方向で2.08m、東西方向で0.99mである。深さは0.29mを測った。床面はほぼ水平であった。

方位 N-15°-E (東壁)

埋没土 壁際にふい黄褐色砂質土が堆積。この層の上位には黒褐色砂質土が堆積していた。これらの土層中から須恵器杯(1)・甕(2)が出土している。(観P190)

所見 平安時代の堅穴住居である可能性があるが、これを決定するだけの諸属性を検出できなかったため土坑として報告する。

24号土坑 (第43図、PL10)

位置 72M-19G

重複 25号土坑と重複、これに先出する。

形状 A区B P9地点に位置する。平面形は倒卵形を呈していた。規模は長径0.78m、短径0.75m、深さ0.28mを測った。

方位 N-9°-E

埋没土 黒褐色砂質土が堆積していた。浅間C軒石粒が少量混入していた。

所見 出土遺物がなく性格については不明であるが、近接する3号・4号住居の築造に近い時期の所産で、両住居に付随する施設の可能性もある。

25号土坑 (第43図、PL10)

位置 72M-19G

重複 24号土坑と重複、これに切られる。

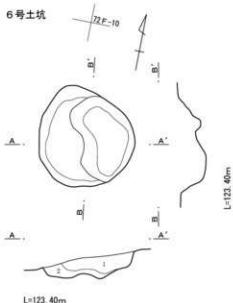
形状 平面形はやや隅丸の長方形を呈していた。規模は長軸1.23m、短軸1.07m、深さ0.20mを測った。

方位 N-41°-W

埋没土 黒褐色砂質土が堆積していた。浅間C軒石

第二章 亀泉西久保日遺跡の調査

6号土坑

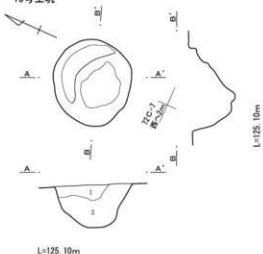


L=123.40m

6号土坑

- 1 黒褐色砂質土 As-C少量混入。均質。細粒で緻密。
- 2 黒褐色砂質土 弾力のある細粒土。緻密。地山の可能性あり。

10号土坑

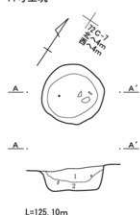


L=125.10m

10号土坑

- 1 にぶい黄褐色砂質土 弾力のある細粒土。
- 2 褐色砂質土 弾力のある細粒土。直径1~2cmの黄褐色ロームを混入。

11号土坑



L=125.10m

11号土坑

- 1 黒褐色砂質土 細粒、弾力がありやや硬質。にぶい黄褐色砂質土を塊状に混入。
- 2 黒褐色砂質土 にぶい黄褐色砂質土の混入が1層よりも多い。

24号・25号土坑



L=120.70m

16号土坑

- 1 As-C混黒褐色砂質土 弾力のある細粒土。直径1mm以下のAs-Cを全体に混入。均質で緻密。
- 2 黒褐色砂質土 にぶい黄褐色砂質土がブロックで混入。
- 3 にぶい黄褐色砂質土 直径1~3cm大のローム粒が混入。下位にはロームが多く、大粒のものが多い。

L=123.50m

24号・25号土坑

- 1 As-C混黒褐色砂質土 2層に耕作土が攪拌されて混入する。
- 2 As-C混黒褐色砂質土 均質で緻密。褐色砂質土の斑混あり。
- 3 注記なし。

0 1:30 1m

第43図 奈良・平安時代の土坑



第44図 奈良・平安時代の土坑出土遺物

粒が24号土坑より多く混入していた。

所見 25号土坑と同様の所見が得られた。

(4) 溝

1号溝 (第45図、PL7)

位置 72P-19・20、Q-20G

重複 1号土坑と重複する。これに先出すると考えられる。

形状 A区P9地点で検出したが西側立ち上がりを始め、広範囲にわたり攪乱を受けていた。検出長は約9.0mである。断面形は外傾著しい逆台形で、上幅2.4m、深さ0.8mを測った。底面の標高は北端で119.05mである。

方位 N-26°-W

埋没土 底面直上に浅間B軽石の2次堆積を主体とした褐色土が堆積していた。上位には砂粒が多く含まれていた。

所見 台地縁辺のやや高い地点を回る導水路と考えられる。埋没土の状況から古代に掘削、使用されたものと考えられる。

2号溝 (第46図、PL7)

位置 62D-15~17、E-14・15G

形状 B区北西隅部分で検出した。北東から南西に傾斜する台地（調査時に著しく削平）の傾斜に沿って直線的に延びている。9.5mを検出したが南北両端とも調査区域外におよんでいる。北端側は上毛電鉄軌道北側の調査区では検出されなかった。幅は0.24~0.45m、深さは0.7mである。断面形は皿状を呈していた。底面の標高は120.90~120.25mである。

方位 北半N-13°-E、南半N-2°-E

埋没土 中位に浅間B軽石を混入する黒褐色土が堆積していた。流水の有無は不明。

所見 埋没土中に浅間B軽石が堆積することから古代に掘削され使用されたものと考えられる。本遺構の西側調査区北西隅外には、大型の粗粒輝石安山岩が集積されていた。なお、調査時の所見では薬師塚古墳と一群をなす古墳が近接して存在していた可能性が指摘されている。

6号溝 (第47図、PL7)

位置 62J-20、72J-1・2、K-2G

重複 7号溝と重複、これに先出する。

形状 A区西側側道南半部分で検出した。以下10号溝までの5条が本地点に位置する。台地の縁辺を等高線に沿って回る南北方向の溝である。検出長は11.04mである。傾斜面上の検出であったため、東側の上端のみを確認するに止まったが土層断面の観察から断面形は箱形を呈し、上幅は0.40~0.45m、深さ0.16mである。

方位 N-14°-W

埋没土 上・中層に淡褐色粘質土が、下層に黒褐色砂質土が堆積していた。流水があったことが認められる。

所見 台地縁辺に沿って延びている。西側沖積地に展開する水出への導水溝と考えられる。埋没土の特徴から古代に掘削、使用されたものと考えられる。

7号溝 (第47図、PL7)

位置 62J-20、72J・K-1、K-2~6G

重複 6号・8号溝と重複する。6号溝に後出、8号溝に先出する。

形状 台地の縁辺に沿って延びる南北方向の溝で

ある。検出長は31.07mであるが、大半が東側の上端のみの検出である。土層断面の観察により断面形は箱形を呈していたことが確認された。上幅は0.30～0.60m、深さ0.16mを測った。底面に鋤跡痕が認められた。

方位 N-10°-W

埋没土 黒褐色土が堆積していた。流水があったものと考えられる。

所見 西側沖積地に展開する水田への導水溝と考えられる。北端部分が台地方向に延びて途切れていることから台地末端の湧水を引水していた可能性も考えられる。埋没土の特徴から古代に掘削、使用されたものと考えられる。

8号溝 (第47図、PL7)

位置 72K-3～6、L・M-6G

重複 7号溝と重複、これに後出する。

形状 72K-5を頂点に東側に大きく弧を描いている。南北両端とも途切れているが、南端は水滴状に膨らんで終わる。検出長は18.60mである。上幅は0.20～1.08m、深さは0.10mである。南北両端の底面の比高差は0.09mである。

方位 南半N-10°-W、北半N-70°-W

埋没土 暗褐色砂質土が堆積していた。

所見 台地縁辺に沿って延びている。水田への導水溝と考えられる。埋没土の特徴から古代に掘削、使用されたものと考えられる。

9号溝 (第47図、PL8)

位置 72L-5・6、M-6～9G

重複 浅間B軽石堆積層を掘り込んでいた。8号溝との関係は不明である。

形状 地形に則して沖積地内を緩やかに彎曲し、南北方向に延びる溝である。21.40mを検出した。規模は上幅が0.40～0.60mで、深さが0.02～0.05mを測った。断面形は皿状を呈していた。底面の標高は北端で116.70m、南端で116.59mであった。

方位 N-18°-W

埋没土 黒褐色砂質土が堆積していた。

所見 浅間B軽石降下後に掘削されたものと考え

られる。古代の所産と考えられる。

10号溝 (第47図、PL8)

位置 72L-7・8G

形状 台地縁辺で検出した南北方向に延びる溝である。検出長は6.21mである。さらに南北両端に延びるものと考えられる。規模は上幅0.16～0.30m、深さ0.02～0.08mを測る。断面形は箱形であった。底面の標高は北端で116.79m、南端で116.76mを測った。

方位 N-5°-W

埋没土 7号溝の埋没土に類似し、多少粘性をおびた黒褐色土が堆積していた。

所見 埋没土の特徴から古代に掘削されたものと考えられる。

12号溝 (第46図、PL8)

位置 72L-20、82L-1、M-1・2G

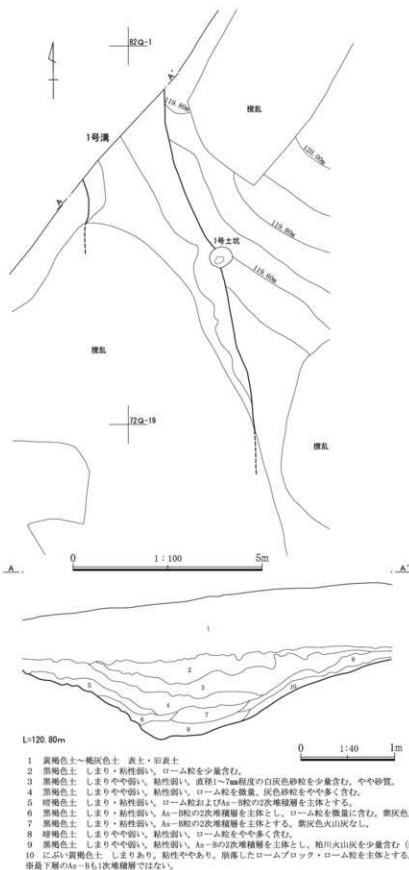
重複 3号・4号住居と重複、両住居が完全に埋没後掘削されている。

形状 A区B9地点の台地上を傾斜に沿って、北西から南東方向に延びる溝である。両端とも調査区域外におよんでいた。途中、攪乱を受けているものの検出長は8.47mにおよんだ。規模は上幅0.80mと、一定していた。深さは0.55mであった。断面形は逆台形であった。底面の標高は121.16～121.05mであった。

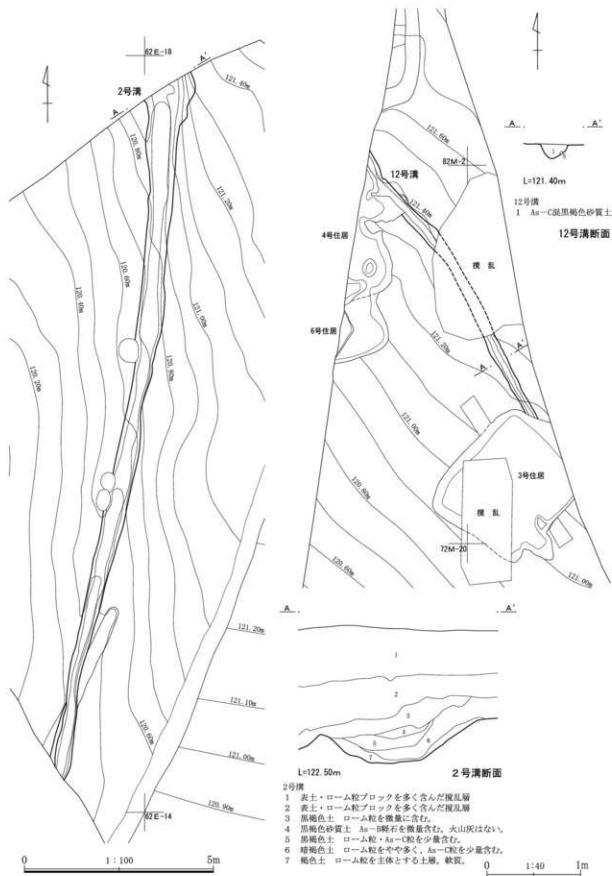
方位 北半N-41°-W、南半N-29°-W

埋没土 浅間C軽石混じりの黒褐色砂質土が堆積していた。流水の痕跡は認められない。

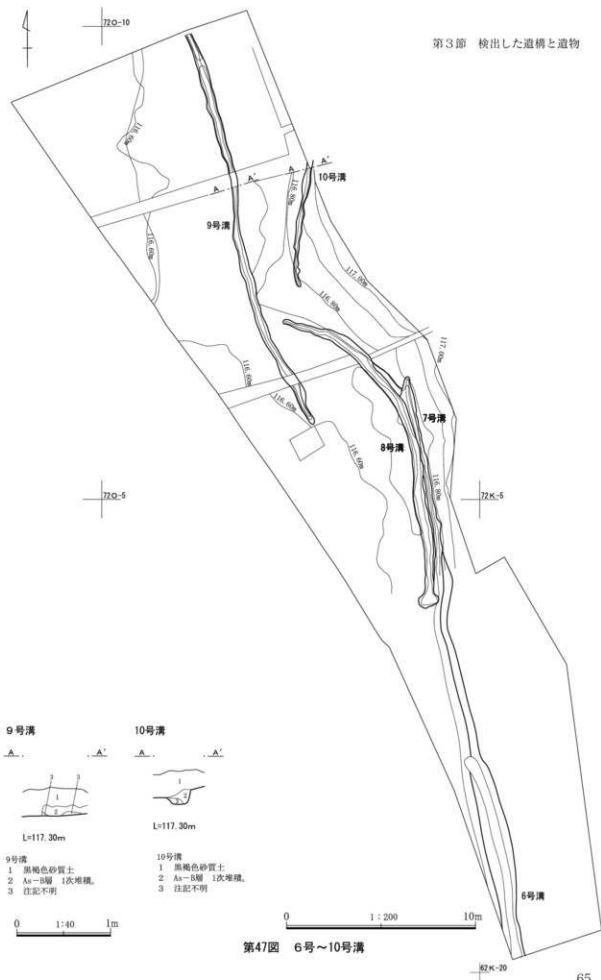
所見 流水の痕跡がないことから区両用の垣か欄の性格も考えられる。3号・4号住居との重複関係、埋没土の観察から浅間B軽石降下前の古代に掘削されたものと考えられる。なお、4号住居に近接する埋没土中から土師器破片20点、須恵器破片3点が出土しているが4号住居からの混入の可能性が考えられるため資料化していない。



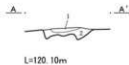
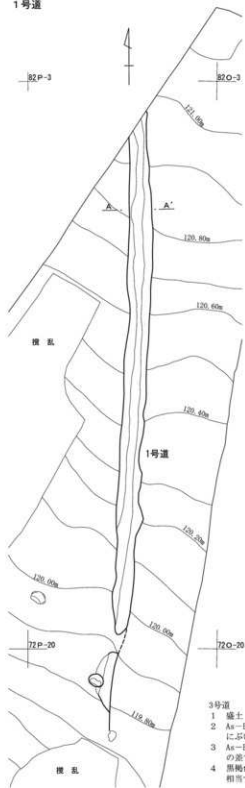
第45図 1号溝



第46図 2号・12号溝



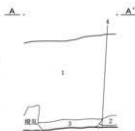
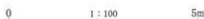
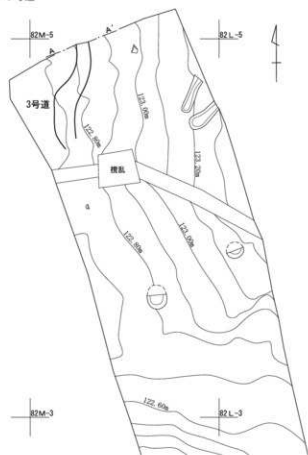
1号道



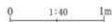
1号道

- 1 赤褐色土 しまり強い、粘性なし、ローム粒・ロームブロックを少量含む。
- 2 黒褐色土 しまり強い、粘性なし（硬化面）。

3号道



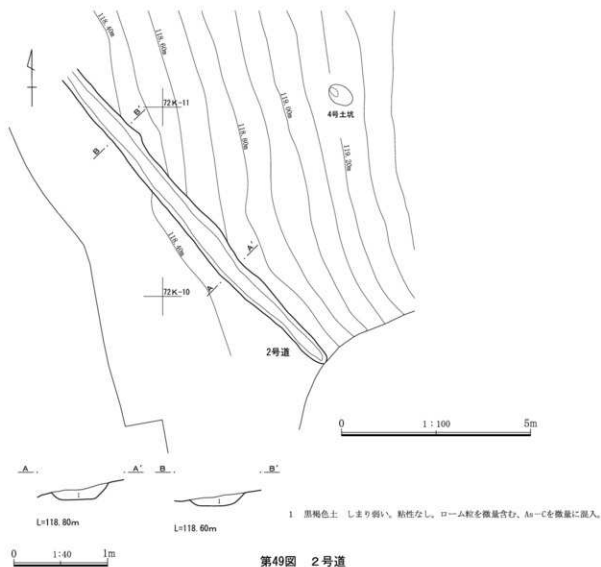
L=122.80m



3号道

- 1 盛土
- 2 Aa-B段黒褐色砂質土 細粒、緻密で硬質、5層のブロックや、ふい黄褐色の砂層が混入、人為的な攪拌と考えられる。
- 3 Aa-B段黒褐色砂質土 3層より2層に近似する、2層とは明確の差で区分。
- 4 黒褐色砂質土 弾力のある細粒土、均質で緻密、黒ボク土に相当する。

第48図 1号・3号道



第49図 2号道

(5) 道

1号道 (第48図、PL9)

位置 720-19・20、820-1・2 G

形状 P9地点で検出した南北方向の道である。北東から南西に向かって傾斜する台地を斜めに横断している。15mにわたり検出した。北端は調査区域外におよんでいる。南端は沖積地縁辺方向に向かうが攪乱を受けている。路面の幅は平均で0.6mで横断面は皿状に凹んでいた。路面の標高は120.93～119.91mである。

方位 N-90°-E

埋没土 硬化面は黒褐色土でその上層に茶褐色土が堆積していた。

所見 出土遺物はなかった。覆土・埋没土の状況から古代の所産と考えられる。

2号道 (第49図、PL9)

位置 72J-9・10、K-10・11 G

形状 A区P7の西側部分で検出した。南北両端とも削平を受けていた。約5mの長さで確認したが、東側から西側に向かって傾斜する台地を斜めに下り、沖積地方向に延びていたものと考えられる。路面の幅は0.40～0.60mで横断面は皿状を呈し、凹んでいた。路面の標高は118.70～118.15mの高さであった。

方位 N-42°-W

埋没土 硬化面の上に黒褐色土が堆積していた。

所見 出土遺物はなかった。覆土・埋没土の状況から古代の所産と考えられる。

3号道 (第48図、PL9)

位置 82L-4G

形状 A区東側側道部分北端、ローム漸移層上面で検出した。この部分における検出長は約3.00mと短かったが、その延長方向、BP9の北西部分でこの続きと考えられる部分を検出したが、判然とせず遺構と認定するにいたらなかった。台地の傾斜に沿って延びていたものと考えられる。路面の硬化部分のみ残存、その幅は0.40~0.60mである。淡い黒褐色砂質土を敷き込んで路面としている。路面はあまり硬化していなかったが良好な部分ではペラペラと剥がれた。厚さ1cm程である。

方位 N-7°-E

埋没土 浅間B軽石を混入する黒褐色砂質土が堆積していた。

所見 出土遺物はなかった。浅間B軽石が混入する土層下にあり、4号住居の埋没状況との比較から古代の所産と考えられる。

(6) 浅間B軽石下水田

A区西側側道南半部分 (第50図、PL6)

A区西端、西側側道部分は洪積台地に接する沖積地の東側縁辺にあたる。この沖積地は本遺跡の北側に位置する荻窪南田遺跡B区の沖積地と同一地形内にあり、本遺跡の南側で寺沢川流路に沿って形成された沖積地と合流している。A区西側における沖積地の幅は1988(昭和63)年作成の前橋市現形図から約50mとすることができる。

本遺跡に先行して調査が実施された荻窪南田遺跡B区では広範囲にわたり浅間B軽石の堆積が確認され、軽石下の水田が検出された。本遺跡においても西側側道部分において第50図に図示したよう浅間B軽石の堆積が確認された。浅間B軽石の堆積層の厚さは0.04~0.15mと地点によってばらつきが見られた。この軽石層下には黒色粘質土が約0.15mほどの厚さで堆積しておりこれを水田耕土と考えた。検出した水田面は東側から西側に向かって緩やかに傾

斜していた。

ただし、この調査区内では水田を区画する畦畔については確認できなかった。調査対象面積は514㎡であった。

また、ここでは6号から10号の5条の溝が検出されたが、浅間B軽石で直接埋没した溝は存在していない。

A区西側側道北半部分 (第51図、PL6)

この調査地点の北側部分においても浅間B軽石の堆積が認められたが、平成14年次に調査を行った調査対象面までの掘削深度が1m以上におよぶ上に台地末端からの大量の湧水があった。直後に予定されていた側道設置工事の工程との調整の必要も生じ、上面の表土を掘削した状態までで調査を終了した。

その後、平成16年度に側道に沿って長さ28m、幅4mのトレンチを設定し、調査を実施した。第51図に示したよう土層の堆積状況を見ると、上層には0.8~1.0mの厚さで隣接した宅地造成時の盛土が堆積していた。ただし、トレンチの南端部分では、側道南半の調査地点で見られた浅間B軽石下の粘性の強い黒色砂質土の堆積が認められた。

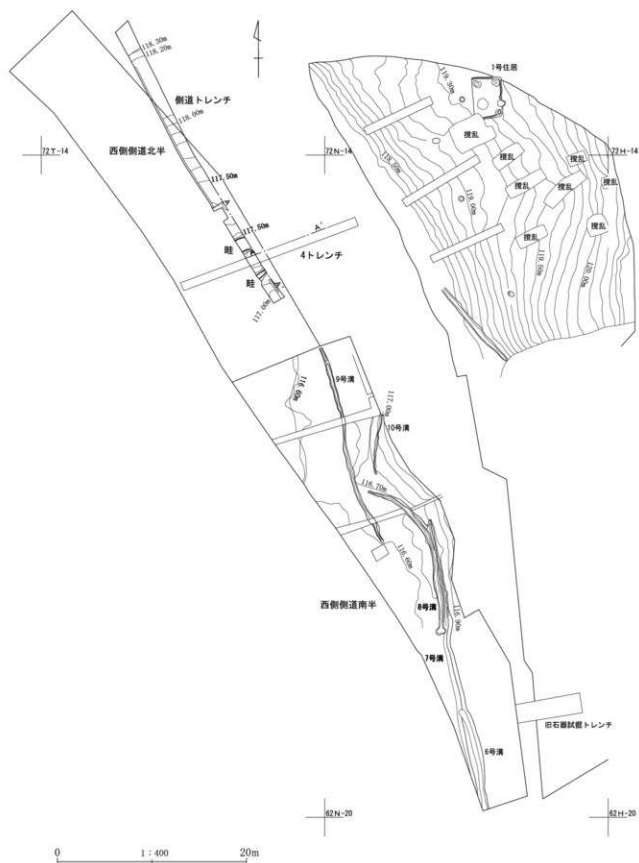
土層の観察からは720-11グリッド内、トレンチ南端から北方向に0.35mと4.15mの地点に帯状の低い高まりが見られた。0.35m地点の高まりは上幅0.32m、下幅0.80m、高さ0.08mである。4.15m地点の高まりは上幅1.50m、下幅2.00m、高まり0.18mである。調査面積が狭小であったため平面的な検討が充分とは言い難いが、水田の畦畔である可能性を考えた。

側道南半部分の調査面積は514㎡、北側の浅間B軽石堆積部分を加えると約910㎡に浅間B軽石下の水田が存在していた可能性が考えられる。

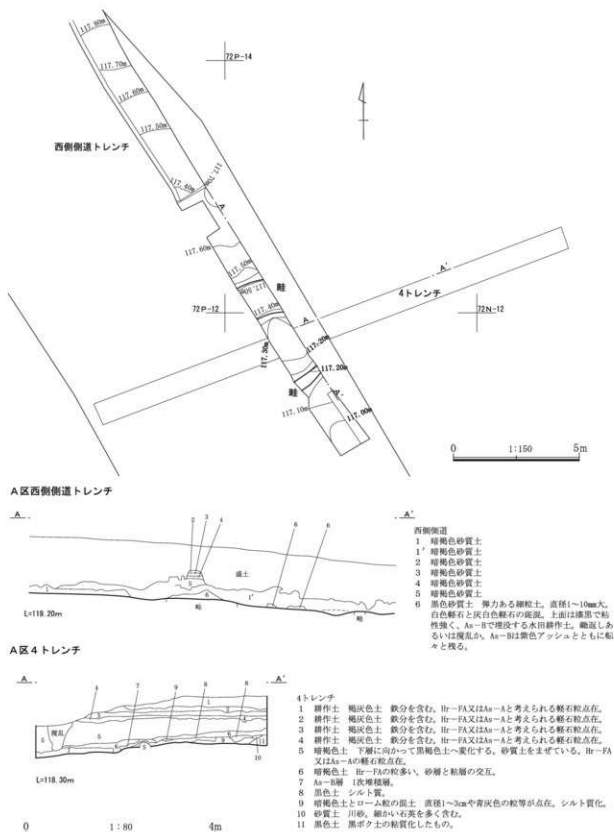
なお、水田に直接伴うと考えられる出土遺物はなかった。

C区 (第52図、PL6)

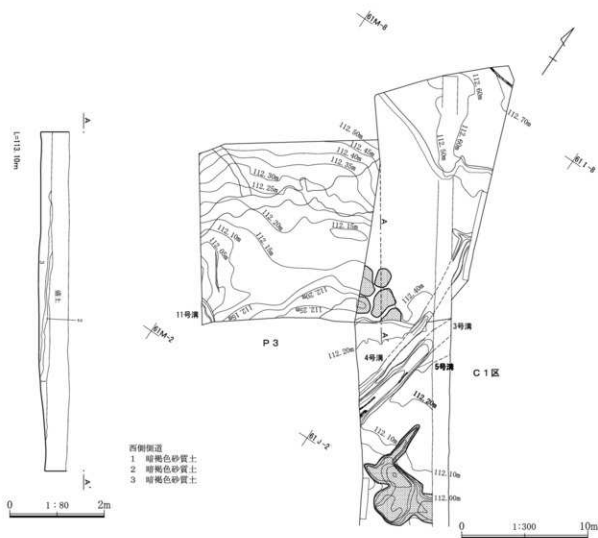
寺沢川右岸においてはB区の調査区かゝる洪積台地の端部までの間、約110mの幅で沖積地が存在していた。



第50図 A区西側側道南半検出の浅間B軽石下水田(1)



第51図 A区西側側道北半検出の浅間B軽石下水田(2)



第52図 C区検出の浅間B軽石下水田

C区では東側側道部分のC1区、西側側道部分のC2区、高架橋橋脚部分のP2、P3の4箇所を対象に調査が実施された。第52図に示したようC1区、P3で浅間B軽石およびこれに被覆された黒色粘質土の堆積が認められた。

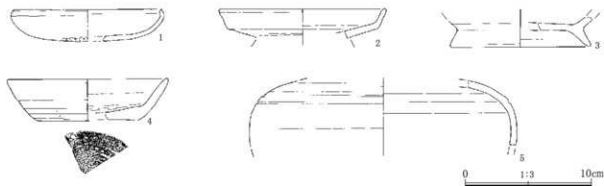
C1区の調査では61J-4グリッド部分で浅間B軽石に埋没した皿状の落ち込みが6箇所検出された。規模は長軸0.8~1.3m、短軸0.6~0.8mで深さは0.05~0.10m程である。にわかに小区画の水田が存在したと断することはできないが、水田遺構の一部が存在していた可能性が考えられる。

C1区西側に接するP3では南北14m、東西14mの調査区内において、調査区南辺から北方向へ4

m程の範囲で黒色粘質土の堆積が確認された。この土層の上には浅間B軽石の1次堆積層が入り込んだくぼみが点在していた。

以上のような調査状況である。圃場整備により浅間B軽石が堆積した層序付近まで削平がおよんでおり攪乱を受けていたため、区画を検出することはできなかった。

浅間B軽石およびこの下位に堆積する黒色粘質土の観察から、寺沢川の流路に接する沖積地においては浅間B軽石下に寺沢川に向かう勾配を利用した棚田状のものが予想された水田が存在していたことが推測される。なお、A区、C区いずれの調査区からも水田に直接伴う出土遺物はない。



第53図 奈良・平安時代遺構外出土の遺物

(7) 遺構外出土の遺物 (第53図、PL24)

本項では竪穴住居や土坑などの遺構から出土した遺構の他に遺構確認作業等の過程で出土した遺物について記述する。

1は土師器杯の破片でA区1号配石周辺からの出土である。2は須恵器の脚台付の盤でA区P6からの出土である。4は須恵器杯の破片でA区72L-5グリッド出土である。(観P192)

5 中・近世の遺構と遺物

(1) 概要

中・近世の遺構としては寺沢川右岸の沖積地部分にあたるC区で3号・4号・5号・11号の4条の溝を検出した。いずれも江戸時代以降の溝と考えられるが、中世の所産と考えられる遺物が少量含まれていた。

時期を推定できず次項に掲載した土坑やピットの中にはこの時期に属するものが少なからずあると考える。

(2) 溝

3号溝 (第55図、PL11・24)

位置 61I-2~4G

重複 4号・5号溝と重複する。

形状 C1区(東側側道部分)で検出した。南北方向の溝で南北両端とも調査区域外に延びる。検出長は11.0mである。断面の土層観察から上幅は4.00m、深さ0.54mであったことが知られる。底面の標高は112.25~111.86mである。底面には護岸養生のためと考えられる杭が別状に打ち込まれていた。

方位 N-12° 30' -W

埋没土 褐灰色土が堆積していた。全体に砂質で中・下層に砂礫を多く含んでおり流水があったことが認められる。また埋没土中に棒状の木材が多く見られた。

遺物 埋没土中から青磁香炉(1)、陶器碗(3)・皿(6)・灯明皿(7)・灯明皿受台(4)・乗燭(5)、磁器碗(2)、瓦(9)などが出土しており資料化した。この他に陶器破片13点、磁器破片12点、軟質陶器破片3点、土師器破片4点、須恵器破片2点、砥石1点が出土している。(観P191)

所見 4号・5号溝と走向を等しくする。南端は調査区域外で11号溝に合流していた可能性も考えられる。出土遺物の特徴から江戸時代の所産と考えられる。

4号溝 (第55図、PL11)

位置 61I-2~6G

重複 3号・5号溝と重複する。4号・3号・5号の順に掘削されたものと考えられる。

形状 C1区(東側側道部分)を検出した。3号溝に平行する南北方向の溝である。検出長は17.00mである。北端では屈曲走向を東方向に変換する様子が見られる。規模は上幅1.08m、深さ0.55mを測った。底面の標高は112.27~112.06mである。

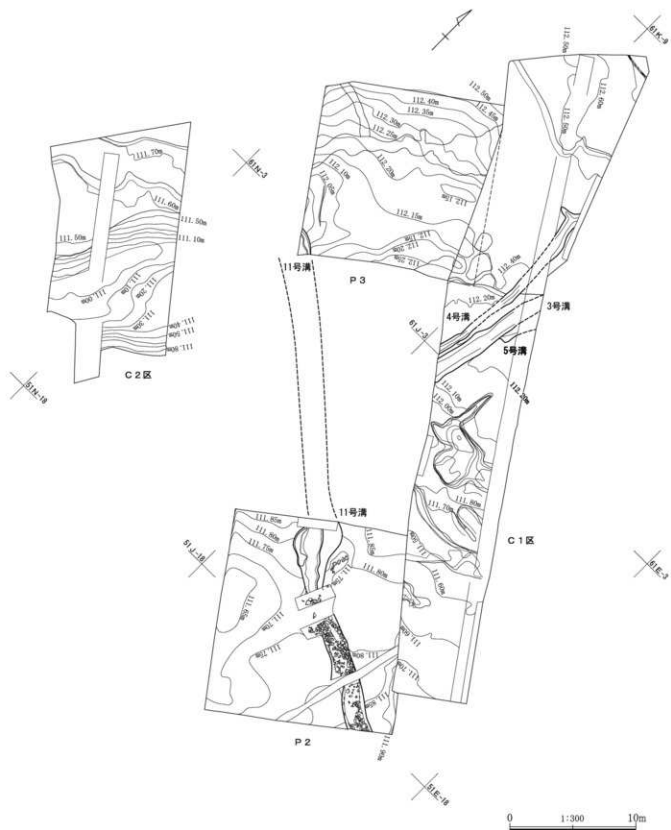
方位 南半N-13° -E、北半N-12° 30' -W

埋没土 褐灰色土・黒褐色土が堆積している。

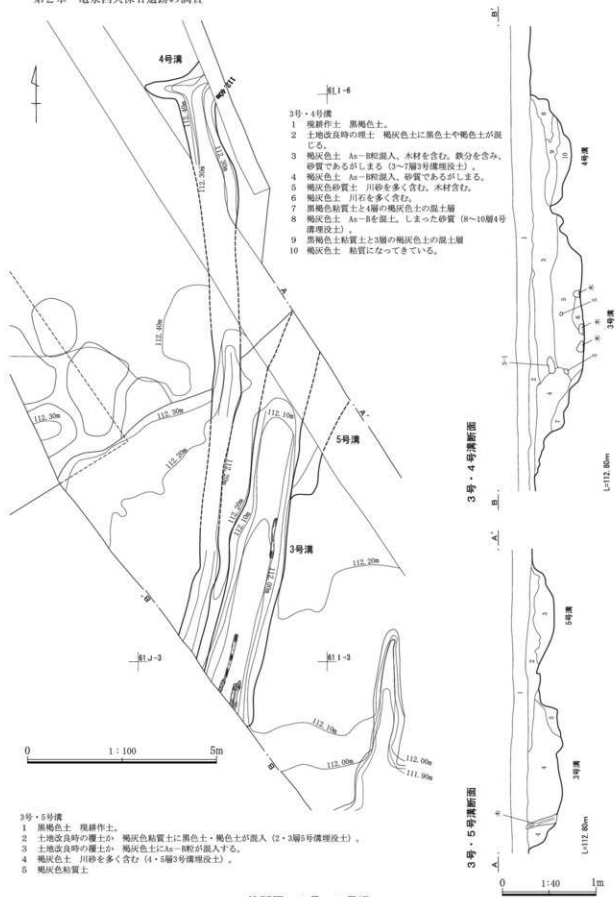
所見 3号溝との重複関係などから江戸時代の所産と考えられる。

5号溝 (第55図、PL11)

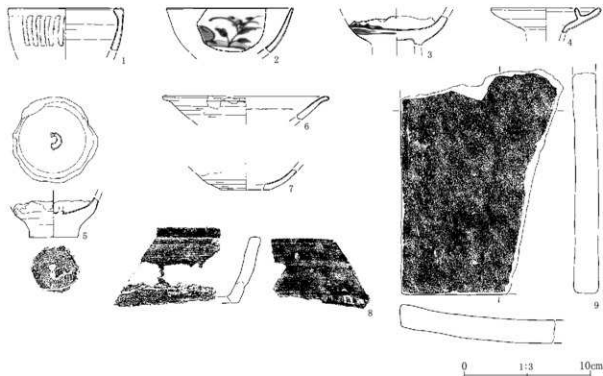
位置 61I-4G



第54図 C区検出の中・近世の遺構



第55図 3号~5号溝



第56図 3号溝出土遺物

重複 3号・4号溝と重複する。

形状 C1区(東側側道部分)調査区東壁際で長さ3.50mを検出した。南北方向に走向を有する溝であったと考えられる。3号溝と同時に調査を行ったため、西側上端を検出することはできなかった。掘り方は外傾著しい逆台形あるいは皿状であったと考えられる。深さは0.30mほどであった。

方位 不明

埋没土 褐灰色土が堆積していた。

所見 3号溝との重複関係から江戸時代以降に掘削されたものと考えられる。埋没土の観察からは近・現代の用水路溝であった可能性もある。

11号溝 (第57～59図、PL11・24)

位置 51F-17、F-H-18、H・I-19、61L-2G

形状 C区P2の調査区で検出。その延長がP3南西隅に続いていた。両者を結んだ検出長は40.4mで、幅1m前後の東西溝の存在が想定される。東西両端は調査区域外におよんでいた。

C区P2の調査では浅間B軽石混じりの黒褐色土

を切る水田らしい平坦面を精査。南北両法面に人頭大の粗粒輝石安山岩を使用した石垣が検出された。北側は45～50度の勾配で1～3段程度の礫が石垣として残っていたが、南側のそれは崩落していた。石垣は裏込めや地業を施さず礫の長軸を縦方向に向けて積み上げられていた。H-19グリッドでは北側の石列が角を意識して並べられていた。石積は複数回におよんでいる。

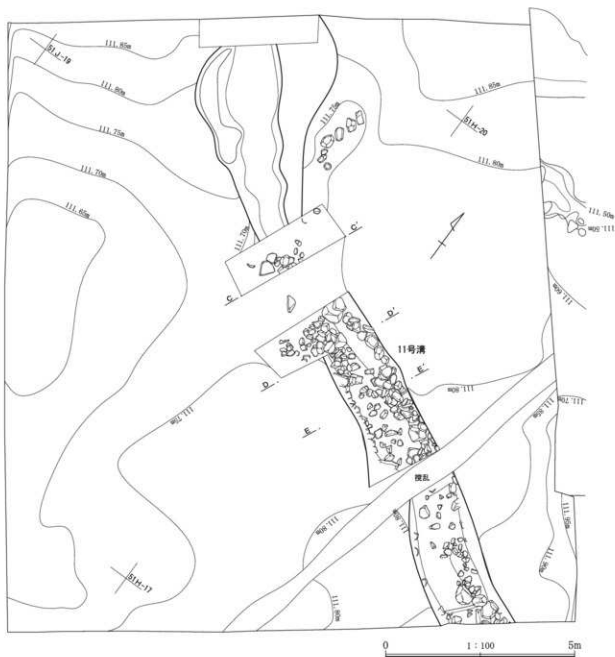
方位 西半N-44°-W、東半N-52°-W

埋没土 埋没土の上層、褐色砂質土中には浅間A軽石が混入していた。下層には、砂礫の堆積層が見られた部分もあった。常時強い水流があったが、一時洪水の繰り返されたものと推測される。

遺物 埋没土中から出土した陶器器手碗(2)・皿(3)・甕(4)、五輪塔空風輪(1)を資料化した。

この他に陶器破片3点、磁器破片5点、軟質陶器破片2点、土師器破片10点が出土している。(観P191)

所見 現在の寺沢川の流路と直交することから河道でなく人工の溝と判断される。出土遺物の特徴か



第57図 11号溝

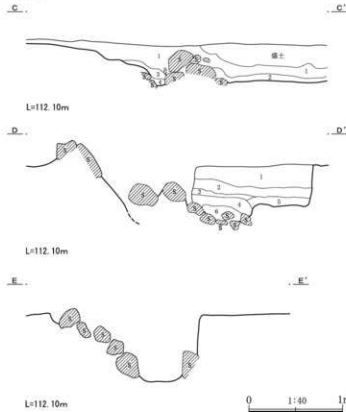
ら江戸時代後期の掘削で、圃場整備前まで水路として使用されていたものと考えられる。検出した石垣は本溝につながる水田の区画が馬入れの路肩を養生したものであろうか。

(3) 遺構外出土の遺物 (第60図、PL24)

本項では遺構外出土の中・近世出土の遺物について記述する。72L-5グリッド出土の陶器天目茶碗(4)や61M-11グリッド出土の軟質陶器播鉢(13)は中世の所産である。51F-18グリッド出土の陶

器播鉢(6)は中世から江戸時代初頭に位置づけられる。72M-6グリッド出土の土師質土器皿(2)も中世の所産である可能性が高い。陶器のC区61O-2グリッド出土の菊皿(7)、C区51O-2グリッド出土の灯明皿(8)、A区72K-4グリッド出土の尾呂茶碗(10)、C区51N-1出土の磁器碗(14)などは江戸時代の所産である。ここに掲載した14点の他に未掲載資料として土器類64点、瓦1点、石器類34点がある。(観P192・193)

11号溝断面



C'

11号溝C-2'

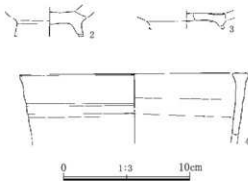
- 1 褐色砂質土 細粒。As-A粒を少量混入。黄褐色シルト質土が薄い織状に混入。
- 2 褐色砂質土 全体の50%が細砂。鉄分凝集が著しく、緻密。
- 3 にぶい黄褐色土 直径1mm以下の細砂層。
- 4 青灰色土 直径3~5mm大の粗粒混入。
- 5 褐色砂質土 微粒。緻密で弾力あり。
- 6 にぶい黄褐色シルト質土 微粒で緻密。

D'

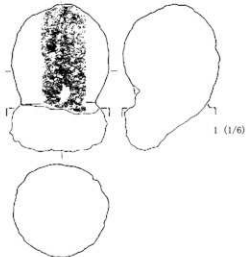
11号溝D-2'

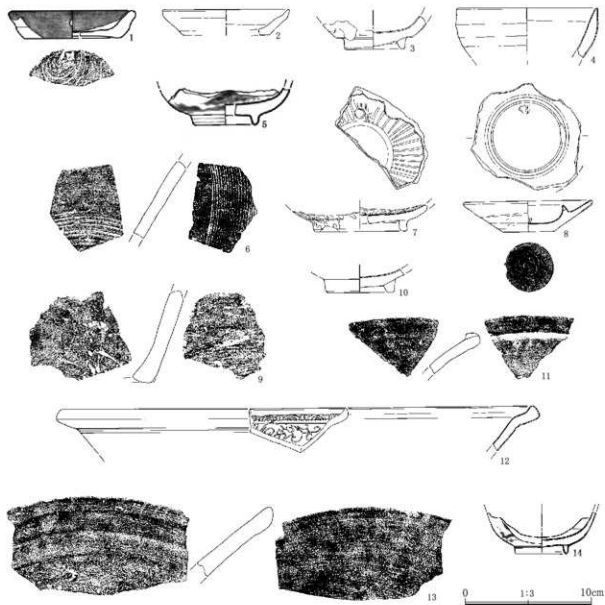
- 1 土地改良時の盛土
- 2 黄灰色砂質土 細粒。均質で粘性あり。
- 3 黄褐色細砂 2層に鉄分が染み込んだ土層。
- 4 褐色粗砂 直径1mm前後。下位に赤りやや大粒になる。
- 5 黄褐色土~青灰色細砂 3層を切る。
- 6 青灰色土を主体とする細砂層

第58図 11号溝土層断面



第59図 11号溝出土遺物





第60図 中・近世遺構外出土の遺物

6 時期不明の遺構

(1) 概要

本遺跡の調査においては遺構として認識できたものの出土遺物がなく埋設土層の観察、その他の遺構との関連などからも時期を確定できない遺構が存在した。本項ではそれらにあたる土坑16基、ピット34基について記述する。

(2) 土坑

土坑は台地上のP9で1号の1基、P7で3基、東側側道南半部分で3基、P6で9基が検出された。全体に散在する傾向にありP6やBP9の調査地点

では後述するピットと混在する状況が認められた。

1号土坑 (第61図、PL12)

位置 72P-19G

重複 1号溝と重複する。これに後出すると考えられる。

形状 小規模である。平面形は楕円形を呈している。規模は長径0.60m、短径0.53m、深さ0.39mを測る。断面形は鉢状である。

方位 N-51°-E

埋没土 暗褐色土・黄褐色土が堆積している。

所見 出土遺構もなく詳細な掘削時期、性格は不

明である。

2号土坑 (第61図、PL12)

位置 72K-15G

形状 小規模である。平面形は楕円形を呈しているが、長短の差は少ない。規模は長径0.60m、短径0.53m、深さ0.25mを測る。断面形は鉢状である。

方位 N-21°-W

埋没土 黒褐色土が堆積していた。

所見 遺物の出土はなく、詳細な掘削時期、性格は不明である。

3号土坑 (第61図)

位置 72K-13G

形状 小規模である。平面形は円形である。規模は直径0.60m、深さ0.36mである。断面形は鉢状を呈していた。

方位 N-74°-E

埋没土 黒褐色土が堆積していた。

所見 出土遺物はなく、詳細な掘削時期、性格は不明である。

4号土坑 (第61図、PL12)

位置 72J-11G

形状 平面形は楕円形を呈していた。掘り込みは南東方向に傾斜していた。規模は長径0.69m、短径0.48m、深さ0.71mを測った。

方位 N-49° 30'-W

埋没土 黒褐色土が単一で堆積していた。

所見 出土遺物はなく、詳細な掘削時期、性格は不明である。

7号土坑 (第61図、PL12)

位置 72D-7G

形状 小規模である。平面形は楕円形を呈している。断面形は筒形である。規模は長径0.53m、短径0.45m、深さ0.26mである。

方位 N-55° 30'-W

埋没土 上層に浅間C軽石を含む黒褐色砂質土が、下層にふい黄褐色砂質土が堆積していた。

所見 出土遺物はなく、詳細な掘削時期は不明である。柱穴の可能性が考えられる。

8号土坑 (第61図、PL12)

位置 72C-7G

形状 小規模である。平面形はほぼ円形である。断面形は筒形である。規模は長径0.45m、短径0.43m、深さ0.38mである。

方位 N-23°-W

埋没土 褐色砂質土が堆積していた。

所見 出土遺物はなく詳細な掘削時期は不明である。柱穴の可能性が考えられる。

9号土坑 (第61図)

位置 72D-7G

重複 7号土坑の西側に接して位置する。

形状 小規模である。平面形は楕円形を呈していた。規模は長径0.45m、短径0.36m、深さ0.32mを測る。

方位 N-73°-W

埋没土 不明である。

所見 出土遺物はなく詳細な掘削時期は不明である。柱穴の可能性が考えられる。

12号土坑 (第61図、PL12)

位置 72E-6G

重複 2本のピットと重複、これに切られている。

形状 平面形は長円形を基本として考えられる。規模は長径1.33m、短径0.84m、深さ0.41mを測る。

方位 N-4° 30'-E

埋没土 到い黄褐色砂質土、黒褐色砂質土とロームの混土が堆積していた。

所見 埋没土中から縄文時代中期の土器片を出土しているが詳細な掘削時期、性格は不明である。

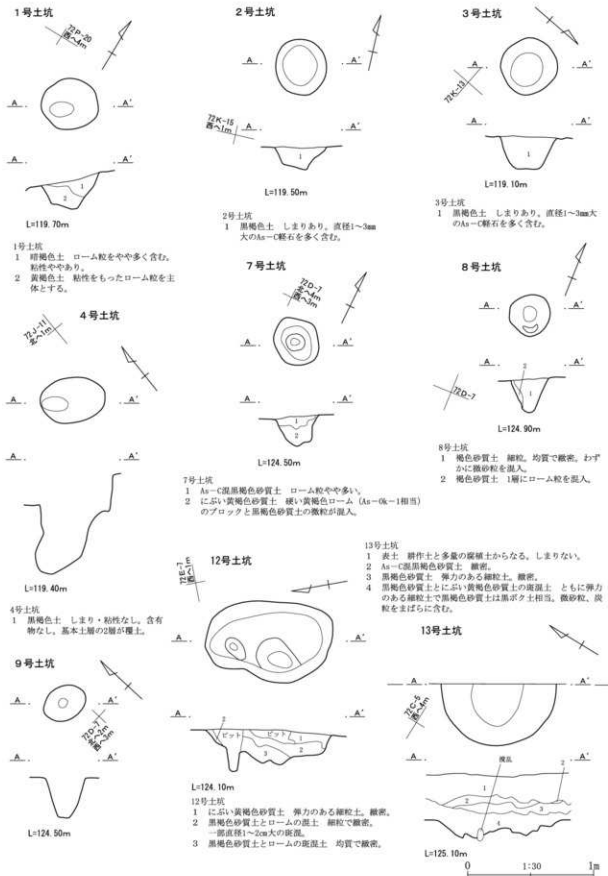
13号土坑 (第61図、PL13)

位置 72C-4G

形状 平面形は円形を呈していたと考えられるが東側は調査区域外におよんだ。規模は直径1.21m、深さ0.16mを測る。あまり整然とした掘り込みではなかった。

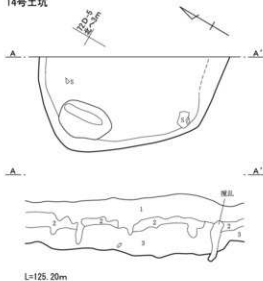
方位 不明

埋没土 中に黒褐色砂質土とにふい黄褐色砂質土の灰混土が堆積していた。



第61図 時期不明の土坑 (1)

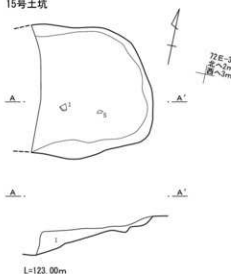
14号土坑



14号土坑

- 1 表土 耕作土と多量の腐植土からなる。しまりない。
- 2 As-C段黒褐色砂質土 緻密。
- 3 黒褐色砂質土にふい黄褐色砂質土の夾混土ともに弾力のある細粒土で黒褐色砂質土は黒ボク土相当。微砂粒、炭粒をまばらに含む。

15号土坑



15号土坑

- 1 As-C段黒褐色砂質土 漆と考えられる付着物がある須臾腐爛部破片1点、裏片1点が出土。

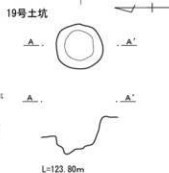
18号土坑



18号土坑

- 1 褐色砂質土 黒ボク土給源の弾力ある細粒土。緻密であるがやや軟質。
- 2 淡黒褐色砂質土 1層中の木の屑による埋戻し。
- 3 にふい黄褐色砂質土 ローム漸移層の2次堆積。弾力のある細粒土。
- 4 にふい黄褐色砂質土 ローム漸移層の2次堆積。炭粒をまばらに含む。弾力のある細粒土。3・5層は明増産で区分。
- 5 にふい黄褐色砂質土 6層と同質。ロームが多く明るい。
- 6 にふい黄褐色砂質土 弾力のある細粒土。3~7層の中で最も黒く硬質。
- 7 にふい黄褐色砂質土 ローム粒を全体に含む。6層より明るくやや軟質。

19号土坑



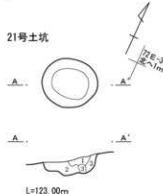
20号土坑



20号土坑

- 1 黒褐色砂質土 黒ボク給源、弾力のある細粒土。均質で緻密。やや硬質。炭粒まばらに混入。

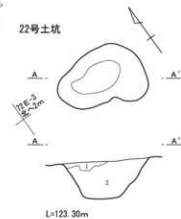
21号土坑



21号土坑

- 1 黒褐色砂質土 黒ボク給源、弾力のある細粒土。均質で緻密。やや硬質。炭粒まばらに混入。
- 2 にふい黄褐色土 1層にローム粒多く含む。上面に炭土が点在。
- 3 As-C段-1相当する硬いロームブロック

22号土坑

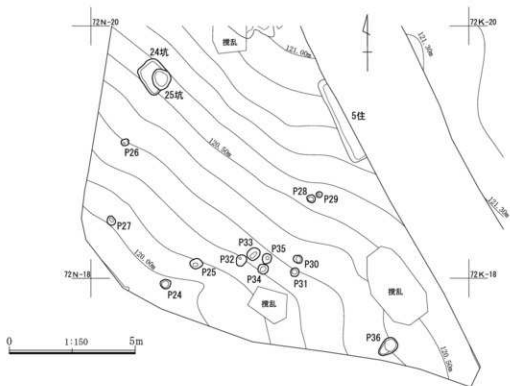


22号土坑

- 1 褐色砂質土 黒ボク給源、弾力のある細粒土。
- 2 黒褐色砂質土と黄褐色砂質土の混土層 塚状となる。隙間にローム多く含む。

第62図 時期不明の土坑(2)





第63図 A区BP9検出の土坑とピット

所見 埋没土中から剥片1点を出土したが、詳細な掘削時期、性格については不明である。

14号土坑 (第62図、PL13)

位置 72C・D-5G

形状 東側が調査区域外におよび全体形状は把握できなかった。平面形はやや隅を有し、長方形あるいは長円形を呈していたと考えられる。

規模は南北方向で2.00m、東西方向の残存は0.99mである。深さは0.18m北西隅にピット状の落ち込みを有する。

方位 N-38°-W

埋没土 黒褐色砂質土とにぶい黄褐色砂質土の斑状混土が堆積していた。

所見 埋没土中から縄文時代前期黒浜式の土器片1点と剥片1点を出土したが詳細な掘削時期、性格は不明である。

15号土坑 (第62・64図、PL23)

位置 72E-3G

形状 台地の肩口に位置し、西側は掘削され検出

できなかった。平面形は長軸を東西方向に有する隅丸長方形あるいは長円形を呈していたと考えられる。規模は東西方向の残存が1.35m、南北方向1.40m、深さ0.23mを測る。底面は西側に向かって傾斜していた。

方位 N-78°-E

埋没土 浅間C軽石粒を含む黒褐色砂質土が堆積していた。埋没土中の下層から漆の付着した須恵器甕(第64図1)の胴部が出土している。(観P193)

所見 古代の所産と考えられるが断定するにいたらなかった。

18号土坑 (第62図、PL13)

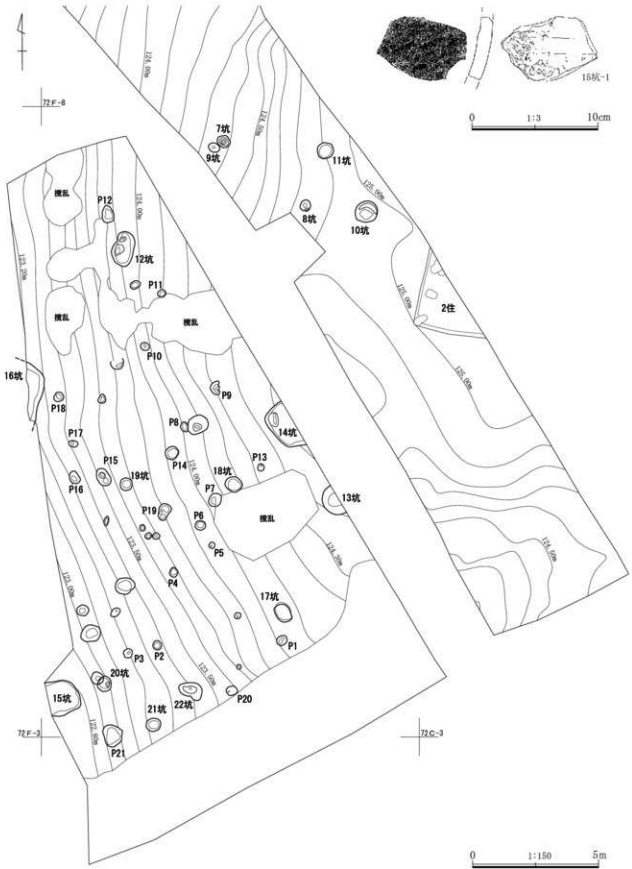
位置 72D-4・5G

形状 平面形は円形を基本とするが東西方向に長径を有している。やや不安定な形状である。規模は長径0.68m、短径0.60m、深さ0.55mを測る。底面は整然としていない。

方位 N-84°-W

埋没土 にぶい黄褐色土を主体に堆積していた。

第3節 検出した遺構と遺物



第64図 A区P6検出の土坑・ピットと出土遺物

所見 詳細な掘削時期、性格については不明である。

19号土坑 (第62図)

位置 72E-4・5G

形状 A区P6地点2トレンチで旧石器試掘調査中に検出した。平面形はほぼ円形を呈する。規模は長径0.50m、短径0.47m、深さ0.34mを測る。

方位 N-7° 30' -E

埋没土 ローム漸移層か堆積、炭粒をまばらに含む。

所見 詳細な掘削時期、性格は不明である。人為的な遺構ではない可能性もある。

20号土坑 (第62図、PL13)

位置 72E-3G

重複 北東部分はピットにより切られている。

形状 平面形はほぼ円形を呈する。規模は長径0.60m、短径0.54m、深さ0.21mを測る。底面は東壁際が一段低くなるがピットとの重複関係等については不明である。

方位 N-67° 30' -W

埋没土 黒褐色砂質土1層か堆積していた。

所見 詳細な掘削時期、性格は不明である。

21号土坑 (第62図、PL13)

位置 72E-3G

形状 平面形はほぼ円形を呈している。規模は長径0.59m、短径0.50m、深さ0.13mである。

方位 N-84° -E

埋没土 黒褐色砂質土にロームを多く含入している。上面で焼土の点が見られた。

所見 詳細な掘削時期、性格は不明である。

22号土坑 (第62図、PL13)

位置 72D-3G

形状 平面形は長円形に近い不整形を呈していた。規模は長径0.93m、短径0.59m、深さ0.54mである。掘り方は上方に向かって大きく開放している。

方位 N-89° 30' -W

埋没土 黒褐色砂質土と黄褐色砂質土が斑状に混入している。

所見 詳細な掘削時期、性格は不明である。

第7表 時期不明のピット計測値一覧 単位:cm

No	位置	形状	長軸	短軸	深さ	備考
1	72D-3	円	51	35	25	
2	72E-3	円	38	34	15	
3	72E-3	円	37	35	36	
4	72D-4	円	39	32	15	
5	72D-4	円	24	22	23	
6	72D-4	円	42	37	16	
7	72D-4	不整形	68	65	42	2本重複か。
8	72D-5	円	82	68	29	
9	72D-5	不整形	48	40	36	
10	72E-6	長円	35	30	50	
11	72E-6	円	32	28	21	
12	72E-7	長円	68	48	26	
13	72D-5	長円	28	25	53	
14	72D-E-5	円	52	48	25	
15	72E-4・5	長円	53	48	38	2本重複か。
16	72E-5	長円	51	37	19	
17	72E-5	長円	36	25	38	
18	72E-5	円	40	36	19	
19	72D-E-4	不整形	67	46	34	2本重複か。
20	72D-3	円	45	35	43	
21	72E-2・3	不整形	88	73	24	
24	72M-17	円	37	37	14	古代
25	72M-18	円	50	42	19	古代
26	72M-19	円	30	25	14	古代
27	72M-18	円	37	31	29	古代
28	72L-18	円	32	30	14	古代
29	72L-18	円	24	24	19	古代
30	72L-18	円	38	34	17	古代
31	72L-18	円	33	32	21	古代
32	72L-18	円	44	40	56	古代
33	72L-18	円	53	45	29	古代
34	72L-18	円	43	39	13	古代
35	72L-18	円	38	36	13	古代
36	72K-17	不整形	79	58	55	

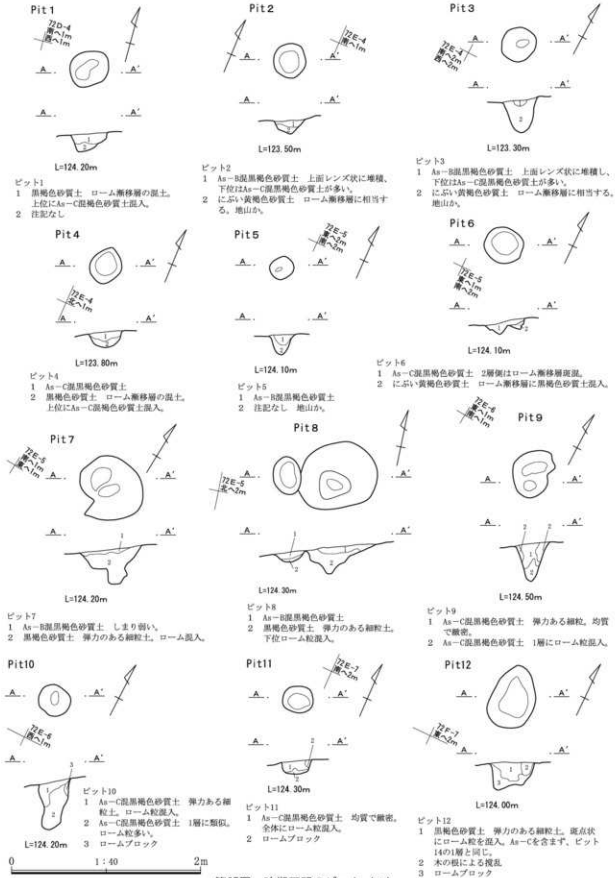
(3) ピット (第63~67図、PL14)

ピットはA区P6地点とB P9地点で検出された。遺構名を付したものは合計34基である。各ピットの法量などは第7表として一覧表を作成した。

平面形は、円形、長円形、不整形であった。掘り込みの深さも様々であった。

P6地点は東側から西側に向かって傾斜する台地頂上に分布するが掘立柱建物などを構成するものではなかった。特段の傾向は見受けられないが浅間B軽石を混じる土粒で埋没しているものが見られた。台地頂上部に近い平坦面にはAs-C混土で深さ0.30m前後の掘り方のものが分布していた。

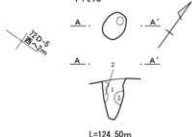
B P9地点では調査区南辺寄りに集中する傾向が見られた。こちらでは埋没土に浅間C軽石の混入が顕著であった。



第65図 時期不明のピット (1)

第二章 亀泉西久保日遺跡の調査

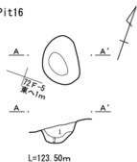
Pit13



ピット13

- 1 As-C混黒褐色砂質土 上位ほどAs-C多い。
緻密。
2 As-C混黒褐色砂質土 1層にローム混入。

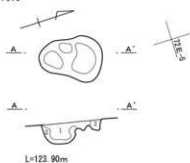
Pit16



ピット16

- 1 As-B混黒褐色砂質土 しまり弱い。
2 柱状なし。地山か。

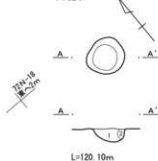
Pit19



ピット19

- 1 As-B混黒褐色砂質土
2 As-B混黒褐色砂質土 1層にローム漸移層混入。

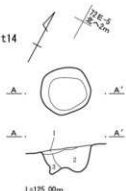
Pit24



ピット24

- 1 As-C混黒褐色砂質土 均質で緻密。
As-Cや多い。
2 褐色砂質土と黒褐色砂質土の混入土
地山か。

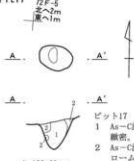
Pit14



ピット14

- 1 黒褐色砂質土
2 黒褐色砂質土 弾力ある細粒土。下位に
直径1~2cm次のローム混入。
3 黒褐色砂質土 2層と同じ。ロームを多
く混入。

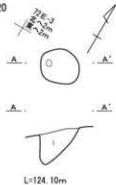
Pit17



ピット17

- 1 As-C混黒褐色砂質土 均質。
緻密。
2 As-C混黒褐色砂質土 1層に
ローム粒を混入。1層よりもし
まり弱い。

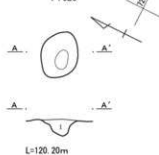
Pit20



ピット20

- 1 As-C混黒褐色砂質土 弾力ある細粒土。
微粒にローム漸移層混入。

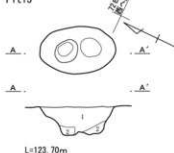
Pit25



ピット25

- 1 As-C混黒褐色砂質土 均質で緻密。
As-Cやが多い。

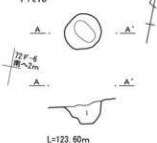
Pit15



ピット15

- 1 As-B混黒褐色砂質土 しまり弱い。
2 As-B混黒褐色砂質土 1層にローム粒
混入。

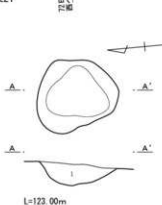
Pit18



ピット18

- 1 As-B混黒褐色砂質土 下位にローム粒混入。

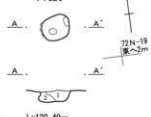
Pit21



ピット21

- 1 As-C混黒褐色砂質土 弾力がある細粒土。
全体にローム漸移層混入。

Pit26

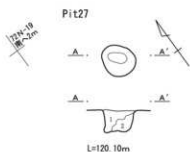


ピット26

- 1 As-C混黒褐色砂質土 均質。緻密。
褐色砂質土の混入あり。
2 黒褐色砂質土

0 1:40 2m

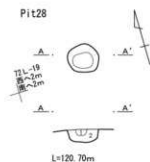
第66図 時期不明のピット(2)



ピット27

- 1 黒褐色砂質土 弾力ある細粒土。緻密。
2 黒褐色砂質土。1層に褐色砂質土混入。1と2は区別できないが自然層か。

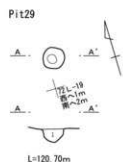
L=120.10m



ピット28

- 1 As-C混黒褐色砂質土 均質で緻密。As-C多い。
2 褐色砂質土と黒褐色砂質土の混入土。As-Cの混入あり。

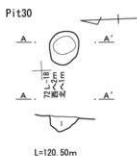
L=120.70m



ピット29

- 1 As-C混黒褐色砂質土 均質で緻密。褐色砂質土の混入あり。

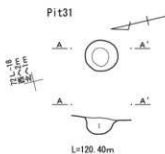
L=120.70m



ピット30

- 1 As-C混黒褐色砂質土 均質で緻密。褐色砂質土の混入あり。

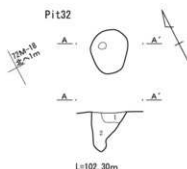
L=120.50m



ピット31

- 1 As-C混黒褐色砂質土 均質で緻密。褐色砂質土の混入あり。

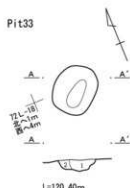
L=120.40m



ピット32

- 1 As-C混黒褐色砂質土 均質で緻密。褐色砂質土の混入あり。
2 褐色砂質土。ローム層移層に相当する細粒土。粘性あり。緻密。

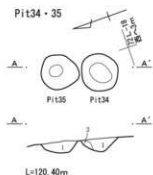
L=102.30m



ピット33

- 1 As-C混黒褐色砂質土 均質で緻密。褐色砂質土の混入あり。
2 As-C混黒褐色砂質土。1層と同質、1層よりもAs-Cの混入が少ない。

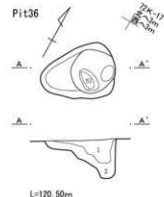
L=120.40m



ピット34・35

- 1 As-C混黒褐色砂質土 均質で緻密。褐色砂質土の混入あり。
2 褐色砂質土。ローム層移層に相当する細粒土。粘性あり。緻密。

L=120.40m



ピット36

- 1 As-C混黒褐色砂質土 弾力のある細粒土。均質で緻密。にがい黄褐色砂質土の混入あり。
2 黒褐色砂質土。弾力のある細粒土。粘性あり。黒ボク土に相当し、地山の可能性が大きい。深さ20cmの段差で軒軌安山石の転石が出土したことから掘り下げた。

L=120.50m



第67図 時期不明のピット (3)

第3章 荻窪南田遺跡の調査

第1節 調査の方法と経過

1 遺跡名の呼称と調査区の設定

遺構名については群馬県埋蔵文化財調査事業団の遺跡命名法にのっとり、遺跡所在地の町名（大字）である荻窪に小字の南田を合わせ、荻窪南田遺跡と呼称した。

荻窪南田遺跡内の調査区は洪積台地上をA区、沖積地内をB区として大別した。さらにB区は調査時の水田地割に沿って、北側からB1区・B2区・B3区・B4区と細別、調査を進めた。B区は北側の幅約5m程をB2区北側として分割して調査を実施した。

2 グリッドの設定

グリッドの設定については亀泉西久保II遺跡と全く同様である。荻窪南田遺跡は8の大グリッドに属した。中グリッドは73・82・83・92・93の各グリッドである。

荻窪南田遺跡のグリッドの座標値は、国家座標（旧座標第Ⅷ系）を用いて計測し、8-82A-1が旧座標でX=44,800m, Y=-63,200m、新座標にすれば概ねX=45,151m, Y=-63,481mである。

3 調査の方法と遺構・遺物の記録

表土掘削および火山灰・洪水砂等の遺構面被覆層の除去は、調査の効率化を図るため、大型掘削機械で行った。また、調査にあたっての図面作成・写真撮影および観察状況の記録については亀泉西久保II遺跡の調査と同様である。

遺構の名称は、遺跡全体を通して遺構の種別ごとに通し番号を付した。報告においても調査時の呼称を踏襲した。

遺構写真撮影には、35mm版と6×7インチ版カメラのモノクロフィルムと35mm版リバーサルフィルムを使用した。遺跡全体の調査状況については高所作業車や気球を使用して全景写真を撮影した。

出土遺物の洗浄・注記作業は調査事務所内で実施した。遺構の注記は、遺跡略号（JK-51）、調査区名、調査面、遺構名またはグリッド名などを記入した。

4 調査の経過

荻窪南田遺跡の調査は平成14年4月から9月の6箇月の間に実施した。

調査は担当者2名の体制で開始されたが、8月下旬からは本遺跡北側台地上の上泉唐ノ堀遺跡の表土掘削、遺構調査を、9月中旬からは南側の亀泉西久保II遺跡の調査準備と平行して行った。

検出した遺構の作図・写真撮影等の工程との兼ね合いから調査はA区とB区1～4の各区を交互にあるいは並行して進めた。

また、A区洪積台地上では縄文時代包含層の調査後、旧石器試掘調査を実施した。調査は4×2mの試掘坑を19箇所を設定、Hr-Hp層までを目途としたが2.5m前後で基盤の礫層に達し、湧水も多いことから終了とした。試掘坑の位置は第71図に示したとおりである。試掘面積は調査対象面積2258㎡に対し152㎡である。試掘調査の結果、いずれの試掘坑からも旧石器時代の遺物は出土しなかった。

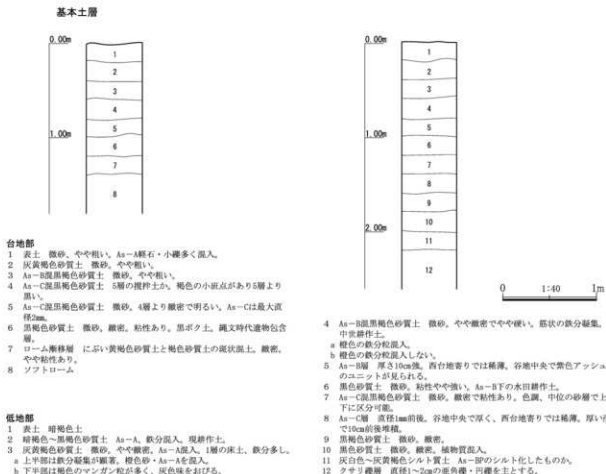
B区においては浅間B軽石下水田の調査終了後、B1区とB2区に試掘坑を設定し、下層の遺構の有無と土層の堆積状況の確認を行った。B区のそれは第69図、第70図に示したよう93グリッドの11ライン付近に設定した。試掘坑の長さは40mである。

荻窪南田遺跡の調査経過の概要は以下のとおりである。

調査日誌抄録

平成14年度

- 4月4日 調査予定地を下見する。以後、作業環境整備のための諸作業を行う。
- 5月2日 湧水対策工事の打合せを行い、5月8日以降施工。
- 5月8日 A区の表土掘削を開始する。
- 5月9日 調査事務所設置。



第68図 萩窪南田遺跡の基本土層

- 5月15日 B1区の表土掘削を開始する。浅間B軽石・浅間C軽石の堆積を確認する。
- 5月19日 調査開始。
- 5月20日 A区道精確認作業を開始。
- 5月22日 B1区道精確認作業を開始。以後、6月3日まで浅間B軽石下水田、溝を調査。6月4日に空中写真撮影。
- 5月28日 B2区の表土掘削開始。7月4日まで道精確認調査。
- 6月4日 B3区の表土掘削を開始。
- 6月10日 B1区・B2区の調査を継続。A区調査も平行して実施。13日からはB3区の調査も実施。
- 6月19日 A区試掘調査を開始する。
- 7月5日 B2区・B3区空中写真撮影。B2区土層観察。資料採取を行う（7月8日にも）。
- 7月23日 A区北側の調査を拡張。道精確認作業を実施。
- 7月30日 B1区東西方向に土層堆積状況確認のためのトレンチを設定。調査実施。
- 7月31日 ここまででB1区～B3区の溝等の調査を終了。B4区の表土掘削を開始する。A区は調査を継続する。
- 8月8日 B2区北側の調査を開始する。
- 8月22日 A区田石器試掘調査を終了する。
- 8月30日 B2区北側、B4区の空中写真撮影。以後、個別道精に対する記録作業を継続する。
- 9月10日 B2区の記録終了。本道精の調査を全て終了する。
- 9月12日 埋戻し開始。9月20日までに終了。

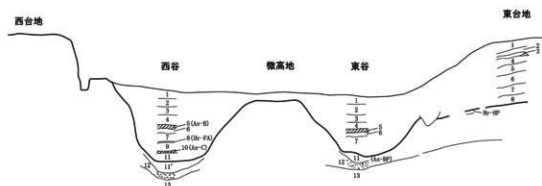
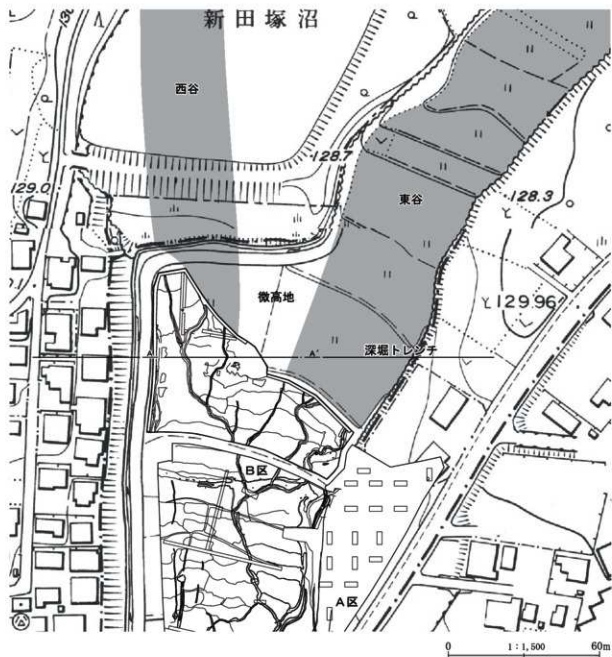
5 整理作業の方法

萩窪南田遺跡の調査成果・出土遺物の整理作業および報告書編集作業は平成19年1月1日から3月31日の間実施した。

道精図面は修正・補足の後、素図を作成、これを基礎にデジタルデータを作成、報告書掲載用の図版を作図した。

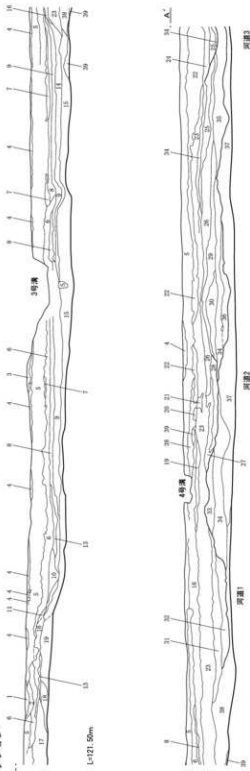
出土遺物は、出土地点ごとに接合作業を行った後、報告書に掲載する遺物を選択した。実測はその全てを手実測したが一部、器械実測や写真実測で素図を作成した物もある。器形の復元が困難な資料は断面のみ実測を行い、これに指本を貼付した。石器類は石器・剥片・礫に分類、全てについて石材同定を行った。石器は64点について実測図を作成、報告書に掲載した。

掲載資料はプロローニーフィルムを用いて適宜の倍



第69図 B1区東西方向地形概念図

B1区深堀セクション



B1区深堀セクション

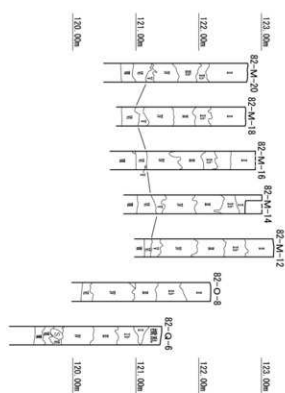
- 1 基本土層1 粘質土とする粗砂 ラミナ状、じまわり強い。
- 2 基本土層2 粘質土とする粗砂 ラミナ状、じまわり強い。
- 3 基本土層3 粘質土とする粗砂 ラミナ状、じまわり強い。
- 4 基本土層4 粘質土とする粗砂 ラミナ状、じまわり強い。
- 5 基本土層5 粘質土とする粗砂 ラミナ状、じまわり強い。
- 6 基本土層6 粘質土とする粗砂 ラミナ状、じまわり強い。
- 7 基本土層7 下位にはAs-Cが少なく、4号溝から東側はAs-Cを多く混入。3mの厚さから東側は直径約3~5mmのAs-Cが混入し、37m5号溝は直径1cm前後の暗褐色の砂粒が多い。有機物の混入で黒さを増し、やや軟質。
- 8 基本土層8 粘質土とする粗砂 ラミナ状、じまわり強い。
- 9 基本土層9 粘質土とする粗砂 ラミナ状、じまわり強い。
- 10 褐色細砂 厚さ1~2cmの薄い褐色土を核心で1~3cmの厚さでラミナ状に互層を成す。8層より新しい層か一時のなげ。
- 11 記載不明
- 12 記載不明
- 13 基本土層10 粘質土とする粗砂 ラミナ状、じまわり強い。
- 14 基本土層11 粘質土とする粗砂 ラミナ状、じまわり強い。
- 15 灰質1~2mmの砂粒層
- 16 オリーブ黒色~黒色粘質土。粘性強い、粘着面状強い。軟分位置。基本土層とは考えられる小層混入。
- 17 基本土層11 粘質土とする粗砂 ラミナ状、じまわり強い。
- 18 基本土層12 粘質土とする粗砂 ラミナ状、じまわり強い。
- 19 灰オリーブ色土。シルト質。

- 20 記載不明
- 21 記載不明
- 22 褐色細砂 厚さ1~2cmの薄い褐色土を核心で1~3cmの厚さでラミナ状に互層を成す。8層より新しい層か一時のなげ。
- 23 褐色細砂 厚さ1~2cmの薄い褐色土を核心で1~3cmの厚さでラミナ状に互層を成す。8層より新しい層か一時のなげ。
- 24 22層と灰オリーブ色シルト質土のラミナ状互層
- 25 河床3 24層に影写するが空層の混入が多い。
- 26 褐色細砂 厚さ1~2cmの薄い褐色土を核心で1~3cmの厚さでラミナ状に互層を成す。8層より新しい層か一時のなげ。
- 27 記載不明
- 28 記載不明
- 29 記載不明
- 30 灰オリーブ色シルト質土
- 31 河床1 灰褐色粘質土。黄褐色細砂が球状に混入。
- 32 河床2 灰褐色粘質土。黄褐色細砂が球状に混入。
- 33 灰オリーブ色粘質土。軟質。
- 34 灰オリーブ色粘質土。軟質。
- 35 河床3 24層に影写するが空層の混入が多い。
- 36 オリーブ黒色~灰オリーブ色砂 厚さ1~3cmの塊状。
- 37 砂層 非常に強い。黒褐色が一面に広がる所と人指太以上の可塑性が集中するところがある。砂層層と砂層との間に堆物の基らしいものが確認出来る層にある。
- 38 記載不明
- 39 直径1cmの黄褐色軟の集中部所。



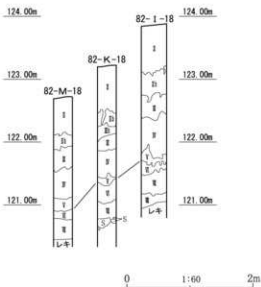
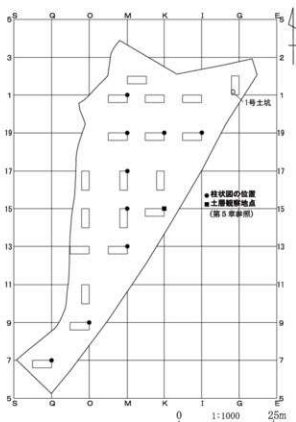
第70図 B1区東西方向土層断面

第3章 获窪南田遺跡の調査



旧石器基本土層

- I 表土
- II 褐色白含層 上部 黒褐色砂質土。下部 黒褐色砂質土に褐色砂質土が鹿子状に入る。上部よりしまった砂質土。
- III As-IV層 黄褐色灰層に明黄褐色～灰白色の軽石のユニット。
- III As-0k-1層 明褐色のしまった砂質土に直径1mmの青灰色軽石・直径8mmの明黄褐色軽石が散見する。
- III b As-0k-1層 褐色の少し粘性のある土質（軟質）。As-0k-1層に見られる軽石粒が見られない。
- IV As-I層 褐色砂質土に黒褐色や褐色や黄褐色の軽石のユニット。露出土。
- V As-IV層 明黄褐色の少し粘った土質。
- VI 暗色帯上面 だいぶ黄褐色粘質土に所々、ATが入る。
- VII 暗色帯下面 暗褐色のしっかりした土層。
- VIII 褐色砂質土 青灰色又は褐灰色のシルト質の土層が入る場合もある。
- IX 礫層



第71図 获窪南田遺跡における旧石器試掘坑の位置と土層地積状況

率で写真撮影を行い、その大半を写真図版として報告書に掲載した。

掲載を断念した土器・石器は出土遺構、地点ごとに種別・器種を分類し、計数後収納した。

第2節 遺跡の基本土層

第1章第2節で記したよう調査区のA区は洪積台地上にある。B区は沖積地にあたり、遺跡地の北側で二つの沖積地が合流している。第68図に基本土層

を示した。

A区台地上では表土の下位に2層間層を挟み浅間C軽石を混土する黒褐色砂質土が堆積しており、この面中で・近世以降の諸遺構を検出した。さらにこの層の下位に堆積する黒褐色砂質土はいわゆる淡色黒ボク土で、縄文土器・石器を包含していた。

第71図の柱状図はA区の旧石器試験時に得られた土層の堆積状況を記録した模式図である。土層番号に付したローマ数字の番号は亀泉西久保II遺跡の番号と共通する。

B区沖積地では表土下約0.6~0.7mで浅間B軽石を混土する黒褐色砂質土の堆積が見られた。B1区ではここを調査の第1面とし中・近世の遺構検出を行った。

この土層の下位には調査区内の広範囲にわたり浅間B軽石(As-B)の堆積が認められた。この軽石・火山灰層を鍵層に水田面の検出を行ったが第98図の土層断面にも示したよう、軽石層の遺存状態は一律ではなく、西側台地寄りでは中世面で隠れ残ったまま残存していた。

浅間B軽石層の下位には部分的に、榛名二ツ岳火山灰(Hr-FA)や浅間C軽石(As-C)の1次堆積層が見られたが、水田面など遺構の検出には至らなかった。

第3節 検出した遺構と遺物

1 調査の概要

各調査区で検出した遺構については以下のとおりである。個々の検出地点については第72図にその概要を提示した。

A区では台地上から縄文時代の土坑1基他に奈良・平安時代の道2条、中世以降の道5条、土坑2基、焼土跡1基を検出した。また、広範囲にわたり縄文土器および同時期の石器が多数出土した。さらに旧石器時代の遺物の確認のためローマ層中の試掘調査を実施した。その結果、A区洪積台地上からは旧石器時代の遺物は検出されなかった。

B区では沖積地内で浅間B軽石に埋没した水田面

1面の広がりを確認した。同時に畦畔や置石の検出、断ち割りを実施した。また、浅間B軽石降下以前の溝を含めた平安時代の溝を13条検出した。

B区からはこの他に中世以降と考えられる水田1面、溝6条を検出した。

今回の調査で得ることのできた資料は、60×37×15cmの遺物収納箱に5箱である。本文中に掲載した資料の内訳と数量は以下のとおりである。縄文土器321点、縄文時代の石器64点、古墳時代の土師器3点、須恵器1点、奈良・平安時代の土師器12点、須恵器36点、灰釉陶器3点、円板1点、中・近世以降の土器類25点、金属器類(銭貨)4点である。

以上の他、資料化の困難であったものの内訳は、縄文土器1695点、縄文時代の石器・剥片・礫622点、古墳時代から平安時代の土師器442点、須恵器69点、中・近世以降の土器類10点、瓦1点、金属器類であった。

2 縄文時代の遺構と遺物

(1) 概要

A区ローマ台地上の広範囲から縄文土器・石器の出土が認められたが、同時期の遺構としては主要地方法道前橋・大胡・桐生線際、92G-1グリッドから縄文時代前期の土坑1基が検出されたのみであった。

遺物の分布状況から台地奥部をはじめとした調査区域外に集落あるいはそれに付随する諸遺構が展開していたものと考えられる。

また、B区の各調査区からも遺構に伴わない形で縄文土器・石器が多数出土した。

(2) 土坑

1号土坑(第73図、PL27・38)

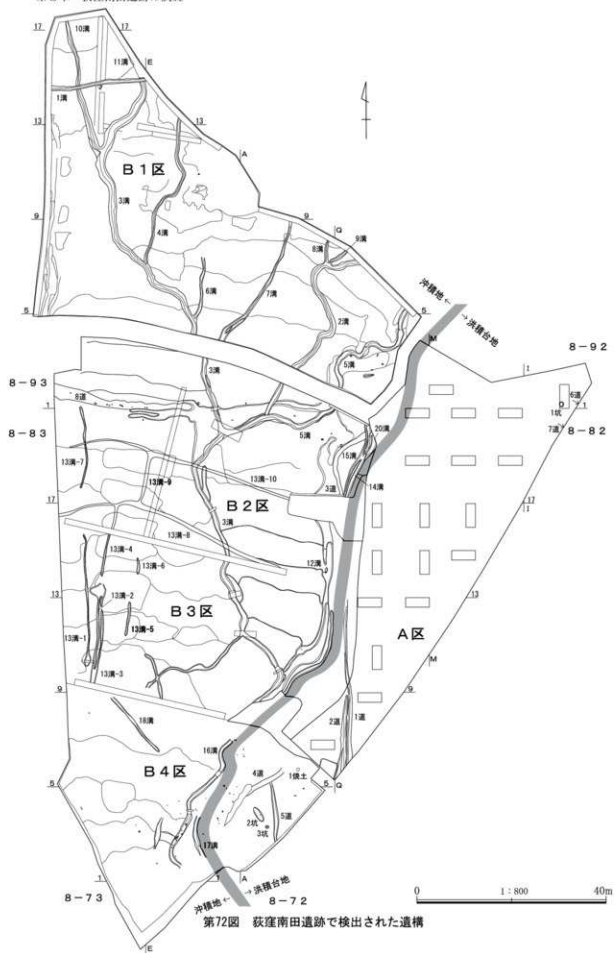
位置 92G-1G

形状 A区台地縁辺から20m程東方の傾斜面上に位置している。平面形は円形である。断面は、壁面が垂直に近い立ち上がりである。底面はほぼ平坦であった。規模は長径1.08m、短径0.88m、深さ0.35mを測った。

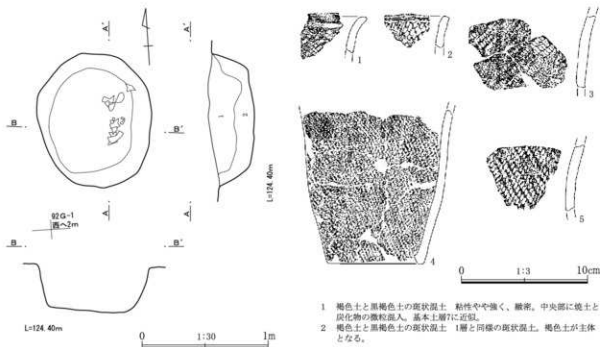
方位 N-4°-E

埋没土 褐色土と黒色土が環状に混土していた。上

第3章 荻窪南田遺跡の調査



第72図 荻窪南田遺跡で検出された遺構



第73図 1号土坑と出土遺物

下2層に分層された。

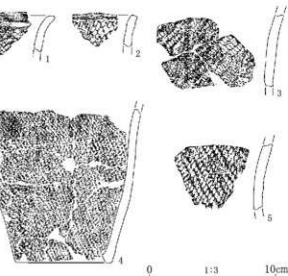
遺物 埋設土中から深鉢(4)をはじめとした土器、剥片が出土した。

1・2は深鉢口縁部の破片である。1は外反気味に立ち上がる。単節L R縄文を横位に施文する。2は外反の度合いが弱い。単節R L縄文を横位に施文する。5の胴部破片と同一と考えられる。3は胴部破片で単節L R縄文が横位に施文される。4は小型の深鉢の胴部である。口縁部、底部は欠損する。形状は口縁部に向かって緩やかに立ち上がるものである。残存高は12.0cm、脚部最大径は12.0cmである。胴部一面に単節R L縄文を横位に施している。胎土中には白色軽石が混入している。焼成は良好で、色調は赤褐色である。

所見 出土した土器の特徴から縄文時代前期諸磯a式の所産と考えられる。

(3) 包含層の調査

第77～94図に掲載した縄文土器および同時期と考えられる石器は荻窪南田遺跡の調査に際し遺構外から出土した資料である。



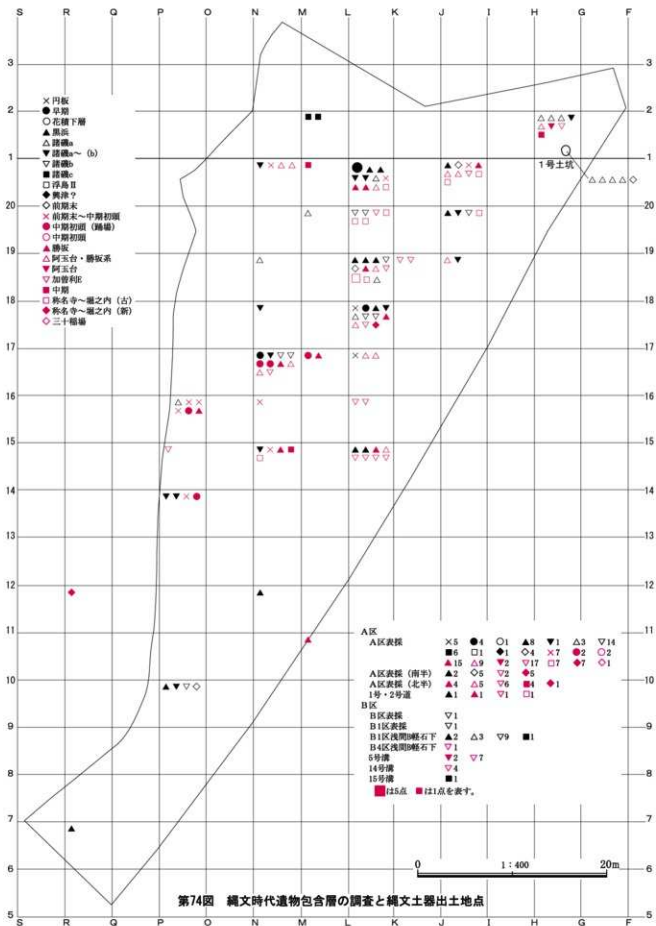
- 1 褐色土と黒褐色土の斑状混土。粘性やや強く、緻密。中央部に焼土と炭化物の微粒混入。基本土層7に近似。
- 2 褐色土と黒褐色土の斑状混土。1層と同様の斑状混土。褐色土が主体となる。

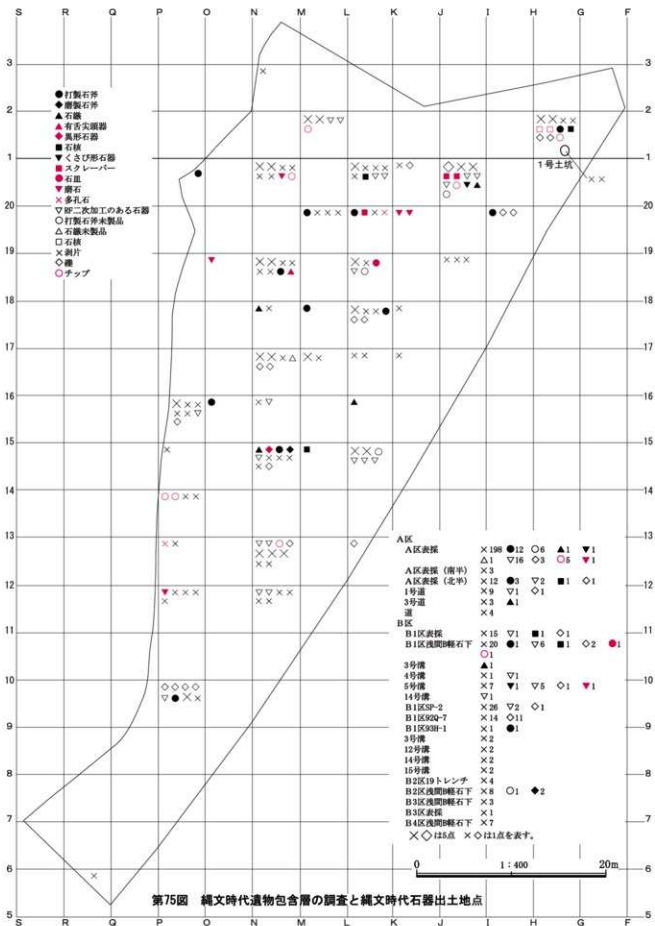
洪積台地上のA区では亀泉西久保Ⅱ遺跡と同様黒褐色砂質土いわゆる黒ボク土の堆積が認められた。このため、表土掘削後の遺構確認作業時に多数の縄文土器・石器が出土している。調査では第71図に示したよう旧石器試掘を兼ねた包含層試掘坑を設定、遺構の検出作業を実施した。その結果、92G-1グリッドで縄文前期諸磯a式の土坑1基を検出した。その他各試掘坑からの土器の出土状況の概要は第74図に、石器については第75図に示したとおりである。

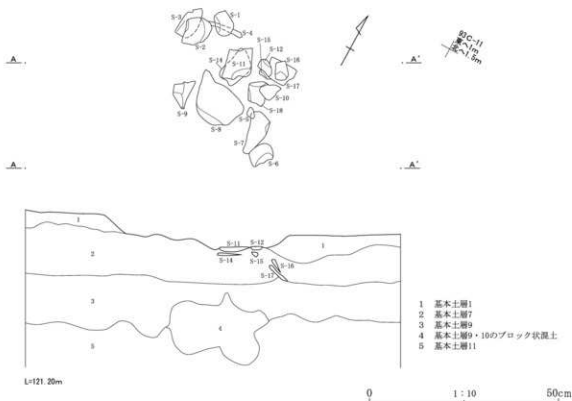
B区では浅間B軽石下の水田調査をはじめとした各遺構の精査の際に縄文土器・石器の出土を見ている。また、後述するようB1区93B-11グリッドから剥片が集中して出土している。出土地点の大別は縄文土器に関しては第8表に、石器に関しては第9表に掲載している。縄文土器は1695点の内1428点がA区から、267点がB区からの出土である。石器は622点の内463点がA区から、159点がB区からの出土である。

これらの資料については土器の型式分類、石器の器種分類、石材同定を行った。このうち本文中に実

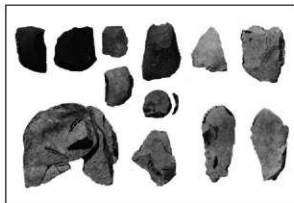
第3章 荻窪南田遺跡の調査



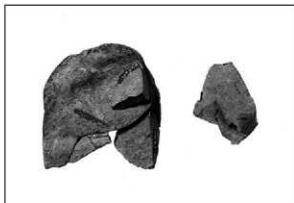




第76図 B1区93B-11グリッド剥片出土状況



図版1 B1区93B-11グリッド出土の剥片



図版2 剥片の接合状況

測図・拓影を掲載した資料は、縄文土器321点、石器64点である。

遺物の出土状況についてはA区を中心に第74図、第75図に示したとおりである。土器はA区北半を中心に前期の黒浜、諸磯の各期の土器が多数出土している。早期や後期の称名寺～堀之内式の土器にも多数のまとまりが見られる。B区からもA区とはほぼ同

期の土器が出土しているが、その多くは器面や割口が激しく摩耗していた。

A区出土の石器の分布は、土器に比べ南側からも出土数を増し、剥片・礫に混じって2次加工のある石器やくさび形石器の出土が見られる。B区ではB1区から打製石斧2点、石鐮・くさび形石器・磨石・石皿が各1点ずつ出土している。

第8表 荻窪南田遺跡縄文土器出土地点一覧

区	早期		前期花柄下層		黒浜		諸磯a		諸磯a～(b)		諸磯b		諸磯c		浮島II		
	掘載	非掘載	掘載	非掘載	掘載	非掘載	掘載	非掘載	掘載	非掘載	掘載	非掘載	掘載	非掘載	掘載	非掘載	
A区	1号土坑																
A区	表採																
A区	グリッド																
A区	縄文以外の遺構																
B区	表採																
B区	グリッド																
B区	縄文以外の遺構																
小計		12	0	1	0	28	83	19	31	16	210	32	48	10	4	1	0
区	興津?		前期末		前期～中期初葉		中期初葉(前期)		中期初葉		勝取		阿玉台地系		阿玉台		
	掘載	非掘載	掘載	非掘載	掘載	非掘載	掘載	非掘載	掘載	非掘載	掘載	非掘載	掘載	非掘載	掘載	非掘載	
A区	1号土坑																
A区	表採																
A区	グリッド																
A区	縄文以外の遺構																
B区	表採																
B区	グリッド																
B区	縄文以外の遺構																
小計		1	0	0	31	18	23	7	6	2	0	31	40	29	191	7	11
区	加賀利E		中期		中期末		地名ヶ～東之内(古)		地名ヶ～東之内(新)		三十郎地		不明		合計		
	掘載	非掘載	掘載	非掘載	掘載	非掘載	掘載	非掘載	掘載	非掘載	掘載	非掘載	掘載	非掘載	掘載	非掘載	
A区	1号土坑																
A区	表採																
A区	グリッド																
A区	縄文以外の遺構																
B区	表採																
B区	グリッド																
B区	縄文以外の遺構																
小計		52	220	7	14	14	0	20	61	13	24	1	0	0	698	321	1695

93B-11グリッドは、B1区では調査区北辺寄りの新田塚沼の方向に延びる沖積地上に位置する。第69図に示したよう下層の旧地形で見れば東西二つの谷地に挟まれた微高地上にあたる。この地点で浅間B軽石下水田の耕土となる基本土層4層と7層の境界から10cm程下位、7層上面において直径0.5cmの範囲から円形にまとまって剥片の20点以上が集中して検出された。調査時の所見では土坑状の掘り込みを持ち、その中に集積されたと考えられた。3種類以上の石材が認められ、うち1つは定型で横広の剥片が多いが同一の母岩からの剥離で接合関係にある資料が見られる。近接地での製作も想定される。

(4) 遺構外出土の土器

土製円盤 (第77図、PL38)

1～7は、土器の破片を素材として、その周縁部を研磨し、円盤状に整形したものである。3がA区82K-16グリッド、6がA区82K-17グリッドからの出土で他はA区表採である。1～4は一部

が欠損しているが直径1.9～2.9cmと小振りである。2には縄文が、3には単節R縄文と漆痕が見られる。5は直径4.5cmと大型である。外面に隆帯の一部が見られ、中期の土器を素材としている。6は直径3.2cm、ていねいな作りである。中期の土器が素材か。単節R縄文が見られる。7は直径3.2cmで、5とともに第2群7類の前期の土器を素材とする。

第1群 (第77図、PL38)

8～19をこの一群とする。早期糸痕文土器と考えられる。A区82K-17グリッドから6点が出土している。いずれも深鉢の胴部破片で19を除き小破片である。内外面に糸痕が見られる。9・10・12・15は単位の細かい糸痕が、それ以外は単位の粗い糸痕が施されている。胎土中にチャートや白色鉱物粒をはじめとした粗砂を多く含む。14は繊維の混入が顕著である。他も繊維が含まれると考えられる。焼成は良好であるが全体に軟質である。色調は橙色・褐色とそれに近似する色調である。

第2群1類 (第78回, PL38)

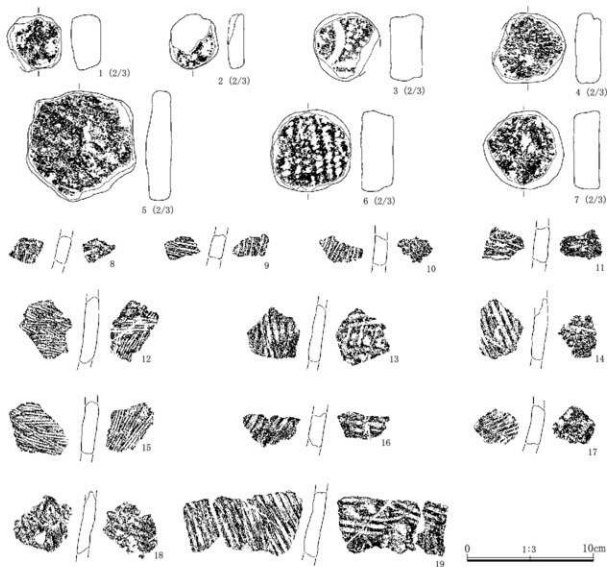
20はA区表採の深鉢口縁部破片である。前期花横下層式に属すると考えられる。口縁端部直下に微隆起線がめぐり、単軸絡状体第1類R・Lが施されている。胎土中に繊維が含まれている。焼成はやや軟質、色調は橙色である。

第2群2類 (第78回, PL38)

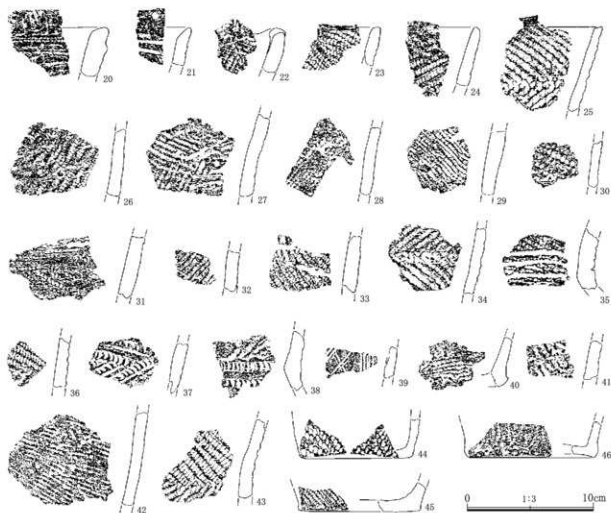
21~46をこの一群とする。前期黑浜式に属すると考えられる。深鉢の破片で、40がB区の他はA区からの出土である。21~25は口縁部破片、44~46は胴部から底部の破片、それ以外は胴部破片である。

21と35は横方向の平行沈線文が見られる。21の

縄文は単節R Lである。35も横位に単節R Lである。22~34・36・40~45は縄文が施されている。22・25・27・34・36・40・43は羽状線文が構成されている。22・36・43は単節のR LとL R縄文による。25は結節である。25・27・34は上帯にR Lを、下帯に無節Lを施文している。36・43は上帯にR Lを、下帯にL Rをそれぞれ横位に施文している。23・29~33・41・42・44~46は単節R L縄文を横位に、24・26は単節L R縄文横位施文している。37・38は平行爪形文が施されている。39は竹管による沈線文からなる文様が構成されている。これらの土器は胎土中に礫・粗粒とともに繊維が含まれている。



第77回 遺構外出土の縄文土器(1)



第78図 遺構外出土の縄文土器(2)

第2群3類 (第79図, PL.39)

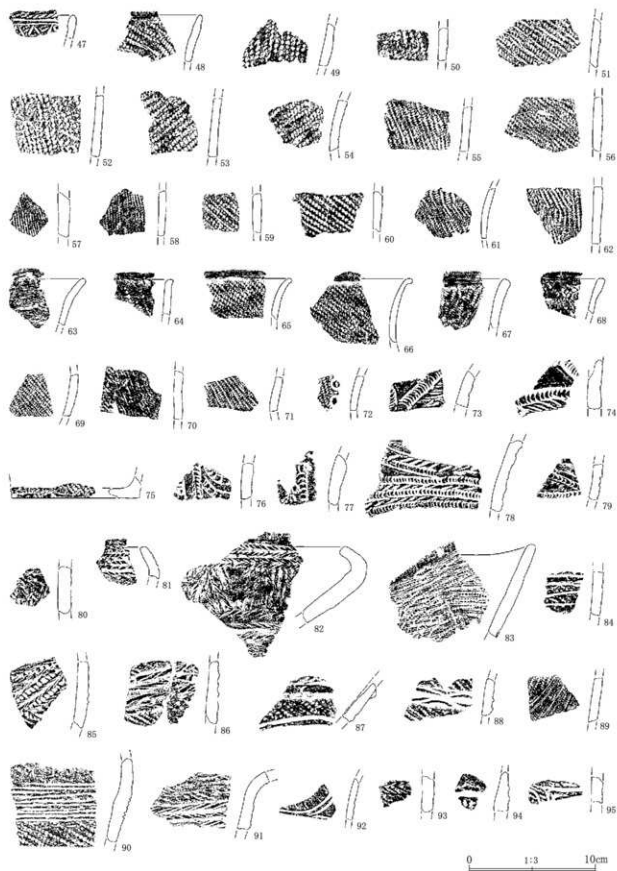
47~75をこの一群とする。前期諸磯a式に属するものと考え。47~62はb式の可能性もある。いずれも深鉢の破片である。67・73・74がB区出土で、それ以外はA区出土である。47・63・72~74を除き縄文を施している。53・54・67・68は単節LR縄文、61・64・68はRL縄文を、57は直前段反摺LLの縄文施文である。70はRを色く単軸絡条体第1類である。その他は単節RL縄文の横位施文である。47は口縁端部直下に平行沈線を巡らしこの下に鋸歯文を配する。地文は単節RL縄文の縦位施文である。72は横位の単節RL縄文に円形竹管文を縦位に重ねている。63は波状口縁で無文である。73・74は平行爪形文を施文している。胎土は白色鉱物・白色軽石などが見られるが粒径は細かく、織

維の混入はほとんど見られない。色調は橙色・褐色、これらに近似する色である。

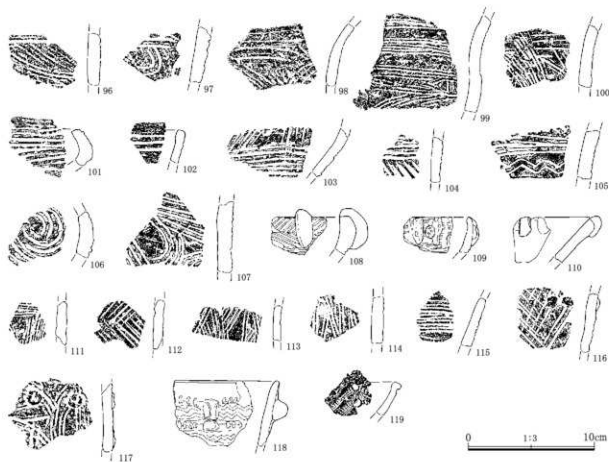
第2群4類 (第79・80図, PL.39・40)

76~107をこの一群とする。前期諸磯b式に属するものと考え。いずれも深鉢の破片で、76~81・84・86・89・92・95・100~107がA区出土、それ以外がB区出土である。

76~79は平行爪形文を施したものである。いずれも木葉文状の文様構成が見られる。78は地文に斜め方向の沈線が施されている。80~83・85~88・91・93・94は刻みを伴う浮線文が施されている。82は大きく内側に屈曲して立ち上がる口縁部、83は波高の高い波状口縁である。集合沈線状の粗雑な竹管文と浮線文が重なっている。87・88は単節のRL縄文が横位に施されている。84・89・90・92



第79図 遺構外出土の縄文土器(3)



第80図 遺構外出土の縄文土器(4)

・95～98は縄文を地文に平行沈線文が重なるものである。89は単節LR縄文、それ以外は単節RL縄文である。99～107は平行沈線文が施されている。胎土にはチャート・雲母とともに軽石の砕かれた砂粒と考えられる白色鉱物が目立つ。色調は橙色・褐色・にぶい褐色などである。

第2群5類(第80図、PL40)

108～117をこの一群とする。前期諸磯c式に属するものと考えられる。いずれも深鉢の破片である。110・115がB区、それ以外はA区の出土である。

108～110は口縁部破片で、108・109は集合沈線状の上に棒状浮文が貼付されている。110は無文で短い棒状浮文が付く。111～117は集合沈線による施文である。111は横方向、斜め縦方向の組み合わせが、112は矢羽あるいは菱形の文様構成が見られる。116は格子状の施文の上にボタン状浮文が付く。117にも同様の浮文が付いている。胎土は諸磯

b式のそれと類似するものである。

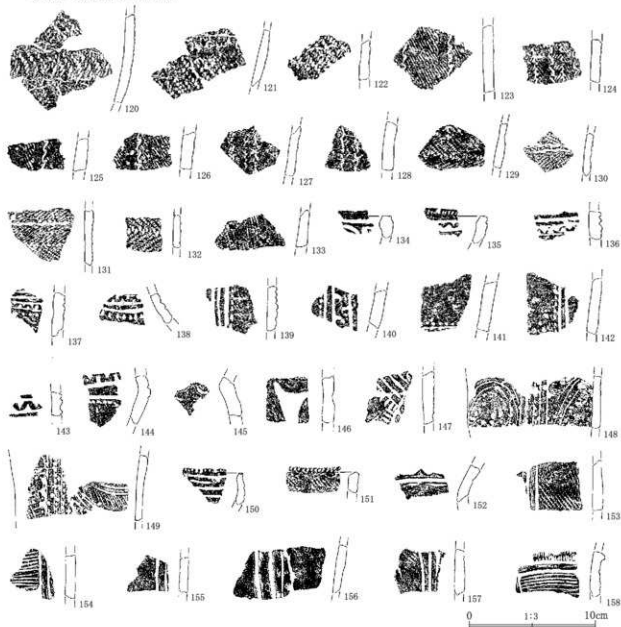
第2群6類(第80図、PL40)

118はA区表探の深鉢口縁部破片である。前期浮島式の段階と考えられる。段状に肥厚した口唇部下端と横位の隆帯には刻目を伴う。この隆帯の上下には山形の沈線文が施される。胎土中の砂粒の混入は諸磯式各期よりやや多い。焼成は良好、色調はにぶい橙色である。

119はA区表探の深鉢口縁部破片である。前期興津式の段階と考えられる。波高の高い波状口縁を呈していたと考えられる。口唇部に沿って平行沈線文による区画を描き、これに3本1単位の刺突文を連続して重ねている。色調はにぶい橙色である。

第2群7類(第81図、PL38・40)

120～133をこの一群とする。前期末に位置づけられよう。いずれも深鉢の破片で、120はA区1号土坑からの出土、121～133はA区からの出土である。



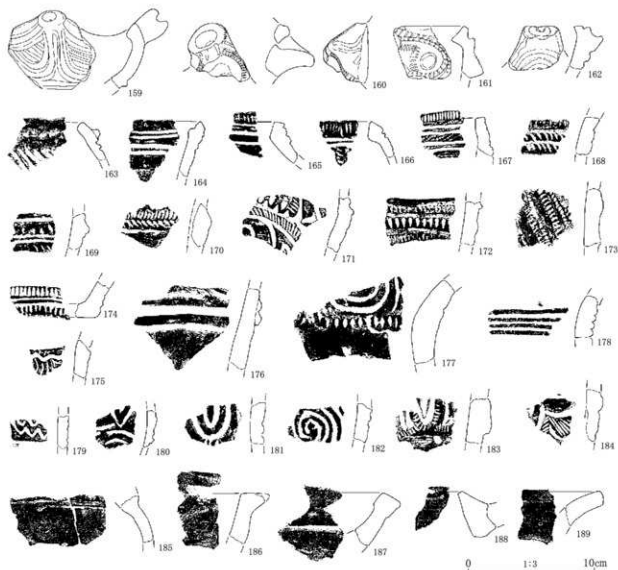
第81図 遺構外出土の縄文土器(5)

120～122は末端に他条を結縛したR L縄文の横位施文である。123～128は直前段反摺L Lの結束縄文を縦位に施文している。胎土、施文の原体が同一または類似している。胎土中に粗砂・礫大の石英・長石・チャートと雲母片が非常に多く含まれている。焼成は良好、色調は褐色である。129～132は横位のLRとRL縄文による羽状縄文が施されている。130と131は同一個体である。131は3段にわたっている。132は上帯にR L、下帯にL R縄文を施す。133はrを巻く単軸絡条体第1類を施文している。

第2群8類 (第81図、PL40)

134～149をこの一群とする。前期末から中期初頭に位置づけられる。いずれも深鉢の破片で、A区からの出土である。

134・135は口縁部の破片で端部直下に沈線による文様が見られる。135は刺突を重ねている。136～144・148・149は沈線文と刺突文の組み合わせによる文様構成である。136・143は135と同様、やや太い施文具による刺突が見られる。136は相互刺突による鋸歯状文が施されている。140・144は太細2種類の刺突文が施される。他は細い刺突文を



第82図 遺構外出土の縄文土器(6)

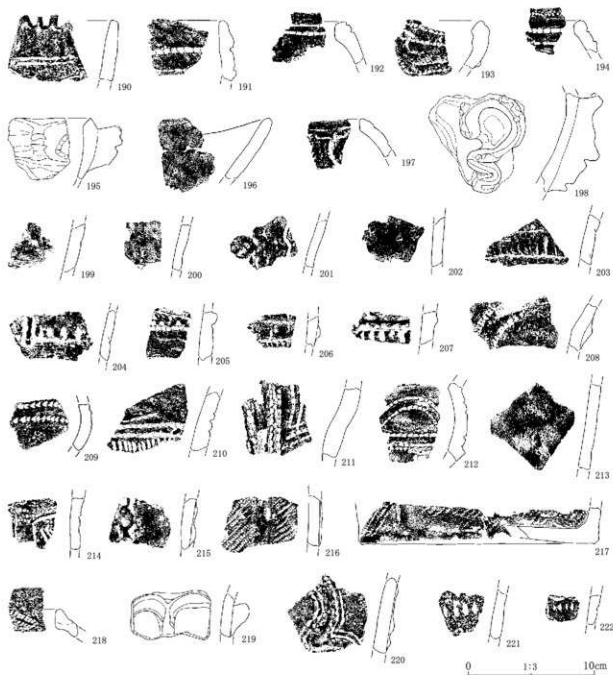
沈線に沿うよう連続して配している。148・149は胴部の直径が10.5cmほどに復元されるもので、弧状の沈線からなる文様構成である。器内は薄く、0.5cmほどである。色調は148がにぶい褐色、149がにぶい橙色である。145はコンパス状の文様が見られる。146は三角形の印刻文である。147は平行する沈線文が見られる。胎土には白色鉱物の混入が多く見られ、他に黒色の珪石あるいは角閃石と思われる鉱物粒が目立つ。

第3群1類 (第81図、PL41)

150～158をこの一群とする。中期初頭に位置づけられる。いずれも深鉢で、A区からの出土である。

150・151は口縁部の破片である。ともに口縁端

部に刻目を加えている。150は横方向の沈線文と刺突文の組み合わせが、151は単節のR.L縄文が見られる。152は横方向の沈線文の上位に一部、山形の沈線文が見られる。153～156は縦方向の沈線文が見られる。153の沈線は垂下する隆帯に沿っている。縄文は単節のR.L縄文である。154は沈線区画内を横方向の沈線で細分している。156も隆帯が垂下する。157は153と同様の施文である。158は154と同様の沈線区画文が見られ、この上位に横方向の刻目を伴う隆帯が巡っている。これらの土器は胎土中の砂粒にばらつきが少ない。焼成は良好、色調は褐色・明褐色である。



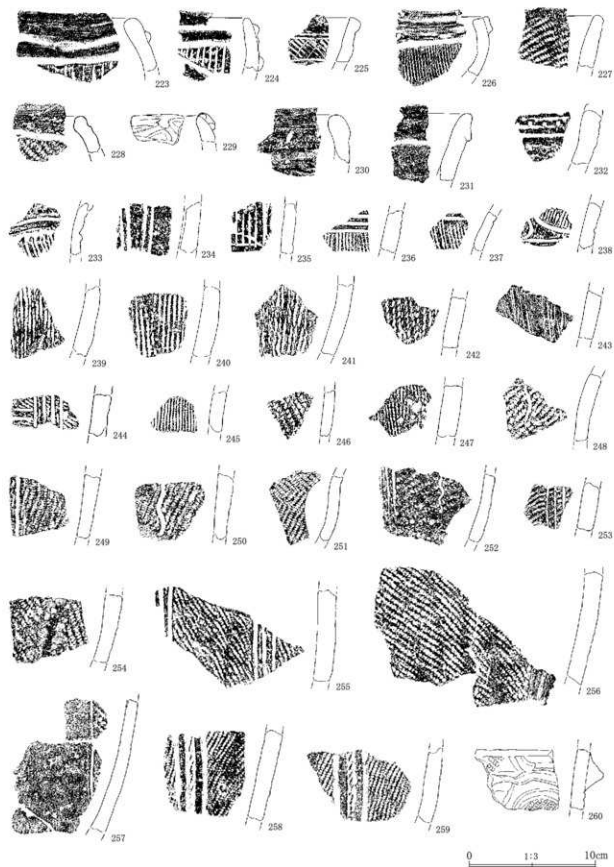
第83図 遺構外出土の縄文土器（7）

第3群2類（第82図、PL41）

159～189をこの一群とする。中期勝坂式に位置づけられる。いずれもA区からの出土である。185～189は浅鉢、その他は深鉢である。

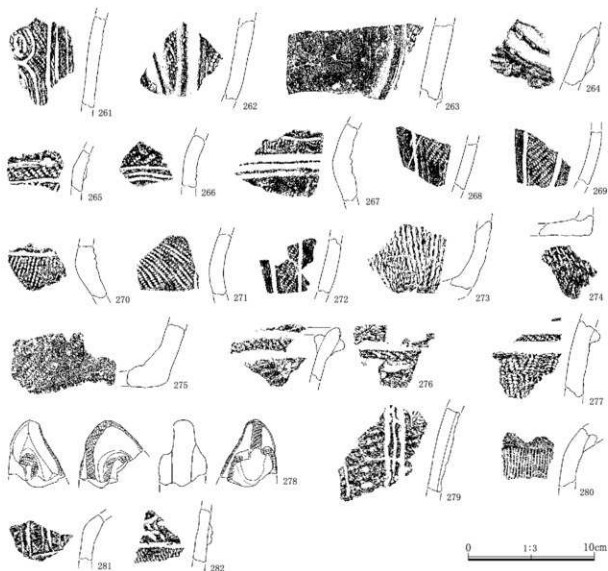
これらの土器には、隆帯とこれに沿うように巡る沈線文による文様構成が見られる。これに連続刻目文を伴うものが多い。159～167は口縁部の破片である。159は頂部に孔を付す山形の突起で、頂部か

ら垂下する隆帯により三日月形の文様帯が区画される。160・161は連続刻目文を伴う隆帯が渦巻状の環状突起である。162は高い山形の突起である。頂部に渦巻文が付されている。164～167は横位の沈線文が見られる。164は口縁直下に、166・167は口縁端部に刻目を伴う。168～171は隆帯に刻目を伴うものである。170は矢羽状に施す。184は171に胎土が類似している。172・183は隆帯に刻



0 1:3 10cm

第84図 遺構外出土の縄文土器(8)



第85図 遺構外出土の縄文土器(9)

目を重ねている。173は隆帯の両脇に沿うように刻目が施されている。174は底部破片である。横方向の2本の沈線の上下両端に刻目が並ぶ。175・179は鋸歯状のモチーフが見られる。176は2条の隆帯が平行する。178は5条の沈線が横方向に平行する。177・181・182は沈線による曲線文が見られる。

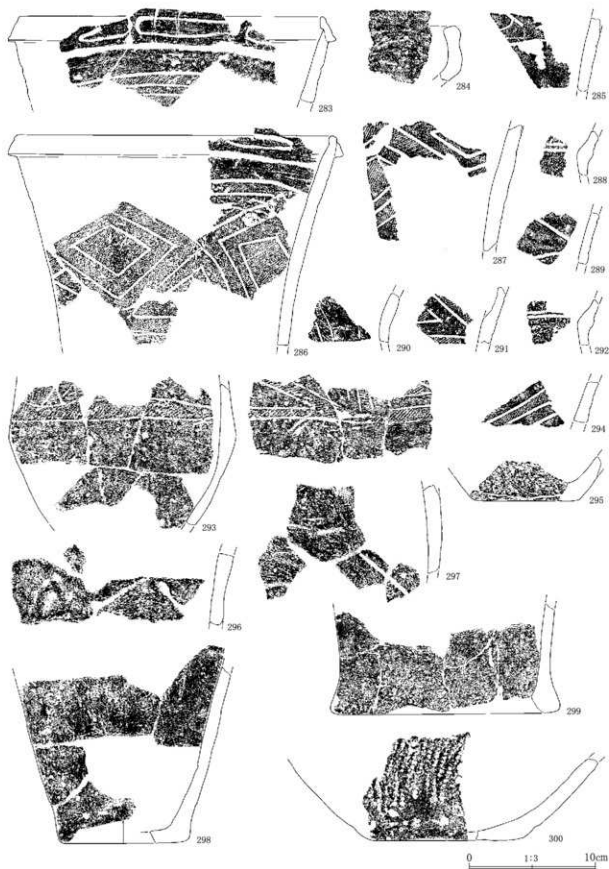
185～189は浅鉢でいずれも無文である。残存部分の形状から器形にバラエティーがあったことがうかがわれる。いずれも器面をよく研磨している。

この一群の土器は胎土中に粗砂を多量に混入している。色調は褐色や橙色が多く、これに赤色味や黄色味を増したものが見られる。

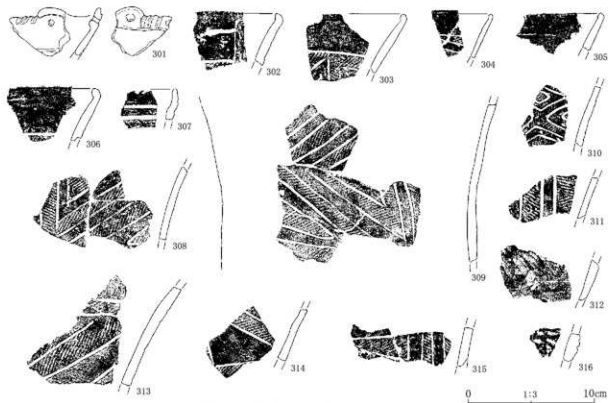
第3群3類 (第83図、PL41・42)

190～222をこの一群とする。中期勝飯式および阿玉台式の系譜を引くものと考えられる。いずれも深鉢で、219と220がB区から、その他はA区からの出土である。

これらの土器には隆帯による文様構成、竹管による結節沈線文、押し引き文(角挿文)、爪形文が多用されている。203・204は粘土紐の輪痕をそのまま残している。190～198は口縁部破片である。190は扇状の把手の破片である。端部に深い刻目が施される。191～194は結節沈線文が見られる。195は刻目を伴う突起が突出する。196は波高の高い口



第86図 遺構外出土の縄文土器 (10)



第87図 遺構外出土の縄文土器 (11)

緑帯で無文部分である。197は曲線を連続刺突文で描いている。198は渦巻状から蛇行して下方に向かう粘土帯による加飾が見られる。205・206・208・210～212・220は隆帯の脇を結節沈線で飾るものである。210は刻目文も見られる。207・210・221・222は爪形文に近いものである。209と218は施文具の角度が斜め方向に入っている。210は懸垂する隆帯にボタン状浮文が貼付されている。214は沈線文にR L縄文が斜位に施されている。216・217は同一個体と考えられる。R Lの単節縄文を地文に縦方向の懸垂文が施されている。217の底径は直径18.9cmである。胎土中にはいづれも金雲母をはじめ石英、長石など多量の粗砂が含まれている。色調は褐色のものが多い。

第3群4類 (第84・85図、PL42・43)

223～275をこの一群とする。中期加曾利E式の段階である。231が浅鉢である。227～229・233・234・240・242・244・246・261・265・271はB区出土、その他はA区出土である。

223～232は口縁部破片である。隆帯で区画した

内側に223～225のように縦方向、格子目状の沈線を施文するもの、燃糸文を充填するものが見られる。226はLの燃糸文を、227は単節R L縄文を縦位に施文する。228は沈線区画内に単節R L縄文を施す。229は隆帯による文様構成が見られる。232は沈線に刺突を重ねている。233以下は胴部の破片である。隆帯、沈線による文様構成・区画が見られる。234は隆帯の両脇に2条ずつ沈線が下がる。253・255は3条の沈線が懸垂する。260は隆帯が弧状に巡っている。261は沈線で蕨手状文が描かれる。243は条線が施される。地文は236・238～242・245・247・273が単軸絡状体第1類で、236・238・241がRまたはr、他はLまたはlである。縄文は249が前々段反摺R R Lを、253がO段3条R Lを、256が前々段3条R Lを施している。他は単節のL RあるいはR Lを縦位、横位に施文している。274は底部外面に網代痕が見られる。231は浅鉢の口縁部破片である。先端がわずかに折り返っている。

第3群5類 (第85図、PL43)

276～282をこの一群とする。中期に位置づけら

れる。いずれも深鉢でA区からの出土である。

276は口縁部直下の内外面に降帯が貼付されたもので、単節L R縄文が施文されている。277も外面に降帯が巡り、単節R L縄文が施文される。278は中位に孔の開く三角錘状の把手・突起である。単節R Lが施文されている。279は懸垂する降帯・沈線により区画されている。280・282はLを色く単軸絡条体を施文する。281は竹管文を施文する。色調は褐色とこれに近似する色調である。

第4群1類 (第86図、PL44)

283～300をこの一群とする。後期称名寺式から堀之内式の古相と考えられる。いずれもA区からの出土である。

283・286は胴部がバケツ状を呈する。口縁部には小さな突起が付くと考えられ、内折する口唇部には沈線文が施される。286の胴部には菱形と三角形からなる区画文が描かれ、単節L R縄文が充填されている。293は胴部に丸みを有している。口縁部が大きく外反し鉢状を呈していた可能性がある。残存上位に幾何学文が見られる。縄文は単節L R縄文である。288と292は屈曲部に横方向の沈線と刻目文を伴う降帯が見られる。284は無文の口縁部破片で、屈曲し内彎気味に立ち上がる。295・298～300は胴部下位から底部の破片である。300は単節R L縄文が縦位に施文されている。他は無文である。

胎土中に粗砂とともに白色鉱物や輝石あるいは角閃石と考えられる黒色鉱物粒を多く含む。色調は浅黄色・にぶい黄橙色などである。

第4群2類 (第87図、PL44)

301～315をこの一群とする。後期称名寺式から堀之内式の新相と考えられる。いずれもA区からの出土である。

301は口縁部の破片である。先端部には穿孔を伴う山形の小突起が見られ、その脇には刻目文が付く。胴部との間は内外面とも横方向の沈線で画している。302～307も口縁部破片である。端部は短く、内折するが、口唇部の文様帯はなくなる。307は端部に刻目文を付す。308～311・313～315の胴部には

309の三角形に見られるような幾何学文が施される。区画内の縄文は単節のL Rである。312は外面に粗雑なナデが施されており、粗製土器の範疇に入るものであろうか。胎土、色調は1類と同様である。

第4群3類 (第87図、PL44)

316はA区表採の深鉢胴部破片である。後期三十種場式と考えられる。刺突文が施されている。焼成はやや軟質、色調はにぶい黄橙色である。

(5) 遺構外出土の石器

A区縄文包含層をはじめA区・B区の調査区から出土した石器および石器類は合計622点であった。本文掲載数は64点である。その内訳は以下のとおりである。()内は本文掲載数である。有舌尖頭器1(1)点、石鏃9(9)点、石鏃未製品3(0)点、打製石斧32(26)点、打製石斧未製品11(3)点、スクレイパー3(3)点、くさび形石器3(3)点、異形石器1(1)点、石核5(4)点、磨製石斧2(2)点、磨石・鍛石7(7)点、台石・石皿2(2)点、多孔石2(2)点、軽石製品1(1)点、2次加工のある剥片58(0)点、剥片501(0)点、礫33(0)点、チップ11(0)点である。

上記の石器について、出土状態と器種の関係は第9表に、器種と石材の組み合わせについては第10表のとおりである。

掲載資料の法量、石材については第11表に一覧とした。以下、個別にその観察結果を記しておく。

有舌尖頭器 (第88図、PL45)

317は有舌尖頭器である。上位は欠損している。表裏両面からの押圧剥離が施され横断面は菱形を呈する。基部は左右に突出し、有茎錐的な形状を呈している。

石鏃 (第88図、PL45)

318～324は石鏃である。いずれも表裏両面からの押圧剥離が施されている。318・319は有茎鏃である。318は先端、茎部先端ともに欠損しているが、全長の長い形状が想定される。茎部も大きい。319も、茎部先端が欠損する。茎部は茎部の両脇が切り込まれている。320～324は無茎鏃である。いずれ

第9表 荻窪南田遺跡縄文時代石器出土地点一覧

区		打製石斧		磨製石斧		石鏃		有角尖頭器		翼形石器		石核	
		掲載	非掲載	掲載	非掲載	掲載	非掲載	掲載	非掲載	掲載	非掲載	掲載	非掲載
A区	1号土坑												
A区	表採	13	3			2						1	
A区	グリッド	10	3	1		5		1		1		2	
A区	縄文以外の遺構	1				1							
B区	表採			1								1	1
B区	グリッド	2											
B区	縄文以外の遺構					1							
	小計	26	6	2	0	9	0	1	0	1	0	4	1
区		くさび形石器		スクレイパー		台石・石皿・磨石		磨石・磨石		多孔石		二次加工のある薄片	
		掲載	非掲載	掲載	非掲載	掲載	非掲載	掲載	非掲載	掲載	非掲載	掲載	非掲載
A区	1号土坑									1			
A区	表採	1						1					17
A区	グリッド	1		3		2		4		1			23
A区	縄文以外の遺構												
B区	表採					1		1					8
B区	グリッド												2
B区	縄文以外の遺構	1						1					8
	小計	3	0	3	0	3	0	7	0	2	0	0	58
区		打製石斧未製品		石鏃未製品		剥片		礫		チップ		合計	
		掲載	非掲載	掲載	非掲載	掲載	非掲載	掲載	非掲載	掲載	非掲載	掲載	非掲載
A区	1号土坑							9				1	9
A区	表採		6		2			236		4		4	18
A区	グリッド	2	1		1			138		8		6	33
A区	縄文以外の遺構		1										2
B区	表採	1						56		4		1	5
B区	グリッド							37		1			2
B区	縄文以外の遺構							25		16			3
	小計	3	8	0	3	0	0	501	0	33	0	11	64

も形状が異なるものである。320は両側縁部が鋸歯状を呈している。基底部も挟り込まれている。321の片面は原礫面である。両側縁、基底部寄りにのみ剥離が施されている。基底部にはU字状の挟り込みが見られる。322は小型品である。基底部は深くU字状に挟り込まれている。323はハート形を呈し、基底部の挟り込みが著しい形状である。324の両側縁部は弱く反り返っている。基底部の挟り込みは弱い。**打製石斧**（第88～90図、PL45～47）

325～350は打製石斧である。基本的に原礫からの素材剥片を用いている。その加工にあたっては、主剥離面が長軸に対し、横方向からの打面により剥離を施した後、両側縁部をはじめとした周縁部に垂直打撃技法による細部調整が加えられている。

325～327は撓形を呈している。325は表面に原礫面が大きく残存する。刃部は欠損するが側縁部に若干の摩耗が見られる。326は風化が進行している。327は表・裏面に横方向からの剥離が見られる。両

者とも刃部の形状に片寄りが見られるが、これは刃部欠損後再調整を施した結果である。327は刃部裏面側による使用による摩耗痕が見られる。328は短冊形の刃部寄り破片である。刃部直刃で、使用による摩耗痕はほとんど見られない。329は楕形の刃部寄り破片である。刃部は刃刃で表面に著しい摩耗痕が見られる。330は破片で短冊形であったか。端部は尖頭状を呈するか欠損後再調整を施したか。331・333～336も楕形を呈する石斧である。331は原礫から長軸方向に向かう打面により素材剥片を得ている。刃部は再調整を施す。333は刃部が欠損している。欠損後全面的に摩耗を受けている。334の刃部は刃刃であったと考えられるが一部欠損している。刃部を中心に広い範囲に使用による摩耗痕が見られる。335は原礫面から長軸方向に叩き、得られた素材剥片が使用されている。刃部は裏面側から細かな剥離が加えられている。336は基部寄りの2分の1が残存する。側縁部に垂直打撃技法による調整が明

第10表 荻窪南田遺跡出土の縄文時代石器の器種と石材

石材	有舌尖頭器	石鏃	石鏃未製品	打製石鏃?	打製石鏃未製品	スクレイパー	くまひ形石器	異形石器	石核	磨製石鏃	磨石・磨石	磨石製品	石皿	多孔石	R F	剥片	礫	礫片	チップ	総計	
チャート		3					1		1							9				14	
ホルンフェルス					2											3				5	
雲母石英変岩										1							1			2	
輝緑岩																		1		1	
玉髄																	1			1	
埴貫頁岩																1				1	
輝石												1								1	
黒色安山岩		1														6	22			29	
黒色頁岩	1	3	1	19	1	7	3	1		3					50	440	1	10	3	543	
黒曜石			1				2	1	2						3	2			6	17	
砂岩																2				2	
砂質頁岩																1				1	
細粒輝石安山岩			3							2						11	5	7		28	
石英閃緑岩											1								1	2	
閃緑岩																2				2	
粗粒安山岩																2				2	
粗粒輝石安山岩				3	2					3		1	2			6	8	10	1	36	
磨製チャート																	1			1	
変玄武岩			1							2						2				5	
変質安山岩												1				3	1	1	1	7	
変質玄武岩																7		3		10	
緑色片岩																1				1	
緑泥片岩																1				1	
総計	1	7	2	26	1	11	3	4	1	6	2	7	1	2	2	59	516	17	32	12	712

瞭に見られる。332は刃部幅が基部幅をわずかに上回る形状である。厚みを有し、横断面は楕円形状である。337は2分の1ほどの残存である。全面的に摩耗を受けている。338は基部寄り2分の1ほどの残存である。右側縁部に垂直打撃技法による調整痕が見られる。339は短冊形の基部寄り破片と考えられる。表面は横方向からの大きな剥離面が見られる。340は基部を欠損する。全体的に粗い仕上がりにある。刃部は偏刃であるが欠損後、再調整した可能性が高い。変形した部分にも使用による摩耗痕が見られる。341は2分の1ほどの残存である。側縁部には垂直打撃技法による剥離調整がいねいに加えられている。342は短冊形の刃部寄り破片である。刃部には細かい調整が加えられているかほとんど使用による摩耗は見られない。343は楕円形と分銅形の間形態をなしている。原礫からの分離素材に横方向から大きく剥離した後、周縁部に細かな調整を加えている。344～346は分銅形を呈する。344は一方

に原礫面を多く残す。刃部・側縁の挟り込み部分はやや摩耗している。345は一部欠損している。横方向に粗く剥離調整を施した後、刃部、挟り込み部には垂直打撃技法による細部調整を加えている。346も一部欠損している。側縁部の挟り込み部分、それに続く表・裏面は著しく摩耗している。特に挟り込み部分は垂直打撃技法の痕跡が消されている。347～349は楕円形であるが刃部の幅が広い形状である。横あるいは斜め方向から剥離を加え成形している。原礫面は見られない。周縁部の調整は粗雑である。摩耗痕は見られない。348は小型品である。側縁部・刃部に垂直打撃技法による剥離調整が施される。摩耗痕は見られない。349は横方向から打撃を加えて得た素材で片面の多くに原礫面を残す。周縁部にはわずかに調整を加えるのみである。350は刃部寄りの破片である。短冊形であったと考えられる。片面に原礫面を残す。両側縁部・刃部とも細かな調整が見られない。未製品の可能性も考えられる。

第3章 荻窪南田遺跡の調査

第11表 荻窪南田遺跡出土の縄文時代石器一覽

No	種別	出土位置	残存状態	全長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材
317	有舌尖頭器	AfK 82-M-18	表採 先端欠損	3.6	1.5	0.4	3	黒色頁岩
318	石鏃	AfK 82-K-15	下部欠損	2.1	1.7	0.4	1	黒色頁岩
319	石鏃	AfK 82-M-17	先端・基部とも一部欠損	2.2	1.4	0.3	1	黒色頁岩
320	石鏃	AfK 82-M-14	先端・基部とも一部欠損	3.4	1.7	0.4	1	チャート
321	石鏃	AfK 3号溝	先端欠損	2.6	1.7	0.4	3	黒色頁岩
322	石鏃	AfK 82-I-20	完形	2.2	1.2	0.3	1	チャート
323	石鏃	AfK 表採	完形	2.0	1.9	0.3	1	黒色安山岩
324	石鏃	B-1K 3号溝 As-B面	先端欠損	1.9	1.6	0.4	1	チャート
325	打製石斧	AfK 92-G-1	表採 刃部欠損	10.8	4.8	1.7	115	黒色頁岩
326	打製石斧	B-1K As-B面	基部一部欠損	11.2	6.4	1.4	100	黒色頁岩
327	打製石斧	B-1K 93-H-11	完形	13.3	5.1	1.6	121	黒色頁岩
328	打製石斧	AfK 表採	刃部欠損	5.9	6.4	1.3	55	黒色頁岩
329	打製石斧	AfK 表採	刃部欠損	5.6	5.3	1.4	54	黒色頁岩
330	打製石斧	AfK 82-K-17	基部欠損	5.7	3.5	0.9	32	粗粒輝石安山岩
331	打製石斧	AfK 82-L-19	完形	12.7	6.8	1.6	148	黒色頁岩
332	打製石斧	AfK 表採	刃部欠損	12.3	5.4	2.0	179	粗粒輝石安山岩
333	打製石斧	AfK 表採	刃部欠損	10.2	4.3	1.5	70	粗粒輝石安山岩
334	打製石斧	AfK 榎丸	刃部一部欠損	10.8	6.0	1.2	96	粗粒輝石安山岩
335	打製石斧	AfK 82-O-9	完形	9.1	4.8	1.0	50	黒色頁岩
336	打製石斧	AfK 表採	刃部欠損	7.4	4.4	2.3	83	黒色頁岩
337	打製石斧	AfK 北側表採	刃部欠損	8.4	5.0	2.0	105	黒色頁岩
338	打製石斧	AfK 82-I-18	刃部欠損	7.0	4.4	1.9	74	黒色頁岩
339	打製石斧	AfK 表採	刃部欠損	6.8	4.1	1.2	50	黒色頁岩
340	打製石斧	AfK 北側表採	刃部欠損	8.5	5.5	1.6	87	粗粒輝石安山岩
341	打製石斧	AfK 北側表採	刃部欠損	9.6	4.9	2.1	129	黒色頁岩
342	打製石斧	AfK 82-L-17	基部欠損	6.5	4.6	1.4	52	粗粒輝石安山岩
343	打製石斧	AfK 82-K-19	完形	11.2	8.2	2.3	220	黒色頁岩
344	打製石斧	AfK 82-M-18	完形	12.2	8.6	2.0	242	粗粒輝石安山岩
345	打製石斧	AfK 表採	輪部一部欠損	10.9	7.8	2.0	168	黒色頁岩
346	打製石斧	AfK 表採	輪部一部欠損	9.6	6.6	1.6	110	黒色頁岩
347	打製石斧	AfK 表採	完形	8.7	7.3	1.4	93	黒色頁岩
348	打製石斧	AfK 82-O-20	完形	7.5	5.2	1.3	51	黒色頁岩
349	打製石斧	AfK 表採	完形	8.6	5.0	1.1	55	黒色頁岩
350	打製石斧	AfK 82-N-15	刃部欠損	6.8	7.3	2.5	159	変玄武岩
351	打製石斧未製品	AfK 82-I-20		11.7	6.3	2.7	218	粗粒輝石安山岩
352	打製石斧未製品	B-2K As-B面		8.7	4.6	1.6	89	黒色頁岩
353	打製石斧未製品	AfK 82-K-14		4.9	3.6	0.9	22	黒色頁岩
354	スクレイパー	AfK 82-I-20	完形	10.5	4.5	1.5	88	黒色頁岩
355	スクレイパー	AfK 82-K-19	完形	10.3	4.5	1.2	58	黒色頁岩
356	スクレイパー	AfK 82-I-20	完形	5.2	4.7	0.9	27	黒色頁岩
357	くさび形石器	AfK 82-I-20	完形	2.6	2.5	1.4	8	黒曜石
358	くさび形石器	AfK 82-M-14	完形	4.0	5.6	1.2	33	黒色頁岩
359	くさび形石器	B-1K 5号溝	完形	2.2	2.0	0.7	4	黒曜石
360	くさび形石器	AfK 表採	完形	3.1	5.0	0.8	19	チャート
361	異形石器	AfK 82-M-14	完形	1.6	2.6	0.7	1	黒曜石
362	石核	AfK 92-G-1	表採	4.9	3.6	2.4	44	チャート
363	石核	AfK 北側		2.7	2.7	2.3	14	黒曜石
364	石核	AfK 82-L-14		10.0	12.8	5.6	858	黒色頁岩
365	石核	B-1K 表採 1面		1.9	1.9	1.8	6	黒曜石
366	石核	AfK 82-K-20		8.5	9.1	2.8	285	黒色頁岩
367	磨製石斧	AfK 82-M-14	一部残存	5.4	6.0	1.3	61	変玄武岩
368	磨製石斧	B-2K As-B面	刃部・基部とも一部欠損	8.9	4.2	1.6	110	変玄武岩
369	磨石?	B-2K As-B面	破片	10.1	2.7	1.5	69	変石英変岩
370	磨石	AfK 表採	残存2分の1	8.4	5.9	4.2	332	粗粒輝石安山岩
371	磨石	B-1K 5号溝	完形	6.3	6.2	5.5	266	粗粒輝石安山岩
372	磨石	AfK 82-M-20	完形	9.7	9.4	5.1	686	石英閃緑岩
373	磨石	AfK 82-N-18	完形	10.7	8.4	5.2	614	粗粒輝石安山岩
374	磨石	AfK 82-J-19	完形	15.7	7.4	4.1	796	粗粒輝石安山岩
375	磨石・石皿	AfK 82-I-19	完形	15.0	8.8	6.7	1136	粗粒輝石安山岩
376	台石?・石皿	AfK 82-O-11	完形	28.1	26.6	4.9	4718	変質安山岩
377	石皿	AfK 82-K-18	完形	17.1	15.9	4.5	1918	粗粒輝石安山岩
378	轉石製品	B-1K As-B面	完形	5.6	5.1	1.7	28	轉石
379	多孔石	AfK 82-O-12	完形	22.4	19.7	10.4	4346	粗粒輝石安山岩
380	多孔石	AfK 82-K-19	完形	23.0	16.2	13.1	5613	粗粒輝石安山岩

351～353は打製石斧の未製品である。351は粗く大きな剥離を施し、側縁部に細かな調整を加えた段階で作業を中断している。352は成品になれば短冊形を呈していたと考えられる。側縁部を調整する段階で破断している。全体が摩耗している。353は側縁部・刃部とも細かな剥離調整が見られる。

スクレイパー (第91図、PL47)

354～356はスクレイパーである。354・355は縦長剥片を用材としている。354は右側縁部縁部に粗雑な刃部加工が見られる。刃部角度は58度である。355は上端に原礫面をわずかに残す他は各側縁部に刃部加工を施している。356は右上部が一部欠損している。刃部にはわずかに摩耗痕が見られる。

くさび形石器 (第91図、PL47)

357～360はくさび形石器である。357は一部に原礫面を残す横長剥片を素材とする。上下両端に対向する剥離痕が見られる。358と359は黒曜石を用材としている。360は粗悪なチャートを用材としている。

翼形石器 (第91図、PL48)

361は翼形石器である。横長の本体の上端につまみ状の突起が付いている。突起部の周辺にはていねいな押圧剥離が施されている。欠損した石匙を再利用し石錐状に利用したものか。

石核 (第91・92図、PL48)

362～366は石核である。362は粗悪なチャートを用材とし、打面を移動させながら剥片を得ている。363・365は黒曜石を用材としている。363は縦方向に剥離をくり返し、小型の剥片を得ている。下端は打面再生剥離の為、打ち欠かされている。365はサイコロ状の石核で数回剥片を得ている。364は亀の甲状をした大型分割礫を素材としている。一部異なる方向も見られるもののほぼ一方向からの打撃がくり返されている。得られる剥離の大きさは長さ、幅8cm以下である。366も扁平な分割礫である。両側縁は打ち欠かされている。一方向から剥離がくり返され横長の剥片が得られている。

磨製石斧 (第92図、PL48)

367・368は磨製石斧である。367は破片で一方

に研磨面が見られる。他方は剥離面であるが弱く研磨されている。368は小型の部類と考えられ、横断面が扁平な楕円形を基本としているが、狭い側面も見られる。刃部は両面から作り出されており現状での角度は約38度を測る。刃部・基部とも欠損が著しい。

磨石・敲石 (第92・93図、PL48・49)

369は棒状礫の一部である。敲石の破片の可能性が考えられる。下位小口部分に敲打痕が見られる。370～375は磨石である。370は棒状の円礫である。長軸に対し直交する形で研磨がなされている。371はほぼ球形を呈する。面を作ることなくいずれの器面も研磨されている。372は扁平な円礫である。表・裏両面の広い範囲が研磨面となっている。側縁部の一部がわずかな敲打に利用されている。373は手の平大の扁平な円礫である。表・裏両面の広い範囲と側面の一部が研磨されている。敲打痕は見られない。374は棒状の円礫で、横断面はかまぼこ状を呈し、裏面は平坦である。表・裏面とも研磨を受け平滑になっている。375も棒状の円礫である。横断面は厚みを有する。側面を主体に、表・裏面とも研磨面が見られる。

台石・石皿 (第93図、PL49)

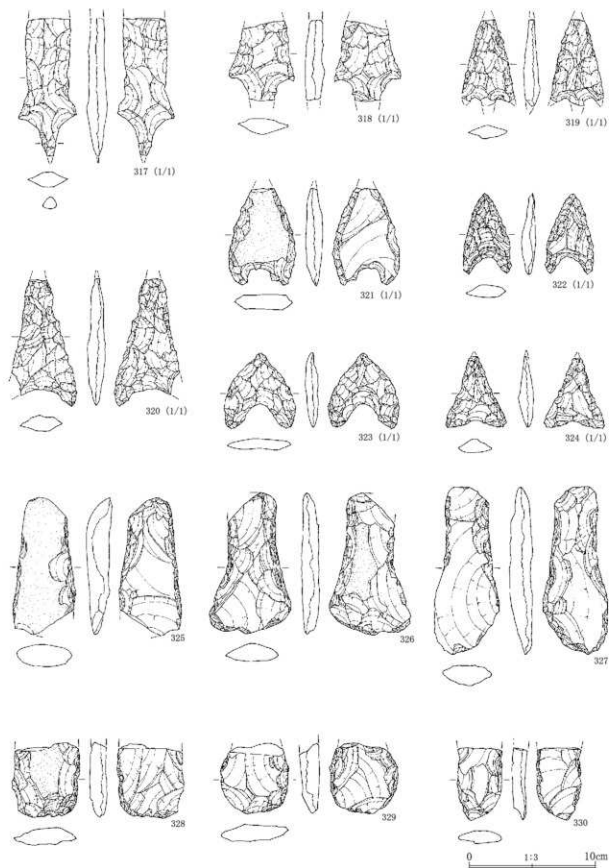
376は台石あるいは石皿として使用されたのであろうか。扁平な自然礫である。一方は旧事での剥離面で摩耗が進行している。敲打痕は見られない。377は平面円形の扁平な円礫である。表・裏面の広い範囲に研磨が施されている。広義の石皿となるものか。

軽石製品 (第93図、PL49)

378は板状の軽石製品である。側面・底面は平坦に仕上げられている。上面は鉢状に凹み、研磨を受けている。

多孔石 (第94図、PL49)

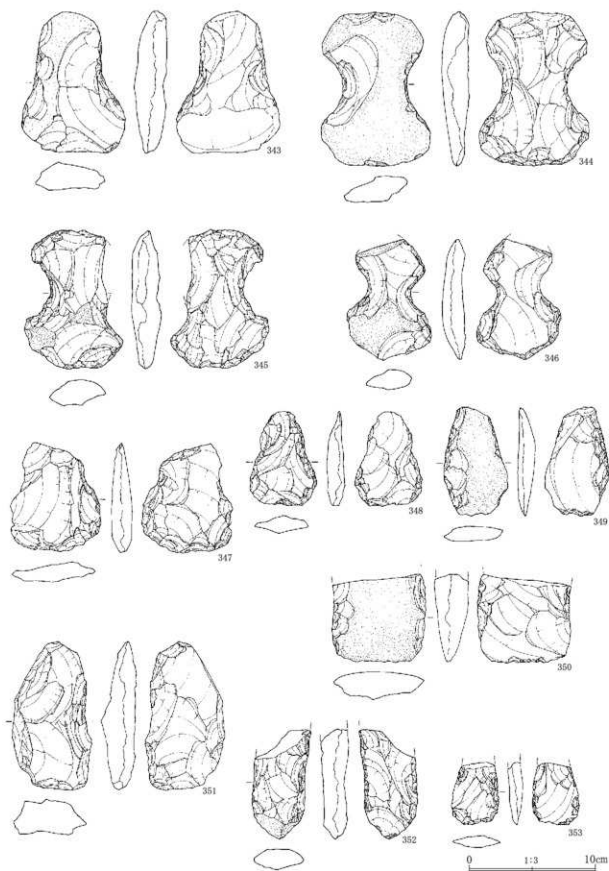
379・380は多孔石である。379は大型の自然礫である。表面の中央部分を中心に上端の直径1～1.5cmの凹穴が多数見られる。孔の断面形は逆円錐形である。裏面の中央部分には敲打状の痕跡がある。380も大型の自然礫である。表・裏両面に多数の凹穴が見られる。



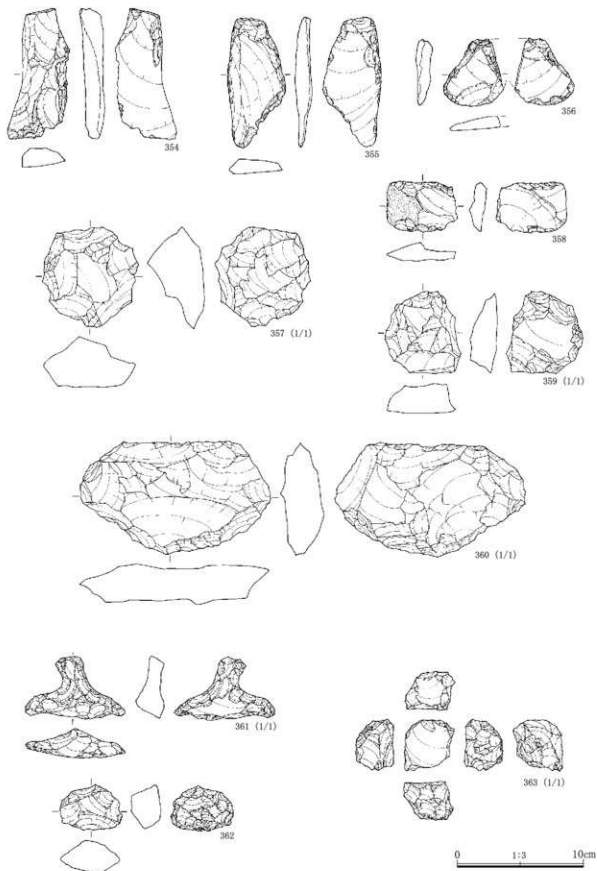
第88図 遺構外出土の縄文時代石器(1)



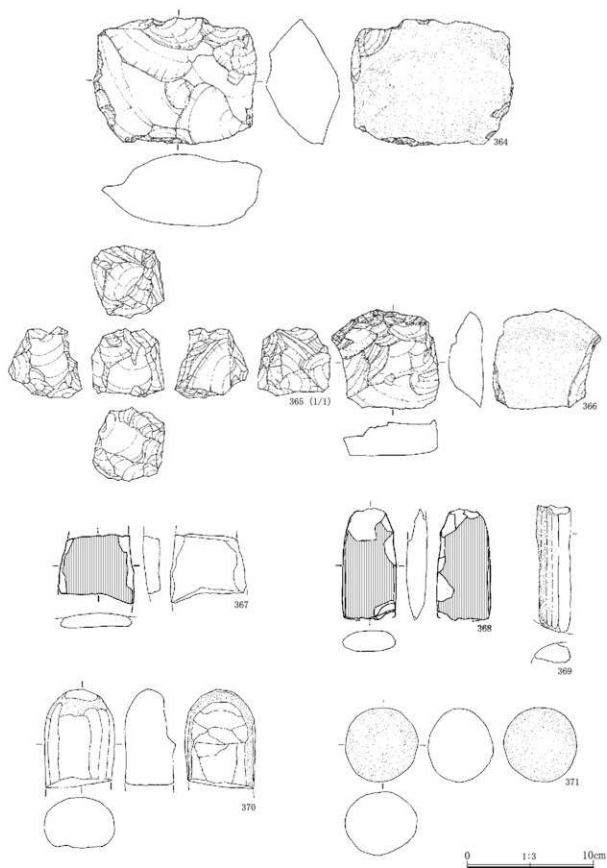
第89図 遺構外出土の縄文時代石器(2)



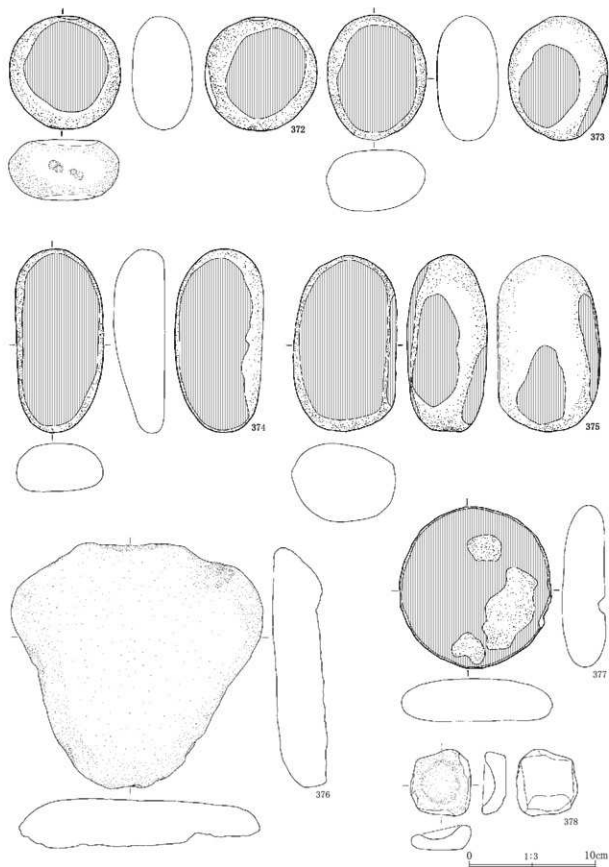
第90図 遺構外出土の縄文時代石器(3)



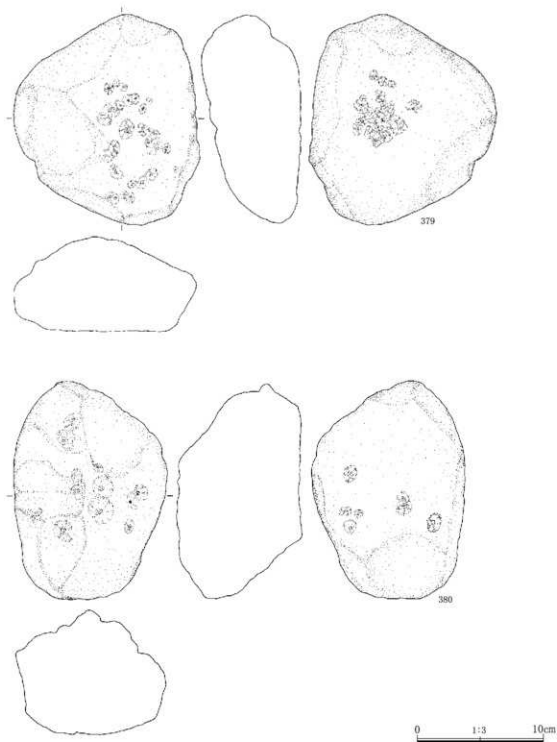
第91図 遺構外出土の縄文時代石器（4）



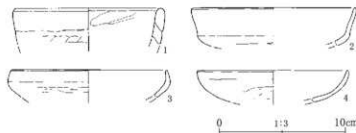
第92図 遺構外出土の縄文時代石器(5)



第93図 遺構外出土の縄文時代石器 (6)



第94図 遺構外出土の縄文時代石器（7）



第95図 古墳時代遺構外出土の遺物

3 古墳時代の遺構と遺物

(1) 遺構外出土の遺物 (第95図)

今回の調査においては古墳時代に帰属する遺構の検出は見られなかった。遺構外から出土した遺物も少量であった。

以下に特徴的な遺物を資料化し、その観察内容は遺物観察表に記述した。(観P194)

4 奈良・平安時代の遺構と遺物

(1) 概要

A区、ローム台地上においては本時期に帰属する遺構の検出は見られなかった。

B区、沖積地内においては浅間B軽石下の水田とこの水田と同時期に使用されていた溝13条を検出した。個々の遺構についての所見は後述のとおりであるが、この浅間B軽石下の水田が形成された沖積地は下流にいたり亀泉西久保II遺跡のA区西側側道部分で検出した浅間B軽石下の水田と一帯となるものである。

(2) 浅間B軽石下水田 (第96~103図、PL27~30・50)

概要 B区では表土下0.6~0.8mに堆積した浅間B軽石層直下で畦畔・置き石・溝とともに水田耕作面を検出した。調査面積はB1区~B4区までの合計で9112m²である。各区の検出状況は第96図のとおりである。ただし第98図において示したよう各調査区、各地点において浅間B軽石の堆積状況は大きく異なっていた。

検出した水田の区画は必ずしも全体が明瞭とは言えないものであった。区画の基本は北から南へ向かって下る緩傾斜面上の等高線に沿って東西方向の畦が検出されており、長軸が等高線に沿った棚田状の

水田面が形成されていたと考えられる。これに対し、等高線に直交する方向、南北方向の畦は全く検出することはなかった。

同じ調査区から後述する13条の溝が検出されたが、これらの溝からは環状の施設は検出されなかったことから、自然とオーバーフローして水田に水が入る以外、調査区内においては溝からこの水田に給水が行われた具体的な状況は見られなかった。個々の区画においても水口は検出されていない。

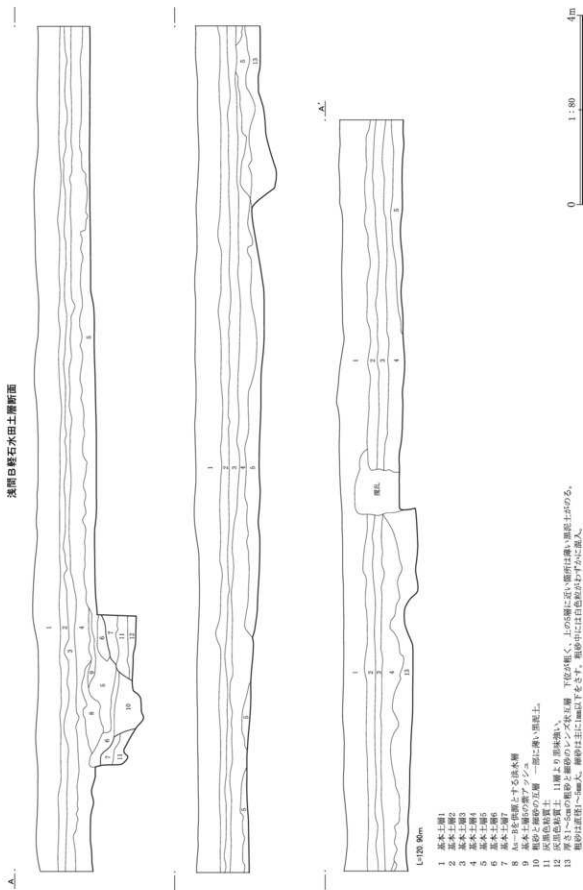
耕作面には一面に円形のくぼみ痕が見られた。中を埋める土粒は4層と5層の2者があった。足跡・蹄跡・株跡と断定することができなかった。

水田耕作土はしまりがあり、粘性のやや強い黒色土であった。

区画 B1区では調査区北側寄りにおいても東西あるいは北西から南北方向の畦が検出されたが、92・93グリッドの8ライン以南で等高線に沿う畦が3本確認された。調査南端のそれは920~3から93H-4グリッドにおよびその長さは直線距離でも約65mを測る。3本の東西畦の間隔は3.5~10.0mである。各区画の南北方向における標高差は約10~20cmである。

東西方向に等高線に沿って区画される畦はB2区・B3区で合わせて12本、B4区で4本検出された。この中でB2区・B3区の3号溝より東側、82グリッドの10から16ラインの範囲で検出された4本の畦は他の地点と比較して段差を有し、明瞭であった。東側は台地の縁辺に沿って南流する12号溝との間を幅広い畦で区画していた。この部分の4枚の区画の南北方向の長さは、北側から5.3~6.5m、4.1~5.5m、7.5~9.3m、3.7~7.4mである。南北方向

浅間白軽石水田土層断面



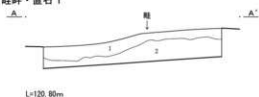
第99図 B 2区浅間白軽石下木田土層断面

出 埋込は遺構1～5のみ、埋込は主に1m以下を占め、埋込中には白色灰がわずかに散見、上部は埋込に乏しい遺物は僅い埋込土が認められる。下部が概く、上の5層に乏しい遺物は僅い埋込土が認められる。

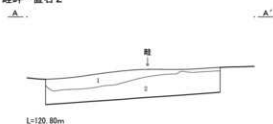
- 1 基本土層1
2 基本土層2
3 基本土層3
4 基本土層4
5 基本土層5
6 基本土層6
7 基本土層7
8 Aa-Bを代表とする基本層
9 基本土層からの高アツシタ
10 灰砂と細砂の互層 一部に薄い赤粘土
11 灰黄色粘質土
12 灰黄色粘質土 上部より形が狭い
13 埋込土

第3章 茨窪南田遺跡の調査

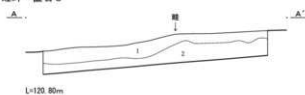
畦畔・置石 1



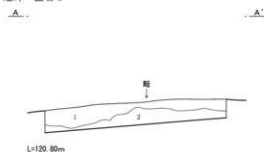
畦畔・置石 2



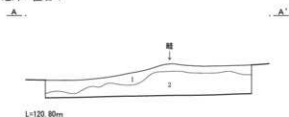
畦畔・置石 3



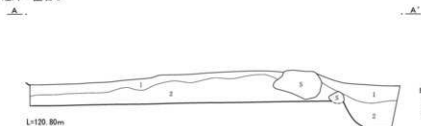
畦畔・置石 5



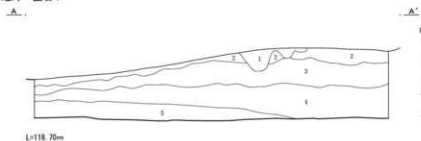
畦畔・置石 4



畦畔・置石 6



畦畔・置石 7



畦畔・置石1~6A-A'

- 1 基本土層6
- 2 基本土層7

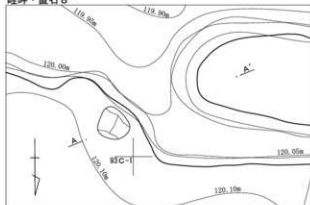
畦畔・置石7A-A'

- 1 にぶい黄褐色土 直径1mm程度のAs-B軽石を含む。
- 2 黒色土 しまりあり。粘性やや強い、As-B下群土。As-B軽石を微量含む。
- 3 黒褐色土 しまりあり。粘性やや強い。
- 4 黒褐色土 しまりあり。粘性やや強い、白色軽石粒を少量含む。
- 5 黒褐色土 しまりあり。粘性強い。白色軽石を微量含む。

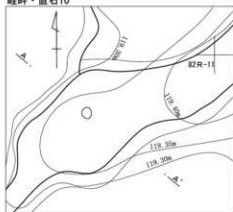
0 1:20 1m

第100図 浅間B軽石下水田畦畔・置石 (1)

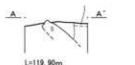
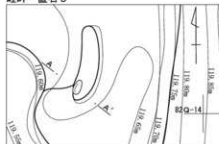
畦畔・置石 8



畦畔・置石 10



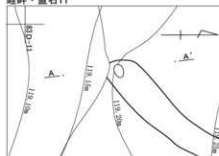
畦畔・置石 9



畦畔・置石 9-A'-A'

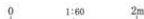
1 基本土層7 褐色の強い粘質土。As-C少量混入。鉄分あり。

畦畔・置石 11



畦畔・置石 11A-A'

1 基本土層6
2 基本土層7 As-Cを混入。



第101図 浅間日軽石下水田畦畔・置石(2)

の標高差は各々、約15cm、約10cm、約10cm、約5cmである。

畦 調査の途上、畦および置石部分の14箇所について土質とその厚さを知ることを目的に調査面を断ち割り、その状況について確認を行った。調査地点は第97図に掲載したとおりである。畦個々の土層については第100・102図に示した。残存状態は不良で、高まりはほとんど認められなかった。置石10の地点における畦の幅は約1mで大畦という認識がなされた。結果、段差の上下で硬さはあってもわずかで

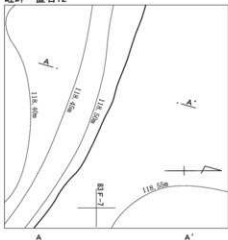
った。杭などの施設も検出されなかった。畦上、あるいは近接した水田面から土器他の遺物が検出することもなかった。

置石 全調査区内で畦上あるいは畦内に置石がなされた地点が6箇所で認められた。その地点は第97図に、土層断面は第100～102図に掲載したとおりである。

置石9や13は東西方向に延びる畦の途中に位置している。置石8と11は畦の分岐や合流が近い。置石9・10は12号溝西側の畦状の高まり上に位置する。

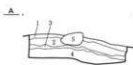
第3章 狭窪南田遺跡の調査

畦畔・置石12



L=118.90m

畦畔・置石13



L=112.40m

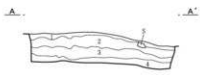
畦畔・置石12A-A'

- 1 基本土層6
- 2 黒褐色土 しまりあり、粘性強い、やや礫土化している。
- 3 黒粘土 しまりあり、粘性やや強い。
- 4 基本土層7
- 5 黒褐色土 しまりあり、粘性強い、As-Cを微量含む。

畦畔・置石13・14A-A'

- 1 基本土層6
- 2 粉灰色土 直径1mm大の白色砂粒を少量含む。微分の沈着が見られる。
- 3 基本土層7
- 4 黒褐色土 粘性強い、緻密、As-Cを微量含む。

畦畔・置石14



L=112.50m

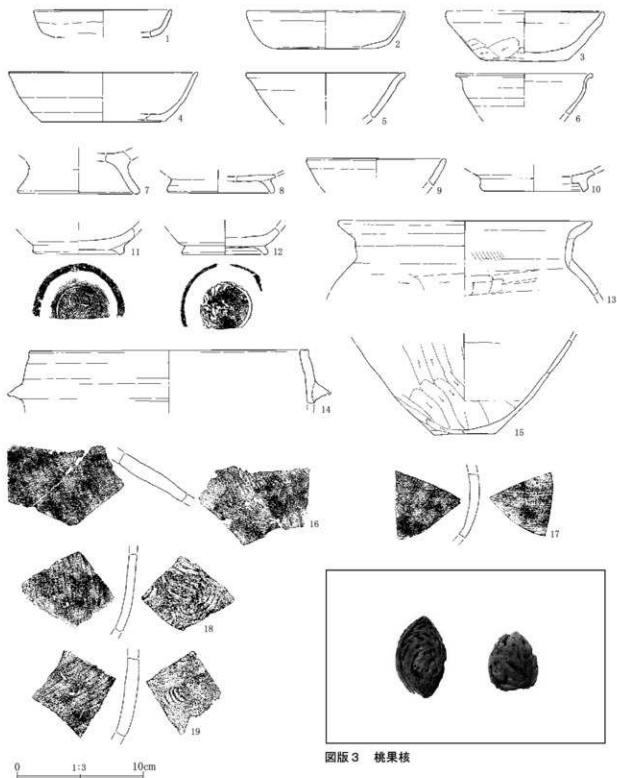
0 1:60 2m

第102図 浅間B軽石下水田畦畔・置石(3)

置石10では畦の芯の中に礫が置かれていた。置石9では溝の東壁から平坦面を有する直方体状の礫が検出された。礫は基本土層6より上位で浅間B軽石と基本土層6の混土層中に位置している。この土層は調査の所見では貼ったクロ状の土粒であった可能性があることから礫は12号溝の掘り直しとその後の護岸造作時に芯材としたものと考えられている。
出土遺物 第103図にこの水田精査時に出土した遺物の一部を掲載した。いずれも詳細な出土地点については不明で、水田耕作に直接関係すると断定する

ことは困難であり、浅間B軽石の降下年、1108年とも考え合わせると取捨選択の余地は残している。12・19がB2区、18がB3区、17がB4区である。それ以外はB1区からの出土である。

1～3は土師器杯である。3は口縁部下半にヘラケズリが施されており、10世紀後半以降の所産である。4～6は須恵器杯、7・8・11・12は須恵器高台付椀である。13・15は土師器甕で、13は口縁部の形状から9世紀代後半のものと考えられる。14は須恵器羽釜の破片である。16・18・19は甕の破



図版3 桃果核

第103図 浅間B軽石下水田出土の遺物

片である。また桃の果核が出土している。(観P195・196) この他にB区全体のこの調査面から縄文土器118点、打製石斧をはじめとした縄文時代石器83点、土師器141点、須恵器36点、陶磁器20点、軟質陶器8点が出土している。

なおプラントオパール分析の検査については第5章第2節に報告を掲載しておいた。プラントオパールの分析においてもイネの耕作が分析地点により密度の差が大きかったことが指摘されている。

所見 以上のような沖積地のほぼ全域にわたり水田が造成されていたと考えられる。この水田は浅間B軽石により埋設していることから、平安時代の所産と考えられる。

(3) 溝

2号溝 (第104・106図、PL33)

位置 82S-20、92R-2・3・6、92O-7、92P-4・6・7、92S-1・2、92Q-3~7G
重複 5号・8号・9号溝と合流する。

形状 B1・B2区で検出した南北方向の溝である。検出長は49.42mである。北端は92O-7グリッドで調査区域外におよぶ。北端から6.65mは西方向を向き92P・Q-7グリッドで8号・9号溝と合流する。ここから92Q-4グリッドまでの間は流路が大きく蛇行している。東側の谷地の中央付近、92Q-4グリッドでほぼ直角に屈曲した後南西方向に延び5号溝と合流する。82S-20グリッドまでは走向を概ねN-36°-Eの方向に取っている。

断面形は壁面の傾斜を有する逆台形状である。上幅は0.80~1.52m、下幅は0.40~0.64mである。深さは0.03~0.18mを測った。底面の標高は北端で120.70m、5号溝との合流地点で118.89mである。溝の両側に畦状に低い高まりを有する部分と片側のみ水田面と同様に低くし、本溝に接する水田に用水を供給する地点がある。

埋没土 いずれの地点の土層観察においても底面直上に浅間B軽石の1次堆積層が確認されている。

所見 埋没土中に浅間B軽石が堆積しており埋没後復旧していないことからその降下以前に使用され

ていたことがわかる。台地の縁辺から集水し、下位の水田に用水を供給するための溝である。調査時の所見では溝の幅、深さがほぼ一定であることから流路を屈曲させることで水量の調整をしたものと考えられている。

古代の掘削と考えられるが出土遺物もなく詳細な年代は不明である。

3号溝 (第104~107・110図、PL31)

位置 82S-8~10、82T-8~12、83A・93G-11~16、83B-15~20、83C-18、93B-1~5、93B-4、93C-4~6、93D・E-5~7、93E-13・14、93F-7~12G

重複 4号~7号・10号・11号溝と合流。5号溝に後出する。12号溝と重複する。

形状 B1・B2・B3区にわたり検出した南北方向の溝である。検出長は155.59mを測った。北端は93E-15グリッドでその先は調査区域外におよんでいる。流路はここから南西方向に向かい、10号溝と合流した後は走向を南から南東方向に変え、4号・6号・7号溝とほぼ等間隔で合流する。83A-20グリッドで5号溝と合流後は再度西方向に弧を描いた後、南から南東方向に流下している。82S-9グリッドで東側の台地の縁辺にぶつかりこれに沿って82T-8グリッドまで続いている。

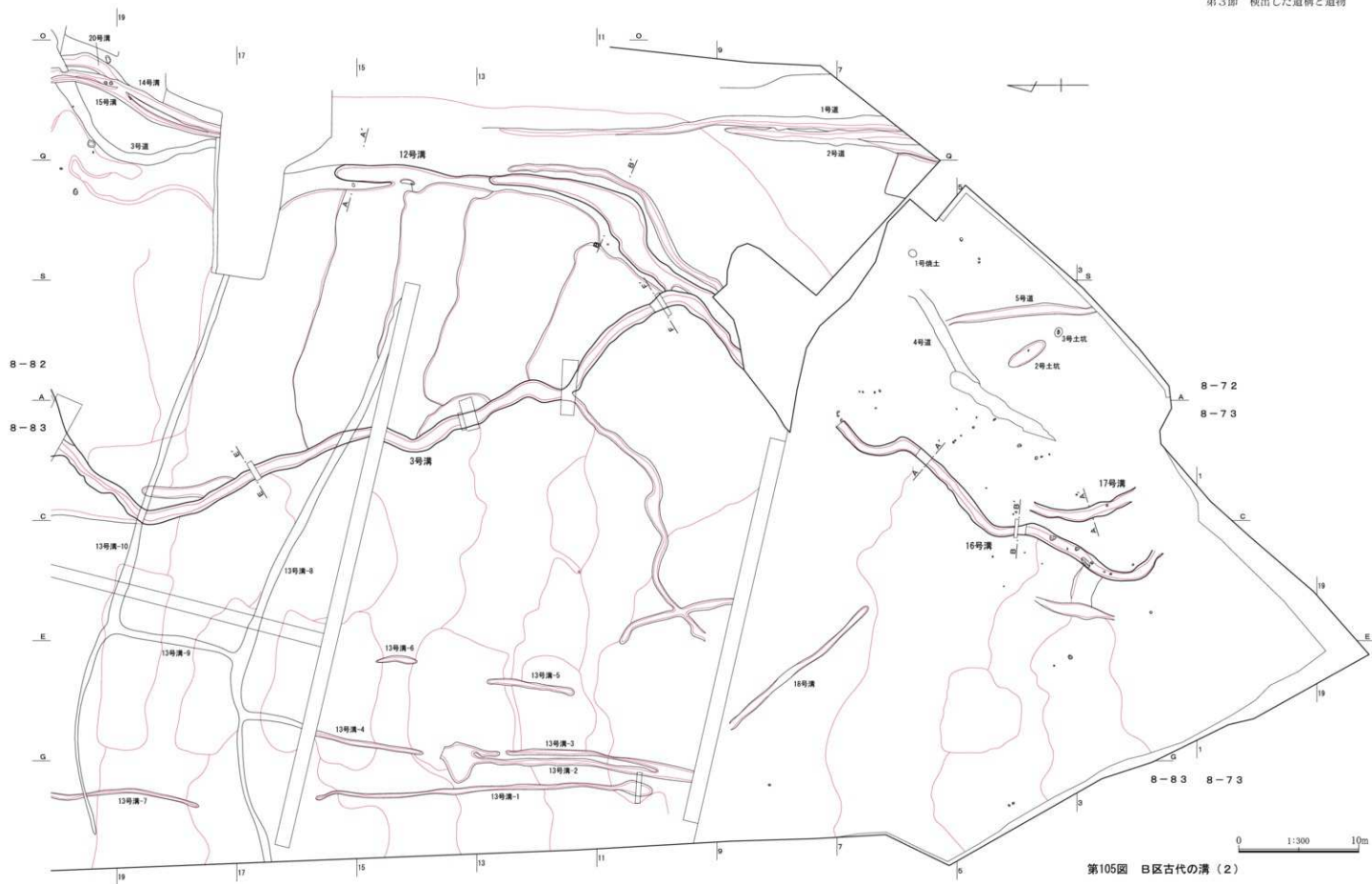
断面形は逆台形を基本としていたと考えられるが、底面の幅、壁面の傾斜は個々の場所ごとに大きく異なっていた。水流により壁面が削られた箇所も認められた。上幅は0.84~1.96m、下幅は0.24~1.00mである。幅は4号溝の合流地点よりも上流では他の溝よりも広い傾向が見られ深さも有していたが、それより下流では特段の状況にはなかった。深さは0.05~0.57mを測った。底面の標高は北端で120.52m、5号溝との合流地点で119.63m、南端で119.02mである。

埋没土 上・下2層の掘り方を有する。上層は浅間B軽石の1次堆積で埋没している。

上流部分では底面直上に浅間B軽石の堆積が見られる地点があった。下流寄りでは中・下層に砂泥が堆

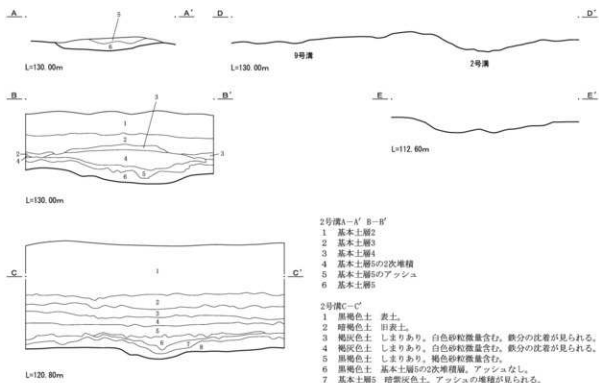


第104図 B区古代の溝(1)

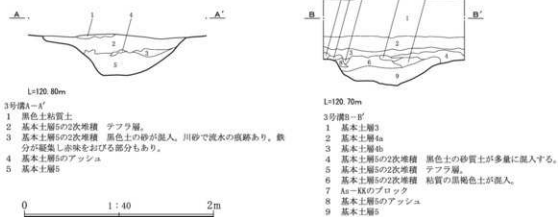


第105図 日区古代の溝 (2)

2号溝



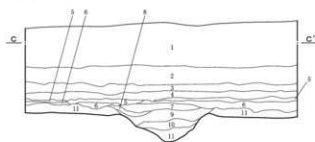
3号溝



第106図 B区古代の溝土層断面(1)

第3章 荻窪南田遺跡の調査

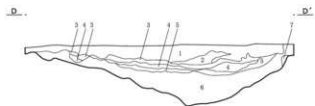
3号溝



L=120.90m

3号溝C-C'

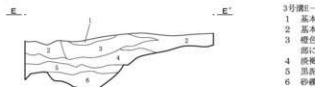
- 1 黒褐色土 表土。
- 2 暗褐色土 田表土。
- 3 暗灰色土 しまりあり。鉄分沈着が見られる。
- 4 暗灰色土 しまりあり。褐色砂粒を少量含む。
- 5 暗灰色土 しまりあり。褐色砂粒を多く含む。
- 6 暗褐色土 しまりあり。やや粘質で褐色砂粒微量含む。
- 7 黒褐色土 基本土層5の3次堆積層（アッシュ無し）。
- 8 暗紫灰色土 基本土層5の2次堆積層（ピンクアッシュあり）。
- 9 黒褐色土 基本土層5の2次堆積層。
- 10 基本土層6 暗紫灰色土。基本土層5のアッシュ。
- 11 基本土層5 にがい黄褐色土。1次堆積層。



L=121.30m

3号溝D-D'

- 1 基本土層4
- 2 As-Cを粘土とする細砂層 洪水に起因する。
- 3 灰黒色粘土 2層に伴う。
- 4 As-KKの1次堆積層
- 5 淡黄色土 微砂。
- 6 基本土層6 30ら貫通するロシカアシを多く混入。



L=119.90m

3号溝E-E'

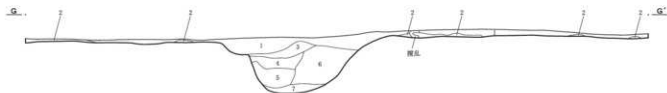
- 1 基本土層5 2次堆積層の可能性もある。
- 2 基本土層6
- 3 橙色砂と黒泥土の縞状互層 離断で壊ってしまった5枚以上の層理からなる。中央部に橙色粗砂が多いが基本土層6よりは黒泥土が主。褐色は鉄分少。
- 4 淡褐色細砂と黒泥土との互層 細砂土主。黒泥土は薄い。有機質やや多い。
- 5 黒泥土と淡褐色細砂の互層 黒泥土は厚さ1cm。やや粘質。
- 6 砂礫層 直径1~20mm。上半部に砂礫。下半部に粗砂多い。



L=119.40m

3号溝F-F'

- 1 基本土層5 直上に厚さ1~5mmの黒泥土。
- 2 淡黒色土 少量の褐色粗砂を混入。
- 3 褐色粗砂 レンズ状の黒泥土が混入。
- 4 黒褐色粘質土と褐色粗砂の互層 黒褐色粗砂が縞状に互層。堆積。
- 5 As-B黒褐色色砂質土



L=120.20m

3号溝G-G'

- 1 基本土層5
- 2 基本土層6
- 3 黄色微砂を主に淡褐色粘質土との混土。3号溝新築。
- 4 粗砂層 中間に厚さ1~3mmの黒泥土が互層に入る。鉄分沈着。3号溝古跡。
- 5 粗砂層 4層と同質直径1~5mm粗砂。薄い黒泥土がレンズ状に入る。3号溝古跡。
- 6 粗砂層 直径1~5mm大。厚さ3~6mm程の縞状に堆積。下位が粗く上が細砂。粗砂中に白色軽石 (0r-FA5) が多い。5号溝古跡。
- 7 砂礫層 直径1~10mm大。6層中の最下位にあたる。5号溝古跡。

0 1:40 2m

第107図 B区古代の溝土層断面(2)

横は浅間B軽石が堆積している。これが下層の掘り方内の埋没土である。G-G'では掘り返しの痕跡が見られる。

埋没土中から須恵器杯(1)・高台付杯(2)の破片が出土している。いずれも8世紀代の所産と考えられる。(観P194)

所見 埋没土中に浅間B軽石が堆積していることから、それ以前の掘削であることが理解されるが詳細な時期は不明である。

4号溝(第104・108図、PL32)

位置 93C-9~13、93D-7~10、93E-7G

重複 3号溝に合流。

形状 B1区で検出した南北方向の溝である。検出長は33.56mであったが、北端は93C-13グリッドで調査区域外におよんでいる。その北端から8.00mはほぼ直線の走向であったものが東南方向に向きを変えそこから長さ5.50mを経て、再度、南西方向に向きを変え北端からの流路の延長線上に位置を戻している。ここから約10.00m下流、93D-7グリッドで3号溝と合流している。両溝の底面は3号溝が0.06m低い。北端部分における走向方向はN-O°-Eである。走向の変化は旧地形に影響されたものと考えられる。

断面形は逆台形状であるが壁面の傾斜は場所により大きく異なっていた。掘り方は全体を通して幅の狭いものであった。上幅は0.52~0.80m、下幅は0.20~0.30mである。深さは0.20~0.36mを測った。底面の凹凸が激しかった。底面の標高は北端で121.00m、3号溝との合流地点で120.24mである。埋没土 上層に浅間B軽石下の耕土と考えられる黒褐色土が堆積していた。土層断面B-B'では中・下層に川砂の堆積があり流水のあったことが知れる。所見 古代の掘削と考えられるが詳細な年代は不明である。

5号溝(第104・108・110図、PL33・50)

位置 92M-5、92N-O-3、92P-1~3、92Q-1、83A・82P-T-20G

重複 2号・3号溝と合流。3号溝より古い。

形状 B1・B2区から検出された北東から南西に向かって流れる溝である。北端は92M-5グリッドで調査区域外におよび南端は83A-20グリッドで3号溝と合流する。検出長は58.46mであるがこの間その走向は大きく蛇行を繰り返している。

断面形は比較的底面の幅が広い逆台形であるが場所ごとに幅・壁面傾斜の状況が異なっていた。

上幅は0.62~1.60m、下幅は0.38~1.44mである。深さは0.23mを測った。底面の標高は北端で120.81m、3号溝との合流地点で119.72mである。埋没土 黒褐色を主体に堆積、川砂・小礫が含まれていたことから流水があったことがわかる。浅間B軽石の堆積は見られなかった。また、埋没土中から土師器杯(1・2)・高台付碗(3)、須恵器杯(5・7~9)・碗(6・10)・甕(13・14)、灰釉陶器壺(12)が出土している。これらはやや時間幅があるが10世紀代が主体である。(観P194・195)

所見 浅間B軽石の堆積はなかったが平安時代の掘削と考えられる。

6号溝(第104・108図、PL32)

位置 93B-4~7G

重複 3号溝と合流する。

形状 B1区で検出した南北方向の溝でその走向はN-5°-Wである。検出長は12.45mで93B-7グリッドより北側は削平を受けたものと考えられる。93B-4グリッドで3号溝と合流する。

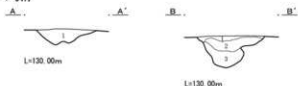
壁面の残存は低く断面形は皿状を呈していた。底面からの立ち上がりを認識することが困難であった。上幅は0.40~0.76m、下幅は0.14~0.48mである。深さは0.02~0.05mを測った。底面の標高は北端で120.58m、3号溝との合流地点で120.19mである。

埋没土 浅間B軽石下木田の調査中に検出した。浅間B軽石で埋没していた。

所見 古代の掘削と考えられるが詳細な年代は不明である。

第3章 荻窪南田遺跡の調査

4号溝



4号溝A-A'・B-B'

- 1 黒褐色土 粘質。As-B下水位の層土と考えられる。
- 2 暗褐色砂質土 As-Bが、角閃石と考えられる黒色鉱物入りの直径5mm～1cmの白色・黄色軽石を混入する。川砂を主体とする砂質土。
- 3 黒褐色土 砂質。川砂を主体とし黄色・白色軽石を混入。



5号溝A-A'

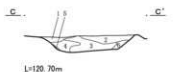
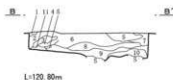
- 1 黒色土 As-B層土。
- 2 黄褐色ロームブロック 直径1cmの集合。
- 3 桃灰色砂質土 細粒。
- 4 基本土層6
- 5 黄褐色砂質土 黒色土の砂粒や小礫が入る。
- 6 桃灰色砂質土 黒色粘質土や褐色砂質土・粘質土が交互に入る。また、小礫の層が層近くによく見られる。
- 7 黒褐色砂質土 小礫が多く入る。

5号溝



5号溝B-B'

- 1 基本土層6
- 2 暗褐色土 鉄分あり。砂質。
- 3 黒褐色土 軽石を含む粘質。
- 4 暗褐色砂質土 川砂か。
- 5 暗褐色砂質土 鉄分多し。
- 6 黒褐色砂質土 川砂多し。上位部分に川砂、直径5mm大の白色・黄色軽石が多い。
- 7 黒褐色粘質土 鉄分あり。
- 8 黒褐色砂質土 砂質、川砂。底面に粘質土が見られる。
- 9 黒褐色砂質土 川砂。
- 10 黒褐色砂質土 一部に粘性を有する。密度の細かい砂粒。
- 11 暗褐色粘質土



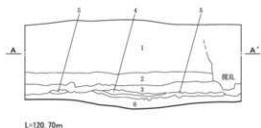
5号溝C-C'

- 1 黒褐色土 粘質。鉄分あり。
- 2 黒褐色土 砂質。黄色・白色軽石を多数含む。
- 3 黒褐色土 砂質。2層より川砂が多く小礫あり。色調は2層より黒い。
- 4 黒褐色土 砂質。密度の細かい砂。粘質部分もあり。鉄分を含む。
- 5 黒褐色土 砂質。4層より粘質。
- 6 黒褐色土 砂質。4層より粘質。

6号溝

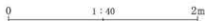


7号溝



7号溝A-A'・B-B'

- 1 基本土層3
- 2 基本土層4b
- 3 基本土層4a
- 4 基本土層5の2次堆積 テフラ主体。
- 5 基本土層5 アッシュ。
- 6 基本土層3
- 7 基本土層5の2次堆積



第108図 B区古代の溝土層断面(3)

7号溝 (第104・108図、PL32)

位置 92R-8、92S-5~8、92T-4~6、93A-3・4G

重複 3号溝と合流する。

形状 B1区で検出した南北方向の溝である。走向は南東方向に緩やかに弧状を呈するもので、北半でN-22°-Eを測る。検出長は29.73mを測り、北端は92R-8グリッドで調査区域外におよぶ。南端は93A-3グリッドで現道下に至り、3号溝と合流していると考えられる。南半、93A-4グリッドでは2条に分かれている。一時、流路に変更があった結果と考えられるが、土層の観察からは前後関係は不明である。

断面形は緩やかな皿状を呈する立ち上がりである。南端で上幅1.20m、下幅0.64mとやや広くなっている。他の上幅は0.32~0.80m、下幅は0.20~0.40mである。深さは0.03~0.09mを測った。底面の標高は北端で120.85m、南端で120.14mである。埋没土 底面直上に浅間B軽石1次堆積層が認められた。

所見 埋没土中に浅間B軽石が堆積していることからその降下以前に使用されていたことが確認できた。古代の掘削と考えられるが出土遺物もなく詳細な年代は不明である。

6号溝と同様、浅間B軽石下水田の区画に直交していることから排(退)水用に掘削されたものか。

8号溝 (第104図、PL33)

位置 92Q-7・8G

重複 2号溝と重複する。

形状 B1区で検出した南北方向の溝である。走向の方位はN-10°-Eである。92Q-8グリッド以北は調査区域外におよんでいる。92Q-7グリッドで2号溝に合流する。検出長は4.76mである。

断面形は皿状を呈していた。上幅は0.40~0.68m、下幅は0.12~0.24mである。深さは0.10~0.13mを測った。底面の標高は北端で120.79m、2号溝との合流地点で120.53mである。

埋没土 浅間B軽石の1次堆積で埋没していた。

所見 調査時の所見では水田内の水を集めるための機能を有していたとの考え方もある。埋没土中に浅間B軽石が堆積していることからその降下以前に使用されていたことが確認できた。古代の掘削と考えられるが出土遺物もなく詳細な年代は不明である。

9号溝 (第104・106図、PL33)

位置 92P・Q-7G

重複 2号溝に合流する。

形状 B1区で検出した北東から南西に向かって流下する溝である。走向の方位はN-50°-Eである。92P-7グリッド以北は調査区域外におよぶ。92Q-7グリッドで2号溝に合流する。検出長は4.43mである。

断面形は皿状を呈していた。上幅は0.64~0.72m、下幅は0.24~0.32mである。深さは0.05~0.07mを測った。底面の標高は北東端で120.72m、2号溝との合流地点との比高差は0.07mである。

所見 古代の掘削と考えられるが出土遺物もなく詳細な年代は不明である。

10号溝 (第104・109図、PL32)

位置 93F-11・12、93G-11~16、93H-15~17G

重複 3号溝と合流する。

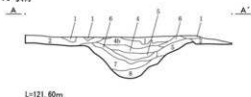
形状 B1区で検出した南北方向の溝である。途中でわずかに蛇行する部分もあるがその振幅の幅は概く1m前後である。その走向は概ねN-15°-Eである。検出長は28.73mである。北端は調査区域外におよぶ。南端は93F-11グリッドで3号溝と合流している。両溝の底面の差は約0.15mで3号溝が低い。

断面形は底面の幅が狭い逆台形状である。上幅は0.56~1.84m、下幅は0.24~0.41mである。深さは0.05~0.44mを測った。底面は段差もなく全体の勾配も少ない。底面の標高は北端で121.55m、3号溝との合流地点で120.36mである。合流部分に向かって徐々に下がっていた。

埋没土 底面に1層間層を置いて浅間B軽石、浅間B軽石の2次堆積層、箱川テフラが堆積していた。

第3章 荻窪南田遺跡の調査

10号溝



10号溝A-A'

- 1 基本土層1
- 2 基本土層4a 灰白色砂粒やや多い。
- 3 基本土層4b 黒く、基本土層5層中の紫色アッシュを混入。
- 4 Aa→Bb層 青灰色。1次堆積層は厚さ1cm強。他は混土化して黒褐色をおびる。
- 5 基本土層5の2次堆積
- 6 基本土層6 アッシュ。
- 7 基本土層6
- 8 にぶい灰色粗砂と黒色泥土の混土 一部は礫状を呈す。

16号溝



L=118.60m



L=118.60m

16号溝A-A'・B-B'

- 1 暗褐色土 直径1~20mm程度の硬質ロームブロックを主体とする。
- 2 黒褐色土 直径1~7mm程度の砂粒・小礫を主体とする。
- 3 黒褐色土 直径1~7mm程度の砂粒・小礫を主体とし、黒褐色土（ややシルト質）が一口状に混入する。

17号溝

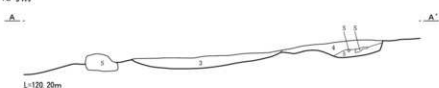


L=118.50m

17号溝A-A'

- 1 黒褐色土 直径1~7mm大のロームブロックを少量含む。
- 2 黒褐色土 直径1mm大の灰色砂粒を多く含む。砂質。
- 3 にぶい黄褐色土 粘性強い。ロームを主体とする。
- 4 黒褐色土 褐色砂粒を多く含む。砂質。

12号溝



L=120.20m



L=119.90m

12号溝A-A'・B-B'

- 1 基本土層4
- 2 基本土層4 アッシュ
- 3 基本土層5
- 4 黒褐色砂質土 ローム粒が入る。図左側より流れ込む。川砂と考えられる。特に図右側は砂粒が細かく粘質化する。
- 5 黒褐色砂質土 ローム粒が入る。粒子が粗い。

0 1:40 2m

第109図 B区古代の溝土層断面(4)

所見 埋没土中に浅間B軽石・柏川テフラが堆積することから埋没後復旧がされていないことがわかる。その浅間B軽石降下以前に掘削、使用された古代の溝で、3号溝と同時期の所在と考えられるが、出土遺物もなく詳細な年代は不明である。

11号溝 (第104図)

位置 93E-15G

重複 3号溝に合流する。

形状 B1区で検出した調査区際でその一部が検出されたため全体形状は不明である。検出長は2.36mである。

埋没土 浅間B軽石が堆積していた。

所見 埋没土の状況から古代の溝と考えられるが詳細な掘削時期は不明である。

12号溝 (第105・109図、PL34)

位置 82Q-9~15、82R-9・10、82S-8・9、82T-8G

重複 3号溝と重複する。

形状 B2区からB3区にかけて検出した南北方向の溝である。南半部分は東側の台地縁辺に沿って弧を描くように南西方向に延びている。西側には畦状の高まりが見られる。検出長は37.96mである。検出時の北端は82Q-15グリッドに位置している。南端は82S-8グリッドである。走向の方向は北半でN-5°-E、南半でN-45°-Eである。

断面形は浅い皿状を呈する。上幅は0.70~3.36m、下幅は0.40~2.72mであるが、深さは0.05~0.25mを測った。溝としては幅広く、浅い掘り込みであったのはヌルメの役割も兼ねていたとの調査所見がある。底面の標高は北端で119.57m、南西端で119.15mである。

埋没土 浅間B軽石の堆積が認められる。川砂も堆積しており流水があったことが認められる。

所見 台地縁辺の浸み出し水を利用するために掘削されたものと考えられる。浅間B軽石により埋没しておりその後復旧されていない。古代に掘削された溝と推定されるか時期を断定するに足り得る根拠はない。

16号溝 (第105・109・110図、PL34)

位置 83A-5・6、83B-4・5、83C-1~4、83D-2G

形状 B4区で検出した北東から東西方向に延びる溝である。緩やかな蛇行を繰り返しながら台地縁辺を回っている。走向方向は、概ねN-50°-Eである。北端は83A-6グリッド、南端は83C-1グリッドに位置するが両端とも削平を受けており、全体形状は不明である。

断面形は底面の平坦な逆台形状である。上幅は0.72~1.12m、下幅は0.40~0.72mである。深さは0.07~0.20mを測った。底面の標高は北端で118.85m、南端で117.73mである。

埋没土 川砂・小礫を主体とする暗褐色土が堆積していた。浅間B軽石の堆積は確認されていない。

埋没土中から須恵器甕の破片(1)が出土している。(観P195)

所見 古代に掘削された溝と推定されるか時期を断定するに足り得る根拠はない。

17号溝 (第105・109図、PL34)

位置 83B・C-2・3G

形状 B4区で検出した南北方向の溝である。16号溝の東側、台地縁辺に沿って廻っている。検出長は8.73m、西側に弱い弧を描いている。南北両端とも削平を受けて全体形状は不明である。

断面形は底面の平坦な逆台形状である。上幅は0.64~1.20m、下幅は0.40~0.72mである。深さは0.48mを測った。底面の標高は北端で118.35m、南端で118.15mである。

埋没土 黒褐色土とにぶい黄褐色土が堆積していた。浅間B軽石の堆積が確認された。

所見 古代に掘削された溝と考えられるか時期を断定するに足り得る根拠はない。

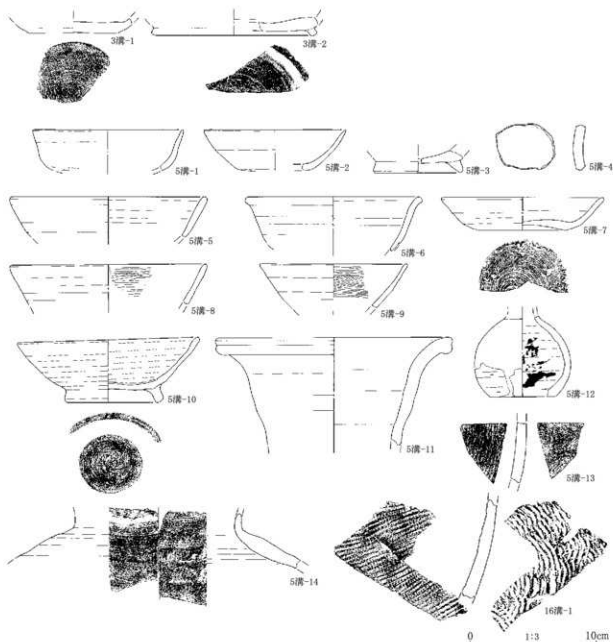
(4) 道

1号道 (第111図、PL35・50)

位置 82P-5~12G

重複 西側に2号道が併走する。2号道に後出する。

第3章 伏窪南田遺跡の調査



第110図 3号・5号・16号溝出土遺物

形状 A区沖積台地の西側縁辺寄りにあり南北方向に直線的に延びている。走向方向はN-O°-Eである。検出長は33.56m、南端は82P-5グリッドで調査区域外におよぶ。台地面を溝状に削り、断面逆台形を呈する掘り方の底面を路面としている。上幅は南端寄りで1.20m、路面の幅は0.30mである。北端に向かうにつれ削平を受け、その幅、残存深度を徐々に減じている。

埋没土 3層に分層される。最下層はにぶい黄褐色土である。

遺物 埋没土中から須恵器蓋(1)・高台付椀(2・3)が出土している。(観P194)

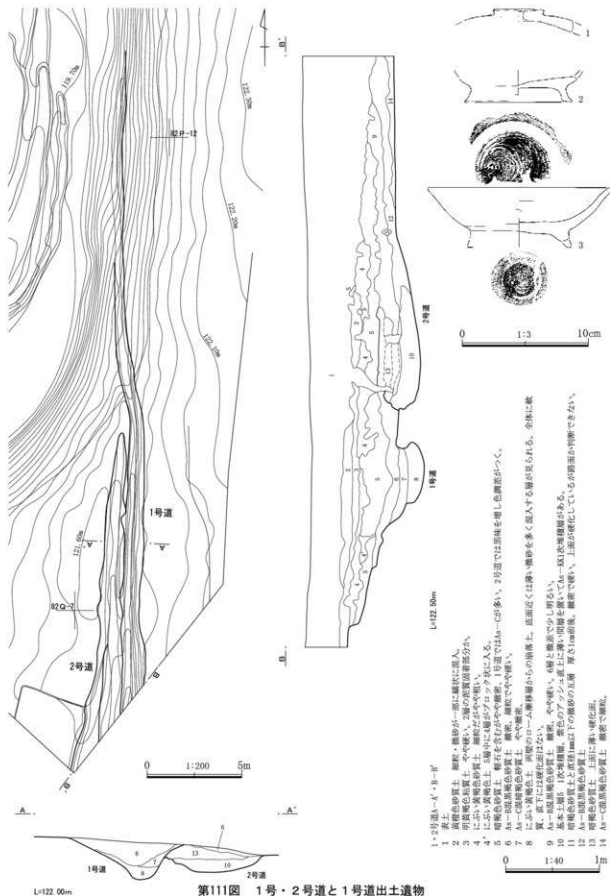
所見 出土土器の特徴などから古代に使用されたと考えられる。浅間B軽石降下後の所産で、2号道で踏襲する道である。

2号道 (第111図、PL35)

位置 82P-5~8G

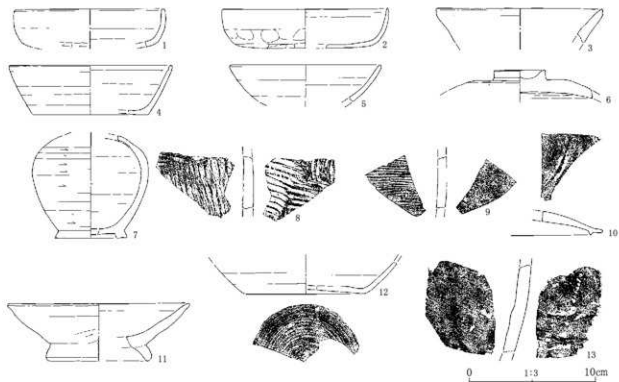
重複 東側の1号道に先出する。

形状 A区洪積台地の西側縁辺寄りを南北方向に直線的に延びる。走向方向はN-5°-Eである。



第1111図 1号・2号道と1号道出土遺物

- 1・2号道-A'-B'-B'
- 1 灰土
 - 2 黄褐色砂質土 細粒・微砂が一部に混在し混入
 - 3 明褐色粘土質土 やや硬い、2層の泥質面層部分か
 - 4 にぶい黄褐色砂質土 細粒だがやや粗い
 - 5 にぶい黄褐色土 5層中に腐敗したブロッカ状に入る
 - 6 明褐色砂質土 5層中に腐敗したブロッカ状に入る
 - 7 A-C混相褐色砂質土 やや硬質、細粒でやや硬い
 - 8 にぶい黄褐色土 所収のローム層様相からの脱落土、底面近くは薄く微砂を多く混入する層が見られる、全体に軟質、底下には硬化面はない
 - 9 A-C混相褐色砂質土 細粒、やや硬い、6層と微差で少し粗い
 - 10 黄褐色土 土質不明、茶色のクワッシュ土と薄く同層を隔てて6層に分布している
 - 11 黄褐色土 土質不明、6層以下の腐敗したブロッカ状の土層、厚さ10cm前後、細粒で硬い、上部が硬化しているが断面が判別できない
 - 12 A-C混相褐色砂質土
 - 13 明褐色砂質土 土質に硬い硬化面
 - 14 A-C混相褐色砂質土 細粒で硬質



第112図 奈良・平安時代遺構外出土の遺物

台地面を溝状に掘りその底面を路面としている。検出長は15.43mである。南端は調査区域外におよぶ。掘り方の上端の幅は1.10m、路面の幅は0.30~0.45mである。硬化していた。

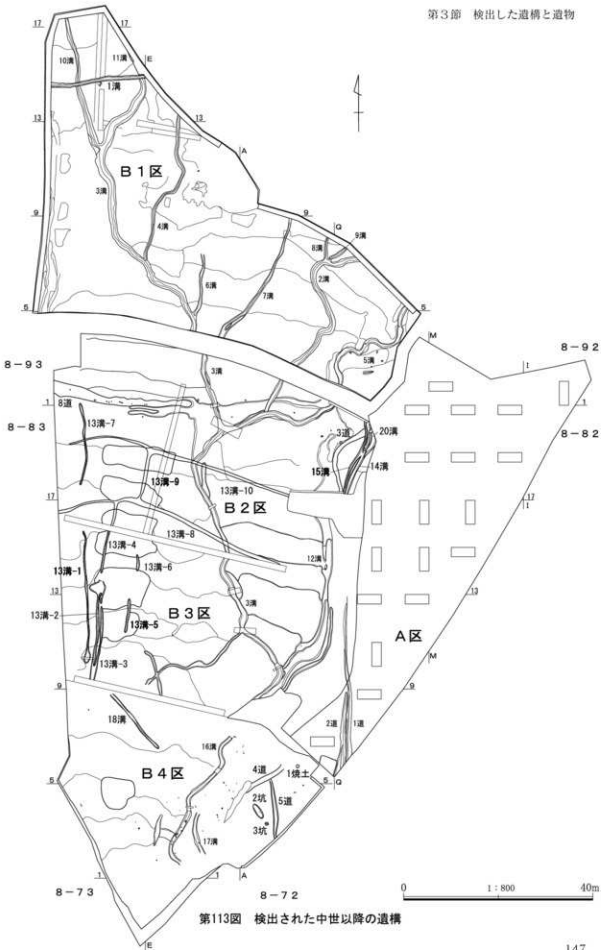
埋没土 路面の直上に浅間B軽石の1次堆積が見られその上位にも硬化面が認められる。

所見 埋没土中に浅間B軽石の堆積が認められていることから古代に使用されていたと考えられる。浅間B軽石降下以前に掘られ、粕川テフラ降下後に再度構築されているがその詳細な年代は不明である。

(5) 遺構外出土の遺物 (第112図、PL50)

ここではA区およびB区から出土した遺構に伴わない奈良・平安時代の資料を13点掲載した。1~3はA区表採、4~10はA区南半からの表採、11~13はB区出土である。12の須恵器杯は1号溝出土であるが、1号溝は中世以降の遺構であることからまぎれ込みあるいは誤注記と考えられる。

1・2は土師器杯である。3は土師器甕の口縁部破片である。11は土師器高台付碗である。4・5・12は須恵器杯、6・10は須恵器蓋である。7は須恵器の壺と考えられる。8・13は須恵器甕の破片



第113図 検出された中世以降の遺構

5 中・近世以降の遺構と遺物

(1) 概要

中・近世以降の遺構としてはA区沖積台地上の南端部分で、道2条、土坑2基、焼土痕1基を検出した。また北東部分調査区境界の土層観察により道2条を確認した。

次にA区の沖積台地からB2区の沖積地へ移行部分で道1条、走向を等しくする溝3条を検出した。

B区沖積地上ではB2区からB3区にかけてE～G列で中世の水田遺構が検出された。他にB1区で東西方向の1号溝、B2区で東西方向の8号道を検出した。

B2区からB4区では東西南北の地割りに沿ってこれを区画する。13号溝関連の複数の溝や18号溝を検出した。いずれも浅間B軽石下の水田以降に造成された水田遺構と関係するものであろう。

これらの諸遺構は14号・15号溝で微量の出土遺物が見られただけで掘削年代の手掛かりとなるような根拠はなかったためこの項で一括順次報告する。

(2) 水田 (第114図、PL36)

位置 83D～G-11～19G

重複 13号溝と重複する。

概要 浅間B軽石下水田面の精査時にB2区・B3区において浅間B軽石水田面の耕土を掘り込んだ浅間B軽石混土の硬く粘りのある土壌が面的に広がる状況を確認した。この面的な広がりには83グリッドの11ラインから19ラインに南北方向に5箇所にわたり確認された。これらは沖積地の傾斜を考慮して段状に造成された浅間B軽石下水田面に上層から第14図模式図状に後世の水田が造成された結果、水田の区画は検出されなかったが攪拌された土壌、水田耕土が残されたものと考えられる。

土壌の広がりの規模は全体が南北約41.60m、東西約15.40mを測った。南北両端における標高差は0.80mである。個々の規模は南端のもので東西12.00m、南北8.80m、北端のもので東西15.40m、南北5.00～8.80mである。

所見 出土遺物もないことから詳細な時期は不明

である。中世以降の所産と考えられる。

(3) 溝

1号溝 (第115図、PL36)

位置 93D～H-14G

形状 B1区で検出した東西方向の溝である。ほぼ直線に延びている。検出長は19.96m、東西両端とも調査区域外に延びている。

断面形は階段状に掘り込まれていた壁面か。上幅は0.64～1.00m、下幅は0.32～0.48mを測る。深さは0.09～0.27mを測った。鏟または鍬による掘削の痕跡が認められる。底面の標高は西端で121.24m、東端で121.32mである。

埋没土 黒褐色土・褐灰色土が堆積、流水の痕跡は認められない。

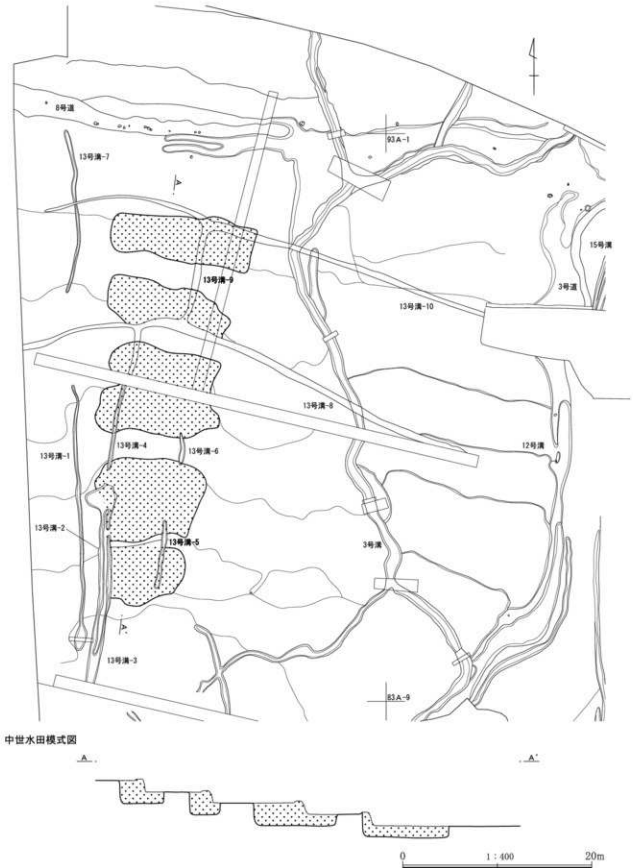
所見 検出面、埋没土の状況から中世以降、近現代まで使用されていた区画溝と考えられる。この遺構の南北に併走するように3条の溝が確認された。1号溝と同様の性格、同時期の所産と考えられる。

13号溝 (第116・117図、PL36)

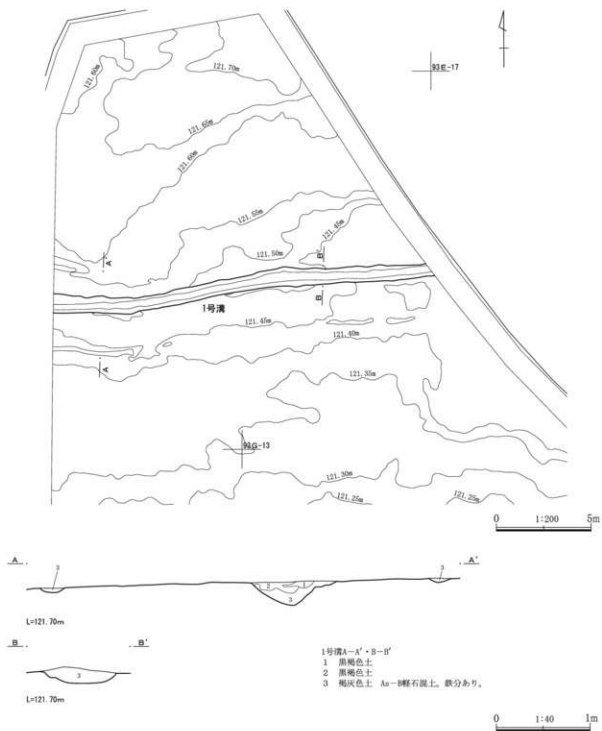
位置 B2区・B3区

形状 B2区、B3区で浅間B軽石混土層、あるいはその堆積相当層を掘り込んで掘削された溝群を総称した。南北方向に8条、東西方向に2条検出された。個々の概要は以下の通りである。

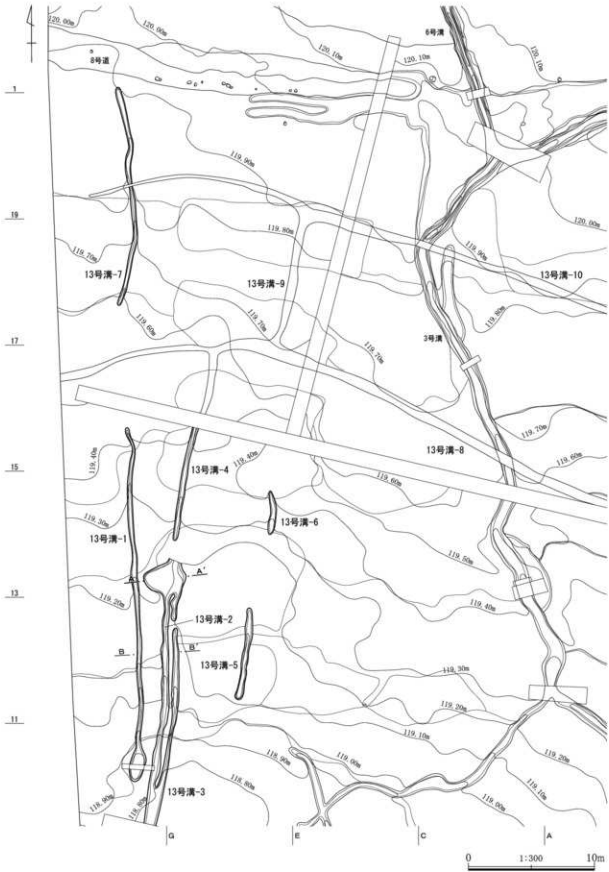
13溝の1は南北方向の溝である。南端は平面形か水滴状を呈する。検出長は28.13m、幅0.30～0.40m、深さ0.10m強である。他の溝もほぼ同様の幅、深さであった。2は南北方向の溝である。73G-13グリッドでは土坑状の掘り込みと接する。検出長は21.06mである。3は南北方向の溝。2の東側に併走している。検出長は21.03mである。4は南北方向の溝である。2・3の延長線上にあり、8と接する。検出長は8.96mである。5は南北方向の溝である。2・3と併走する位置にある。検出長は7.33mである。6は南北方向の溝。5の延長線上にある。検出長は3.48mである。7は南北方向の溝。1の延長線上にある。検出長は17.46mである。8は東西方向の溝である。10と平行関係にある。検出長は



第114図 B区中世の水田

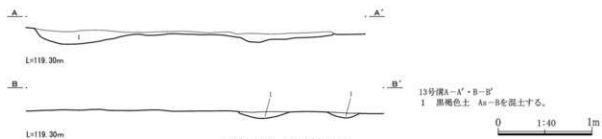


第115図 1号溝

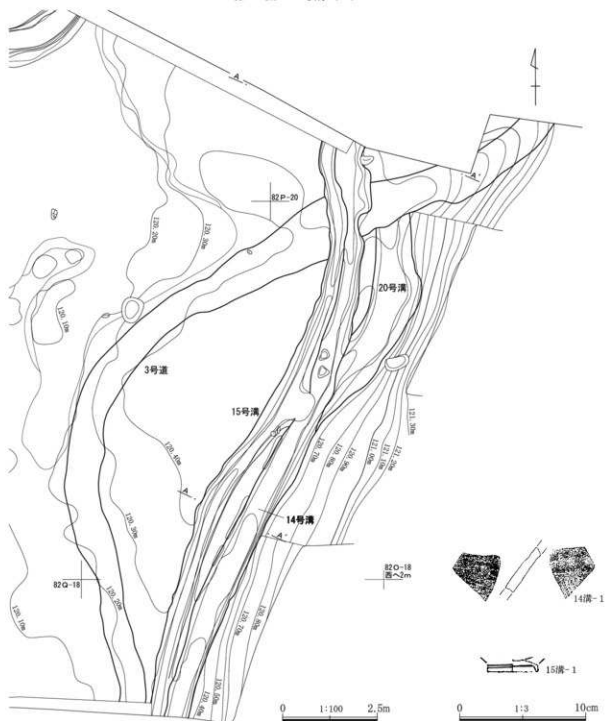


第116図 13号溝 (1)

第3章 荻窪南田遺跡の調査

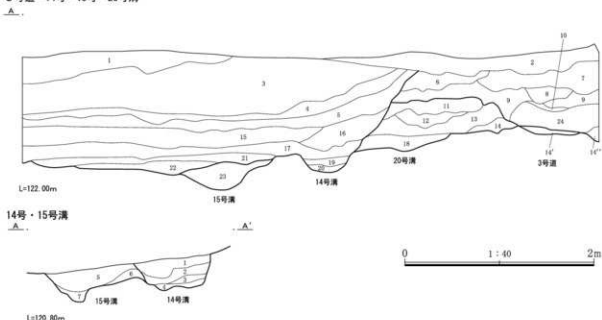


第117図 13号溝(2)



第118図 14号・15号・20号溝、3号道と出土遺物

3号溝・14号・15号・20号溝



3号溝・14号・15号・20号溝A-A'

- 1 黒褐色土 表土・田表土。
- 2 暗褐色土 表土・田表土。
- 3 黒褐色土 表土・田表土。
- 4 黒褐色土 表土・田表土。
- 5 黄灰色土 表土・田表土。
- 6 に近い黄褐色土 ローム粒を多く、炭化物を微量含む。
- 7 褐色土 ローム粒多く、黄褐色硬質ロームブロックを微量含む。
- 8 黒色土 白色砂粒を少量、黄褐色硬質ロームブロックを少量含む。
- 9 褐色土 ローム粒を全体的に少量含む。
- 10 暗褐色土 黄褐色硬質ローム粒を多く含む。しまりあり、やや硬質。
- 11 に近い黄褐色土 暗灰色シルトを少量含む。
- 12 に近い黄褐色土 暗灰色シルトを多く、ローム粒を微量含む。
- 13 黒褐色土 暗灰色シルト・白色砂粒を少量含む。
- 14 黒褐色土 しまりあり、粘質ロームを少量含む。溝の跡面。
- 14' 黒褐色土
- 14'' 黒褐色土 14層を利用した養生土。
- 15 黒褐色土 黄褐色硬質ロームブロックを多く含む。鉄分の沈着が見られる。
- 16 灰色土 黄褐色硬質ロームブロックを微量、炭化物を少量含む。
- 17 黒褐色土 黄褐色硬質ロームブロックをやや多く、灰色砂粒を多く含む。
- 18 黄灰色土 粘質ロームを主体とする。
- 19 褐色土 直径1mm大の灰色砂粒を多く、粘質ロームブロックを少量含む(14号溝埋設土)。
- 20 黒褐色土 直径1mm大の灰色砂粒を多く、粘質ロームブロックも多く含む(14号溝埋設土)。
- 21 褐色土 灰色砂粒・黄褐色ローム粒を主体とする。鉄分の沈着が見られる。
- 22 黄灰色土 ややシルト質。灰色砂粒を多く、黄褐色ロームブロックも多く含む。
- 23 暗黄褐色土 礫が多い、シルト質の土粒やロームと考えられるブロック含む(15号溝埋設土)。

14号・15号溝A-A'

- 1 灰黄褐色土 しまりあり。粘性ややあり。直径1~7mm程度の黄褐色ロームブロック灰色砂をやや多く含む。
- 2 灰黄褐色土 粘性あり。1層に準ずるがロームブロックを多く含む。
- 3 暗褐色土 直径1mm程度の黄砂。直径1~5mm程度の黄褐色砂粒を多く含む。
- 4 に近い黄褐色土 直径1mm大の黄褐色砂粒。粘性のあるロームブロックを主体とする(1~4層、14号溝埋設土)。
- 5 褐色土 ややシルト質。直径1mm大の灰色砂粒を微量含む。
- 6 黒褐色土 直径1mm以下の黒色細粒を多く、黄褐色ロームブロックを少量含む。
- 7 褐色土 直径1~30mm大の砂礫を主体とする(5~7層、15号溝埋設土)。

第119図 14号・15号・20号溝、3号溝

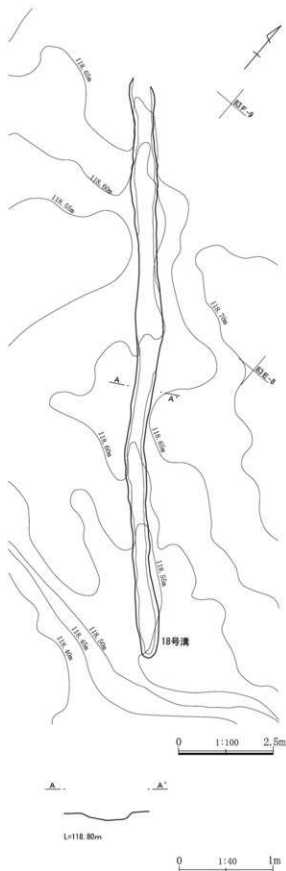
49.94mである。9は南北方向の溝である。8・10と接する。検出長は11.08mである。10は東西方向の溝である。検出長は49.04mである。

埋設土 灰色砂あるいは鉄分凝集の灰色砂が堆積していた。

所見 中世以降の所産と考えられる浅間B軽石下

水田遺構を掘り込んでいる。出土遺物もないことから詳細な掘削年代は不明であるが中世以降の所産と考えられる。

東西方向の溝は等高線に沿った地割が存在したことを表している。8は圃場整備前の地割とほぼ一致している。南北方向の溝群と近年の地割の関係は不



第120図 18号溝

明である。

14号溝 (第118・119図、PL36)

位置 82O-18~20、82P-17・18G

重複 15号・20号溝と重複、15号・20号溝に後出する。

形状 B2区の東端で検出した溝である。A区台地とB区沖積地の変換点を回っている。検出長は15.93mである。

全体形状は不明であるが断面形は逆台形を呈していたと考えられる。北端部分で上幅は約0.60m、下幅は約0.30mを測る。深さは約0.15~0.35mである。

埋没土 ロームブロックを含む褐色土が堆積していた。埋没土中から陶器櫛鉢の破片(1)が出土している。(観P197)

所見 中世以降、近・現代にいたるまで使用されていたと考えられる。流水はなく区画溝としての性格が想定される。

15号溝 (第118・119図、PL36)

位置 82O-18~20、82P-17・18G

重複 14号・20号溝と重複、14号溝に先出する。形状 B2区の東端で検出した溝である。14号溝に平行して掘削されている。検出長は15.96mである。

全体形状は不明であるが、残存部分の断面形は逆台形である。北端部分の上幅は約1.00m、下幅は約0.30mを測る。深さは0.35mである。

埋没土 黒褐色土・暗灰黄色土が堆積していた。埋没土中から磁器碗の破片(1)が出土している。(観P198)

所見 中世以降、近・現代にいたるまで使用されていたと考えられる。区画溝と考えられる。

18号溝 (第120図)

位置 83D-6・7、83E-7・8、83F-8G

形状 B4区で検出した北西から南東方向に延びる溝である。両端とも削平されており、全体形状は不明である。検出長は14.93mである。断面形は皿

状を呈している。上幅は0.45～0.70m、下幅は0.25～0.52mを測る。深さは0.05m以下であった。底面の標高は北西端で118.67m、南東端で118.55mである。

所見 中世以降の所産と考えられるが詳細な掘削年代は不明である。

20号溝 (第118・119図、PL36)

位置 82O-19G

重複 14号・15号溝と重複、14号溝に先出する。また、3号道にも先出する。

形状 B2区東端で検出。14号・15号溝と平行、台地縁辺を掘削していた。検出長は4.16mであった。埋没土 しぶい黄褐色土・黒褐色土・黄灰色土が堆積していた。

所見 中世以降、近・現代まで使用されていたものと考えられる。区画溝と考えられる。

(4) 道

3号道 (第118・119・121図、PL36・37)

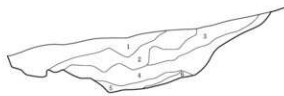
位置 82N・O-19・20、82P-17～19、82Q-18G

重複 82O-19・20グリッドで14号・15号・20号溝と重複、20号溝に先出する。

形状 A区洪積台地縁辺で検出された。検出長は22.13mである。路線は西側に大きく張り出しているが南北両端とも調査区域外におよぶ。北側は台地上へ延びている。北半の走向方向はN-55°-Eである。路面の幅は0.56～1.48mで、硬化面が検出された。

埋没土 断面逆台形状の掘り方内に黒褐色土が堆積していた。最上位が硬化面である。深さは0.12～0.20mである。

A.



L=122.20m

A.

- 1 黒褐色土 ローム粒を全体的に少量含む。
- 2 黒褐色土 ローム粒を少量、ロームブロック・灰白色砂粒を微量含む、やや軟質。
- 3 暗褐色土 ローム粒を全体的にやや多く、灰白色砂粒を少量含む、やや軟質。
- 4 黒褐色土 ローム粒を微量含む。
- 5 しぶい黄褐色土 ローム粒・ロームブロックを主体とした硬化面。
- 6 暗褐色土 直径10mm前後のロームブロックを多く含む。

0 1:40 2m

第121図 3号道

所見 埋没土に浅間A軽石が混入していた。中世以降の遺構と考えられるが詳細な年代は不明である。本遺構は、南田と明安寺の字境に相当する。

4号道 (第122図)

位置 82S-5、82T-4・5G

重複 5号道との重複関係は不明である。

形状 A区洪積台地上で検出された。北東から南西方向に台地縁辺部に沿うように低地から台地上に向かって延びる。路線の検出長は9.16mである。その走行方向はN-65°-Eである。路面の幅は0.95m前後を測り、地山を0.05m以上掘り込んでいた。埋没土 灰色砂質土で埋没、厚さ1cm弱の硬化面が形成されていた。複数回にわたり路面が形成されている。

所見 詳細な年代は不明であるが土地改良事業前の地割りに反映されており、馬入れとして使用されていたものである。

5号道 (第122図、PL37)

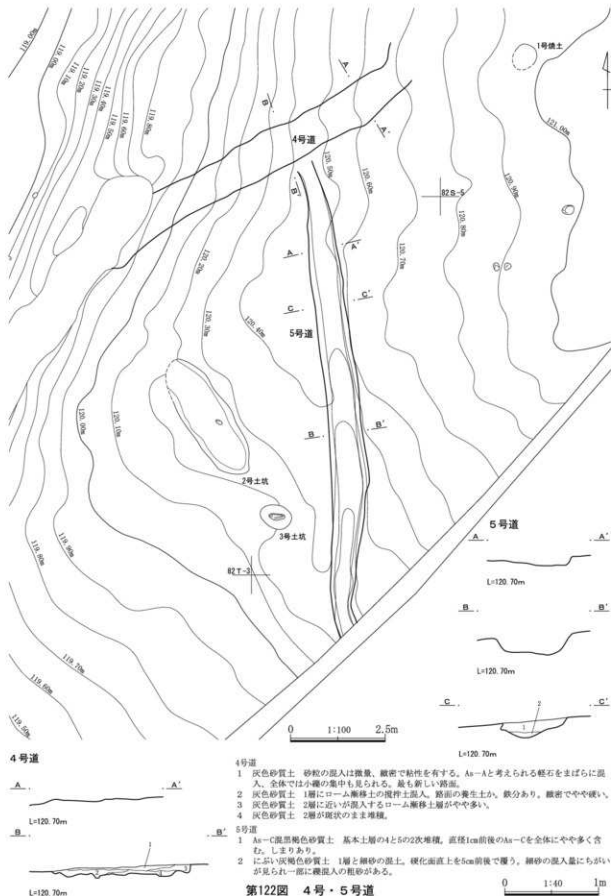
位置 82S-2～5G

重複 4号道との前後関係は不明である。

形状 A区台地上を南北方向に延びる道である。路線の検出長は12.23m、その走行方向はN-5°-Wである。路面はAs-C混黒褐色土を掘り込んでおり、硬化面の幅は0.60m前後を測った。

埋没土 上層にAs-C混黒褐色砂質土、硬化面直上にしぶい灰褐色砂質土が厚さ5cm前後堆積していた。

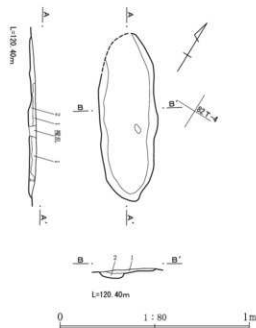
所見 埋没土中に浅間B軽石の堆積が見られないことから中世以降の所産と考えられるが時期を特定できる遺物もなく、詳細な使用年代は不明である。



第122図 4号・5号道

第3章 荻窪南田遺跡の調査

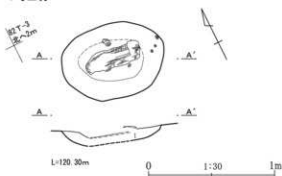
2号土坑



3号土坑

- 1 As-C混黒褐色砂質土 均質にややしる。全体に炭化材を多く含む。2層との境に薄い硬化面がある。
- 2 にぶい黄褐色砂質土 As-Cを混入。均質でややしる。1・2層いずれも自然埋没。

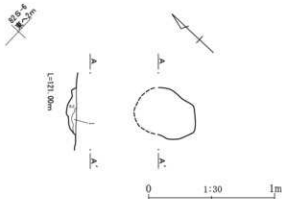
3号土坑



3号土坑

- 1 As-C混黒褐色砂質土 1~5cmの炭化物を多く含む。黒味強い。

1号焼土痕



1号焼土

- 1 にぶい黄褐色砂質土 炭粒わずかに混入。
- 2 にぶい黄褐色土 1層が全体に被熱。淡い朱色をおびる。As-YF直上の固結ブロックが焼けた小塊あり。

第124図 中世以降の土坑と焼土痕

6号道 (第123図)

位置 92F-1G

形状 A区東側の調査区境界部分の土層断面観察で確認したため走行方向、形状については不明である。路面の幅は2m強である。南側に幅0.60mの側溝が付設されている。埋没土の状況から2時期以上に変遷していることがわかる。

埋没土 黒色砂質土を掘り込む。路盤は粘性をおびた土粒と砂層の混土を互層にして硬くしている。

所見 埋没土中の浅間A軽石の状況から天明3年以後の所産と考えられるか詳細な使用時期については不明である。

7号道 (第123図)

位置 82G-20G

形状 A区東側の調査区境界部分の土層断面観察で確認したため、走行方向、形状については不明である。路面の幅は3m近い。南側に浅い側溝を付設している。側溝は新旧2時期あり旧段階のものは幅1mを越えている。

埋没土 As-C混黒褐色砂質土上面まで掘り込む。

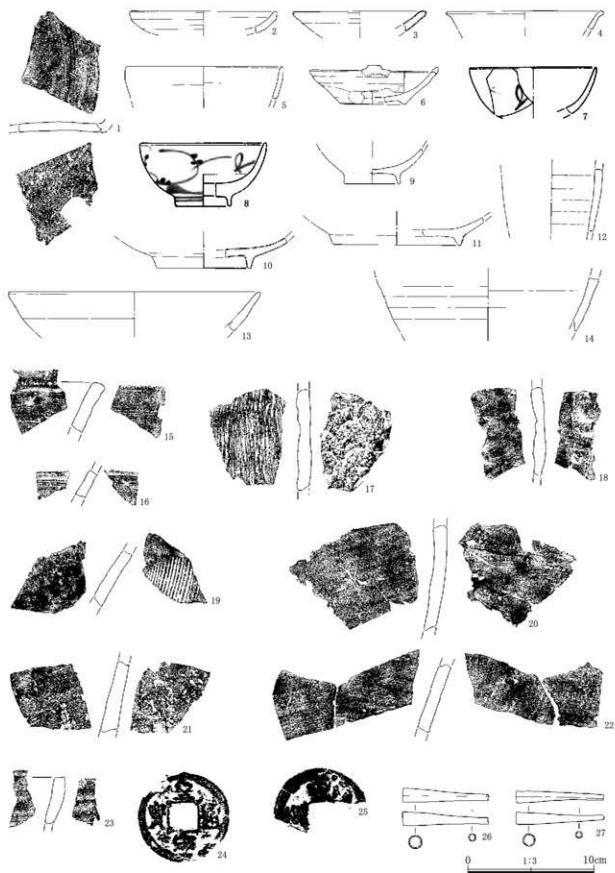
所見 3号道より新しく、土地改良事業前の耕地に残る馬入れの前身となる可能性が大きい。詳細な使用時期については不明である。

8号道 (第123図、PL37)

位置 83C~F-20、93C~H-1、93H-2G

重複 浅間B軽石下水田を切って構築されている。

形状 B2区で検出した東西方向の道である。路



第125図 中世以降遺構外出土の遺物

第3章 荻窪南田遺跡の調査

線の検出長は29.93m、その走行方向はN-70°-Wである。西端は調査区域外におよんでいる。路面の幅は0.56~2.80mである。

埋没土 路面中に0.20m前後の礫が見られた。路盤の養生に用いられたものと考えられる。

所見 中世以降の所産と考えられるが詳細な使用年代は不明である。

(5) 土坑

2号土坑 (第124図、PL37)

位置 82T-3・4G

重複 南側に3号土坑が存在する。

形状 平面形は長円形を呈している。中央は攪乱を受けている。規模は長径3.36m、短径1.04m、深さ0.18mを測る。

方位 N-32°-W

埋没土 中央部分の上層に黒褐色砂質土が、中央部の下層から周縁部にかけて黄褐色砂質土が堆積していた。ともに浅間C軽石が混入していた。上層中には針葉樹・広葉樹からなる炭化材が混入していた。また、上下両層の間に5層を貼って固めた硬化面が見られた。

所見 焼土の混入や壁底面の被熱を受けた痕跡もないため用途などは不明である。出土遺物もなく、掘削の時期も不明である。

3号土坑 (第124図)

位置 82S-3G

形状 2号土坑の南側に位置する。平面形は長円形を呈し、壁面は緩やかに立ち上がる。規模は長径0.84m、短径0.59m、深さ0.12mを測る。

方位 N-84°-E

埋没土 掘り込みの中央部分上・中層から炭化材が出土している。炭化材の他は単一の土層で堆積していた。

所見 出土遺物もなく、掘削の時期、用途などは不明である。

(6) 焼土痕 (第124図、PL37)

1号焼土痕

位置 82R-5G

形状 As-YP上位のソフトローム上面で検出された。長円形の土坑状を呈する。規模は直径0.35~0.40mを測る。壁面全体が著しく被熱しており、As-YP上の硬いロームブロックが焼土化していたが、炭・灰は伴わない。

方位 N-21°-W

埋没土 にぶい褐色土で混土粒、焼土粒の有無で分層される。

所見 出土遺物もなく、掘削の時期、用途などは不明である。

(7) 遺構外の出土遺物 (第125図、PL50)

A区・B区の両区から少量ずつではあるが遺構に伴わない資料が出土している。この中においてA区から出土した軟質陶器1点、B区から出土した陶磁器、軟質陶器、灰釉陶器、銭貨、煙管の中から23点を掲載した。この他の未掲載資料として土器類10点、瓦1点がある。

1はA区表採の軟質陶器焙烙の底部破片である。江戸時代の所産である。

2以下はB区出土の資料である。いずれも浅間B軽石降下面を精査する途上で検出された。

10の青磁皿は中国産で中世の所産である。13は陶器の平碗と考えられる。14世紀末から15世紀前半の古瀬戸である。15の陶器片口鉢は常滑産で13世紀後葉から14世紀初頭の時期の所産と考えられる。18の甕も中世常滑産である。

他は江戸時代の所産である。2・3は陶器皿である。5は陶器碗、6は陶器灯明皿である。7・8は磁器の碗である。

B区浅間B軽石面から出土した2枚の銅銭のうち24は皇宋通寶、25は銭種不明である。26・27はB区出土の煙管の吸口である。(観P198・199)

第4章 荻窪南田遺跡における自然科学分析

株式会社 古環境研究所

第1節 荻窪南田遺跡の土層とテフラ

1. はじめに

群馬県中央部の赤城山とその周辺に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、赤城、榛名、浅間など北関東地方とその周辺の火山、中部地方や中国地方さらには九州地方などの火山に由来するテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで、年代が不明な土層や遺構が検出された荻窪南田遺跡においても、地質調査を行い土層層序を記載するとともに、テフラ検出分析、火山ガラス比分析、屈折率測定を行って指標テフラの層位を把握し、遺構や土層の年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象となった地点は、B-2区第1地点、B-2区第2地点、B-1区B地点、B-1区C地点、B-1区D地点、B-1区E地点、B-3区、旧石器深掘地点、2号溝の9地点である。

2. 土層層序

(1) B-2区第1地点

B-2区第1地点では、固結した砂層（層厚20cm）を切って形成された谷が検出された（第127図）。谷を埋積した地層は、下位より垂円礫混じり灰色砂層（層厚7cm、礫の最大径41mm）、暗褐色泥炭層（層厚10cm）、灰褐色泥炭層（層厚8cm）、灰色軽石層（層厚6cm、軽石の最大径7mm、石質岩片の最大径3mm）、砂混じり暗灰色泥層（層厚4cm）、暗灰色泥層（層厚5cm）、黒泥層（層厚2cm）、白色軽石混じり灰白色細粒火山灰層（層厚2cm、軽石の最大径5mm）、暗灰色土（層厚6cm）、灰色砂層（層厚2cm）、灰白色細粒軽石混じり暗灰色土（層厚16cm、軽石の最大径2mm）、灰白色細粒軽石混じりで色調がとくに暗い暗灰色土（層厚18cm、軽石の最大径2mm）、灰白色細粒軽石混じり灰褐色土（層厚8cm、軽石の最大径3mm）、暗灰色土（層厚1cm）、黒色土（層厚0.2cm）、かすかに成層した灰褐色粗粒火山灰層（層厚4cm）からなる（第127図）。

(2) B-2区第2地点

B-2区第2地点では、下位より灰褐色泥炭層（層厚5cm）、灰色軽石層（層厚7cm、軽石の最大径8mm、石質岩片の最大径2mm）、灰色砂層（層厚3cm）、暗灰色泥層（層厚7cm）、白色軽石混じり灰白色砂層（層厚3cm、軽石の最大径13mm）が認められる（第128図）。

(3) B-1区B地点

B-1区B地点では、下位より黒泥層（層厚3cm以上）、白色軽石混じり灰白色細粒火山灰層（層厚3cm、軽石の最大径7mm）、黒褐色泥層（層厚13cm）、暗灰色泥層（層厚8cm）、灰色砂層（層厚0.8cm）、暗灰色泥層（層厚5cm）、黒泥層（層厚5cm）、かすかに成層した灰褐色粗粒火山灰層（層厚6cm）、砂混じり灰色土（層厚14cm）、砂混じり褐色土（層厚18cm）、灰色作土（層厚19cm）が認められる（第129図）。

(4) B-1区C地点

B-1区C地点では、下位より灰色砂質土（層厚17cm以上）、灰色軽石を多く含む灰色土（層厚14cm、軽石

第4章 荻窪南田遺跡における自然科学分析

の最大径6mm、7層)、黒灰褐色泥層(層厚9cm、6層)、成層したテフラ層(層厚7.9cm、5層)、砂混じり灰色土(層厚13cm、4層)、砂混じり褐色土(層厚21cm、3層)、灰色作土(層厚11cm)が認められる(第130図)。これらのうち成層したテフラ層は、下位より灰色砂質細粒火山灰層(層厚0.1cm)、褐色粗粒火山灰層(層厚0.6cm)、灰色粗粒火山灰層(層厚0.3cm)、橙褐色粗粒火山灰層(層厚2cm)、黄灰色粗粒火山灰層(層厚3cm)、桃色細粒火山灰層(層厚2cm)からなる。このテフラ層は、その層相から1108(天仁元)年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ(As-B, 荒牧, 1968, 新井, 1979)に同定される。

(5) B-1区D地点

B-1区D地点では、下位より砂混じり暗灰褐色土(層厚6cm、7層)、黄灰色砂層(層厚6cm、6'層)、暗灰色泥層(層厚5cm)、灰色砂層(層厚0.4cm)、黒泥層(層厚6cm、6層)、葉理が発達した灰色砂層(層厚7cm、5'層)、砂混じり灰色土(層厚3cm以上、4層)が認められる(第131図)。

(6) B-1区E地点

B-1区E地点では、下位より白色軽石混じり黒灰色泥層(層厚12cm、軽石の最大径13mm)、灰色砂層(層厚6cm)、砂混じり暗灰色泥層(層厚13cm)、灰色泥層(層厚13cm)、黒灰褐色泥層(層厚9cm)、灰褐色粗粒火山灰層(層厚3cm以上)が認められる(第132図)。

(7) B-3区

B-3区では、下位より黒褐色泥層(層厚3cm以上)、白色軽石混じり灰白色細粒火山灰層(層厚2cm、軽石の最大径5mm)、灰褐色泥層(層厚22cm)、暗灰褐色泥層(層厚19cm)、黄色砂層(層厚2cm)、黒灰色泥層(層厚2cm)、黄灰色砂層(層厚0.7cm)、黒泥層(層厚0.3cm)、かすかに成層した灰褐色粗粒火山灰層(層厚6cm)、砂混じり灰色土(層厚3cm以上)が認められる(第133図)。これらのうち、かすかに成層した灰褐色粗粒火山灰層の直下からは、水田遺構が検出されている。

(8) 旧石器深掘地点

旧石器深掘地点では、下位より褐色スコリア混じり褐色土(層厚8cm以上、スコリアの最大径4mm)、灰色石質岩片を多く含む暗灰褐色土(層厚42cm、石質岩片の最大径13mm)、灰褐色土(層厚25cm)、橙色軽石混じり褐色土(層厚13cm、軽石の最大径4mm)、褐色土(層厚13cm)、橙色軽石層(層厚6cm、軽石の最大径7mm、石質岩片の最大径2mm)、褐色砂質土(層厚2cm)、橙色粗粒火山灰層(層厚2cm、軽石の最大径2mm)、砂混じり暗灰色土(層厚3cm)、褐色砂質土(層厚2cm)、橙色軽石層(層厚3cm、軽石の最大径4mm、石質岩片の最大径2mm)、橙色細粒軽石に富む褐色砂質土(層厚4cm)、褐色土(層厚15cm)、白色細粒軽石混じり褐色土(層厚12cm、軽石の最大径3mm)、黄白色軽石(最大径9mm)や白色軽石(最大径7mm)が多く含まれる褐色土(層厚14cm)、黄色細粒軽石混じり褐色土(層厚11cm、軽石の最大径3mm)、黄褐色土(層厚10cm)、成層したテフラ層(層厚13.4cm)、褐色土(層厚19cm)、暗褐色土(層厚24cm)が認められる(第134図)。

これらのうち、中位に認められる3層のテフラ層は、層相から、約1.9~2.4万年前^{*)}に浅間火山から噴出した浅間板鼻褐色軽石群(As-BP Group, 新井, 1962, 町田・新井, 1992, 早田, 1996, 未公表資料)の中・上部に同定される。また、成層したテフラ層は、下位より黄色軽石層(層厚11cm、軽石の最大径8mm、石質岩片の最大径2mm)、灰色細粒火山灰層(層厚0.2cm)、桃色粗粒火山灰層(層厚0.8cm)、灰色砂質細粒火山灰層(層厚1.4cm)からなる。このテフラ層は、層相から、約1.3~1.4万年前^{*)}に浅間火山から噴出した浅間板鼻黄色軽石(As-YP, 新井, 1962, 町田・新井, 1992, 早田, 1996)に同定される。

(9) 2号溝

道路状遺構の可能性が考えられている2号溝では、下位より褐色土(層厚2cm以上)と黒褐色土(層厚2cm)

が認められる。その上位には、さらに成層したテフラ層（層厚12.9cm）、灰褐色砂質土（層厚3cm）、青灰色砂質細粒火山灰層（層厚2.2cm）、暗灰褐色土（層厚3cm以上）が認められる。

これらのうち、成層したテフラ層は、下位より灰色砂質細粒火山灰層（層厚0.2cm）、褐色粗粒火山灰層（層厚0.5cm）、灰色砂質細粒火山灰層（層厚0.2cm）、黄色粗粒火山灰層（層厚0.7cm）、青灰色細粒火山灰層（層厚0.2cm）、かすかに成層した黄色粗粒火山灰層（層厚1.5cm）、暗灰色粗粒火山灰層（層厚0.3cm）、橙褐色粗粒火山灰層（層厚1.2cm）、暗灰色粗粒火山灰層（層厚0.3cm）、黄白色粗粒火山灰層（層厚3cm）、桃色砂質細粒火山灰層（層厚5cm）からなる。このテフラ層は、層相からAs-Bに同定される。また、その上位の青灰色砂質細粒火山灰層は、層位や層相などから1128（大治3）年に浅間火山から噴出したと推定されている浅間柏川テフラ（As-Kk, 早田, 1991, 1995）に同定される。

3. テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

B-2区第1地点、B-2区第2地点、B-1区B地点、B-1区C地点、B-1区D地点、B-1区E地点、B-3区において採取された試料のうち、29点についてテフラ検出分析を行った。分析の手順は、次の通りである。

- 1) 試料10gを秤量。
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 3) 80℃で恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下で観察し、テフラ粒子の量や特徴を把握。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を第12表に示す。B-2区第1地点では、試料18のテフラ層に、スポンジ状に比較的良く発泡した灰白色軽石（最大径7.8mm）がとくに多く含まれている。この軽石の班品には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。この軽石は、試料17～16および試料13～2でも認められる。試料14のテフラ層には、さほど発泡の良くない白色軽石（最大径5.1mm）が多く含まれている。この軽石の班品には、角閃石や斜方輝石が認められる。同じような特徴をもつ軽石は、試料16や試料13～2でも認められる。とくに試料16に含まれる軽石については、層位から試料14のテフラ層とは別のテフラに由来する可能性が考えられる。試料1のテフラ層には、比較的よく発泡した淡褐色軽石（最大径3.0mm）がとくに多く含まれている。軽石の班品には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。

B-2区第2地点では、試料2のテフラ層に、スポンジ状に比較的良く発泡した灰白色軽石（最大径10.5mm）がとくに多く含まれている。この軽石の班品には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。この軽石は、試料1にも少量含まれている。試料1には、さほど発泡の良くない白色軽石（最大径4.2mm）が多く含まれている。この軽石の班品には、角閃石や斜方輝石が認められる。

B-1区B地点では、試料2のテフラ層に、さほど発泡の良くない白色軽石（最大径6.6mm）が多く含まれている。この軽石の班品には、角閃石や斜方輝石が認められる。試料1のテフラ層には、比較的よく発泡した淡褐色軽石（最大径3.9mm）がとくに多く含まれている。軽石の班品には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。

B-1区C地点の試料1には、さほど発泡の良くない白色軽石（最大径6.7mm）と、スポンジ状に比較的良く発泡した灰白色軽石（最大径3.3mm）が比較的よく含まれている。前者の班品には角閃石や斜方輝石、後者の班品には斜方輝石や単斜輝石が認められる。

B-1区D地点の試料2には、スポンジ状に比較的良く発泡した灰白色軽石（最大径1.8mm）がごく少量含

第4章 茨窪南田遺跡における自然科学分析

まれている。この軽石の班晶には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。試料1には、この軽石（最大径4.1mm）のほかに、さほど発泡の良くない白色軽石（最大径3.7mm）が比較的多く含まれている。この軽石の班晶には、角閃石や斜方輝石が認められる。

B-1区E地点の試料4には、スポンジ状に比較的良く発泡した灰白色軽石（最大径2.9mm）が少量含まれている。この軽石の班晶には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。この試料には、ほかにさほど発泡の良くない白色軽石（最大径1.4mm）も含まれている。この軽石の班晶には、角閃石や斜方輝石が認められる。

B-3区の試料3には、スポンジ状に比較的良く発泡した灰白色軽石（最大径6.3mm）や、さほど発泡の良くない白色軽石（最大径3.7mm）が多く含まれている。前者の班晶には斜方輝石や単斜輝石、後者の班晶には角閃石や斜方輝石が認められる。試料2には、スポンジ状に比較的良く発泡した灰白色軽石（最大径2.0mm）や、さほど発泡の良くない白色軽石（最大径1.1mm）がごく少量含まれている。前者の班晶には斜方輝石や単斜輝石、後者の班晶には角閃石や斜方輝石が認められる。試料1のテフラ層には、比較的よく発泡した淡褐色軽石（最大径5.7mm）がとくに多く含まれている。軽石の班晶には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。

4. 火山ガラス比分析

(1) 分析試料と分析方法

旧石器深掘地点において、As-BP Groupの上下の土層から基本的に5cmごとに採取された試料のうち、5cmおきの12点について、火山ガラスで特徴づけられる指標テフラの層位を明らかにするために、火山ガラス比分析を行った。分析の手順は、次の通りである。

- 1) 試料15gを秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3) 80℃で恒温乾燥。
- 4) 分析篩により1/4-1/8mmの粒子を篩別。
- 5) 偏光顕微鏡下で250粒子を観察し、火山ガラスの色調・形態別比率を求める。

(2) 分析結果

火山ガラス比分析の結果をダイヤグラムにして第135図に、その内訳を第13表に示す。分析したいずれの試料からも、火山ガラスを検出することができた。無色透明のハブル型ガラスは、試料21~15、試料9、試料1で認められる。そのうち、試料19に出現ピーク（6.4%）があり、この試料付近に無色透明のハブル型ガラスで特徴づけられるテフラの降灰層率があると考えられる。

分厚い中間型ガラスは、試料19および試料9~1で認められる。このなかでは、試料3（2.8%）に不明瞭ながら出現ピークがあるが、試料7（1.6%）で急に増える傾向にある。またスポンジ状に発泡した火山ガラスは、試料5を除くいずれの試料にも含まれている。さらに繊維束状に発泡した軽石型ガラスは、試料3を除く、試料7~1でごく少量認められる。白色軽石を含み、軽石型ガラスが急増する試料9、また黄白色軽石を含み中間型やスポンジ状軽石型のガラスを比較的多く含む試料7付近に、テフラの降灰層率があると推定される。

5. 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

指標テフラとの同定精度を向上させるために、B-2区第1地点の試料16、旧石器深掘地点の試料9と試料7の3点について、温度一定型屈折率測定法（新井、1972、1993）により屈折率の測定を行った。

(2) 測定結果

屈折率測定の結果を第14表に示す。B-2区第1地点の試料16に含まれる火山ガラス(n)の屈折率は、1.512-1.517である。また重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石のほか、ごく少量の角閃石が含まれている。斜方輝石(γ)と角閃石(n2)の屈折率は、各々1.706-1.711と1.672-1.677である。

旧石器深掘地点の試料9に含まれる火山ガラス(n)の屈折率は、1.502-1.506である。また重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が含まれている。斜方輝石の屈折率(γ)は、1.703-1.708である。また試料7に含まれる火山ガラス(n)の屈折率は、1.501-1.502である。また重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が含まれている。斜方輝石の屈折率(γ)は、1.704-1.709である。

6. 考察

B-2区第1地点の試料16に含まれるテフラのうち、灰白色軽石については、その岩相や火山ガラスおよび斜方輝石の屈折率などから、4世紀中葉¹²に浅間火山から噴出した浅間C軽石(As-C, 荒牧, 1968, 新井, 1979)に由来すると考えられる。より下位にある試料18のテフラ層が、層相や軽石の特徴から、As-Cに同定される。また試料16に含まれる白色軽石については、角閃石の屈折率などから、5世紀に榛名火山から噴出した榛名有馬火山灰(Hr-AA, 町田ほか, 1984)に由来すると考えられる。より上位にある試料14のテフラ層は、層位や層相さらに含まれる軽石の特徴から、6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳洗川テフラ(Hr-FA, 新井, 1979, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992)に同定される可能性が高い。試料1のテフラ層は、層位や層相さらに含まれる軽石の特徴から、As-Bに同定される。したがって、ここで検出された水田遺構の層位は、As-Bの直下と考えられる。

B-2区第2地点の試料2の軽石層は、層相や含まれる軽石の特徴から、As-Cに同定される。また試料1の砂層については、Hr-FA降灰後に発生した洪水に由来すると考えられる。B-1区B地点の試料2のテフラ層は、層位や層相さらに含まれる軽石の特徴から、Hr-FAに同定される可能性が高い。また試料1のテフラ層は、層位や層相さらに含まれる軽石の特徴から、As-Bに同定される。B-1区C地点では、試料1(7層)に含まれる灰白色軽石と白色軽石については、層位や岩相から、各々As-CとHr-FAに由来する可能性が高い。

B-1区D地点の試料2と試料1に含まれる灰白色軽石は、岩相からAs-Cに由来すると考えられる。また試料2に含まれる白色軽石については、Hr-FAに由来する可能性が高い。B-1区E地点では、試料4に含まれる灰白色軽石と白色軽石については、層位や岩相から、各々As-CとHr-FAに由来する可能性が高い。B-3区の試料3と試料2に含まれる灰白色軽石と白色軽石についても、層位や岩相から、各々As-CとHr-FAに由来する可能性が高い。その下位にある砂質火山灰層は、層相からHr-FAに同定されると考えられる。試料1のテフラ層は、層相からAs-Bに同定される。したがって、ここで検出されている水田遺構の層位は、As-Bの直下に層位がある。

なお、本遺跡においては、Hr-FAとAs-B間の複数の層間に洪水堆積物が認められる。層位や本遺跡の位置を考慮すると、これらの洪水堆積物の中には、818(弘仁9)年の地震にともなって発生した斜面崩壊や土石流などに起因する洪水(能登ほか, 1990)に由来するものもあると考えられる。

旧石器深掘地点の試料19付近に降灰層のあるテフラは、火山ガラスの色調や形態などから、約2.4-2.5万年前¹³に南九州の始良カルデラから噴出した始良Tn火山灰(AT, 町田・新井, 1976, 松本ほか, 1987, 池田ほか, 1995)と考えられる。ほぼ同じ層相に認められる橙色軽石は、層位や岩相などから、本来ATの直上付近にあるAs-BPGROUP最下部の室田軽石(MP, 森山, 1972, 早田, 1990)に由来するものと考えら

れる。As-BP Groupの上位のテフラのうち、試料9付近に降灰層率のある可能性があるテフラは、若干屈折率が高い火山ガラスが含まれることや斜方輝石の屈折率などから、約1.8万年前に浅間火山から噴出した浅間白糸軽石 (As-Sr, 町田ほか, 1984, 町田・新井, 1992) の可能性がある。また試料7付近に降灰層率があると考えられるテフラは、火山ガラスの形態や屈折率、さらに重鉱物組成や斜方輝石の屈折率などから、約1.6~1.8万年前¹⁾に浅間火山から噴出した浅間大窪沢第1軽石 (As-Ok1, 中沢ほか, 1984, 町田・新井, 1992, 早田, 1996) あるいは浅間大窪沢第2軽石 (As-Ok2, 中沢ほか, 1984, 町田・新井, 1992, 早田, 1996) に由来すると考えられる。

7. 小結

荻窪南田遺跡において、地質調査、テフラ検出分析、火山ガラス比分析、屈折率測定を行った。その結果、下位より始良Tn火山灰 (AT, 約2.4~2.5万年前¹⁾)、浅間板鼻褐色軽石群 (As-BP Group, 約1.9~2.4万年前¹⁾)、浅間白糸軽石 (約1.8万年前) あるいは浅間大窪沢軽石群 (As-Ok1およびAs-Ok2, 約1.6~1.8万年前¹⁾)、浅間板鼻黄色軽石 (As-YP, 約1.3~1.4万年前¹⁾)、浅間C軽石 (As-C, 4世紀中葉²⁾)、榛名有馬火山灰 (Hr-AA, 5世紀)、榛名二ツ岳洗川テフラ (Hr-FA, 6世紀初頭)、浅間Bテフラ (As-B, 1108年)、浅間船川テフラ (As-Kk, 1128年) などを検出することができた。荻窪南田遺跡で検出された水田遺構の層位は、As-Bの直下にあると考えられる。

*1 放射性炭素 (¹⁴C) 年代。

*2 現在では4世紀を遡るとする説が有力になっているようである (たとえば、若狭, 2000)。しかし、具体的な年代観が示された研究報告例はまだない。現段階においては「3世紀後半」あるいは「3世紀終末」と考えておくのが妥当なのかも知れないが、土器をもとにした考古学的な年代観の変更については、考古学研究者による明確な記載を待ちたい。

文献

- 新井房夫 (1962) 関東盆地北西部地域の第四紀編年。群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79.
- 新井房夫 (1972) 斜方輝石・角閃石によるテフラの同定—テフロクロノロジーの基礎的研究。第四紀研究, 11, p.254-269.
- 新井房夫 (1979) 関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層。考古学ジャーナル, no.53, p.41-52.
- 新井房夫 (1993) 温度一定型屈折率測定法。日本第四紀学会編「第四紀試料分析法—研究対象別分析法」, p.138-148.
- 荒牧重雄 (1968) 浅間火山の地質。地団研専報, 14, 45p.
- 池田晃子・奥野 充・中村俊夫・筒井正明・小林哲夫 (1995) 南九州、始良カルデラ起源の大隅軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器質量分析法による¹⁴C年代。第四紀研究, 34, p.377-380.
- 町田 洋・新井房夫 (1976) 広域に分布する火山灰—始良Tn火山灰の発見とその意義。科学, 46, p.339-347.
- 町田 洋・新井房夫 (1978) 南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ—アカホヤ火山灰。第四紀研究, 17, p.143-163.
- 町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス。東京大学出版会, 276p.
- 町田 洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫 (1984) テフラと日本考古学—考古学研究と関係するテフラのカタログ。古文化財編集委員会編「古文化財に関連する保存科学と人文・自然科学」, p.865-928.
- 松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗 (1987) 始良Tn火山灰 (AT) の¹⁴C年代。第四紀研究, 26,

p.79-83.

森山昭雄 (1972) 榛名火山東・南麓の地形-とくに軽石流の地形について-。愛知教育大学地理学報告, 36-37, p.107-116.

中沢英俊・新井房夫・遠藤邦彦 (1984) 浅間火山, 黒斑~前掛期のテフラ層序。日本第四紀学会講演要旨集, no.14, p.69-70.

能登 健・内田憲治・早田 勉 (1990) 赤城山南麓の歴史地震-弘仁九年の地震に伴う地形変化の調査と分析-。信濃, 42.

坂口 一 (1986) 榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器, 群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」, p.103-119.

早田 勉 (1989) 6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害。第四紀研究, 27, p.297-312.

早田 勉 (1990) 群馬県の自然と風土。群馬県史通史編, 1, p.39-129.

早田 勉 (1991) 浅間火山の生い立ち。佐久考古通信, no.53, p.2-7.

早田 勉 (1995) テフラからさぐる浅間山の活動史。御代田町誌自然編, p.22-43.

早田 勉 (1996) 関東地方~東北地方南部の示標テフラの諸特徴-とくに御厩第1テフラより上位のテフラについて-。名古屋大学加速器質量分析計業績報告書, 7, p.256-267.

若狭 徹 (2000) 群馬の弥生土器が終わるとき。かみつけの里博物館編「人が動く・土器も動く-古墳が成立する頃の土器の交流」, p.41-43.

第12表 テフラ検出分析結果

地点	試料	軽石の量	軽石の色調	軽石の最大径
B-2区	1	+++++	淡褐	3.0
第1地点	2	++	白, 灰白	3.9, 1.9
	4	++	白, 灰白	3.1, 2.8
	6	++	灰白, 白	3.9, 3.3
	8	++	灰白, 白	4.4, 3.8
	10	++	灰白, 白	3.9, 4.1
	12	+++	灰白>白	3.9, 3.3
	13	++	灰白, 白	4.2, 3.7
	14	+++	白	5.1
	15	-	-	-
	16	++	灰白>白	3.0, 2.1
	17	+++	灰白	5.3
	18	+++++	灰白	7.8
	20	-	-	-
	22	-	-	-
	23	-	-	-
24	-	-	-	
26	-	-	-	
B-2区	1	+++	白>灰白	4.2, 2.1
第2地点	2	+++++	灰白	10.5
B-1区B地点	1	+++++	淡褐	3.9
	2	+++	白	6.6
B-1区C地点	1	++	白, 灰白	6.7, 3.3
B-1区D地点	1	++	灰白, 白	4.1, 3.7
	2	(+)	灰白	1.8
B-1区E地点	4	+	灰白>白	2.9, 1.4
B-3区	1	+++++	淡褐	5.7
	2	(+)	灰白>白	2.0, 1.1
	3	+++	灰白, 白	6.3, 3.7

+++++: とくに多い, ++++: 多い, ++: 中程度, +: 少ない,
 (+): 非常に少ない, -: 認められない, 最大径の単位は, mm.

第13表 A区82K-14グリッドにおける火山ガラス比分析結果

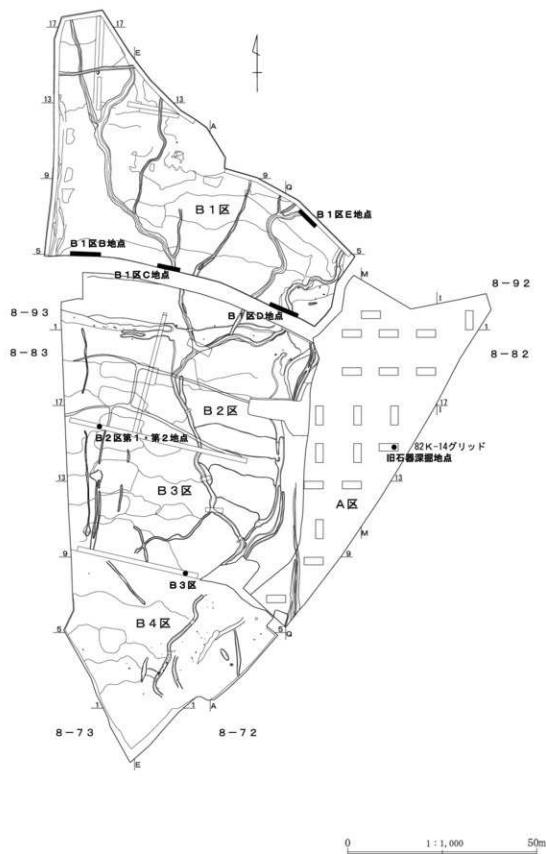
試料	bw(cl)	bw(pb)	bw(br)	md	pm(sp)	pm(fb)	その他	合計
1	0	0	0	3	1	1	245	250
3	1	0	0	7	1	0	241	250
5	0	0	0	5	0	1	244	250
7	0	0	0	4	4	1	241	250
9	1	0	0	1	3	0	245	250
11	0	0	0	0	1	0	249	250
13	0	0	0	0	1	0	249	250
15	13	0	0	0	1	0	236	250
17	15	0	0	0	3	0	232	250
19	16	0	0	1	3	0	230	250
21	3	0	0	0	4	0	243	250
23	0	0	0	0	2	0	248	250

数字は粒子数. bw:バブル型, md:中間型, pm:軽石型, cl:無色透明, pb:淡褐色, br:褐色, sp:スポンジ状, fb:繊維束状.

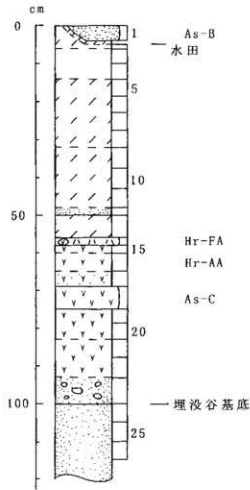
第14表 屈折率測定結果

地点	試料	火山ガラス(n)	重鉱物	斜方輝石(γ)	角閃石(n_z)
B-2区第1地点	16	1.512-1.517	opx>cpx, (ho)	1.706-1.711	1.672-1.677
旧石器深掘地点	7	1.501-1.502	opx>cpx	1.704-1.709	-
旧石器深掘地点	9	1.502-1.506	opx>cpx	1.703-1.708	-

屈折率は温度一定型屈折率測定法(新井, 1972, 1993)による. opx:斜方輝石, cpx:単斜輝石, ho:角閃石. 重鉱物の()は, 量が少ないことを示す.

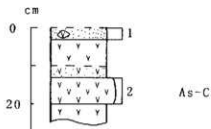


第126図 科学分析試料採取地点



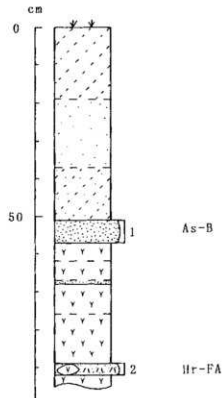
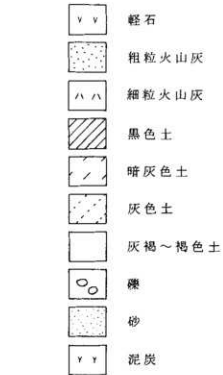
数字はテフラ分析の試料番号

第127図 B2区第1地点の土層柱状図



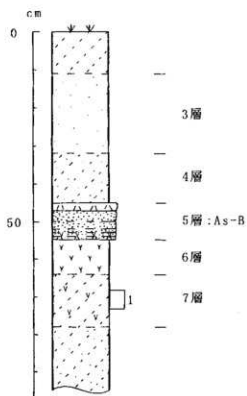
数字はテフラ分析の試料番号

第128図 B2区第2地点の土層柱状図



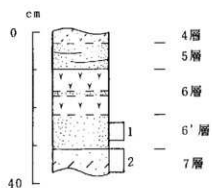
数字はテフラ分析の試料番号

第129図 B1区B地点の土層柱状図



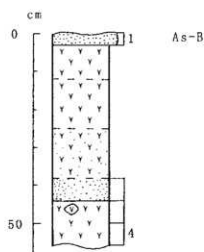
数字はテフラ分析の試料番号

第130図 B1区C地点の土層柱状図



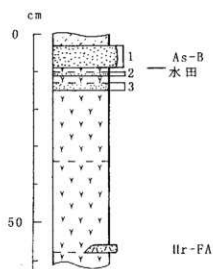
数字はテフラ分析の試料番号

第131図 B1区D地点の土層柱状図



数字はテフラ分析の試料番号

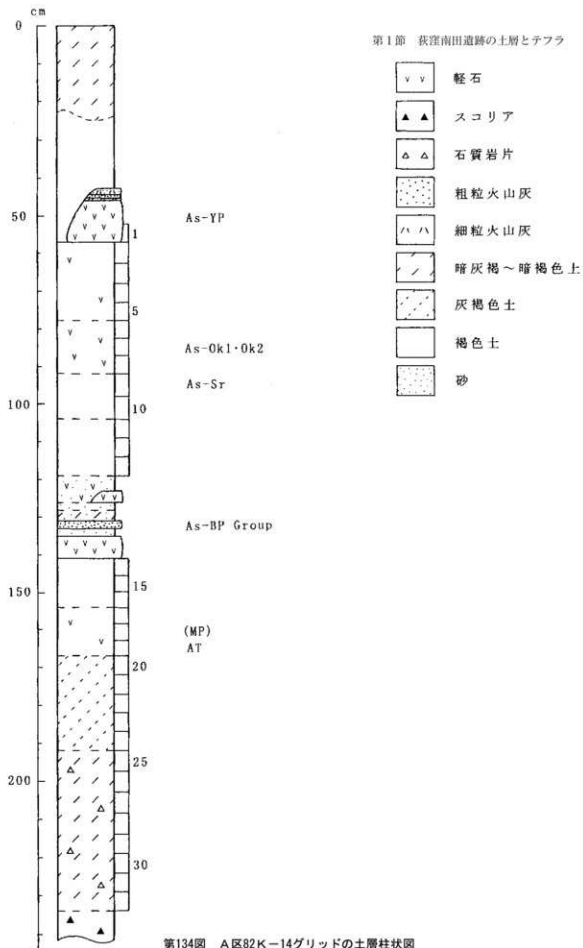
第132図 B1区E地点の土層柱状図



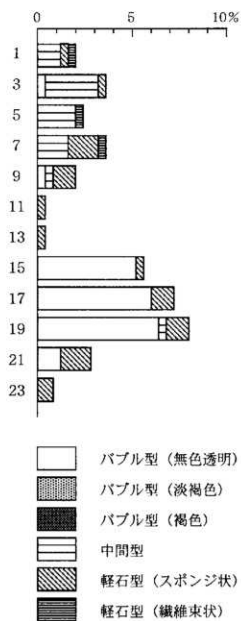
数字はテフラ分析の試料番号

第133図 B3区の土層柱状図

第1節 荻窪南田遺跡の土層とテフラ



第134図 A区82K-14グリッドの土層柱状図



第135図 A区82K-14グリッドの火山ガラス比ダイヤグラム

第2節 荻窪南田遺跡におけるプラント・オパール分析

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸（ SiO_2 ）が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石（プラント・オパール）となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査が可能である（杉山、2000）。

2. 試料

分析試料は、B-2区の第1地点と第2地点、B-1区のB地点、C地点、E地点、およびB-3区の6地点から採取された計26点である。試料採取箇所を分析結果の柱状図に示す。

3. 分析法

プラント・オパール分析は、ガラスピース法（藤原、1976）を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
- 2) 試料約1gに対し直径約40 μm のガラスピースを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）
- 3) 電気灰化法（550℃・6時間）による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射（300W・42kHz・10分間）による分散
- 5) 沈底法による20 μm 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパールを対象として行った。計数は、ガラスピース個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスピース個数に、計数されたプラント・オパールとガラスピース個数の比率をかけて、試料1g中のプラント・オパール個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10 $\text{-}5\text{g}$ ）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94（種実重は1.03）、ヒエ属（ヒエ）は8.40、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、タケ亜科（ネザサ節）は0.48である。

4. 分析結果

水田跡（稲作跡）の検討が主目的であることから、同定および定量はイネ、ヒエ属型、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科の主要な5分類群に限定した。これらの分類群について定量を行い、その結果を第15表および第136・137図に示した。写真図版4に主要な分類群の顕微鏡写真を示す。

5. 考察

(1) 水田跡の検討

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山、2000）。ただし、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

1) B-2区第1地点

第4章 荻窪南田遺跡における自然科学分析

As-B直下層（試料1）からAs-Cの下層（試料11）までの層準について分析を行った。その結果、As-B直下層（試料1）からHr-FA直上層（試料6）までの各層、およびHr-AA混層（試料8）からイネが検出された。このうち、As-Bの下位層（試料4）では密度が5,300個/gと高い値であり、水田遺構が検出されたAs-B下層（試料2）やAs-Bの下位層（試料5）でも3,800~4,500個/gと比較的高い値である。したがって、これらの層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

その他の層準では、密度が1,500~2,800個/gと比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては、稲作が行われていた期間が短かったこと、土層の堆積速度が速かったこと、洪水などによって耕作土が流出したこと、採取地点が畦畔など耕作面以外であったこと、および上層や他所からの混入などが考えられる。

2) B-2区第2地点

As-Cの上層（試料1）とAs-C直下層（試料2）について分析を行った。その結果、As-Cの上層（試料1）からイネが検出された。密度は600個/gと低い値である。イネの密度が低い原因としては、前述のようなことが考えられる。

3) B-1区B地点

As-B直下層（試料1）からHr-FA直下層（試料3）までの層準について分析を行った。その結果、As-B直下層（試料1）とその下層（試料2）からイネが検出された。密度は800~1,300個/gと比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては、前述のようなことが考えられる。

4) B-1区C地点

As-B直下層（試料1）について分析を行った。その結果、イネは検出されなかった。

5) B-1区E地点

As-B直下層（試料1）から砂層直下層（試料4）までの層準について分析を行った。その結果、すべての試料からイネが検出された。このうち、砂層直下層（試料4）では密度が5,300個/gと高い値であり、As-Bの下層（試料2、3）でも3,800~4,500個/gと比較的高い値である。したがって、これらの各層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。As-B直下層（試料1）では密度が700個/gと低い値である。イネの密度が低い原因としては、前述のようなことが考えられる。

6) B-3区

As-B直下層（試料1）とその下層（試料2、3）およびHr-FA直下層（試料4）について分析を行った。その結果、As-B直下層（試料1）とその下層（試料2、3）からイネが検出された。このうち、水田遺構が検出されたAs-B直下層（試料1）では密度が1,500個/gと比較的低い値である。ただし、同層は直上をテフラ層で覆われていることから、上層から後代のものが混入した可能性は考えにくい。したがって、同層の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。

その他の層準では、密度が800~2,700個/gと比較的低い値である。イネの密度が低い原因としては、前述のようなことが考えられる。

(2) 堆積環境の推定

ヨシ属は湿地的なところに生育し、ススキ属やタケ亜科は比較的乾いたところに生育している。このことから、これらの植物の出現状況を検討することによって、堆積当時の環境（乾燥・湿潤）を推定することができる。イネ以外の分類群では、ほとんどの層準でタケ亜科（おもにネササ節型）が多量に検出され、ヨシ属も比較的多く検出された。おもな分類群の推定生産量によると、全体的にヨシ属が優勢であり、とくにAs-B直下層ではヨシ属が卓越していることが分かる。

以上のことから、稲作が開始される以前の遺跡周辺は、ヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、Hr-FAの下層の時期にそこを利用して調査区の一部で水田稲作が開始されたと推定される。なお、稲作の開始以降もヨシ属が多く見られることから、水田雑草などとしてヨシ属が生育していたことや、休閑期間中にヨシ属が繁茂していたこと、施肥などの目的でヨシ属が水田内に持ち込まれたことなどが想定される。当時の調査区周辺にはタケ亜科（おもにネザサ属）が多く生育していたと考えられ、ススキ属などが生育する草原的なところも見られたと推定される。

As-B直下の時期には、何らかの原因によって一時的に水田が放棄され、ヨシ属が繁茂する湿地の環境になっていた可能性が考えられる。このような状況は前橋市周辺などで一般に認められており、比較的広い範囲におよぶ現象として注目される。

6. まとめ

プラント・オパール分析の結果、水田遺構が検出された浅間Bテフラ（As-B、1108年）直下層からはイネが検出され、同遺構で稲作が行われていたことが分析的に検証された。また、As-Bの下位層では部分的にイネが多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。さらに、榛名二ツ岳洗川テフラ（Hr-FA、6世紀初頭）の下層でも部分的に少量のイネが検出され、稲作が行われていた可能性が認められた。

本遺跡周辺は、稲作が開始される以前はヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、Hr-FAの下層の時期にそこを利用して調査区の一部で水田稲作が開始されたと推定される。

文献

- 杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）、考古学と植物学、同成社、p.189-213。
藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）-数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法-、考古学と自然科学、9、p.15-29。
藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）-プラント・オパール分析による水田址の探査-、考古学と自然科学、17、p.73-85。

表15表 荻窪南田遺跡におけるプラント・オパール分析結果
検出密度 (単位: ×100個/g)

分類群	学名	B-2区																
		第1地点																
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	9'	10	11	第2地点				
イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	15	38	23	53	45	28	15	7							6	1	2
ヒエ属型	<i>Echinochloa</i> type								7									
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)	149	23	38	8	53	28	48	45	15	48	30	26	78				
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	60	60	45	38	68	55	14	60	23	38	55	75	13				
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)	112	218	309	151	197	256	27	37	53	204	218	135	19	157			

推定生産量 (単位: kg/m²・cm)

イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	0.44	1.11	0.66	1.56	1.34	0.81	0.44	0.63							0.19		
ヒエ属型	<i>Echinochloa</i> type								0.63									
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)	9.43	1.42	2.38	0.48	3.34	1.75	3.03	2.84	0.95	3.01	1.89	1.62	4.94				
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	0.74	0.75	0.56	0.47	0.84	0.69	0.17	0.74	0.28	0.47	0.68	0.93	0.16				
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)	0.54	1.05	1.48	0.73	0.94	1.23	0.13	0.18	0.25	0.98	1.05	0.65	0.09	0.75			

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。

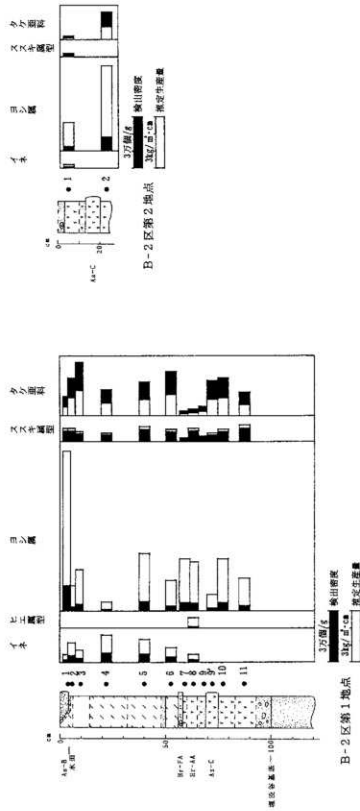
検出密度 (単位: ×100個/g)

分類群	学名	B-1区												B-3区					
		B地点						C地点						E地点					
		1	2	3	1	1	1	1	2	3	4	1	2	3	4	1	2	3	4
イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	8	13				7	38	45	53	15	8	27						
ヒエ属型	<i>Echinochloa</i> type																		
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)	120	7	114	68	37	8	37	23	121	68	27	39						
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	90	20	20	14	45	38	37	23	68	53	14	26						
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)	90	257	27	197	164	165	217	121	144	227	131	475						

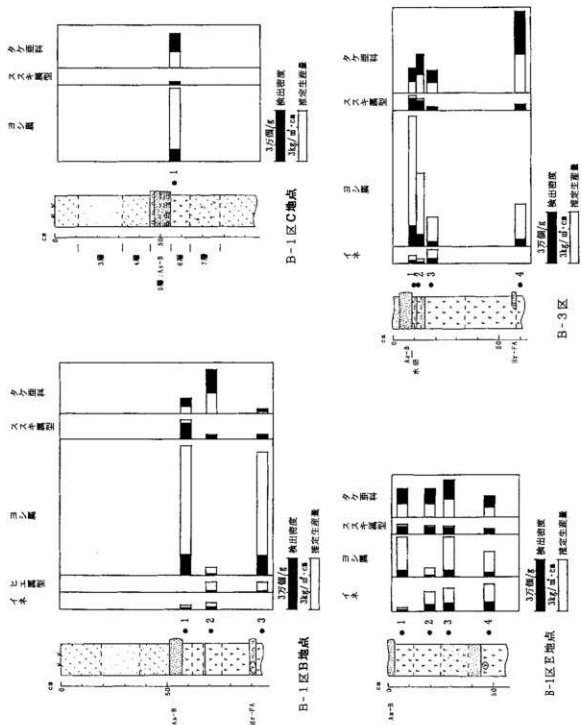
推定生産量 (単位: kg/m²・cm)

イネ	<i>Oryza sativa</i> (domestic rice)	0.22	0.39				0.22	1.11	1.32	1.56	0.44	0.22	0.81					
ヒエ属型	<i>Echinochloa</i> type		0.55	0.56														
ヨシ属	<i>Phragmites</i> (reed)	7.57	0.42	7.18	4.28	2.36	0.47	2.36	1.43	7.64	4.30	1.73	2.46					
ススキ属型	<i>Miscanthus</i> type	1.12	0.25	0.25	0.17	0.56	0.47	0.46	0.28	0.84	0.66	0.17	0.32					
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)	0.43	1.23	0.13	0.94	0.79	0.79	1.04	0.58	0.69	1.09	0.63	2.28					

※試料の仮比重を1.0と仮定して算出。



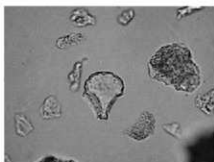
第136図 萩窪南田遺跡におけるプラント・オパール分析結果(1)



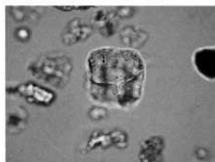
第137図 萩窪南田遺跡におけるプラント・オパール分析結果 (2)



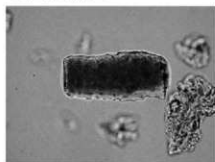
イネ
B-2区第1地点 5



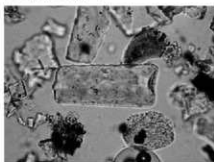
イネ
B-2区第1地点 8



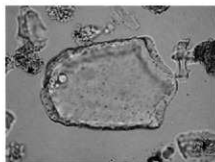
イネ (側面)
B-3区 3



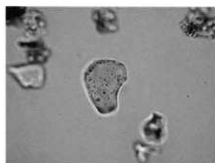
ヒエ属
B-2区第1地点 8



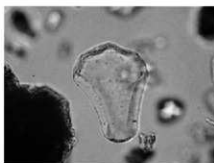
キビ族
B-1区B地点 3



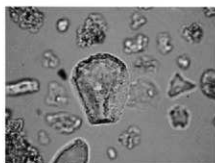
ヨシ属
B-1区B地点 2



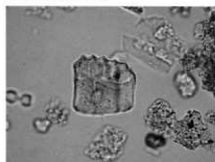
ススキ属
B-2区第1地点 3



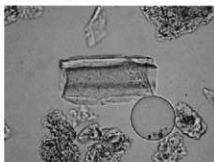
ウシクサ族B
B-2区第1地点 6



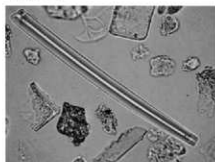
メダケ節型
B-3区 4



ネザサ節型
B-3区 3



イネ科の茎部起源
B-2区第2地点 1



海綿骨針
B-3区 3

50 μm

図版4 植物珪酸体(プラント・オパール)の顕微鏡写真

第5章 調査成果と整理のまとめ

第1節 亀泉西久保Ⅱ遺跡のまとめ

1 奈良・平安時代の遺構と遺物について

今回、亀泉西久保Ⅱ遺跡の調査において台地の縁辺から6軒の竪穴住居を検出した。出土土器の特徴から6軒の竪穴住居については、年代を検討するに足る遺物の出土がなかった5号住居を除き4号、3号、1号あるいは2号、6号の順で築造されたことが考えられる。

3号住居と2号住居の間には湧水を起源とすると考えられる小規模な埋没谷を挟んでいる。この谷は黒ボク土堆積以後急速に埋没しており、1号住居はこの中に作られている。3号から6号住居、それらと離れて2号住居が位置するように沖積地を臨む台地の縁辺に数件ずつの竪穴住居が数グループに分かれて集落を形成していたことが推定される。

集落の様相やその変遷については調査対象が限定されたため詳細については検討することは困難であるが、4号住居と6号住居が重複すること、各住居の主軸方向に相違がみられること、沖積地におい

て浅間B軽石下から水田遺構が検出されたことなどから、奈良時代以降、集落は台地奥部にその主体を有しながら、あるいは古地場所を移動させながら平安時代後半まで継続していた可能性が高いものと考えられる。

また、集落の形成開始時期については、近接して葉師塚古墳が造営されていたり、対岸の寺沢川左岸台地上に小古墳が散在することを考慮すると古墳時代、6世紀から7世紀の段階には寺沢川に沿った周辺の開発は既に進行していたものと考えられる。

沖積地内で検出した浅間B軽石下の水田については2箇所唯と考えられる高まりが検出された他は区画などの耕作に係わる具体的な情報を得ることはできなかった。台地縁辺に沿うように検出された6号から10号と呼び名した細い溝は、水田とほぼ同時期に機能していた水路と考えられることから、沖積地の上流域で得られた用水を有効的に活用しようとした姿勢の表れと見ることができよう。

4号住居出土の截頭四角錐形を呈した石製品（第

第16表 群馬県出土の重り一覧

註(1)文献中の福田氏作成表から群馬県部分を抜粋、一部修正

1	遺跡名	出土遺構	所在地	材質	重量(g)	法量 (cm) 上×下×高×厚	時期	備考	文献
1	亀泉西久保Ⅱ	4号住居	前橋市亀泉町	石製	40.27	2.0×2.7×3.5×2.9	8世紀前半	本報告の遺跡	
2	多胡蛇黒	26号土坑	吉井町大字多胡	石製	50	2.9×4.0×2.8×4.0	8世紀前半	大集落	1
3	戸神諏訪Ⅱ	60号住居	沼田市町田町	石製	89.2	2.0×3.7×5.2×3.3	9世紀1/4	寺院址近接	2
4	上野国分寺	A区68号住居	前橋市元籠社町	石製	—	2.3×3.3×4.9×3.0	10世紀前半	大集落、寺院址	3
5	尼寺中間地域	H3区住居	前橋市元籠社町	石製	—	2.2×3.3×6.1×2.1	10世紀	近接	4
6	熊野堂	97号住居	高崎市大八木町	石製	82	2.0×4.0×5.3×2.8	10世紀前半	大集落、底面に 縁石	5
7	融通寺	1区95号住居	高崎市大八木町	鉄製	129.2	3.5×3.0×3.1×2.7	8世紀後半	8と一連の集落	6
8	大八木屋敷	98号住居	高崎市大八木町	石製	55	2.0×3.5×5.4×2.5	10世紀前半	官衙関連集落	7
9	株木B	FH-9号住居	藤岡市大字上戸塚・下戸塚	石製	60	2.0×3.6×4.8×2.3	平安	平安住居52軒	8

引用・参考文献

- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団「多胡蛇黒遺跡」1993
- 沼田市教育委員会「戸神諏訪Ⅱ遺跡」1993
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団「上野国分寺・尼寺中間地域(6)」1992
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団「上野国分寺跡・上野国分寺中間地域」1993
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団「熊野堂遺跡(2)」1990
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団「融通寺遺跡」1991
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団「大八木屋敷遺跡」1995
- 藤岡市教育委員会「株木B遺跡」1991

40図15)は重りと考えられる。法量は上辺2.0cm、下辺2.7cm、高さ3.5cm、厚さ2.9cm、重量は40.27gである。石材は変質デイスイトであった。出土位置は竈焚口部手前で掘り方埋土中である。これにより本資料は4号住居の築造年代の8世紀前半以前の所産と考えられる。

本資料と同様の古代の重り、権衡については、1997年の段階で福田聖氏が関東地方出土の26遺跡32例について集成を行っている⁽¹⁾。福田氏はこれらの資料について分類、重量との比較、時期、出土遺構、出土遺跡の性格等を分析し、古代権衡資料、古代衡制について考察を加えている。本資料は福田氏の分類のC b類の範疇に含まれるものである。本資料は竈穴住居からの出土であり、周辺に公的施設・寺院などの存在が知られていない地点からの出土である。重量の40.27gは中井公氏が示した古代の単位重量1両 \approx 42gに近い数値となる⁽²⁾。

なお、福田氏の集成においては群馬県内からの出土例は7遺跡8例であった。その後、10年を経過し、同種の資料の増加が見込まれるところである。実際、藤岡市上栗須前遺跡⁽³⁾や渋川市諏訪ノ木V遺跡⁽⁴⁾などから出土例があり、重りとして認識された上で報告されている。本遺跡の周辺では前橋市二之宮町二之宮千足遺跡⁽⁵⁾や二之宮宮下東遺跡(刻書を伴う)⁽⁶⁾からの出土が見られる。これらの資料については当事業団の職員により集成と分析の作業が進められており、近くその成果が報告される予定とのことである⁽⁷⁾。

註

- (1) 福田聖「関東地方出土の古代権衡資料」『研究紀要』13 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1997
- (2) 中井公「平城京跡から出土した「はかりのおもり」をめぐって」『考古学と生活文化』 同志社大学考古学シリーズ刊行会 1992
- (3) 群馬県埋蔵文化財調査事業団「上栗須前遺跡群Ⅲ」 1996
- (4) 群馬県埋蔵文化財調査事業団「石原東遺跡D区 調査ノ木V遺跡」 2005
- (5) 群馬県埋蔵文化財調査事業団「二之宮千足遺跡」 1992
- (6) 群馬県埋蔵文化財調査事業団「二之宮宮下東遺跡」 1994
- (7) 当事業団職員の笹澤泰史氏によれば、笹澤氏と神谷住明氏による作業が進行中であるとのことである。なお、古代権衡の基礎的な文脈については高島英之氏から教示を受けた。

第2節 萩窪南田遺跡のまとめ

1 浅間B軽石下の水田と溝について

萩窪南田遺跡の調査においては西側沖積地部分のB区から1108(天仁元)年に降下した浅間B軽石に埋没した水田遺構およびこれと関連のあると考えられる溝13条を検出した。本遺跡から寺沢川を上流に遡った萩窪倉兼遺跡や萩窪倉兼II遺跡においては掘立柱建物を含む奈良・平安時代の集落が検出されている。流域全域が均一であったか否かは検討を要するものの、この時期には標高190m、広瀬川低地帯から3.5kmに位置する寺沢川上流域にまで開発が進行していたことが窺われるところである。

浅間B軽石下で検出した水田域は9112mにおよぶが、水田を区画する畦畔の残存状態は必ずしも良好とは言えず、不明瞭な部分が少なくなかった。

水田区画は、北から南に傾斜する緩斜面を造成して作られている。等高線に沿って東西方向の横畦を作っており、東西に長い帯状の区画が段差を有し、棚田状に配置されていたものと考えられる。区画の幅は各々の地点における傾斜の状況に対応するためか必ずしも一律ではなかった。南北方向の畦については不明瞭である。区画の段差部分からは石積や木杭などの造作などは検出されなかった。

また、畦部分からは水口が検出されていない。後述する溝にも堰などの給・配水施設が見られないことから、これらの水田域への給水は掛け流しの方法が取られていたものと考えられる。

あいにく、本遺跡周辺の沖積地部分における浅間B軽石下の水田検出例は知られていないが、等高線に沿って横畦を設け、棚田状を呈する水田の造成状況は荒砥川流域の荒砥宮田遺跡や荒砥前田遺跡で見られる。

水田とともに検出された13条の溝は、その大半が埋没土中に浅間B軽石の1次堆積が認められることから上記水田遺構と同時に存在していたものと考えられる。調査時の所見によれば、これらの溝は、配水と排水に特徴のあるものであったとされる。

13条の溝は、B1区において旧地形¹⁾の西谷部分(第69回参照)にあり、3号溝を幹線にこれに合流する10号・4号・6号・7号・11号溝と、東谷部分にあり、2号溝を幹線にこれに合流する8号・9号・5号溝に大別される。各々複数の溝からの給水を集約した3号溝と2号溝はB2区の82A-19グリッドで2つの系統がY字状に合流し、B3区以下の水田域に用水を掛け流していたものと考えられた。合流後の3号溝は、72T-11グリッドで今度は下流域への配水のため、逆Y字状に分流していたようである。

溝の走行については、配水用と考えられる3号や2号などの溝が水田の間を蛇行する形の流路であるのに対し、6号や7号は直線的な流路を取っている。これらの溝は、東西方向の水田区画にも直交することから、排水の機能も兼ねた溝と考えられた。

3号溝系、2号溝系とは別に東側台地縁辺には12号溝が掘削されている。この溝は、台地縁辺からの湧水と西側の水田区画からの落水を集約し、B4区への配水あるいはさらに下流の水田域に対して送水を行っていたと考えられた。

なお、西側調査区域外には上泉唐ノ堀遺跡のある西側台地際を南流する溝が存在していたことが推定され、検出した水田域のうち、B2区、B3区の3号溝から西側部分はこの溝から配水を受けていたものと考えられる。

溝の埋没土の観察からは2つの点が確認された。1点目は、これらの溝は全てが同時期に存在したわけではなく、時間差をもって機能していたものと考えられる。B1区の旧地形の西谷部分にあった4号溝は浅間B軽石降下時には既に埋没していたようで、3号溝に先行して存在していたものと考えられる。東谷部分の5号溝も2号溝に先出するものである。故に当初は4号溝と5号溝が83B-20グリッドの地点で合流する形を取っていたものが、その後、3号溝と2号溝の合流に変化したものと考えられる。

2点目は、10号・11号・3号・6号・7号・8号・2号・17号の各溝においては埋没土中に浅間B

軽石の1次堆積層・火山灰層が確認されているが、10号・3号溝では間層を挟んで更にその上層に稲川テフラ(As-KK)の1次堆積が確認されている。稲川テフラの降下は1128(大治3)年とされており²⁾、このことから1108(天仁3)年に浅間B軽石の降下した後の20年間、これらの溝が復旧されることなく放置された状態にあったことが分かった。水田覆土の状況からは同様な火山灰堆積状況を確認することはできなかったが、水田面においても溝同様、長期にわたる休耕期間、荒廃した状態が続いていたことが想定される。同様の事例は大泉坊川流域の富田漆田遺跡で検出された浅間B軽石下水田の覆土堆積状況からも認められている。

なお、本節は調査時の記録を基に調査担当者の女屋和志雄氏との協議の上記述したものである。

註

(1) 浅間B軽石下水田下層の旧地形については第69・70回に示したところである。調査時、B1区において下層の遺構の存在の有無を知る目的で深堀トレンチを設定、土層の観察を行っている。この結果、B1区においては南北方向に延びる微高地を挟み、東西2つの谷地が埋没していることが判明した。西側の谷の規模は、東西約16m、基盤層からの深さは0.7~0.8mであった。浅間C軽石降下前に多量の流水を伴う時期があったが、その上層には浅間C軽石、榛名ニツ岳降下軽石の1次堆積層の存在が確認された。微高地上からは3条の河道が検出されている。

(2) 早田勉「テフラからさぐる浅間山の活動史」『御代田町誌』自然編 1994

参考文献

- 佐原 真 講談社「特論－縄文施文法入門」『縄文土器大成』3 1981
- 能登 健「里棲み集落の研究－集落変遷からみた農耕地拡大過程とその背景－」『内陸の生活と文化』地方史研究協議会編1986
- 山崎 一
『群馬県古城史の研究』上巻1978
『群馬県古城史の研究』補遺篇1979
- 群馬県「群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告書第5輯 上毛古墳総覧」1938
- 群馬県教育委員会
『群馬県遺跡台帳Ⅰ（東毛編）』1971
『昭和54年度女堀遺跡群詳細分布調査実績報告書 女堀』1980
- 群馬県史編さん委員会 群馬県「群馬県史」資料編3 1981
- 群馬県企業局「菅野・下田中・矢場遺跡」1991
- 前橋市教育委員会
『富田遺跡群・西大室遺跡群・清里南部遺跡群』1979
『富田遺跡群』1981
『富田遺跡群・西大室遺跡群』1982
『渠遺跡』1990
『亀泉町業師塚古墳』1976
『平成11年度文化財調査報告書 第30集』1999
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団
『芳賀東部団地遺跡』1998
『ローズタウン遺跡群堤沼下遺跡』2000
『ローズタウン遺跡群富田下大日Ⅳ遺跡』2001
『五代江戸屋敷遺跡』2001
『五代竹花遺跡・五代木福Ⅰ遺跡・五代伊勢宮Ⅰ遺跡』2001
『五代木福Ⅱ遺跡・五代深堀Ⅰ遺跡』2001
『五代伊勢宮Ⅱ遺跡』2002
『五代伊勢宮Ⅲ遺跡・五代深堀Ⅱ遺跡・五代中原Ⅰ遺跡・五代伊勢宮Ⅳ遺跡』2002
『五代伊勢宮Ⅴ遺跡』2003
- 『五代伊勢宮Ⅵ遺跡・五代中原Ⅱ遺跡』2003
『五代中原Ⅲ遺跡・五代山街道Ⅰ遺跡・五代山街道Ⅱ遺跡』2004
『五代竹花Ⅱ遺跡・五代木福Ⅲ遺跡』2004
『五代木福Ⅳ遺跡・五代深堀Ⅲ遺跡』2005
- 大胡町誌編纂委員会「大胡町誌」1976
- 大胡町教育委員会
『天神風呂遺跡』1981
『大胡北西部遺跡群 乙西尾引遺跡/西天神遺跡/柴崎遺跡』1994
『大胡西北部遺跡群 横沢向田遺跡 堀越丁二本松遺跡 横沢向山遺跡 茂木二本松遺跡』1998
- 石関西榮瀬遺跡調査会「石関西榮瀬遺跡・西片貝源田島遺跡」1996
- 新里村教育委員会「赤城山麓の歴史地震－弘仁九年に発生した地震とその災害」1991
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団編『群馬遺跡大事典』1999
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
『荒砥高原遺跡』1984
『女堀 中世初期農業用水址の発掘調査』1985
『荒砥北原遺跡 今井神社古墳群 荒砥青柳遺跡』1986
『荒砥天宮遺跡』1988
『房谷戸遺跡Ⅰ』1989
『荒砥北三木堂遺跡Ⅰ』1991
『小島田八日市遺跡』1994
『荒砥荒子遺跡』2000
『石関西田Ⅱ遺跡』2002
『今井三騎堂遺跡 今井見切塚遺跡』縄文時代編2005
『富田漆田遺跡 富田下大日遺跡』2006
『江木下大日遺跡』2006
『菅野Ⅱ遺跡』2007
『富田細田遺跡 富田宮下遺跡』2007
『年報22』2003
『年報23』2004

遺物観察表

凡例

1. 遺物の一覧表は遺構ごとに作成した。
2. 掲載図番号は本文で報告した挿図番号を、掲載写真は写真図版のPL番号を記載した。
3. 出土状態の項の①は遺構内の平面位置を表す。②は床面比高を表し、床直は床面直上からの出土を、+6.5は床面から6.5cm遊離した上層の位置から出土したことを表す。
4. 法量の項の口は口径、底は底径を表し、()のあるものは復元値を表す。高は器高を表し、欠損のあるものは残高とした。

目次

亀泉西久保遺跡

古墳時代遺構外出土の遺物	187
1号住居	187
2号住居	188
3号住居	188・189
4号住居	189・190
6号住居	190
16号土坑	190
3号溝	191
11号溝	191
奈良・平安時代遺構外出土の遺物	192
中・近世遺構外出土の遺物	192・193
15号土坑	193

萩窪南田遺跡

古墳時代遺構外出土の遺物	194
1号道	194
3号溝	194
5号溝	194・195
16号溝	195
浅間B軽石下水田	195・196
奈良・平安時代遺構外出土の遺物	197
14号溝	197
15号溝	198
中・近世遺構外出土の遺物	198・199

1 亀泉西久保Ⅱ遺跡

古墳時代遺構外出土の遺物 (第28図、PL22)

検出番号 PLNo.	種別 器種	出土位置 ①平面②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
1	土師器 高杯	①AK72M-6	胴部上位 残高・3.6	①細砂 ②酸化 ③にぶい黄褐色	柱状を呈す。外面はタテ方向のミガキを施す。内面には成形時の紋りが残されている。	
2	土師器 卍	①CK510-2	胴部破片 残高・4.8	①粗砂・細砂 ②酸化 ③灰黄	胴部は球形を呈し、丸底の底部に続く。外面は上位に丁寧なナデを、下位にはヘラクスリを施す。内面は下位にタテ方向のナデを加えた後、上位にヨコ方向のナデを施す。	
3	須恵器 甗	①AKP6	胴部破片	①黒色鉱物粒 ②還元 ③灰黄	外面にはハケ目が施される。内面にはアテ目が残る。	
4	須恵器 甗	①AK72K-4	口縁部破片 口・(21.4) 残高・6.3	①白色鉱物粒 ②還元 ③灰	大きく外反して立ち上がる先端は内外の両方につままれたように突出する。内外面ともクロ回転によるナデ調整を施す。	
5	須恵器 甗	①AK4号トレンチ	胴部破片	①白色鉱物粒少量 ②還元 ③灰	外面にはカキ目が施される。内面にはアテ目が残る。	

1号住居 (第32図、PL22)

検出番号 PLNo.	種別 器種	出土位置 ①平面②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
1	土師器 皿	①北東隅 ②床直	ほぼ完形 口・15.8 高・2.5 底・13.6	①粗砂少量 ②酸化 ③橙	口縁部は平底の底部から外形沿って直線的に延びる。口縁部はヨコナデ。底部外面はヘラクスリ後ミガキに近いナデを施す。	
2	土師器 杯	①南東隅 ②+11	口縁部破片 口・(12.9) 残高・3.1 底・(8.6)	①粗砂少量 ②酸化 ③橙	口縁部は底部との間に弱い稜をなす。口縁部はヨコナデ。底部は下半にヘラクスリを施す。	
3	土師器 杯	①北東 ②+7	口縁部破片 口・(11.0) 残高・2.2 底・(8.0)	①粗砂少量 ②酸化 ③明褐色	口縁部は斜め上方に向けて立ち上がる。底部は平底。口縁部の上半は原形面を残す。底部外面にはヘラクスリを施す。	
4	土師器 杯	①埋没土	口縁部破片 口・(14.2) 残高・2.8 底・(13.6)	①細砂少量 ②酸化 ③にぶい褐色	口縁部は外形沿って立ち上がり、先端は内側に丸くおさまる。口縁部は上半にヨコナデ。下半は原形面を残す。底部外面はヘラクスリ。	
5	土師器 杯	①甕突口部	1/4 口・(12.2) 高・5.1 底・(6.8)	①粗砂 ②酸化 ③橙	口縁部は斜め上方に向かって立ち上がる。外面はヨコナデ。内面は棒状工具によるミガキをヨコ方向に施す。底部は外面がヘラクスリ。内面はミガキ。	細片に割れた跡。火熱を受けたため炭素残存の認められない部分あり。
6	須恵器 杯	①甕燃焼部	口縁部一部欠損 口・12.2 高・3.7 底・7.4	①粗砂少量 ②還元 ③灰	口縁部は斜め上方に向かって直線的に立ち上がる。右回転クロ回転。底部は回転を伴うヘラ切り磨し。	
7	須恵器 甗	①甕突口部	口縁部破片 口・(17.8) 残高・2.4	①黒色鉱物粒・白色 色鉱物粒少量 ②還元 ③灰	口縁部は斜め上方に向かって立ち上がる。左回転クロ回転成形である。	

遺物観察表

2号住居 (第33・34図、PL22)

検出番号 PLNo	種別 器種	出土位置 ①平面②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
1	土師器 杯	①南西隅 ②+19・埋没土	3/4 口・ 13.2 高・ 3.6	①粗砂少量 ②酸化 ③明褐	口縁部は平底ぎみの底部から彎曲、斜め上方に向かって立ち上がる。口縁部上半はヨコナデ。底部外面はヘラズリ。	
2	土師器 杯	①南西隅 ②+15	1/4 口・ (11.8) 高・ 2.6 底・ (7.8)	①粗砂 ②酸化 ③にぶい褐	口縁部は斜め上方に向かって立ち上がる。先端にいたり短く内彎する。口縁部上半はヨコナデ。底部外面はヘラズリ。	
3	土師器 杯	①埋没土	口～底部破片 口・ (10.8) 残高・ 1.9 底・ (9.4)	①粗砂・細砂 ②酸化 ③明赤褐	口縁部は弱く外反して立ち上がる。底部は平底である。口縁部はヨコナデ。底部はヘラズリ。	
4	土師器 甕	①西壁 ②埋没土	口縁部破片 口・ (21.2) 残高・ 3.4	①細砂 ②酸化 ③明褐	口縁部は外反して立ち上がる。内外面ともヨコナデを施す。	
5	土師器 甕	①西壁 ②床直	口縁部破片 口・ (18.3) 残高・ 3.8	①細砂 ②酸化 ③明赤褐	口縁部は外反して立ち上がる。内外面ともヨコナデを施す。	
6	土師器 甕	①西壁 ②+6	頸部破片 残高・ 4.8	①細砂 ②酸化 ③橙	口縁部はヨコナデ。胴部外面はヨコ方向のヘラズリ。内底はヨコ方向のナデ。	
7	土師器 台付甕	①南壁 ②床直	胴部下1/3 残高・ 6.4	①粗砂・細砂 ②酸化 ③明褐	台部は欠落している。外面はタテ方向のヘラズリ。台部との接合部分はヨコ方向のナデ。内面は磨耗し、観察できない。	欠損残片として再利用していたか。
8	須恵器 杯	①西壁 ②床直	3/4 口・ 12.6 高・ 4.0 底・ 8.2	①白色鉱物粒。黒色鉱物粒は発色する ②還元 ③オリーブ灰	口縁部は斜め上方に向かって直線的に立ち上がる。右回転成。底部は回転ヘラ切り難し後ナデ調整を加える。	
9	須恵器 杯	①南壁 ②床直・埋没土	3/4 口・ 12.2 高・ 3.4 底・ 6.8	①白色鉱物粒 ②還元 ③灰	口縁部は斜め上方に向かって立ち上がる。下半はやや曲線を描く。回転を伴う糸切り難し後、周縁部に回転を伴うヘラズリを加える。	
10	土師器 甕	①南壁 ②床直	胴部下～底部 1/4 残高・ 10.3 底部・ (5.0)	①粗砂・細砂 ②酸化 ③橙	狭小な底部を有する。胴部外面は斜めタテ方向のヘラズリ。内面は斜め方向にヘラナデ。底部外面はヘラズリ。	
11	須恵器 甕	①西壁 ②埋没土	頸部～胴部破片	①白色鉱物粒 ②還元 ③灰	内外面ともナデ調整を施す。	

3号住居 (第36・37図、PL22)

検出番号 PLNo	種別 器種	出土位置 ①平面②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
1	土師器 杯	①東 ②+15・+19	3/4 口・ 13.7 高・ 3.7	①粗砂少量 ②酸化 ③橙	口縁部は丸底の底部から彎曲上方に向けて立ち上がる。口縁部はヨコナデ。底部は中央部近くの狭い範囲にヘラズリ。	底部内面にヘラによる磨耗あり。
2	土師器 杯	①中央 ②+13・+19	口～底部破片 口・ 16.8 高・ 4.2	①細砂 ②酸化 ③灰黄	口縁部は斜め上方に向かって直線的に立ち上がる。口縁部は上位にヨコナデ。下半にヘラズリを施す。底部外面はヘラズリ後、ヘラナデ。	器面はやや磨耗している。
3	土師器 杯	①中央 ②埋没土	口縁部破片 口・ (25.0) 残高・ 4.5	①細砂 ②酸化 ③橙	口縁部は緩やかに外反して立ち上がる。内外面ともヨコナデ。	

採回番号 PLNo	種別 器種	出土位置 ①平面②垂直	残存状態 計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
4	須恵器 椀	①北東 ②埋没土	口～底部1/3 口・(14.0) 高・ 4.9 底・ (9.0)	①雑・粗砂 ②還元 ③灰白	口縁部は斜め斜方上に向けて立ち上がる。高台部はハの字状に外反する。右回転ロクロ成形。底部へう切り離し後高台部を取り付け。	
5	須恵器 蓋	①埋没土	口縁部破片 口・(15.4) 残高・ 2.5	①粗砂 ②還元 ③灰黄	縁部は短く折れる。右回転ロクロ成形。内外面にロクロ石を強く残す。上位にはヘラケズリを重ねる。	
6	須恵器 甌	①北西 ②埋没土	頸部破片	①白色鉱物粒少量 ②還元 ③灰	左回転ロクロ成形。外面はナデ調整を兼ねる。	外面に自然物 付着
7	須恵器 甌	①西 ②埋没土	胴部破片	①黒色鉱物粒少量 ②還元 ③灰	外面タタキ目、内面アテ目。	
8	須恵器 甌	①中央 ②埋没土	胴部破片	①黒色鉱物粒 ②還元 ③灰	外面タタキ目、内面アテ目。	
9	石製品 砥石	①中央 ②埋没土	一部 長・ 7.8 幅・ 5.7 厚・ 4.8 重・ 276g	粗粒輝石安山岩	柱状を呈した炭碇石である。西面とも研磨面として使用している。小口は両端とも欠損している。右側面には刃偏状の削痕がある。	
10	石製品 支脚	①竈焼痕部	長・ 12.8 幅・ 8.4 厚・ 5.3 重・ 518g	石材 不明	粒子の細かい砂粒から構成される堆積岩である。上面の狭い立面台形状の切石である。火熱を受け、形状、断面とも変形、変質している。	
11	鉄製品 刀子	①北 ②+15	完形 長・ 18.3 重・ 16g		全長18.3cm。両面で茎部長9.1cm。刃長9.2cmを測る。茎部は先端に向かってその幅を徐々に狭める。厚さは1.5～2.0mm。刃部は研ぎ減りにより著しくやせている。錆ぶくれによる変形が著しく特に厚みは原形をとどめるところがない。	

4号住居 (第40図、PL23)

採回番号 PLNo	種別 器種	出土位置 ①平面②垂直	残存状態 計測値(cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
1	土師器 杯	①竈焼痕部・竈突 口部	1/4 口・(16.0) 高・ 2.9	①粗砂・細砂 ②酸化 ③橙	器形全体が浅く皿状を呈する。口縁部はココナテ。底部外面はヘラケズリ。内面はヨコ方向のナデ。	
2	須恵器 壺	①埋没土	口縁部破片 口・(12.1) 残高・ 2.2	①黒色鉱物粒 ②還元 ③灰白	口縁部は短く直立きみに立ち上がる。ロクロ成形であるがロクロ回転の方向は不明。外面にはナデ調整が施される。	
3	土師器 杯	①竈石袖部	口～底部破片 口・(20.0) 残高・ 3.8	①粗砂・細砂 ②酸化 ③橙	口縁部は平底さみの底部から丸みをもって立ち上がり、上半部は直立する。底部外面はヘラケズリ。内面はヨコ方向のナデ。	
4	須恵器 杯	①埋没土	口縁部破片 口・(14.6) 残高・ 2.4	①黒色鉱物粒 ②還元 ③淡黄	口縁部は斜め斜方に向けて立ち上がる。右回転ロクロ成形。	
5	須恵器 壺	①埋没土	底部1/4 残高・ 7.5	①粗砂・黒色鉱物 粒 ②還元 ③灰白	胴部は大きく張り出す。底部は平底に高台部が付されていたものが剥落している。ロクロ成形。下位の一部にヘラケズリの痕跡が見られる。	
6	須恵器 長頸壺	①南 ②床直	頸部破片 残高・ 4.7	①粗砂少量 ②還元 ③黄灰	右回転ロクロ成・整形が考えられる。胴部との接合部分に削痕によるオサエ痕が見られる。	
7	須恵器 甌	①埋没土	胴部破片	①鉱物粒少量 ②還元 ③黄灰	右回転ロクロ成形。外面にはカキ目状のハケ目を残す。	

遺物観察表

神岡番号 PLNo	種別 器種	出土位置 ①平面②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
8	須恵器 甕	①②竈煙焼部	胴部破片	①灰物 ②還元 ③灰	外面タタキ目、内面アテ目。	
9	須恵器 甕	①②埋没土	胴部破片	①白色灰物粒 ②還元 ③灰白	内外面ともナテ調整を施す。	
10	須恵器 甕	①床直 ②埋没土	胴部破片	①灰物粒少量 ②還元 ③黄灰	外面タタキ目、内面アテ目。	
11	須恵器 甕	①南 ②+16	胴部破片	①灰物粒少量 ②還元 ③灰白	内外面ともナテ調整を施す。	
12	須恵器 甕	①②埋没土	口縁部破片 残高・ 1.9	①灰物粒少量 ②還元 ③灰	内外面ともナテ調整を施す。	
13	須恵器 甕	①②埋没土	胴部破片	①白色灰物粒少量 ②還元 ③オリーブ灰	外面タタキ目、内面アテ目。	意図的に打ち 欠いた可能性 もあり。
14	須恵器 甕	①②埋没土	胴部破片	①白色灰物粒少量 ②還元 ③灰白	外面タタキ目、内面アテ目。	
15	石製品 重り	①竈口部右前 ②掘り方埋土	完形 長・ 3.5 幅・ 3.0 厚・ 2.9 重・ 40.27 g	炭質デイスイト	截面四角錐状を見するが、上位、下位とも不均等である。上部から下方6mmの位置に貫通する直径5mmの孔が穿たれている。底面は平滑に仕上げられているが、側面は四面とも上半部に複雑な調整痕を残している。面取りも加えられている。	

6号住居 (第41圖、PL23)

神岡番号 PLNo	種別 器種	出土位置 ①平面②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
1	須恵器 蓋	①竈煙焼部	1/2 口・ (16.2) 残高・ 3.3	①白色の礫・粗砂 ②還元 ③灰	天井部につまみ部はつかない。端部は内側ぎみに短く折れる。右側は口縁口成形。頂部は回転を伴う糸切り難し後未調整。	器形はやや歪んでいる。
2	土師器 甕	①竈右袖部	口～胴部上位1/2 口・ (20.2) 残高・ 10.7	①粗砂少量 ②酸化 ③橙	口縁部は直立ぎみに立ち上がり、上位にいたり外傾して立ち上がる。口縁部はヨコナテ。胴部は外面にヘラケズリ。内面にヨコ方向のナテを施す。	
3	土師器 甕	①竈煙焼部	口～胴部中位1/3 口・ (21.0) 残高・ 15.8	①粗砂 ②酸化 ③橙	口縁部は外反して立ち上がる。器形の最大径は胴部上位にある。口縁部はヨコナテ。胴部は外面にヘラケズリ、一部にナテ。内面にヨコナテ。	
4	石製品 支脚	①右袖部	ほぼ完形 長・ 14.8 幅・ 7.9 厚・ 7.1 重・ 66.2 g	石材 不明	加工により截面円錐形状を見する。底面の平坦面を基準に同化すると一方に反り返っているが、実際は竈掘り方に据えらる際、バランスを調整していたと考えられる。	3号住居10と 同質。

16号土坑 (第44圖、PL23)

神岡番号 PLNo	種別 器種	出土位置 ①平面②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
1	須恵器 杯	①②埋没土	口縁部下平～底部 破片 残高・ 2.8 底・ (7.1)	①白色灰物粒 ②還元 ③灰	右側は口縁口成形。底部は回転を伴う糸切り難し後未調整。	
2	須恵器 甕	①②埋没土	胴部破片	①灰物粒少量 ②還元 ③灰	外面タタキ目、内面アテ目。	

3号溝 (第56図、PL24)

採回番号 PLNo.	種別 器種	出土位置 ①平面②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
1	青磁 香炉	①②埋没土	口～胴部破片 口・(9.2) 残高・3.4	①精選 ②還元 ③灰白	緩やかに側面して立ち上がり先端は上方に平面を有し、内側は肥厚する。外面は楕状の印文が縦方向に並ぶ。内外面施釉。	肥前。 18～19世紀。
2	磁器 碗	①②埋没土	口～胴部破片 口・(10.0) 残高・3.5	①精選 ②還元 ③灰白	外面に草木を描いた染め付け文様が見られる。	波佐見系。 17世紀末～18世紀中葉。
3	陶器 碗	①②埋没土	底部破片 残高・2.3	①精選 ②還元 ③灰白	外面に風景を描いた山水が見られる。胎は厚く、買入が見られる。	肥前。 陶胎染付。
4	陶器 灯明皿受台	①②埋没土	口～胴部破片 口・(8.6) 残高・1.9	①精選 ②還元 ③灰白	皿状の受部は内側に灯芯の受けが輪状に一周する。内外面全面に透明釉。買入入る。	製作地不詳。 19世紀中葉～後葉。
5	陶器 束脩	①②埋没土	底部のみ 残高・3.1 底・3.8	①精選 ②還元 ③灰白	底部内面に灯芯を受ける突起が付けられているが欠損する。底部外面中央に途中で止まる孔が穿たれている。内面と外面の一部に鉄粒がかかる。右回転口クロ成形。胎釉。	瀬戸・美濃。 19世紀。
6	陶器 皿	①②埋没土	口縁部破片 口・(13.2) 残高・2.8	①胎物粒少量 ②還元 ③灰白	口縁部は外傾著しく立ち上がり、先端は更に外方につままれたように延びる。回転口クロ成形。外面の下半は回転を伴うヘラケズリが重ねられている。上半部に灰粒がかけられている。	美濃か。 江戸時代。
7	陶器 灯明皿	①②埋没土	口～底部破片 残高・1.6 底・(3.8)	①胎物粒少量 ②還元 ③にぶい黄橙	口クロ成形。右回転と考えられる。外面の残存部分は回転を伴うヘラケズリ。胎釉施釉。外面体部以外胎をめぐり取る。	瀬戸・美濃。 19世紀。
8	教育陶器 焙烙	①②埋没土	胴～底部破片 残高・5.2	①粗砂 ②還元 ③黒	内外面とも口クロ使用による十字調整を施す。口縁部外面の底面寄りにはヘラケズリを施す。	炭素吸着。在地産。
9	瓦	①②埋没土	破片	①粗砂・白色胎物粒 ②還元 ③灰	側面は上面側に面取りが施されている。	

11号溝 (第59図、PL24)

採回番号 PLNo.	種別 器種	出土位置 ①平面②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
1	石製品 五輪塔	①②埋没土	風輪の大平欠損 長・23.7 幅・15.7	内四石安山岩	空風輪の空輪部分が残存したのみ。全体的にやや粗雑。空風輪の境のくり込みはあまり顕著でない。	
2	陶器 貝器手碗	①②埋没土	底部～高台部破片 残高・1.8	①夾雑物なし ②還元 ③灰白	高台部は外傾弱く延びる。内外面、高台内面に透明釉がかかる。全体に買入が見られる。	肥前。17世紀後葉～18世紀初期。
3	陶器 皿	①②埋没土	底部～高台部破片 残高・0.8	①白色胎物粒 ②還元 ③灰白	内面～高台部胎釉。	瀬戸・美濃。 江戸時代。
4	陶器 甕	①②埋没土	口～胴部破片	①黒色胎物粒 ②還元 ③灰白	口縁部先端は平坦な面を形づくる。外面に2条の沈線がめぐり、内外面施釉。	瀬戸・美濃。 18世紀中葉～後葉。

遺物観察表

奈良・平安時代遺構外出土の遺物 (第53図、PL24)

採回番号 PLNo	種別 器種	出土位置 ①平面②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
1	土師器 杯	①1号配石	口～底部破片 口・(11.6) 残高・2.5	①粗砂 ②酸化 ③肌黄褐色	口縁部は先端が内湾して立ち上がる。口縁部はヨコナデ。底部外面は下位の狭い範囲をヘラケズリ。	
2	須恵器 盤	①AKP6	口縁部破片 口・(13.1) 残高・2.3	①白色鉱物粒多量 ②還元 ③緑灰	右回転ロクロ成形。口縁部は短く外傾して立ち上がる。底部には高台が取り付けられていたと考えられる。	
3	須恵器 椀	①AK表土	底部～高台部1/3 残高・2.1 底・9.8	①粗砂少量 ②還元 ③灰オリーブ	右回転ロクロ成形と考えられる。底部を切り離した後、高台部を取り付け、周縁部にナデを加えている。	
4	須恵器 杯	①AK72L-5 ②覆土	口～底部1/4 口・(12.5) 高・3.3 底・(7.9)	①黒色鉱物粒発泡 ②還元 ③灰	口縁部は斜め上方に向かって立ち上がる。右回転ロクロ成形。底部は回転を伴うヘラケズリ調整。口縁部外面の下半部もヘラケズリを施す。	
5	須恵器 壺	①AKBP9	胴部破片 残高・(5.2)	①鉱物粒少量 ②還元 ③灰黄	右回転ロクロ成形と考えられる。胴部に2条沈線が平行にめぐる。	

中・近世遺構外出土の遺物 (第60図、PL24)

採回番号 PLNo	種別 器種	出土位置 ①平面②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
1	土師質土器 皿	①AK72H-1	2/5 口・(9.5) 高・2.2 底・(7.6)	①粗砂・細砂 ②酸化 ③浅黄褐色	口縁部は短く斜め上方に立ち上がる。器内厚い。底部は回転糸切り離した後未調整。	内外面の広範囲に煤付着。灯芯の残した痕跡も認められる。
2	土師質土器 皿	①AK72M-6	口～底部破片 口・(10.0) 高・2.1 底・(6.8)	①粗砂・細砂 ②還元 ③にぶい褐	口縁部は外傾著しく立ち上がる。先端にいたりその向きを上方に変える。左回転ロクロ成形。底部は回転糸切り離した後未調整。	中世か。
3	陶器 天目碗	①CK611-4	底部～高台部 残高・2.6 底・4.8	①黒色鉱物粒 ②還元 ③灰白	右回転ロクロ成形と考えられる。高台部は傾り出し高台で低い。内面～高台縁に鉄軸。	瀬戸・美濃。
4	陶器 天目碗	①AK72L-5	口縁部破片 口・(11.2) 残高・4.0	①精選 ②還元 ③灰白	全体に器内は厚いが先端にいたり薄くなる。内外面に鉄軸がはかっている。	瀬戸・美濃。
5	陶器 碗	①CK第1トレンチ	胴部下平～底部破片 残高・(2.9) 底・5.2	①精選 ②還元 ③淡黄	高台部に2条の横線がめぐる。焼成不良により外面の軸白化する。	肥前。 陶胎染付。18世紀。
6	陶器 搦鉢	①CK51F-18	口縁部破片	①赤色鉱物粒 ②還元 ③褐灰	左回転のロクロ成・整形を施す。内外面錆軸。	大宮～蓮房初期か。
7	陶器 菊皿	①CK610-2	底部破片 残高・2.1 底・(7.4)	①やや精選 ②還元 ③浅黄	内面～体部外面灰軸。口縁部に銅線軸流す。	瀬戸・美濃。 17世紀。
8	陶器 灯明皿	①CK510-2	口～底部1/2 口・(10.2) 残高・2.4 底・4.0	①精選 ②還元 ③灰白	内面の中心に輪状の受けがめぐり、1箇所灯芯を受けるための切り込みがある。内面全面と外面の口縁部上位に灰軸がかかる。右回転ロクロ成形。外面の中心から下位にはヘラケズリを施す。	京・信楽系か。 19世紀。

神岡番号 PLNo	種別 器種	出土位置 ①平面②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
9	軟質陶器か 甕か	①CRK表探	割部破片 残高・7.3	①粗砂 ②還元 ③灰	内外面ともナデ調整を施す。	時期不詳。
10	陶器 尾呂茶碗	①AK72K-4	底部～高台部 残高・2.0 底・5.0	①精選 ②還元 ③灰白	右回転ロクロ成形と考えられる。高台部は断面台形状で低い。削り出し高台である。内面胎輪でワラ灰輪流れる。高台内～高台輪。胎輪を深く化粧かけ。	瀬戸・美濃。 17世紀末～18 世紀中葉。
11	陶器 掻鉢	①CR51N-2	口縁部破片	①赤色鉱物粒 ②還元 ③にぶい黄褐色	口縁部の先端は内側に反る。内外面ともロクロによるナデ調整を施す。胎輪。	瀬戸・美濃。 17世紀中葉～ 後葉。
12	陶器 皿	①CR51F-18	口縁部破片 口・(37.4) 残高・3.6	①精選 ②還元 ③灰オリーブ	口縁部内面文様に深く白土が入るが、体部内面の文様に白土が入っていない。	肥前三島手、 江戸時代。
13	軟質陶器 掻鉢(片口)	①AK61M-11	口縁部破片 残高・5.7	①白色鉱物粒 ②還元 ③暗灰質	口縁部の一部を外方につまみ、片口部分を作り出している。内外面ともロクロ調整を施す。	内面には使用 による磨耗痕 が認められる。
14	磁器 碗	①CR51N-1	割～底部破片 残高・3.3 底・(4.2)	①精選 ②還元 ③灰白	染付で体部外面の一部と底部中央に文様が描かれる。外面高台部のつけ根と内面中位にも横線が1条ずつ引かれている。やや焼成不良。	瀬戸・美濃か、 19世紀前半～ 中葉。

15号土坑 (第64図、PL23)

神岡番号 PLNo	種別 器種	出土位置 ①平面②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
1	須恵器 甕	①②埋没土	割部破片	①細砂 ②還元 ③内面褐灰	ロクロ成形。外面に自然輪。内面に漆と考えられる付着物が見られる。割れ口は人為的に割ったか否かの区別はできない。	

遺物観察表

2 荻窪南田遺跡

古墳時代遺構外出土の遺物 (第95図)

採回番号 PLNo.	種別 器種	出土位置 ①平面②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
1	土師器 甕	①AK82O-11	口縁部破片 口・ (12.0) 残高・ 2.8	①細砂 ②酸化 ③浅黄	内外面ともナデ調整。外面に輪積み痕を残す。	
2	土師器 杯	①AK82Q-5	口～底部破片 口・ (13.0) 残高・ 3.0	①粗砂少量 ②酸化 ③にぶい赤褐	口縁部は底部との間に別いせをもちった後外縁部く立ち上がる。口縁部はココナデ。底部外面はヘラケズリ。	
3	須恵器 杯	①AK南 ②表土	口縁部破片 口・ (12.0) 残高・ 2.1	①細砂 ②還元 ③にぶい褐	口縁部は内折するように彎曲して立ち上がる。先端は尖る。口縁部はココナデ。底部外面は一部を除いてヘラケズリ。	
4	土師器 杯	①AK南 ②表土	口縁部破片 口・ (12.0) 残高・ 2.5	①粗砂・輝石 ②酸化 ③橙	口縁部は短く内彎して立ち上がる。口縁部はココナデ。底部は下平部にヘラケズリ。内面はココナデ、ナデ。	

1号道 (第111図、PL50)

採回番号 PLNo.	種別 器種	出土位置 ①平面②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
1	須恵器 蓋	①AK ②表土	天井部破片 残高・ 1.8	①黒色・白色鉱物粒 ②還元 ③灰白	右回転ロクロ成形。ボタン状のつまみの周縁にヘラケズリを施す。	
2	須恵器 高台付椀	①AK ②表採	底～高台部1/2 残高・ 2.0 底径・ (8.6)	①粗砂大の白色・ 黒色鉱物粒 ②還元 ③灰	高台部ハの字状に延び、接地面は広い。右回転ロクロ成形。高台部取り付け後周縁部分にココナデを施す。	
3	須恵器 高台付椀	①AK ②表採	口～底部2/3 口・ (14.6) 残高・ 4.2	①粗砂少量 ②還元 ③にぶい黄褐	右回転ロクロ成形。口縁部は回転を伴うナデ調整。高台部は大平が剥落。高台剥落後も2次利用した可能性あり。	

3号溝 (第110図)

採回番号 PLNo.	種別 器種	出土位置 ①平面②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
1	須恵器 杯	①B1区 ②As-B面	底部1/3 残高・ 1.3 底・ (7.2)	①白色鉱物粒 ②還元 ③灰	右回転ロクロ成形。底部は回転ヘラケズリ。	
2	須恵器 高台付杯	①B1区 ②As-B面	底部～高台部破片 残高・ 1.5 底径・ (12.1)	①白色鉱物粒 ②還元 ③灰	右回転ロクロ成形。底部は回転を伴うヘラケズリ。内外面も磨耗顯著。	

5号溝 (第110図、PL50)

採回番号 PLNo.	種別 器種	出土位置 ①平面②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
1	土師器 杯	①B1区 ②埋没土	口～底部破片 口・ (12.0) 残高・ 3.1	①細砂 ②酸化 ③橙	口縁部上位にココナデ。底部はヘラケズリ。	
2	土師器 杯	①B1区 ②埋没土	口～底部破片 口・ (11.2) 残高・ 3.2	①精選・細砂少量 ②酸化 ③にぶい橙	口縁部が歪んでいるために径、外形に誤差が生じる可能性大。	
3	土師器 高台付椀	①B1区 ②埋没土	高台部破片 残高・ 1.7 底径・ (7.0)	①粗砂・細砂 ②還元 ③にぶい黄橙	高台部は低くハの字状に外傾する。粗雑にナデを加えている。	

検出番号 PLNo	種別 器種	出土位置 ①平面②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
4	土製品 円板	①B1区 ②埋没土	完形 縦・ 3.5 横・ 4.4 厚・ 0.8	①粗砂 ②酸化 ③にぶい橙	甞の割部破片を2次利用して作られている。	
5	須恵器 杯	①B1区 ②埋没土	口縁部破片 口・ (15.2) 残高・ 3.2	①細砂 ②酸化 ③にぶい黄橙	右回転ロクロ成形か。口縁部外面先端と内面に炭素吸着。	
6	須恵器 甗	①B1区 ②埋没土	口縁部破片 口・ (13.4) 残高・ 4.3	①細砂 ②還元 ③灰白	先端はつままれたように外反して立ち上がる。	
7	須恵器 杯	①B1区 ②埋没土	口～底部1/4 口・ (12.9) 高・ 2.6 底・ 7.0	①黒色鉱物粒発泡 ②還元 ③灰	右回転ロクロ成形。底部に回転糸切り難し後無調整。	
8	須恵器 甗	①B1区 ②埋没土	口縁部破片 口・ (15.4) 残高・ 3.2	①粗砂 ②還元 ③黄灰	右回転ロクロ成形と考えられる。内外面に炭素吸着。	
9	須恵器 杯	①B1区 ②埋没土	口縁部破片 口・ (11.2) 残高・ 3.4	①粗砂・細砂 ②還元 ③にぶい黄橙	右回転ロクロ成形。内面黒色処理。棒状工具によるミガキ。	
10	須恵器 甗	①B1区 ②埋没土	口～底部1/2 口・ 14.4 高・ 6.2 底径・ (7.0)	①粗砂 ②還元 ③にぶい黄	右回転ロクロ成形。底部内面は剥離している。	
11	須恵器 壺	①B1区 ②埋没土	口縁部1/3 口・ (18.7) 残高・ 8.5	①白色鉱物粒 ②還元 ③灰黄	内外面ともロクロ成形・調整。	
12	灰釉陶器 壺	①B1区 ②埋没土	口～底部破片 残高・ 6.5 底・ (5.4)	①精選 ②還元 ③灰白	細くしまった面部を有していたと考えられる。割部は下位に最大径を有し。平底の底部へと続く。ロクロ成形。底部は回転糸切り難し後未調整。割部外周下にヘラケズリを施す。外面の割部上半に釉がかかる。	内面に付着物あり。漆の可能性あり。東遷系。9世紀。
13	須恵器 甗	①B1区 ②埋没土	割部破片	①粗砂・白色鉱物粒 ②還元 ③灰	外面タタキ目。内面ナデ。	
14	須恵器 甗	①B1区 ②埋没土	割部破片	①粗砂少量 ②還元 ③灰黄	内外面とも回転を伴うロクロによるナデ調整。	

16号溝 (第110図)

検出番号 PLNo	種別 器種	出土位置 ①平面②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
1	須恵器 甗	①B4区 ②埋没土	割部破片 残高・ 7.9	①粗砂大の白色鉱物粒少量 ②還元 ③灰	疑似格子目状のタタキ目。内面同心円文状のアテ目。	

浅間B軽石下水田面 (第103図、PL50)

検出番号 PLNo	種別 器種	出土位置 ①平面②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
1	土師器 杯	①B1区	口縁部破片 口・ (10.1) 残高・ 2.2	①細砂 ②酸化 ③灰青	破片のため口径は変更される可能性もある。	口縁部の先端は炭素吸着。
2	土師器 杯	①B1区	口～底部破片 口・ (12.6) 残高・ 3.0 底・ (10.0)	①粗砂 ②酸化 ③にぶい橙	口縁部は外縁斜く立ち上がり。先端は内折して終わる。底部は平底。破片のため口径が小さくなる可能性あり。	

遺物観察表

神岡番号 IV-3a	種別 器種	出土位置 ①平面②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
3	土師器 杯	①B1区	口～底部1/2 口・ (12.6) 残高・ 4.0 底・ 6.8	①粗砂 ②酸化 ③にぶい橙	口縁部は斜め上方に向けて立ち上がり、先端直下に稜を有する。口縁部外面は稜から上をヨコナデ。下位に手持ちヘラケズリ。底部外面もヘラケズリ。内面はヨコ方向に小さなナデ。	
4	須恵器 杯	①B1区	口～底部破片 口・ (14.9) 残高・ 4.0	①黒色鉱物粒発泡 ②還元 ③黄灰	右回転ロクロ成形。底部は回転を伴うヘラ切り難し。	
5	須恵器 杯	①B1区	口縁部破片 口・ (12.6) 残高・ 3.6 底・ (9.8)	①粗砂少量 ②還元 ③にぶい黄橙	右回転ロクロ成形と考えられる。器面、摩滅顯著。	
6	須恵器 杯	①B1区	口縁部破片 口・ (10.8) 残高・ 3.3	①白色鉱物粒 ②還元 ③灰	左回転ロクロ成形と考えられる。	
7	須恵器 高台付椀	①B1区	高台部破片 残高・ 3.4 底径・ (9.6)	①粗砂 ②還元 ③浅黄橙	右回転ロクロ成形と考えられる。	
8	須恵器 高台付椀	①B1区	底部1/4 残高・ 1.5 底径・ 8.5	①粗砂少量 ②還元 ③灰白	回転を伴うロクロ成形。内外面とも磨耗、摩滅が著しい。	
9	灰輪陶器 杯	①B1区	口縁部破片 口・ (11.0) 残高・ 2.2	①粗砂少量 ②還元 ③灰白	回転を伴うロクロ成形(回転方向不明瞭)。内外面とも稜がかかっている。	
10	灰輪陶器 高台付椀	①B1区	底～高台部1/4 残高・ 1.7 底・ (7.8)	①精選 ②還元 ③灰白	右回転ロクロ成形。内面に重ね焼きの痕跡あり。	
11	須恵器 高台付椀	①B1区	口縁部下平～高台部1/2 残高・ 2.0 底径・ 7.2	①黒色鉱物粒少量 ②還元 ③灰黄	右回転ロクロ成形。回転糸切り難し。高台部取り付け後周縁部にヨコナデを施す。	
12	須恵器 高台付椀	①B2区	底～高台部2/3 残高・ 2.1 底径・ 3.8	①白色鉱物粒 ②還元 ③灰	右回転ロクロ成形。底部は切り難し後ヘラケズリ調整。内面は磨耗著しい。	
13	土師器 甕	①B1区北	口～胴部上位破片 口・ (20.0) 残高・ 5.9	①粗砂多量 ②酸化 ③橙	口縁部は胴部から直立ぎみに立ち上がった後、強く外傾して立ち上がる。口縁部はヨコナデ。胴部は外面にヘラケズリ。内面はヨコ方向のナデ。	
14	須恵器 羽釜	①B1区	口縁部破片 口・ (22.0) 残高・ 4.3	①粗砂 ②還元 ③灰白	罎は断面三角形で、先端は欠損している。内外面ともヨコナデ。	
15	土師器 甕	①B1区	胴～底部破片 残高・ 7.5 底・ 5.0	①粗砂・細砂 ②酸化 ③にぶい橙	外面、縦あるいは斜め方向のヘラケズリ。内面、斜めあるいは横方向のヘラナデ。	
16	須恵器 甕	①B1区	胴部破片	①粗砂大の鉱物粒 ②還元 ③灰白	内外面ともナデ。	
17	須恵器 甕	①B4区	胴部破片	①黒色鉱物粒 ②還元 ③黄灰	ロクロ成形。外面白黒釉付着。	
18	須恵器 甕	①B3区	胴部破片	①白色鉱物粒少量 ②還元 ③灰	外面タタキ目。内面アテ目後ナデ。瓶の破片の可能性あり。	
19	須恵器 甕	①B2区	胴部破片	①白色鉱物粒 ②還元 ③灰	外面アテ目後ナデ。内面タタキ目後ナデ。	

奈良・平安時代遺構外出土の遺物 (第112図、PL50)

検出番号 Pl.No	種別 器種	出土位置 ①平面②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
1	土師器 杯	①AK ②表採	口～底部破片 口・ (11.6) 残高・ 3.0	①粗砂少量 ②酸化 ③明赤褐	口縁部は上半部のみヨコナテ。底部外面はヘラケズリ。	
2	土師器 杯	①AK ②表採	口～底1/3 口・ (13.2) 高・ 3.1	①粗砂少量 ②酸化 ③橙	口縁部は上半部のみヨコナテ。底部外面はヘラケズリ。	
3	土師器 甕	①AK ②表採	口縁部破片 口・ (13.0) 残高・ 2.7	①粗砂 ②酸化 ③橙	内外面ともナテ。	
4	須恵器 杯	①AK南 ②表採	口～底部1/3 口・ (13.0) 高・ 3.9 底・ (9.2)	①粗砂少量 ②還元 ③灰	口縁部は直線的に外傾して立ち上がる。右回転ロクロ成形。底部は回転糸切り難し後周縁部にナテ調整を施したものと考えられる。	
5	須恵器 杯	①AK南 ②表採	口縁部破片 口・ (13.0) 残高・ 2.9	①赤色粘土粒 ②還元 ③にぶい黄橙	右回転ロクロ成形と考えられる。	
6	須恵器 蓋	①AK南 ②表採	天井部破片 残高・ 2.3	①黒色鉱物粒 ②還元 ③灰	リング状のつまみがつく。右回転ロクロ成形。つまみ取り付け後周縁部にヨコナテ。天井部外面の上位には回転を伴うヘラケズリ。	
7	須恵器 壺?	①AK南 ②表採	胴～高台部破片 残高・ 8.1 底径・ (5.6)	①精選 ②還元 ③暗褐	右回転ロクロ成形。断面台形状の低い高台部を取り付けた後周縁部にヨコナテ。外面の一部に自然釉付着。内外面火熱により焼きはせたような割漉。	2片をもとに 図上復元。 9世紀。
8	須恵器 甕	①AK南 ②表採	胴部破片	①粗砂少量 ②還元 ③オリーブ灰	外面タタキ目。内面同心円文状のアナ目。	
9	須恵器 甕	①AK南 ②表採	胴部破片	①白色鉱物粒 ②還元 ③灰	外面タタキ目。内面ナテ。	
10	須恵器 蓋	①AK南 ②表採	天井部破片	①黒色鉱物粒少量 ②還元 ③灰黄	外面に自然釉付着。重ね焼きの痕跡あり。	
11	土師器 高台付椀	①B2区 ②19号トレンチ	口～底部1/3 口・ (14.4) 残高・ 4.6 底径・ 7.6	①粗砂 ②酸化 ③にぶい黄橙	器面はやや荒れている。口縁部は外傾著しく立ち上がる。高台部も斜め方向に延びる。	
12	須恵器 杯	①B1区1号溝 ②As-B面	口～底部破片 残高・ 2.4 底・ (9.2)	①粗砂少量・青面 特針 ②還元 ③灰	回転ロクロ成形。底部は回転糸切り難し。	注記通りの可能性大。
13	須恵器 甕	①B1区 ②表採	胴部破片	①粗砂・白色鉱物 粒 ②還元 ③黄灰	外面タタキ目後ナテを重ねているか。内面アナ目後ナテ。	

14号溝 (第118図)

検出番号 Pl.No	種別 器種	出土位置 ①平面②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
1	陶器 振鉢	①②埋没土	口縁部破片	①黒色鉱物粒 ②還元 ③暗赤褐	内外面とも筋轆を施す。	瀬戸・美濃。 江戸時代。

遺物観察表

15号溝 (第118図)

検出番号 PLNo	種別 器種	出土位置 ①平面②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
1	磁器 碗	①B2区北側 ②埋没土	高台部のみ残存 残高・ 1.0 底径・ 4.0	①精選 ②還元 ③灰白	外面に2条、内面に1条、青色の横線が施される。	肥前。 江戸時代。

中・近世遺構外出土の遺物 (第125図、PL50)

検出番号 PLNo	種別 器種	出土位置 ①平面②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
1	軟質陶器 焙烙	①AK ②表採	底部破片 残存長・ 6.7	①白色鉱物粒少量 ②還元 ③灰黄	外面、押圧痕。内面、ナズ。	在地産。 江戸時代。
2	陶器 皿	①B1区 ②As-B面	口縁部破片 口・ (11.6) 残高・ 1.7	①白色鉱物粒少量 ②還元 ③灰黄	内面から口縁部外面灰釉。	瀬戸・美濃。 17世紀。
3	陶器 皿	①B1区 ②As-B面	口縁部破片 口・ (10.6) 残高・ 1.6	①精選 ②還元 ③灰	灰釉。貫入する。	瀬戸・美濃。 17世紀。
4	灰釉陶器 皿	①B2区 ②As-B面	口縁部破片 口・ (12.4) 残高・ 1.5	①精選 ②還元 ③灰白	ロクロ成形。	古代。
5	陶器 碗	①B1区 ②As-B面	口縁部破片 口・ (13.0) 残高・ 2.6	①精選 ②還元 ③褐	胎釉。口縁部のみワラ灰釉。	瀬戸・美濃。 江戸時代。
6	陶器 灯明皿	①B1区 ②As-B面	口～底部1/4 口・ (9.9) 残高・ 2.7 底径・ (5.2)	①粗砂少量 ②還元 ③灰白	口縁部の先端に耳状の灯芯受けを貼り付ける。右回転ロクロ成形。底部は碇目状を呈する。鉄軸。	瀬戸・美濃。 18世紀前半～中葉。
7	磁器 碗	①B1区 ②As-B面	口縁部破片 口・ (10.0) 残高・ 3.7	①精選 ②還元 ③明オリーブ灰	外面に染め付けによる文様が描かれている。	波佐見系。 18世紀中葉～後葉。
8	磁器 碗	①B1区 ②As-B面	口～高台部1/3 口・ (10.0) 高・ 5.0 底径・ (4.4)	①精選 ②還元 ③明緑灰	当輪樹文。	波佐見系。 18世紀中葉～後葉。
9	磁器 碗	①B1区 ②As-B面	口縁部下半～底部破片 残高・ 2.8 底径・ (4.4)	①精選 ②還元 ③灰白	残存部分無文。	製作地不詳。 近・現代。
10	青磁 皿	①B1区 ②As-B面	底部破片 残高・ 2.5 底・ (7.4)	①精選 ②還元 ③緑灰	内外面に施釉。貫入が見られる。二次被熱。	中国。 中世。
11	白磁 碗	①B4区 ②As-B面	底部破片 残高・ 2.3 底・ (10.1)	①精選 ②還元 ③灰白	高台部は断面三角形。左回転ロクロ成形。高台部外面にはヘラケズリ調整。高台内を除き白磁釉。胎土・釉調から古代と思われる。	中国。
12	陶器 徳利か	①B2区 ②As-B面	胴部破片 残高・ 4.9	①精選 ②還元 ③灰黄	ロクロ成形。外面灰釉。	瀬戸・美濃。 江戸時代。
13	陶器 平碗か	①B1区 ②表採	口縁部破片 口・ (20.0) 残高・ 3.1	①精選 ②還元 ③灰黄	ロクロ成形。灰釉。	古瀬戸。 14世紀末～15世紀前半。
14	陶器 瓶	①B1区 ②As-B面	胴部破片 残高・ 4.3	①鉱物粒少量 ②還元 ③赤褐	ロクロ成形。鉄軸。	瀬戸・美濃系。 江戸時代。
15	陶器 片口鉢	①B1区 ②As-B面	口縁部破片	①粗砂 ②還元 ③によい・赤褐	回転を伴うロクロによる器面調整。	常滑。13世紀後半～14世紀前半。22と推定。

2 萩南田遺跡

神岡番号 PI.No	種別 器種	出土位置 ①平面②垂直	残存状態 計測値 (cm)	①胎土 ②焼成 ③色調	成・整形技法の特徴	備考
16	陶器 掻鉢	①B2区 ②As-B面	口縁部破片	①精選 ②還元 ③灰褐	内面。錆蝕。	瀬戸・美濃。 江戸時代。
17	須恵器 甕	①B1区 ②As-B面	胴部破片	①粗砂大の長石 ②還元 ③赤灰	外面タタキ目。内面は全て剥離。傾き不明 (詳細な部位不明)。	
18	陶器 甕	①B1区 ②As-B面	胴部破片	①白色鉱物粒 ②還元 ③灰褐	内外面とも詳細な部位不明。	常滑。 中世。
19	陶器 掻鉢	①B2区 ②As-B面	口縁部破片	①混人物少ない ②還元 ③にぶい赤褐	錆蝕。	瀬戸・美濃。 江戸・現代。
20	軟質陶器 甕か	①B3区 ②As-B面	胴部破片	①粗砂大の白色鉱物粒 ②還元 ③褐灰	内外面ともナテ調整。	胎土・焼成から中世と考えられる。
21	須恵器 甕	①B区北 ②As-B面	胴部破片	①白色鉱物粒 ②還元 ③灰	内外面ともナテ。	
22	陶器 片口鉢	①B1区 ②As-B面	胴部破片	①粗砂 ②還元 ③淡赤橙	ロクロ調整。片口鉢日類。体部内面下位使用により摩滅。	常滑,15と接合。 13世紀後半～ 14世紀初頭。
23	軟質陶器 焙烙	①B1区 ②As-B面	口縁部破片	①粗砂 ②還元 ③黒褐	内外面ともナテ調整。	内外面とも炭素吸着。江戸時代。
24	銅銭 皇來通寶	①B区 ②As-B面	銭外径・2.4mm 銭内径・1.9mm 銭厚・0.9mm 重・1.82g			初铸年1039年・北宋。
25	銅銭 銭種不明	①B区 ②As-B面	一部残存 銭厚・1.1mm			至□□寶と思われる。
26	金属器 燈管	①B4区 ②As-B面	長・6.8 最大径・1.0		吸口。上位に接合 (圧着) 痕あり。	材質 不明。
27	金属器 燈管	①B区 ②As-B面	長・7.0 最大径・0.9		吸口。ややつぶれている。上位に銀鍍と思われる接合痕が見られる。	材質 不明。

写 真 图 版



1 寺沢川流路から見た遺跡遠景(南東から)



2 A区BP9地点遺構検出状況(北西から)



3 A区P6地点遺構検出状況(東から)



4 A区西側側道部分遺構確認状況(南東から)



5 B区遠景(東から)



6 現況の寺沢川(北東から)



7 C区遺構検出状況(北から)



8 C2区調査状況(北西から)

PL 2 亀泉西久保日遺跡



1 A区P9地点全景(南西から)



2 A区B P9地点全景(北から)



3 A区P7地点全景(西から)



4 A区P6地点全景(南から)



5 A区西側側道部分南側全景(北から)



6 C区P2・P3地点全景(南西から)



7 B区旧石器試掘調査状況(南西から)



8 B区62A-19グリッド東壁土層断面(西から)



1 1号配石遺構遺物出土状況(南から)



2 1号配石遺構遺物出土状況(北から)



3 1号配石遺構全景(西から)



4 1号配石遺構掘り込みの状況(西から)



5 5号土坑全景(北東から)



6 5号土坑土層断面(南西から)



7 17号土坑全景(南から)



8 1号トレンチ遺物出土状況(西から)

PL 4 亀泉西久保II遺跡



1 1号住居全景(西から)



2 1号住居掘り方全景(西から)



3 1号住居壙全景(西から)



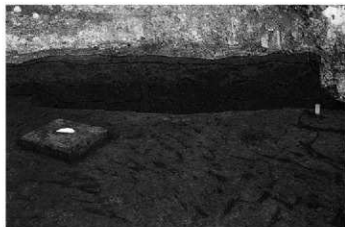
4 1号住居壙掘り方全景(西から)



5 2号住居土層断面(東から)



6 2号住居遺物出土状況(東から)



7 5号住居土層断面(南西から)



8 5号住居掘り方全景(北西から)



1 3号住居全景(北西から)



2 3号住居遺物出土状況(南西から)



3 3号住居全景(北西から)



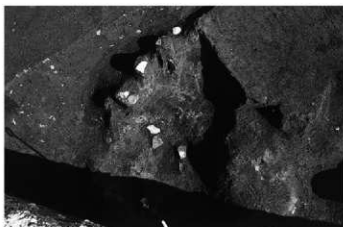
4 3号住居遺物出土状況(北西から)



5 4号・6号住居遺物出土状況(南から)



6 4号・6号住居全景(南から)



7 4号住居全景(西から)



8 6号住居全景(南から)



1 A区浅間B軽石下水田検出状況(北から)



2 A区浅間B軽石下水田検出状況(南から)



4 C1区浅間B軽石下水田検出状況(東から)



6 C区P3浅間B軽石下水田検出状況(南東から)



3 A区浅間B軽石下水田検出状況(北から)



5 C区P3浅間B軽石下水田検出状況(南から)



7 C区P3浅間B軽石下水田土層断面(北西から)



1 1号溝全景(南東から)



2 1号溝土層断面(南東から)



3 2号溝全景(北から)



4 2号溝土層断面(南から)



5 6号・7号溝全景(南から)



6 6号・7号溝土層断面(南から)



7 8号溝全景(南西から)



1 9号・10号溝全景(南から)



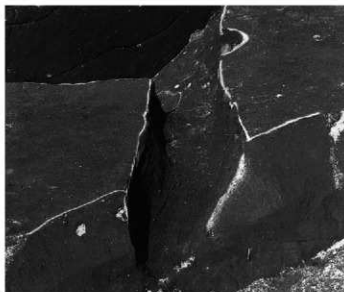
2 9号溝土層断面(南から)



3 10号溝土層断面(南から)



4 12号溝全景(北西から)



5 12号溝全景(南東から)



1 1号道全景(南から)



2 2号道全景(西から)



3 1号道全景(北から)



4 2号道全景(南東から)



5 1号道土層断面(南から)



6 2号道土層断面(南東から)



7 3号道全景(北から)



8 3号道全景(北から)

PL10 亀泉西久保Ⅱ遺跡



1 6号土坑全景(西から)



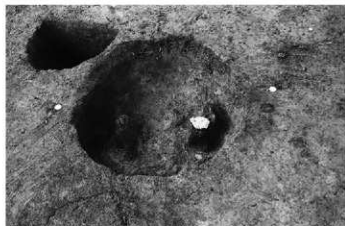
2 6号土坑土層断面(南から)



3 10号土坑全景(西から)



4 10号土坑土層断面(西から)



5 11号土坑全景(南東から)



6 11号土坑土層断面(南東から)



7 16号土坑全景(南から)



8 24号・25号土坑全景(南西から)



1 3号～5号溝全景(南東から)



2 4号溝土層断面(南東から)



3 11号溝全景(上空から)



4 11号溝石積検出状況(西から)



5 11号溝全景(北西から)



6 11号溝土層断面(北西から)



7 11号溝土層断面(南東から)

PL12 亀泉西久保Ⅱ遺跡



1 A区P6地点土坑検出状況(南から)



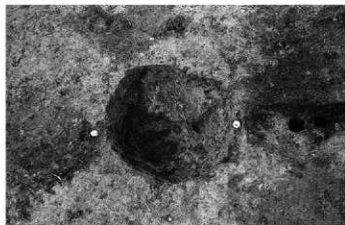
2 1号土坑全景(南から)



3 2号土坑全景(南から)



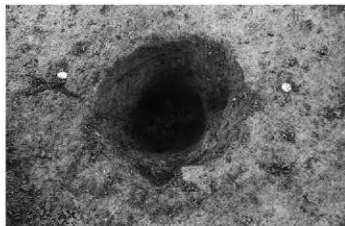
4 4号土坑全景(東から)



5 7号土坑全景(南から)



6 12号土坑全景(西から)



7 8号土坑全景(南西から)



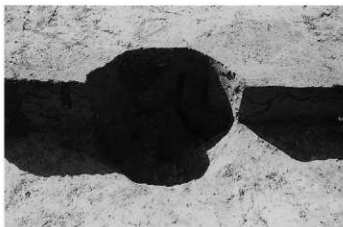
8 8号土坑土層断面(南東から)



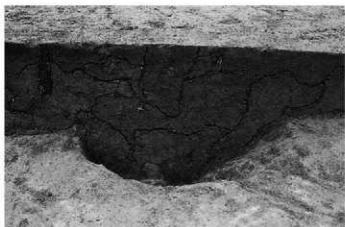
1 13号土坑全景(南西から)



2 14号土坑全景(南西から)



3 18号土坑全景(北から)



4 18号土坑土層断面(北から)



5 20号土坑全景(南東から)



6 21号土坑全景(南から)



7 22号土坑全景(南から)



8 22号土坑土層断面(南西から)



1 A区P6地点ピット検出状況(南から)



2 1号ピット土層断面(南から)



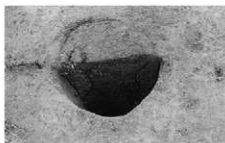
3 4号ピット土層断面(南から)



4 13号ピット土層断面(南東から)



5 8号ピット土層断面(南から)



6 9号ピット土層断面(南東から)



7 7号ピット土層断面(南東から)



8 10号ピット土層断面(南東から)



9 15号ピット土層断面(南西から)



10 19号ピット土層断面(南西から)



11 21号ピット土層断面(南西から)



12 25号ピット土層断面(南西から)



13 27号ピット土層断面(南西から)



14 32号ピット土層断面(南から)



15 36号ピット土層断面(南東から)



配石-1

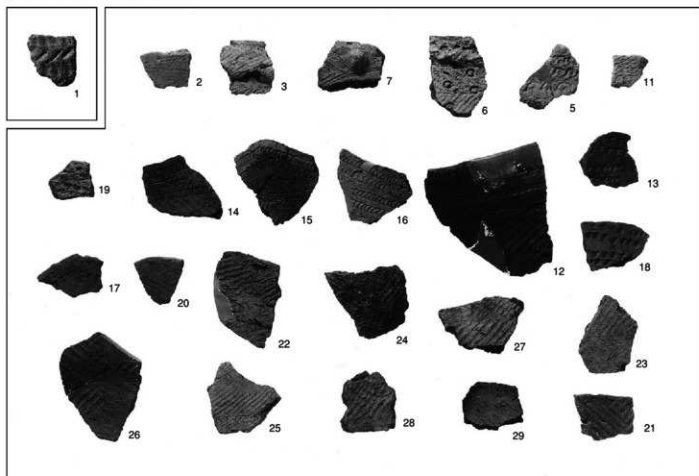


5坑-1

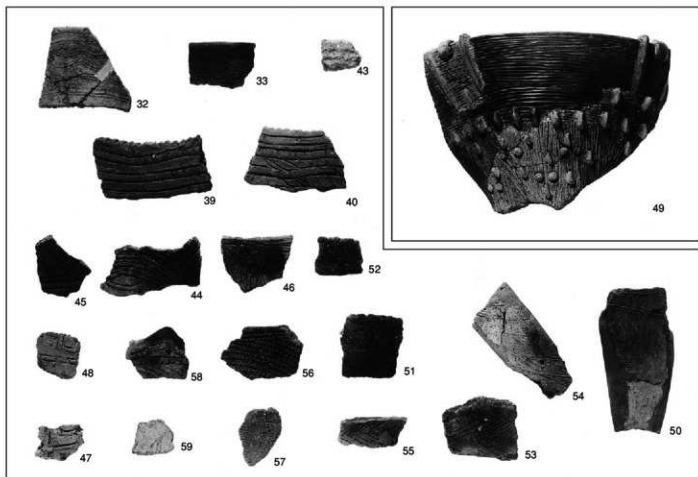


配石-2

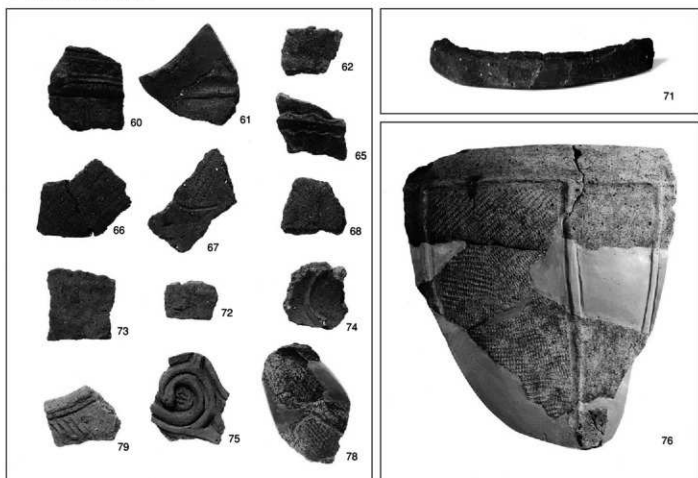
1 5号土坑、1号配石遺構出土の土器



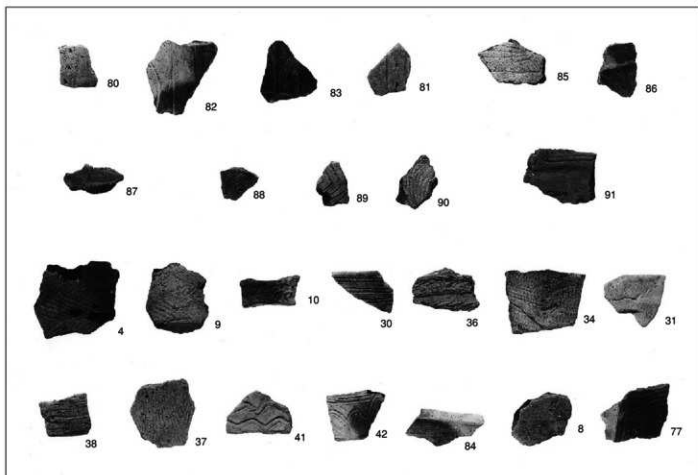
2 遺構外出土の縄文土器(1)



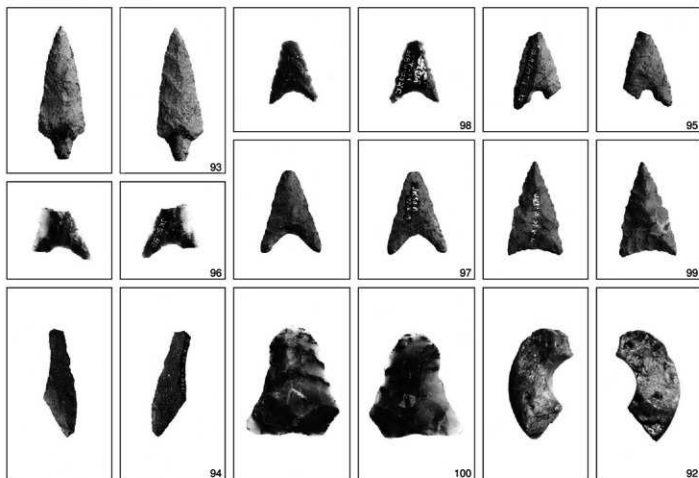
1 遺構外出土の縄文土器(2)



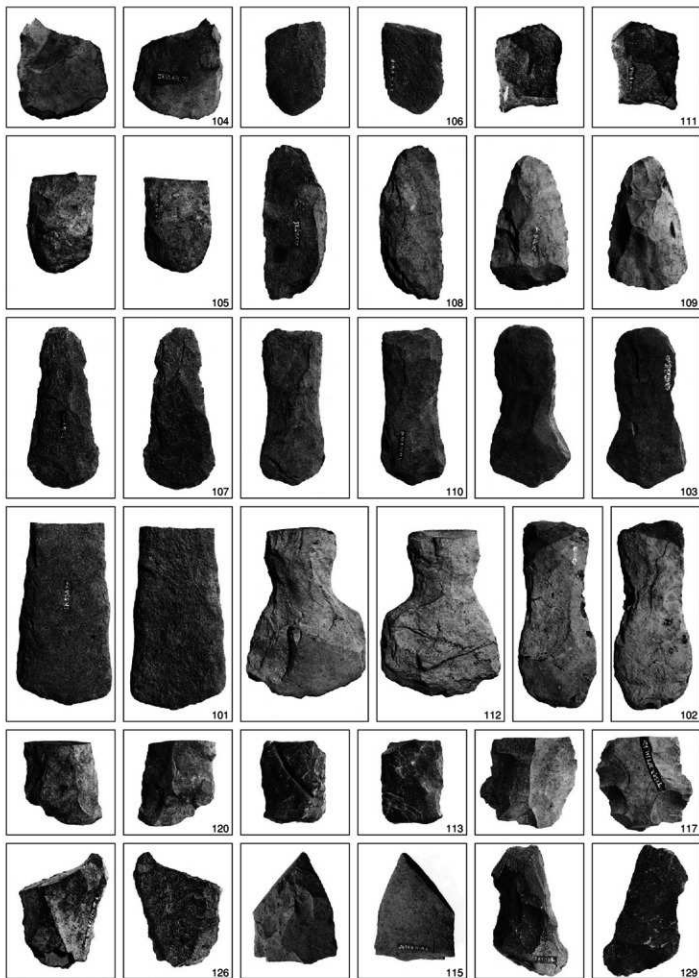
2 遺構外出土の縄文土器(3)

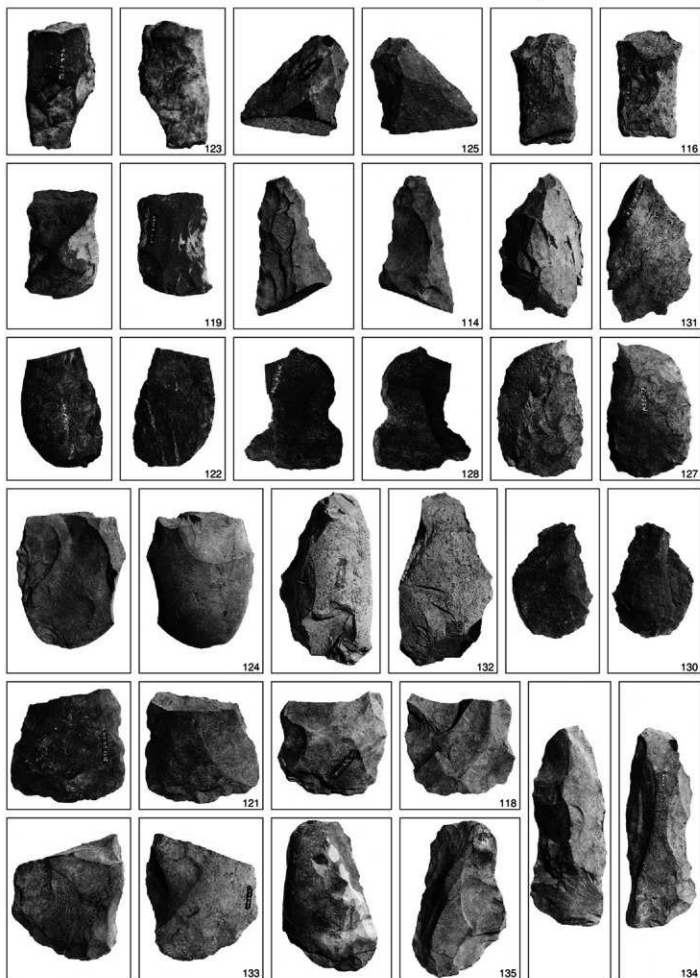


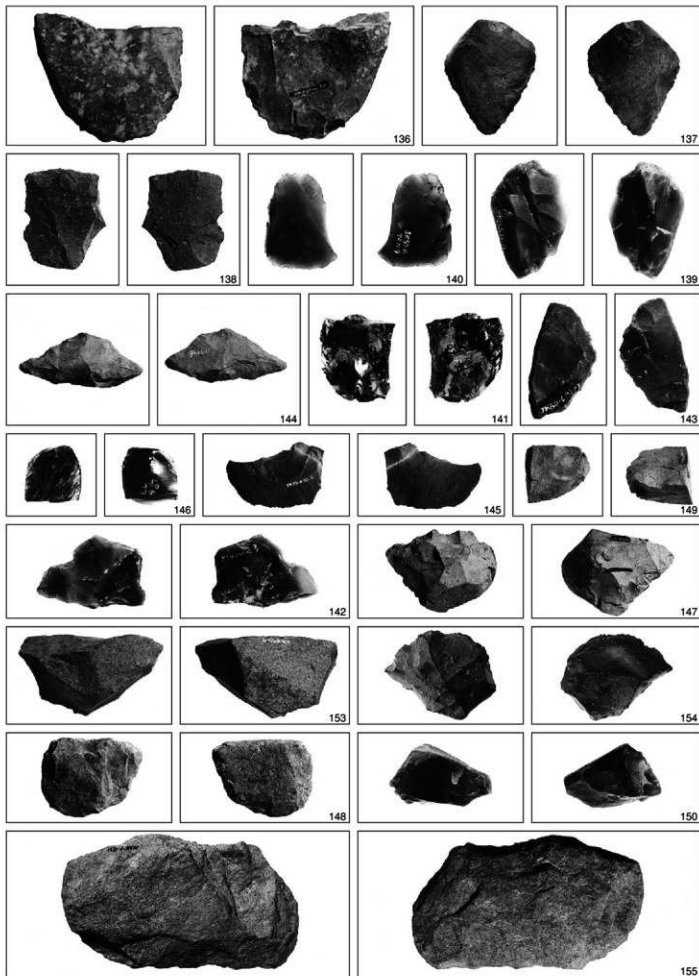
1 遺構外出土の縄文土器(4)

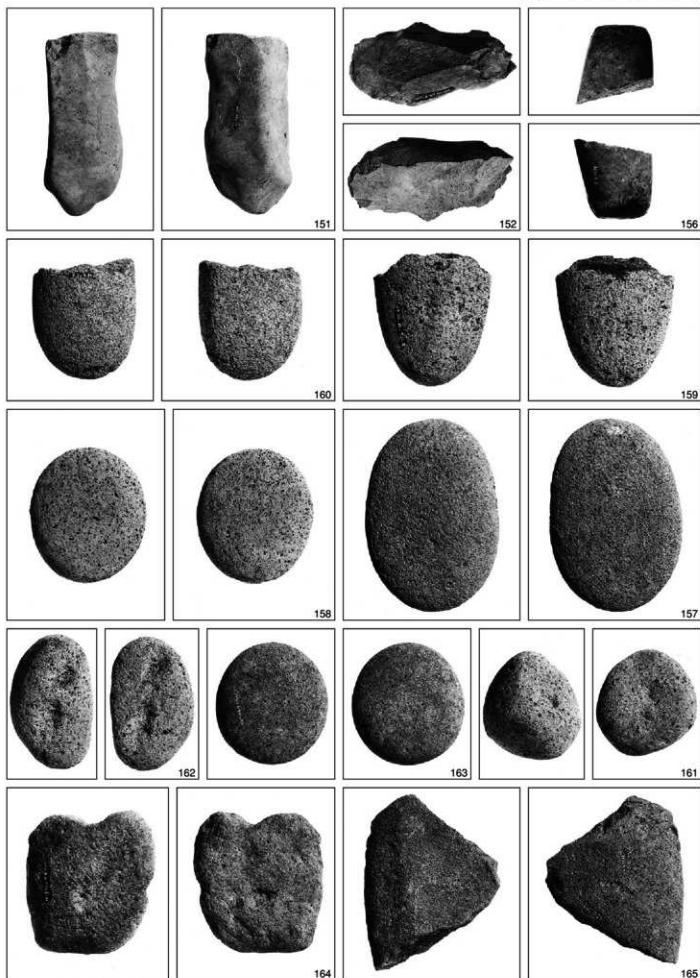


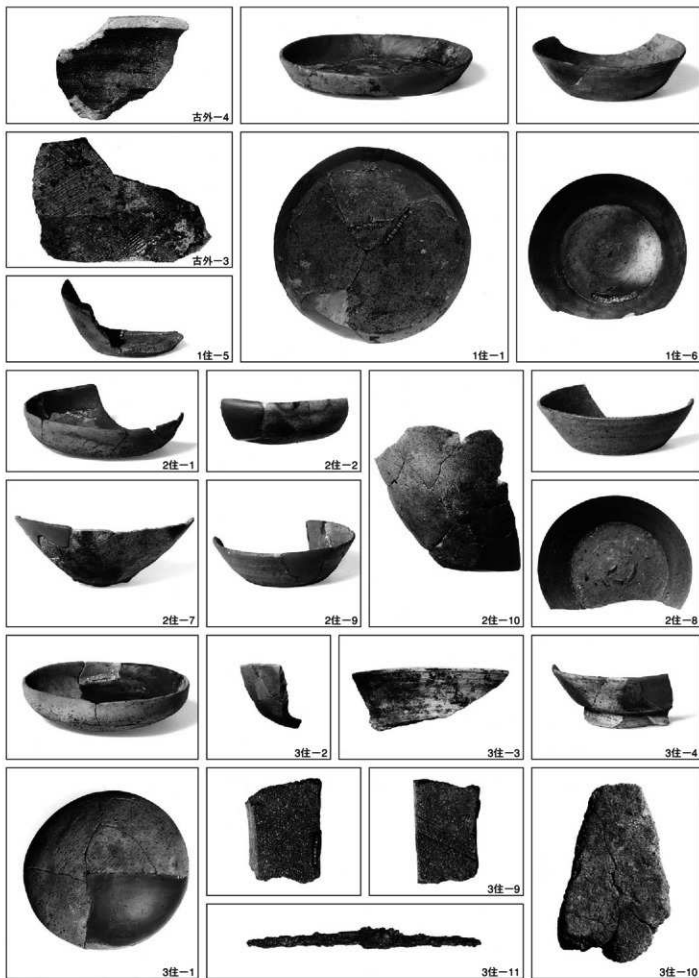
2 遺構外出土の縄文時代石器(1)

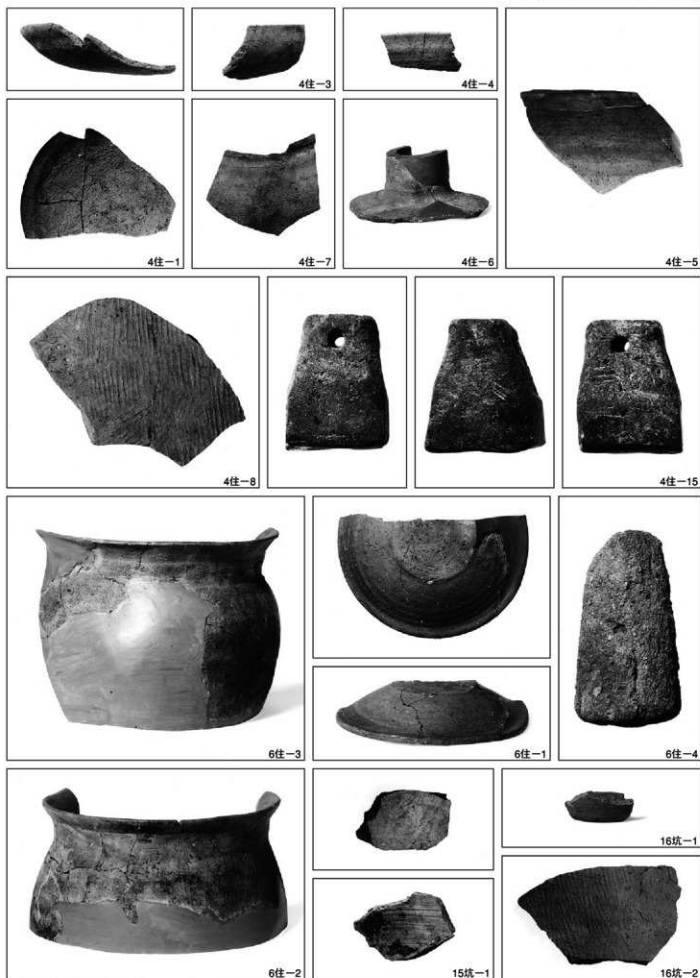




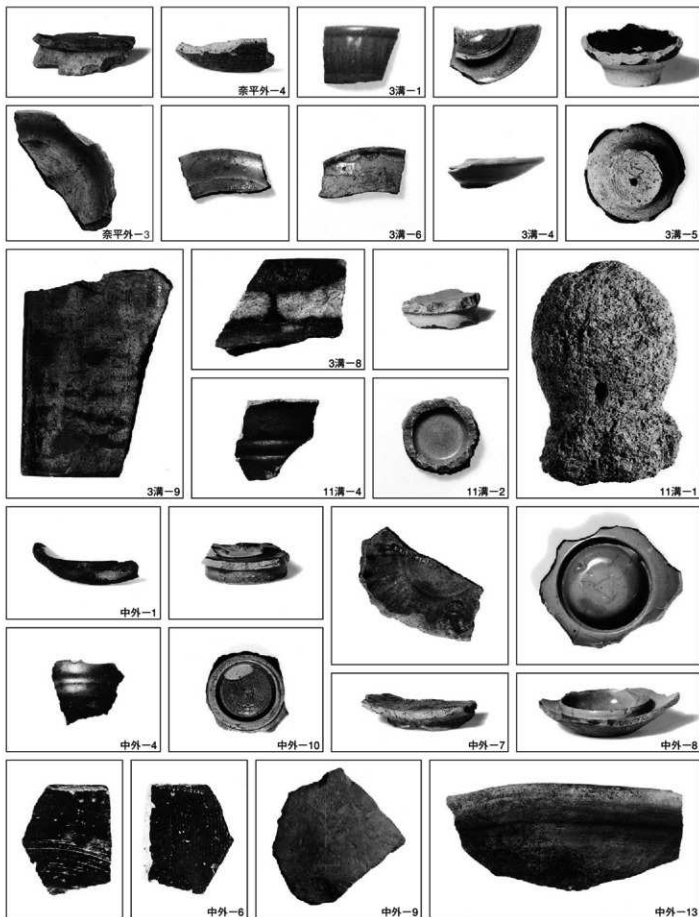








4号・6号住居、15号・16号土坑出土の遺物





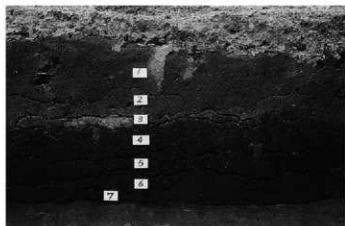
1 調査前の荻窪南田遺跡(南から)



2 B1区・B2区の調査状況(南から)



3 B2区・B3区・B4区の調査状況(南から)



1 A区92M-2グリッド北壁土層断面(南から)



2 A区旧石器試掘作業状況



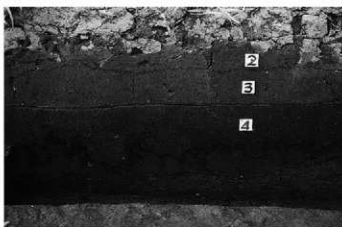
3 A区82M-18グリッド東壁土層断面(西から)



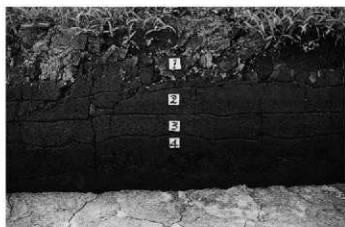
4 A区82K-14グリッド東壁土層断面(西から)



5 B1区93I-14グリッド西壁土層断面(東から)



6 B2区93H-1グリッド西壁土層断面(東から)



7 B3区83H-14グリッド西壁土層断面(東から)



8 B4区83H-7グリッド西壁土層断面(東から)



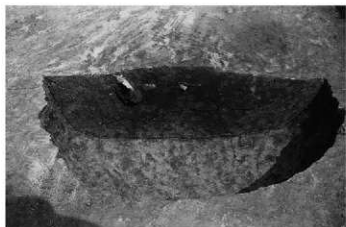
1 A区遺構検出作業状況



2 B1区93B-11グリッド割片出土状況(南西から)



3 1号土坑全景(西から)



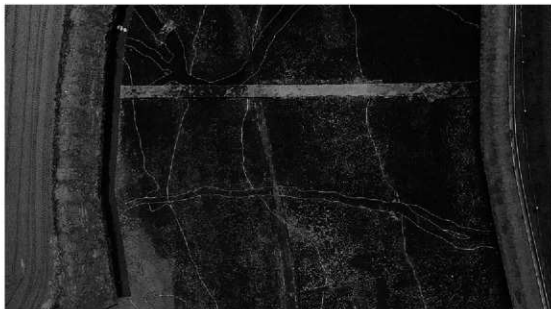
4 1号土坑土層断面(西から)



5 B1区浅間B軽石下水田および古代溝検出状況(上空から)



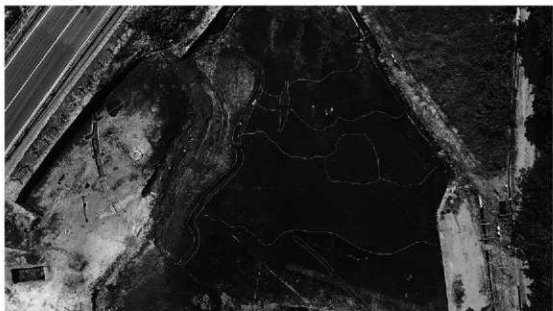
1 B1区南、東側部分浅間B軽石下水田および古代溝検出状況(上空から)



2 B1区南、中央部分浅間B軽石下水田および古代溝検出状況(上空から)



3 B1区南、西側部分浅間B軽石下水田および古代溝検出状況(上空から)



1 B4区浅間B軽石下水田および古代溝検出状況(北から)



2 B2区・B3区浅間B軽石下水田および古代溝検出状況(北から)



3 B2区北、浅間B軽石下水田および古代溝検出状況(上空から)



1 B 1区浅間B軽石下水田畦畔・置石5土層断面(東から)



2 B 1区浅間B軽石下水田畦畔土層断面(東から)



3 B 2区浅間B軽石下水田畦畔・置石8検出状況(北東から)



4 B 2区浅間B軽石下水田畦畔・置石8土層断面(北東から)



5 B 2区北、浅間B軽石下水田畦畔・置石7検出状況(東から)



6 B 2区北、浅間B軽石下水田畦畔出土状況(南から)



7 B 3区浅間B軽石下水田畦畔・置石11検出状況(東から)



8 B 3区浅間B軽石下水田畦畔・置石11土層断面(東から)



1 B1区3号溝全景(南から)



2 B1区3号溝全景(南から)



3 B2区・3区3号溝全景(北から)



4 B1区3号溝土層断面(北から)



5 B2区3号溝土層断面(南から)

PL32 荻窪南田遺跡



1 4号溝全景(南から)



2 4号溝土層断面(南から)



3 10号溝全景(南から)



4 10号溝全景(北から)



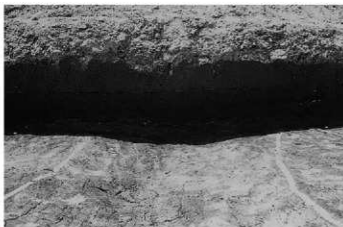
5 6号溝全景(南東から)



6 10号溝土層断面(南から)



7 7号溝全景(南西から)



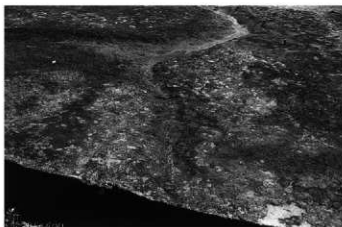
8 7号溝土層断面(北から)



1 2号溝全景(南西から)



2 2号溝土層断面(北から)



3 8号溝全景(北から)



4 9号溝全景(北から)



5 8号溝土層断面(東から)



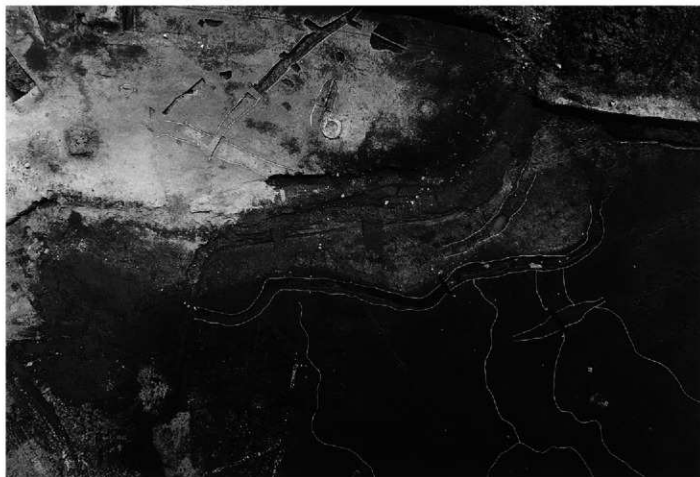
6 5号溝全景(南西から)



7 5号溝全景(南から)



8 5号溝土層断面(南西から)



1 16号・17号溝全景(西から)



2 16号溝土層断面(北から)



3 17号溝土層断面(北から)



4 12号溝土層断面(南から)



5 12号溝土層断面(北から)



1 1号・2号道検出作業状況



2 1号・2号道土層断面(北から)



3 1号・2号道全景(上空から)



4 1号溝全景(東から)



5 1号溝土層断面(東から)



6 13号溝土層断面(南から)



7 13号溝土層断面(西から)



1 B区中・近世溝全景(南から)



2 14号・15号溝全景(上空から)



3 14号・15号溝土層断面(南から)



4 14号・15号・20号溝、3号道土層断面(南から)



1 3号道全景(上空から)



2 3号道土層断面(南から)



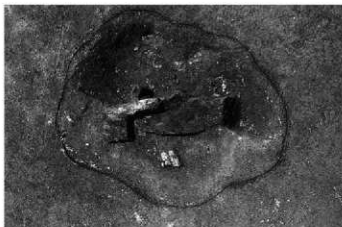
3 8号道全景(西から)



4 5号道全景(南から)



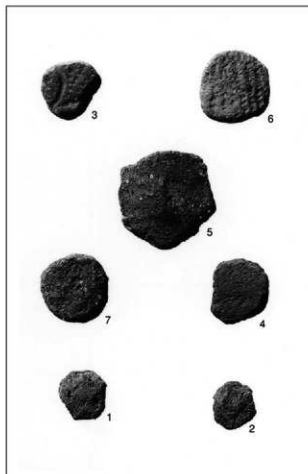
5 5号道土層断面(南から)



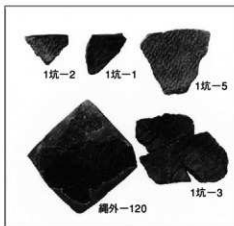
6 2号土坑炭化材出土状況(北から)



7 1号焼土層土層断面(北から)



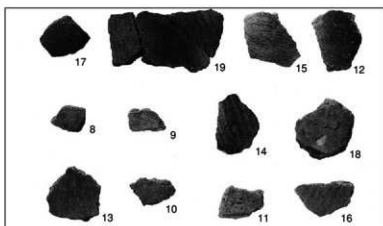
1 遺構外出土の縄文土器 (1)



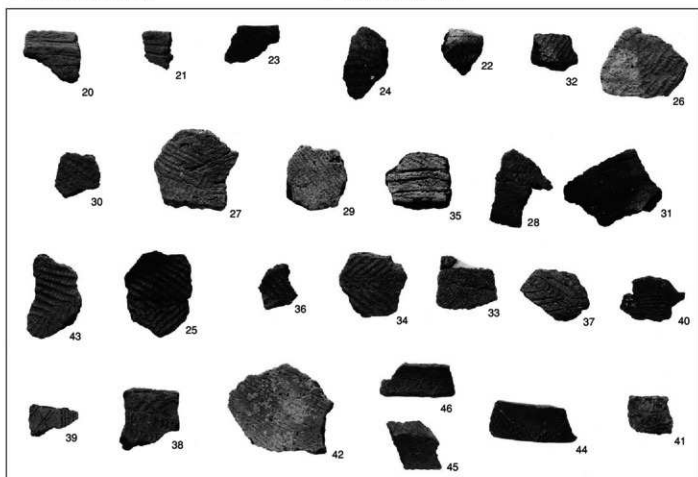
2 1号土坑出土の縄文土器



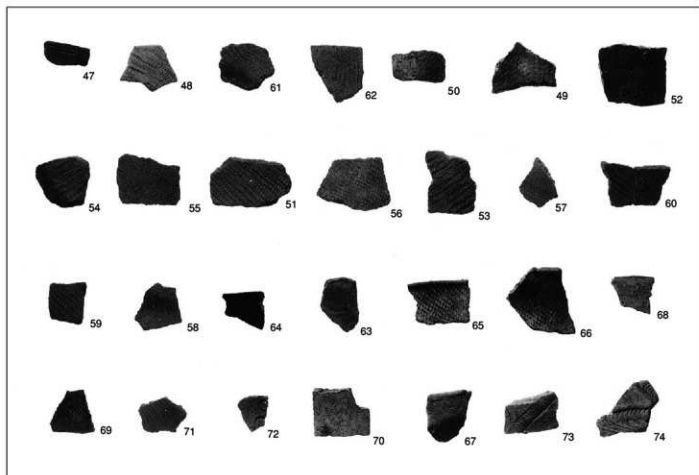
1坑-4



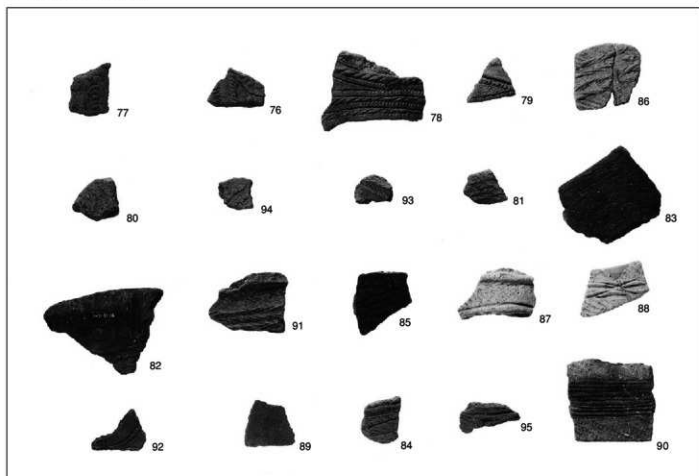
3 遺構外出土の縄文土器 (2)



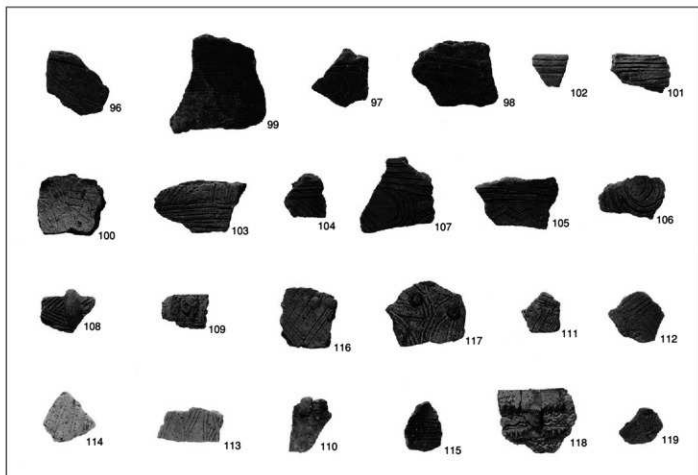
4 遺構外出土の縄文土器 (3)



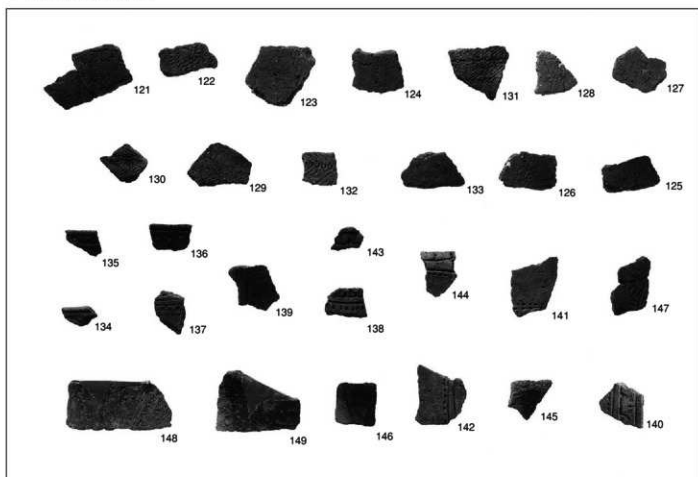
1 遺構外出土の縄文土器(4)



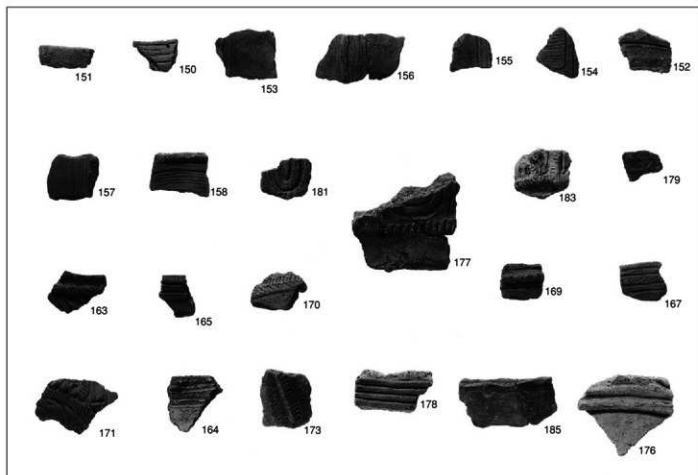
2 遺構外出土の縄文土器(5)



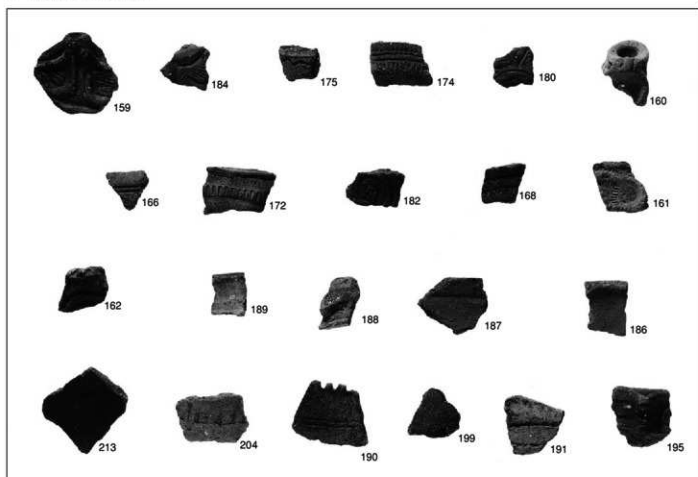
1 遺構外出土の縄文土器 (6)



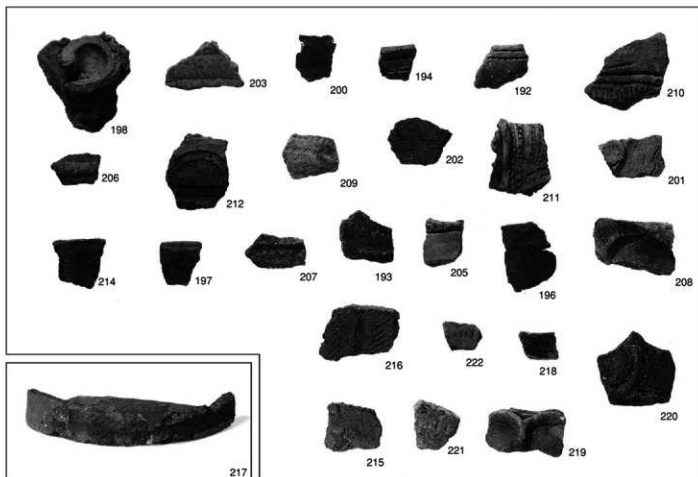
2 遺構外出土の縄文土器 (7)



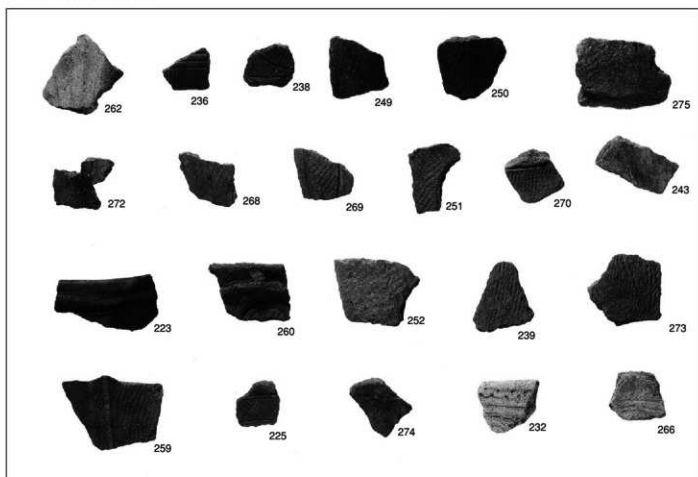
1 遺構外出土の縄文土器(8)



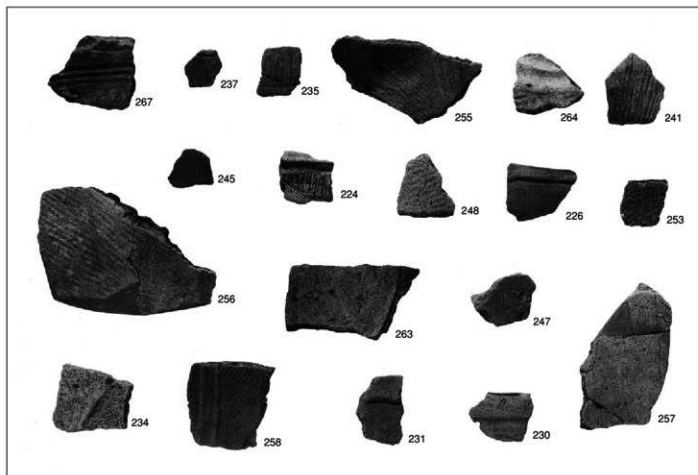
2 遺構外出土の縄文土器(9)



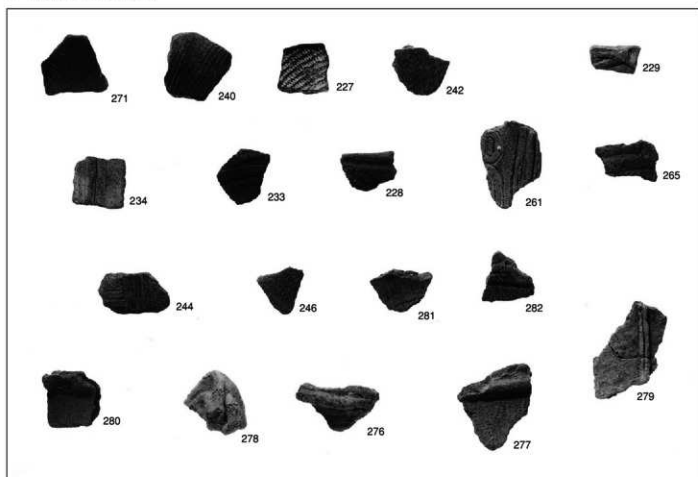
1 遺構外出土の縄文土器 (10)



2 遺構外出土の縄文土器 (11)



1 遺構外出土の縄文土器 (12)



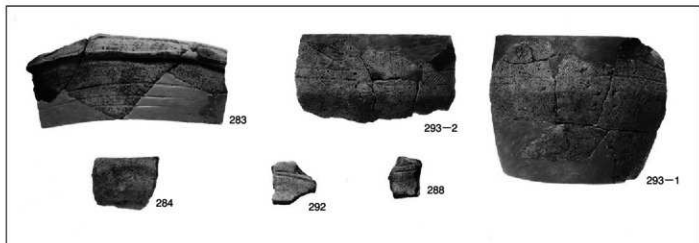
2 遺構外出土の縄文土器 (13)



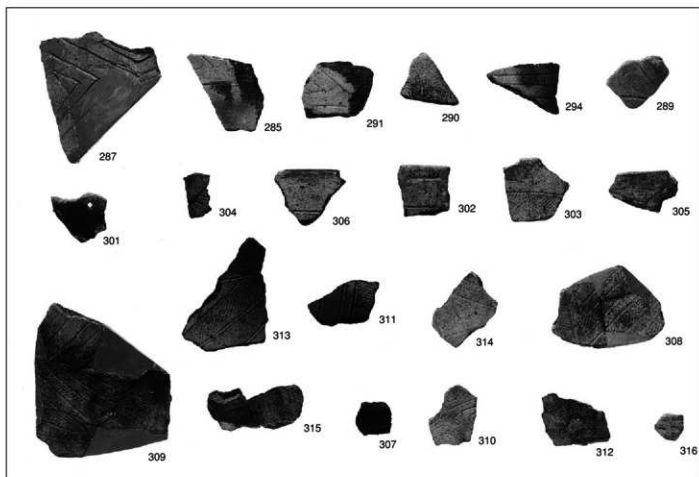
286



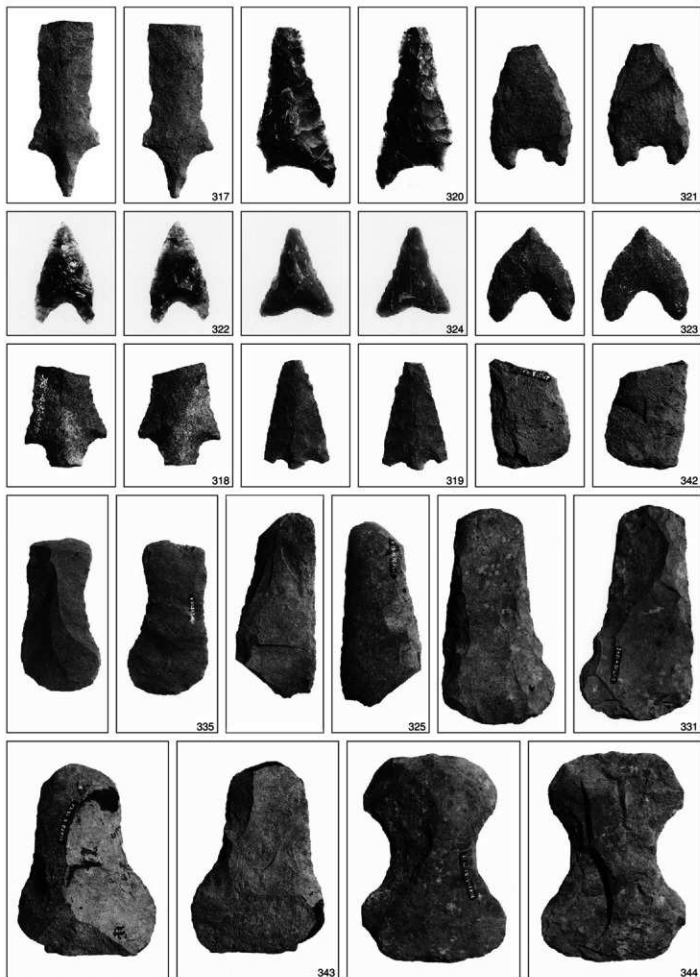
299

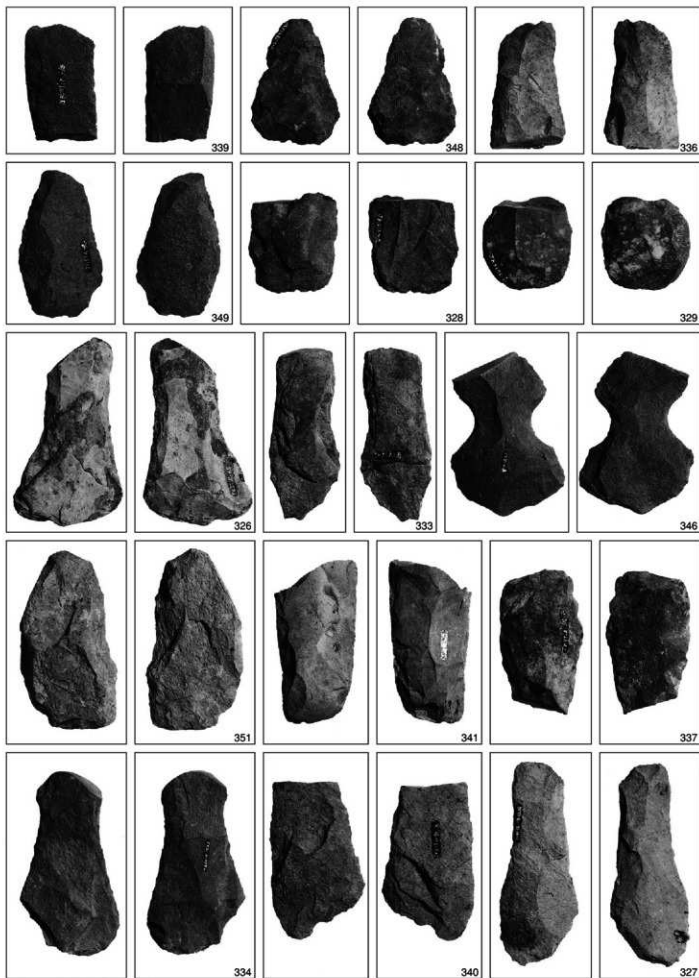


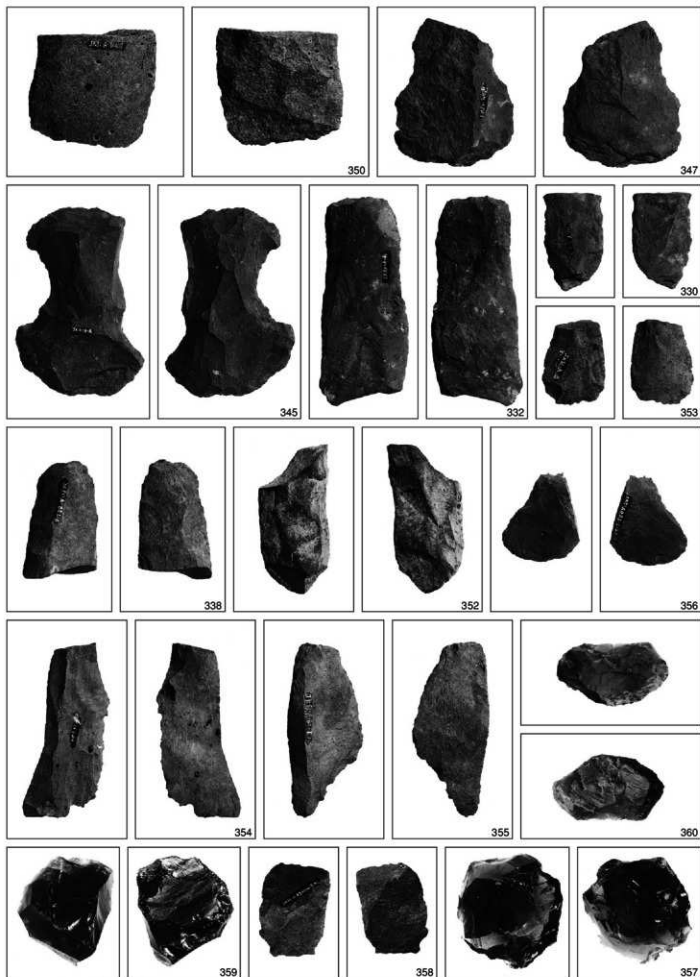
1 遺構外出土の縄文土器 (14)

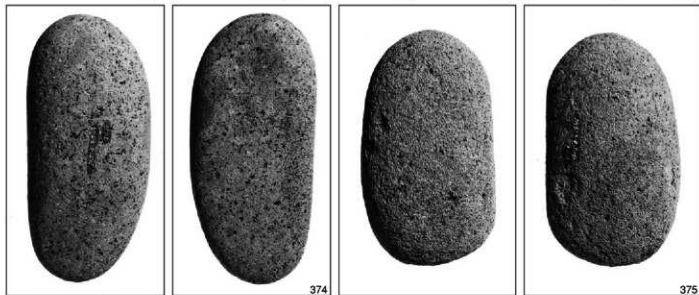
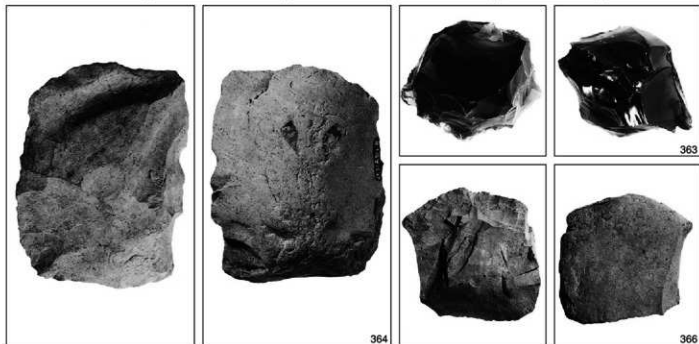


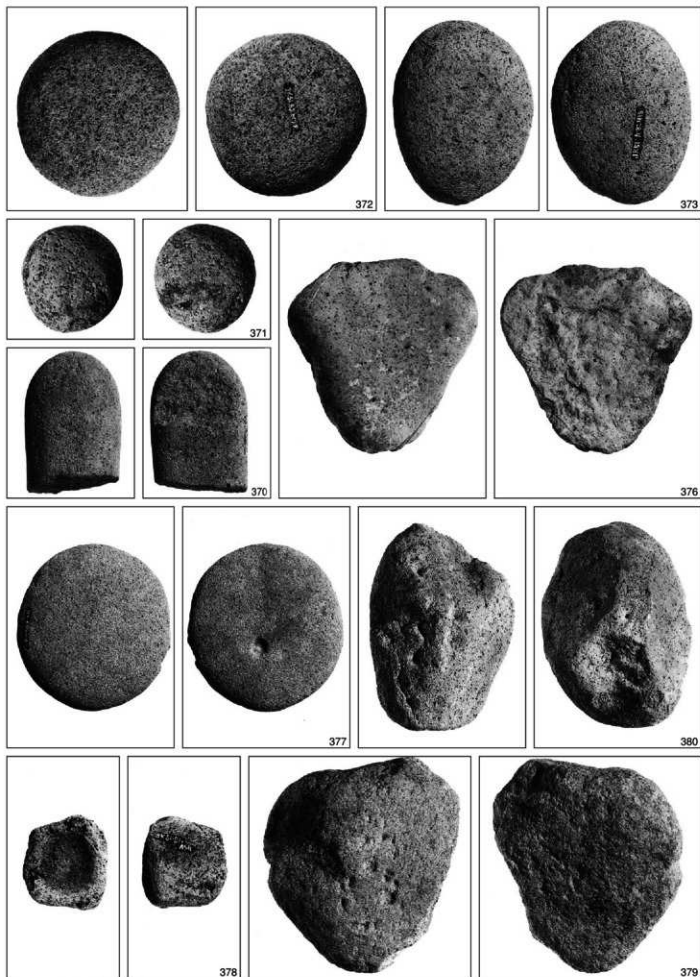
2 遺構外出土の縄文土器 (15)

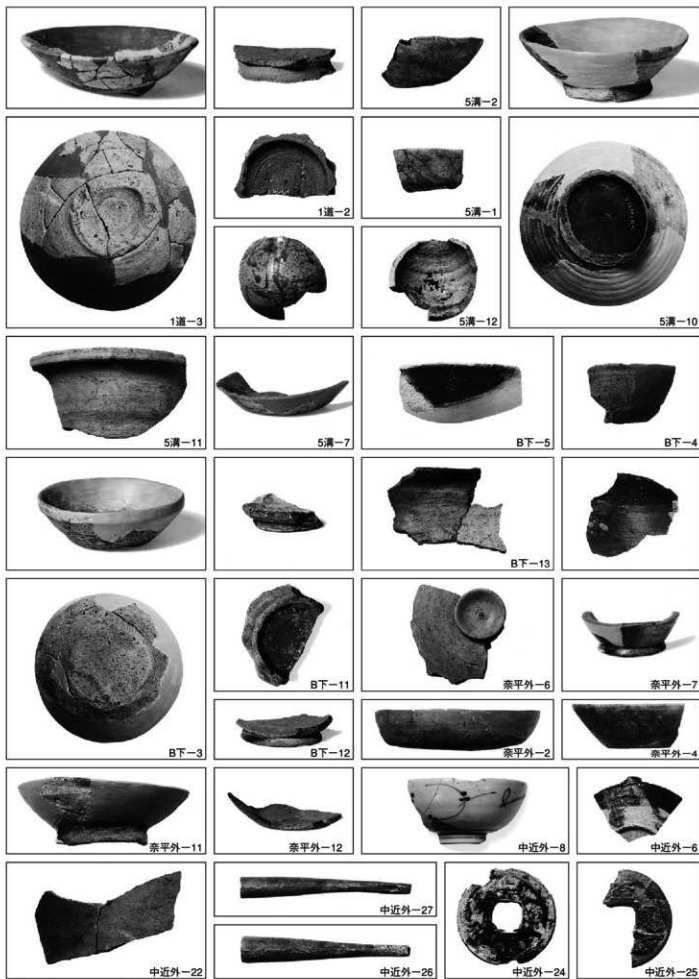












抄 録

書名ふりがな	かめいずみにしくほにいせき おぎくほみなみだいせき
書名	亀泉西久保II遺跡 萩窪南田遺跡
副書名	一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	420
編著者名	徳江秀夫
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20080125
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北楯町下箱田784-2
遺跡名ふりがな	かめいずみにしくほにいせき
遺跡名	亀泉西久保II遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんまえばししかめいずみまちあぎにしくほ
遺跡所在地	群馬県前橋市亀泉町字西久保
市町村コード	10201
遺跡番号	21005-905
北緯(日本測地系)	362410
東経(日本測地系)	1390740
北緯(世界測地系)	364058
東経(世界測地系)	1391261
調査期間	20021001-20021231 20031201-20040331 20040401-20050331
調査面積	9129
調査原因	道路建設工事
種別	集落/田畑
主な時代	縄文/古墳/奈良平安/中近世
遺跡概要	集落・奈良平安・竪穴住居・土師器+須恵器+鉄器/田畑・古墳・水田/奈良平安・水田/その他・縄文・土坑6+配石遺構1+包含層・縄文土器+石器/奈良平安・土坑12+溝11+道4/中近世・溝13・陶磁器
要約	赤城山南麓、標高120m前後の洪積台地上に展開する縄文時代から近世にいたる複合遺跡。縄文時代集落の外縁部を調査、中期勝坂式期の配石遺構1基、前期諸磯式期の土坑などを検出する。また、奈良から平安時代の集落とこれに接する水田(1108年降下の浅間B軽石に埋没する)を検出した。
遺跡名ふりがな	おぎくほみなみだいせき
遺跡名	萩窪南田遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんまえばししおぎくほまちあぎみなみだ
遺跡所在地	群馬県前橋市萩窪町字南田
市町村コード	10201
遺跡番号	21005-869
北緯(日本測地系)	362421
東経(日本測地系)	1390743
北緯(世界測地系)	364089
東経(世界測地系)	1391253
調査期間	20020401-20020930
調査面積	13378
調査原因	道路建設工事
種別	集落/田畑/その他
主な時代	縄文/奈良平安/中近世
遺跡概要	田畑・奈良平安・水田1・土師器/その他・縄文・土坑1+包含層・縄文土器+石器/奈良平安・溝20+道2・土師器+須恵器/中近世・土坑1+道6+焼土痕1
要約	亀泉西久保II遺跡と同一台地・沖積地上に立地する縄文時代から近世にいたる複合遺跡である。浅間B軽石により埋没した水田・溝・道を検出した。また、中世以降の所産と考えられる水田・溝・道などの遺構も検出した。

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第420集

亀泉西久保Ⅱ遺跡 萩窪南田遺跡

一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成20(2008)年1月18日 印刷

平成20(2008)年1月25日 発行

編集・発行／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北碓町下箱田784番地の2

電話 0279-52-2511 (代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷／川島美術印刷株式会社



亀泉西久保Ⅱ遺跡 荻窪南田遺跡 付図

一般国道17号（上武道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

付図1 亀泉西久保Ⅱ遺跡全体図（1：500）

付図2 荻窪南田遺跡全体図（1：400）

